

悪タイプ使いの成り上がり

煽りイカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カースト最下位の高校二年生 影山広人は神様達の企画により現実とポケモン世界が混じった世界のポケモントレーナーに選ばれる。担当の神から相棒と道具とチートな加護をもらい、色々混沌とした世界を生き抜いて楽しんでいく。

目次

第一部

プロローグ	1
神と対談	13
現状確認と2匹目	20
レベル上げ	28
緑な3匹目	36
軽い散策	42
バッジシステム	48
強運	54
道具の有用性	61
2体目の御三家	70
進化	77

夜戦	84
人海戦術	96
リアル鬼ごっこ	103
アルセウスの実力	116
練習試合	124
600族	135
社会の動向	143
色違い	152
侵入者	166
復学	173
理不尽な決闘	185
後日談	203
閑話 後輩	216

第二部

加護の追加と真実	225
ゲーセン	234
破壊の遺伝子?	245
チャラ男 前編	254
チャラ男 後編	264
抗争	279
意外な強敵	294
砂場デート	305
襲撃	314
援軍	322
ぼうそうぞく 前編	336
ぼうそうぞく 後編	344

遊園地	357
ナイトメア	366
水族館	376
山登り	385
アルピニスト	394
正体	404
虫取り青年	416
お泊まり	427
学校へ	439
紳士	448
ドッグラン	457
東京観光	464
二つ名	471

どっちみち	603
お見舞い	593
初めての海外旅行	581
第三部	
閑話 スノウとの初対面	572
閑話 迷子	566
打ち上げ	554
因果応報	538
中堅戦	522
次縫戦	514
先鋒戦	505
過去	494
腐った正義	484

しまキング	723
湖	712
キャンプ	700
修行場	693
今回の標的	685
メガネ野郎	675
ダブルバトル	666
ストリートファイター	657
オフ会	647
世界大会	639
ライバル達	629
観光	620
飛行機	612

大会前	—	733
初戦	—	742
成長	—	754
他の奴らは？	—	768
全国大会	—	778
ピラミッド 前編	—	786
ピラミッド 後編	—	795
ロワイヤル	—	806
こんたいかいちゆうもくのダークホー	—	816
ス	—	816
真田家	—	831
こんたいかいゆうしようこうほの	—	841
チーム	—	841

他の加護持ちの実力	—	853
ベスト3にはいるちからをもったチ	—	865
ム	—	865
トップクラスのちからをそなえたチ	—	883
ム	—	883
決勝	—	893
小旅行 その1	—	908
小旅行 その2	—	918
本戦開始！	—	929
バトルチューブ 前編	—	940
バトルチューブ 中編	—	950
バトルチューブ 後編	—	961
世界トーナメント	—	973

夜の砂浜 前編

夜の砂浜 後編

開始ッ!

ヤドランの謎

巨星墜つ

スーパークイーン

俺の番か

10431032102210141005 994 985

第一部

プロローグ

「オラッ！」

「フンッ！」

俺の名前は影山 広人、高校二年生だ。

「さっさと出せよ！」

「金よこせや!!」

今放課後で校舎裏のカツアゲの真っ最中だ。

「ウグッ」

急所に当たった。

「まったく手間掛けさせやがって」

後ろから羽交い締めされ財布がポケットから盗られる。

「おっラッキー」

「結構あるな」

今月の生活費が入ってるんだよ。

支給された日に盗られるなんて滅茶苦茶運悪いわ。

取り返したいが羽交い締めされ動けない。

「ゲーセン行こうぜー」

「カラオケのクーポンあるぜ」

やめろ俺の生活費を遊びに使うな！

そうして地面に叩きつけられる。

「痛ッ！」

「あん？お前まだいたの？」

「返せ！」

掴み掛かるが避けられ、そのまま足を掛けられ転ぶ。

「あのなお前が弱いからこうなるの弱肉強食つて奴。お前みたいな無能がこうやって搾

取されて俺らの役に立つってわけだ。感謝しろよ」

「ぶぶぶっ」

「言い過ぎー」

こいつら人をなんだと思っているんだ？

「さっさと退けよー」

そして蹴られ不良共は去って行った。

「痛い」

よくカツアゲされるため先生にチクった事があるが無駄だった。答えは簡単、権力だ。いじめている奴の親が多額の寄付金を学校に入れているからだ。相談をしても俺が悪いと言われしまう。

胸くそ悪いしタチが悪い。

「帰るか」

部活は入って無いしな。運動神経は下の中だ。
帰ってゲームでもしよう。

「先輩！何があつたんですか!？」

「あれ玉川?」

コイツは玉川柚子、一学年下の後輩だ。

絡まれている所を助けたらなついた。

代償にボコボコにされたがな。

「また絡まれたんですか！ケガありませんか!？」

「こうしてよく気にかけてくるいいコだ。

「……………何にもないよ」

「じゃあそのアザなんですか!？」

「なんでも無いよ」

「でも!？」

「なんでも無いつたら!!」

俺は走り出す。コイツを巻き込みたくない。

走ったら脇腹が痛くなってきた。運動不足だ。

公園があるからジューズでも買って飲むか。

あつ金がないんだっけ。

「よっいしょ」

とりあえず座ってこれからの生活について考えよう。どうしようゲーム売るか？狩

猟や採取で凌「ニヤア!!」なんだこの鳴き声？猫？

何処から聴こえたかはわかった。

二人程で子猫をエアガンで打っている。

子猫は怯えて動けないようだ。

あ、俺の足下に角材があるぞ？

「アハハハハ「オラッ」ギヤア！」

近づいて先制攻撃し後頭部に打撃をくらわせる。

悶絶し頭を抱えて蹲る。まあ死にはしないだろう。

その隙にを武装解除しエアガンを遠くに投げる。

「何だよお前！」

よし猫は逃げたようだな。後は、

「この野郎おお」

殴りかかってくるが避けると転び額を石にぶつける。

「ギヤアアアアアアアア」

俺は何もしていない。

「さてと猫の気持ちかわかったか？」

「ひいひい」

足を踏みつけるが折れない程度に。

もうこのくらいでいいかな？金を盗られたうつぶんは少しは晴れたな。

「やめろっ!!」

「は？」

振り向いた瞬間殴られ宙を舞い地面に叩きつけられる。

「お前！なんてことしているんだ!!」

今誰だかわかった。

コイツの名は聖沢響夜、俺と同じ学年だ。

運動神経抜群、成績優秀、容姿端麗の三拍子揃った超有名人であり他の高校にも名が響く。

助っ人で空手の大会で優秀したり、全教科一位を取る等の伝説を作った男だ。

「お話し」

最後まで喋られず蹴られる。

「黙れ!!」

コイツの欠点は正義感が強く人の話を聴かないことだ。

「よくも俺の弟を傷付けたな！」

「つはつ。」

弟かよ！

「許さない！」

許されない事をしたのはお前の弟だよ。

可愛い猫をいじめていたんだろうが。

「弟が何をしたんだよ!？」

何したか言つてやりたいが、

「ヴギツ!ガホツ!ガバツ!!」

馬乗りになれ殴られているため伝えられない。

そうして数十秒殴り続けると満足したのか拳が止まる。

「このゲス野郎が!お前みたいなのやつ犯罪をするんだ!もうこんな事はやめろ!!」

そっくりその言葉を返してやりたいが発言する気力がもうない。

「大丈夫響夜君!?!ケガはない?」

そう言つて女が駆けてくる。

コイツはかなり女にモテるから周りがハーレムの様になっている。

「大丈夫か響夜!?!」

「ケガありませんか!?!」

正直ウザいな、最初殴られた時にチラツと見えていたし、一方的に殴られていたので聖沢にはケガは無いはずだ。つまり点数稼ぎである。

「大丈夫だみんな、ケガはないよありがとう」

スマイルが眩しいな。

この笑顔で女を落とすんだよな。

「もうこんな事はやめろ、絶対にだ」

虫を見る目だよ。

ちなみにハーレム共はゴミを見る目だ。

「さあ帰ろう皆！」

「ねえ一緒にカラオケいこうよ」

「ハハ、行こうか」

そして台風の様になって行く、迷惑な奴だ。

さて後は……………

「よくもやりやがって!!」

「死ね!!」

このクソガキの相手だ。

こうして蹴られる感触を感じながら限界が来てしまい、

俺の意識はブラックアウトした。

「ニャオー」

「はっ！」

今子猫に舐められ目が覚めた、もう夜だ。

………帰るかな。

あれ？ズボン何処行つた？

「ただいまー」

と言つても独り暮らしだ。

爺ちゃんが不動産屋なので借りており管理を兼ねて住んでいる。庭が広く森のようになつており大自然だ。

「ニャー」

この子猫が付いてきた。ケガもしてるしな。

段ボールで家でも作るかな。

それより疲れたな風呂入って寝るか。

「ニャオーン」

エサと寝床が先だな。

俺はベッドに横になる。

今日は運が悪かったな。金を盗られるし、殴られるわで大変だった。

だけど金や権力や才能があれば正しいのか？何やってもいいのか？

俺だって金が欲しいし女と付き合いたいよ男だもの。

しかしああなるならばリア充になんてなりたくない。ずっと弱いままでいい、そんな力なんて欲しくない。

ダークな事考えてたら眠くなる。もう寝るか。

こうして7時間後強大な力を得る事をまだ俺は知らない。

神と対談

「ん？」

「ここは何処だ？」

ボロい小屋みたいだけど……。

疲れているのか？もう一度寝よう。

「ちよつと!?混乱しないんですか!?起きてくださーい!!」

顔を向けて見ると小さな女の子がいた。

「あの一話聞いてくれませんか？」

「誰？」

「神です」

「は？」

神？何言ってるの。

「寝ないでくださーい！」

わかったよめんどくさいな。

「良かったあ聞いてくれて」

「で？なんなの？」

「あなたは選ばれました」

「何に？」

「ポケモントレーナーに」

「はい？」

長々説明が続いたので省略するところだ。

神様達の国なのだがかなり暇だそうだ。それで退屈しのぎにポケモンの世界と融合させてしまい均衡を保つため俺がポケモントレーナーに選ばれてしまったと言う訳だ。

コイツらも人をなんだと思っっているんだ？

混乱して死人がでるだろうが。

だかまだ続きがある。

とある神が言った、

「これで次の神様決めればいいんじゃないやね」

こうして神候補が現実世界で1万人程トレーナーに選び、一番人気のトレーナーの神候補が神になると言う事になってしまった。

「簡単に言えばユーチューバーですね。ああトイレや風呂などはカットされるのでご安心を」

俺らを巻き込むなよ神イ……………。

「それでですね選ばれた特典なんですけど」

特典？

「はいポケモンと道具です。ちなみに貴方には加護があります」

「加護？」

「はい、人類滅亡や多数の人間の命を救うと与えられる加護です。広人さんは3つありますね」

俺は知らぬ間に何やってたの？

「ポケモントレーナーの中だと100人に1人1つ持っている確率です。いい人材を取れました」

「それでどんな加護があるの？」

「待ってて下さいね、えくと」

まず一つめ

◎悪タイプ強化セット UR

・悪タイプのステータス2倍

・悪タイプの技威力2倍

・悪タイプの経験値2倍

・悪タイプの成長限界 Lv200まで

・悪タイプのエンカウント上昇

これはかなりのチートだ。

2倍と言うことはアドバンテージになる。

そして二つめ

◎黄金体 UR

・肉体と精神が人間の限界を超える。

聞いてみると10万ポルトやだいたいばくはつをくらっても平気な体になるらしい。簡

単に言えばスーパーマサラ人だろうな。

3つめ

◎技マシんつめ合わせ SR

これは80個ほどあるという。やったネ。

「なおこの加護は遺伝しますのでハーレムとかつくとかいいかもしれませんよ」

「生々しいわ」

神がニヤニヤしとる。

第一ハーレムなんてできるわけないだろ。

「少子化ですからね〜」

「それでポケモンと道具は？」

「それは目が覚めてからののおっ楽しみですよ」

「そうかい」

「最初のポケモンは悪タイプなので安心して下さいね。後は道具の数が少ないのですが、面白い道具があるので楽しんでください」

とりあえず楽しみにしとくかな。

「そろそろ時間なので聞きたい事があれば言ってください」

「ん？じゃあ……………」

「そういえばさ」

「はい？」

「俺は何やって加護を得たんだ？」

「さっきから気になっていたんだ。」

「加護があるのを知ったのは今なのでわかりません。ですがあなたは貧しくても見返りを求めず善行をしています。この前だつて車に引かれた野良犬を看取りましたね」

「見てたのかよ。」

「ええ、だから広人さんを選びました。あの犬は最後は幸せと感じていたそうですよ」

「良かったよ。」

「他にもありますが時間なので止めておきましょう。それでは広人さん」

「何だ？」

「貴方の未来に光あれ。私も全力でサポートします」

「ありがとう」

そして光眩しくなり視界は白く染まった。

現状確認と2匹目

「う〜ん」

朝の光が眩しい。

かなり内容が濃い夢をみた感じだ。

とりあえずカーテン開けるかな。

そして開けた瞬間、

「ボ?」

……………マメパト!?

うわあ。

こうして俺は夢が現実だと再確認した。

さあどうしようか。

俺はベッドに座り考える。

そういえば視界の下の方に逆三角のアイコンがあるな、なんだこれ？

「うわっ!!」

じつと見ていたらステータスウィンドウみたいまでてきた。どこかのVRMMOみたいだ。

えくと書いてあるのは図鑑にポケモンに道具、バッジ、まだ色々あるな。これゲームにあつたな。

とりあえず気になるのは……

ポケモンのアイコンを押してみる。

するとモンボがボンと出てくる。

さてと俺のポケモンは？

「出てこいー!」

パカン!とボールから出てきたのは、

「ヤミィ〜」

おつヤミラミが最初のポケモンか、

「よろしくな相棒」

「ヤミ」

俺達は握手した。

ピコーン！

うわっなんだこの音は？

ステータスを見るとお知らせのアイコンに何か来ている。

えくとなになに

『いい忘れた事があります。世界の融合により神に選ばれた人間以外はポケモンの事を忘れており、無かった存在になっています』

なにいいい！俺がようやく作った6Vが!!

くっ落ち着けまだ続きがある。

『それと法則が変わっており、人がポケモンを殺す事が困難になります。例えば銃弾をくらわしてもピンピンしてますよ』

軍事利用とかされると嫌だな。

『後は賞金なのですがトレーナーと戦えばわかるでしょうね。またお知らせがあつたら連絡します』

よし頑張るか。

ヤミラミのステータスを確認してみると特性はいたずらごころみいだ。たまご技ではじこさいせいとふいうちがある。

「ヤミイ」

何だ？ 腹減つたの？

お腹押さえてるな。

「じゃあ飯食べるか」

「ヤミー」

昨日の残り物を温めて皿にだす。

「粗末な物だけど」

「ヤミー!? ヤミー!!」

何だ? ガツガツ食べているがそんなに旨いか?

あつそういえば猫にもあげなくちやな。

「おーい起きてるか餌だぞ」

「ニャー」

「あ」

赤と黒の毛並みで猫と云えば、

「ニャー？」

ニャビーじゃないか。

ポケモンに餌をあげ終わったので俺もコーヒーを飲みながら一段落つく。
ああ道具の確認しておかないとな。

片手でコーヒーを持ちながら道具のアイコンを押す。

現在の道具は

モンスターボール×5

キズぐすり×5

げんきのかげら×1

キーの実×10

あなぬけのヒモ×3

なんでもなおし×8

たいせつなものには

たんけんセット

ひみつのカギ

ひみつのカギって何に使うんだ？

たんけんセットも意味がわからん。どこを探検するの？

まあいいテレビでもつけるか。

案の定テレビではニュースがやっておりポケモンが写し出されていた。

「なんなのでしょいかこの生物達は!？」

「地球温暖化の影響でしょいかねえ」

どのニュースをみてもポケモンと言う単語が出てこない。

やはり皆忘れてるか。

実際に映像でピカチュウ等の有名なポケモンが出てても名前が出てこない。

だがステータスは皆出るそうだ。

ん?もう時間か。

時計をみると登校時間だ。

「さあ行くか」

立ち上がるとニャビーに服を引っ張られる。

「おかわりか?」

「ニャア」

ニャビーは頭をさげる。

「なんだお礼か？」

「ニャ」

頭を横に振る、違うのか？

「仲間になりたいのか？」

「ニャア！」

頷いた。

「よろしくなニャビー」

「ニャー」

手堅く握手し2匹目をゲットした。

レベル上げ

世界が変わって混乱はあるが、学校は平常運転だった。だけど、

「影山 広人 停学4週間」

今掲示板の前に立っているのだがどうゆう事だろうか？

周りからの目が痛い。

「おい影山、職員室に來い」

何だよティーチャー、一体俺は何をした？

職員室に呼ばれると色々説明された。

簡単に言えば昨日のクソガキ共をしばいた事だ。

だが真実が歪んでいた。

俺が猫をいじめていた事になっており、クソガキが助けようとし止めたら殴られたと

なっている。

冤罪なので真実を話すと証拠がないと言い。

暴力を振るつたのは間違いないので信用できないそうだ。

クソガキは良い子で通っているらしく、そんな事をしないそうだ。

こうして俺は停学になるのだった。

クソツ！マジかよ……………

まあいい、嫌な奴と会わないし前向きに考えるか。

「あの先輩！」

玉川？何の用だ。

「これを拾ったので」

あつ俺の財布。

見つけてくれたのか。

「ありがとう玉川」

「それにしても何があったんですか？」

「実はさ……」

真実を話した。

「な、何ですかそれ！酷すぎですよ！」

「信じるのか？」

「信じますよ。先輩日頃の行いが良いじゃないですか」

信じてくれる人がいるって心が安らぐな。

「それに先輩は嘘つく時に少し右半身に重心かけますし、一瞬眉を動かしますから」

どこまで俺を見てるの!?

どこまで見てるとすごいな。

………待てよ。

トレーナーとか増やした方がいいんじゃないか。

「なあ玉川」

「何ですか？」

「放課後暇か？」

「暇ですよ」

「大事な話があるんだ、俺の家に来て欲しい」

「え？」

何だ？固まったぞ。

「い、行きます」

覚悟を決めたような顔をした。まあ大事な話だからな。

「そ、それで気になっているんですけど、アザはどうしたんです？」

そう言われて見ると昨日腕にあったアザがない。

おまけに体がいつもより軽い。

多分加護だろうか。

「それも含めて大事な話だ。んじやまた放課後に」

「はい！」

そうして学校を後にした。

AM10時 公園

この公園は広く平日は特に人がいない。

つまり色々やるのに最適だ。

「来い。ヤミラミ、ニャビー」

パカン！とボールからでてくる。

「さてと今日はヤミラミ中心でバトルしてもらおう。ニャビーは援護だ」

ニャビーはまだ悪タイプを持っていない。それにヤミラミはじこさいせいを持っているからな。

だがその前に技マシンを使ってみよう。

ステータスウインドウを出し技マシンの欄を押す。

ヤミラミにでんじはでも覚えさせるか。

説明に書いてあるが覚えさせたいポケモンに触るといいらしい。

ヤミラミに触ってみる。

「ヤミ!?!」

何かを感じたようだ。

ステータスをみると技にでんじはある。

ちなみに技マシンは使い捨てではない。
他にも覚えさせてみよう。

さてと戦ってみるかな。

「ツボー！」

あ、マダツボミだ。

戦いたいみたいだな。

突然HPのバーが出てくる。LV5だ。

ゲームと同じだ。

「行けヤミラミ！」

「ヤミ」

ヤミラミのHPバーが出てくる。

「ふいうちだ」

「ヤミィ」

一旦消えて死角から攻撃する。

「ツボ〜」

あ、逃げた。でも経験値は入っているな。
この調子でどんどん行くか！

P M 2 時。

そろそろやめておくか。

それで今日の結果は

ヤミラミ L v 1 6

ニヤビー L v 7

拾った物

モモンのみ×4

ヤミラミは経験値が多いため上がりやすい。

かげうちを覚えた。

今さつき気づいたのだか技は8個までみたいだ。
ゲームと比べて戦略性が上がるな。
もう帰るかな。

緑な3匹目

俺は道路を歩いているがよくポケモンをみかける。

なにもしなければ襲って来ないみたいだ。

だがポケモンを出しているとバトルを仕掛ける奴が結構いる。

今日はキズぐすりは使いたくないし、ヤミラミのじこさいせいもPPが少ししかない。

戦い方をミスったり、格上と多く戦った。

正直加護に頼りすぎると痛い目に遭いそうだ。

加護の他にも武器が欲しい。

家の庭には森があるしポケモンを探してみるか。

木の実とかあれば嬉しい。

ガサ

「ん？」

横のゴミ置き場から音がした。

あれ？なにもないぞ？

ガサ

箱の中から音がするな。

……開けるか。

「ベト〜」

ベトベターでした。

だけどコイツは普通のやつじゃない。

「リージョンフォーム？」

南国のベトベターだ。

まさかリージョンフォームのポケモンがいるのか？

「ベト〜」

じつと見つめてくる。

「ベトオ」

仲間になりたそうな目をしている。

そういえば夜から雨が降るんだっけ？

ゴミ捨て行くのも面倒だしな。コイツ臭くないし。

「俺の所へくるか？」

「ベッドオ」

OKみたいだ。

3匹目をゲットした。

とりあえず家に着いた。

あつそうだ！玉川が来るんだし何か作っておこう。

今モモンのみがあるからそれを材料にしようか。

実は本当は6個あったのだから2つ食べた。

食べて数時間後も特に問題無く、毒はないようだ。

さて取りかかるか。

少し時間がたち、

ピンポン

来たか。料理は出来ている。

「先輩、お邪魔します」

「来てくれたか」

「はい、それにしても良い匂いしますね」

「桃でお菓子作ったから食べてくれ」

「いいんですか!?!」

メチャクチャ喜んでる。

「ほれ、焼き桃アイスだ」

作り方は簡単で、トースターで桃に焦げ目をつけ、その後にアイスを置いて完成だ。
「甘いですね」

桃は焼くと甘さが増すみたいだ。

「やはり先輩の料理は絶品ですね」

「そんなに?」

「はい、弁当の卵焼きとかヤバいですから」

全然自覚がない。

とまあ全部ペロリと食べてくれた。嬉しい。

「それで大事な話って何ですか?」

「まずはコイツらを見てくれ」

俺はボールを取りだし投げる。

「ヤミ」

「ニヤ」

「ベター」

「これってどういう事ですか？」

俺は今までの経緯を話す。

「先輩、大変な事に巻き込まれましたね」

「それで頼みがあるんだけどさ」

「はい？」

「トレーナーになってみないか？」

今日日本や世界が混乱している。だからトレーナーを増やした方が得策と思うんだ。

「ポケモンって捕まえられるんですか？」

「ああ、その時には手伝う」

俺みたいな人間に優しいからな。

「わ、私なんかでいいんですか？」

「勿論だ」

「よろしくお願いします」

こうして弟子が出来た。

軽い散策

今、玉川と一緒にニユースを見る。

国会の中継が写しだされる。

まあ得体のしれない生物がいきなり現れればそうなるか。

それで日本にいるトレーナーが名乗り出て、神の事やポケモンの事を話したらしい。
俺だったら恥ずかしくできない。

と言う事で日本にいるトレーナーは名乗り出て欲しい事となった。

「行きたくねえ……」

「気持ちわかりますけど……」

他のトレーナーがどんな奴らか気になるが、色々コキ使われそうだからな。

「そういえば私のペットがポケモンになっているのですけれどその子を相方にしようかなと」

「どんなポケモン？」

「飼っていたのはドーベルマンなのですが……」

犬系か。

「口から炎を出すようになりました」
確定だな。

「それじゃ明日の放課後捕まえよう」

「はい、お願いします！」

玉川が帰っていった。

少し庭を散策するかな。

その前にベトベターのステータスでも確認するかな。

ベトベター Lv30

高っ！即戦力じゃないか。

特性はどくしゅだ。どくづきを技マシンで覚えさせたら森に入って散策しよう。

森に入ってみると結構ポケモンがいるな。

ちなみにこの庭は山と繋がっており鹿や狸、猪等かよくみられ、池とかも存在しておりドジョウとかみられる。

金があっても無くてもここで食べられる野草を探したりして食べており、よくお世話になっている。

「ニャビー、何やってるの?」

ニャビーが土を掘っている。何か見つけたのだろうか?

そして掘り終えたらしく、掘った物を見せてくれた。

なにかの根っこだろうか? 山芋だったら嬉しいがステータスで確認してみよう。

ちからのねっこ

漢方薬が自生してるのか、安くて回復量があるからゲームでも重宝した記憶がある。なつき度は下がるが。

俺はニャビーを撫でる。よく探せたな。

「えらいぞー」

「ニャー」

撫でているとニャビーはまた何か見つけた様だ。

次は何かの草を引き抜いて、その草を渡してくれる。

ふっかつそう

また漢方薬が手に入った。

「これくらいにしておくかな」

もう夕方になってしまった。

ステータスにポケモンセンターのアイコンがあり回復していたため、俺のポケモンの疲れはない。

だが、バトルは少なかった。

温厚なポケモンが多いみたいだ。

それで収穫は

ちからのねっこ×3

ふっかつそう×1

モンスターボール×1のみだ。

風呂入って寝るかな。

今日はいろんな事があつたな。

俺はベッドに寝転び、ヤミラミとニヤビーを見るともう寝ている。

明日は役所に行く事と玉川のポケモンをゲットだつて。

頑張ろう。

こうして眠りについた。

バッジシステム

「それでは住所と電話番号を」

俺は今市役所に来ている。

連絡先を今書いている所だ。

「所で影山さんボールは何個持っていますか？」

「ええつと二個程ですが」

玉川が使う分があるからな。

「ゲットの手伝いですか？」

「はい、して欲しかったのですが……」

話を聞いてみるともう一人同じ県にトレーナーがいるらしくソイツがゲットの手伝いをするらしい。昨日、他の市に来たそうだ。

ソイツはボールをたくさん種類と数を持っているらしく3桁は超えるそうだ。

尚、ポケモンは4体程持っているらしい。

神が言っていたが俺の道具の数が少ないみたいだな。

市役所の人間もそっちにいくらしい。
俺は困った時に手伝う事となった。

さて、時間があるしレベル上げしようかな。

ヤミラミとニヤビーを育てよう。

「コラツッ！」

コラツタが出てきたな。

「ヤミラミ、みだれひつかき！」

「ヤミー！」

みだれひつかきが数回ヒットする。

この調子でレベリングしよう。

ピコーン。

変な音がしたからステータスを見てみる。

バッジのアイコンに何かあるみたいだ。

開いてみると説明が表示され、自分のポケモンが一定のレベルに上がればバッジの本来の効果と新しい機能が追加されるみたいだ。

バッジ1つ目を手に入れる条件は自分のポケモンが3体以上がLv10になることと書かれている。

今さっきニャビーがLv10になったからかな。

「ん、エサ機能？」

味とか選べるらしく、無限に出てくると説明に書かれている。約100種類程味があるみたいだ。

これは便利な機能だ。

次のバッジは3体以上がLv15だそうだ。

今日中にLvが上がるだろうか。

「おつ、ジグザグマだ。ヤミラミ、ふいうち」

「ヤミー！」

「ただいま」

結局時間とかもありLv15まで上がらなかった。

それで今日の結果は

ヤミラミ Lv26

ニヤビー Lv14

ベトベター Lv32

結構Lvが上がってきたな。

ステータスを見てみるとかなりの数値だ。

「頑張ったな」

「ニヤ〜」

頭を撫でてみる。いい毛並みで気持ちいい。

「ヤミ」

「ベター」

「わかつてるよ」

他の2匹も撫でる。コイツらかなり頑張ったからな。

あれ？ベトベターは柔らかいな。枕とかにしたら気持ちよく眠れそうだ。

ピンポーン

「先輩！こんにちは！」

「それじゃ家に行くか」

「お前の家どこか？」

「はい、そうです」

かなりの豪邸だな……。

「私の祖父は大きな病院の院長なんです」

「凄いな」

門とか尖った鉄格子があるよ。

「ガウー！」

「あつ、ポチ」

声が出たから振り向くと黒い犬がいた。

「デルビルか」

あく・ほのおタイプのポケモンで、鳴き声で仲間と連絡をとったり、仲間と連携をするのが得意なポケモンだ。

「ほい、ボール」

「ありがとうございます」

玉川にボールを渡す。

「よろしくポチ」

「ガウー！」

こうしてデルビルは玉川のポケモンになった。

強運

玉川のデルビルを捕まえた翌日。朝食を食べた俺は今庭にいる。

「気になってたけど……これ何だろうな？」

たんけんセットだ。ポケモンDPで出てくる道具で石とかプレートを発掘するんだけど……

とりあえずたんけんセットの箱の中に説明書見つけたから読んでみるか。

ええつと、

『この道具はダンジョンに入る道具です』

ダンジョンに？

何か道具とか見つけるやつだろうか？

『このダンジョンは鉱物系のアイテムを採取する事ができます』

鉱物ってことは石の進化アイテムとかだよな。

メガストーンとか見つかると嬉しい。

それでどうやって入るんだろうか？

説明書に書かれているがヘルメットのライトをつける事により入れるそうだ。

そうしてヘルメットをかぶりライトをつけてみると

「は？」

自分の足下に穴が空いた。

「ええええええええ!!」

「うがつ！」

勢いが軽減し着地する。

落ちている時間は1分程だろうか。

穴に落ちる所までゲームと同じのようだ。

周りを見てみると洞窟のようだ。ここで採掘するのか……

たんけんセットにあつた地図を見てみると現在地が表示されており、近くに光り輝く

点がぼつぼつと見られる。

うわー便利。

とりあえず近くの光る点の採掘してみるか。

俺はツルハシやハンマーで岩を砕いていき、ボールのような石を上手く取り出す。ええつと何だ重いなコレ？メガストーンか？

ステータスで確認してみるか。

きんのたま

……いきなり下ネタきちやつた。

ゲームとかで色々あつたよな。おじさんが強調してくれたよ。

まあいい次だ、次。メガストーン来い。

近くの光る点を探してツルハシを降り下ろす。

小石を退かしてまたボール状の石を取り出す。

ん？この石大きいな。ステータスでまた調べる。

でかいきんのたま

………次だ、次。

時計を見ると3時間は経っただろうか

それで結果は、

きんのたま×3 1

でかいきんのたま×2

リーフのいし×3

こわもてプレート×1

みずのいし×1

かたいいし×1

Zリング×1

かわらずのいし×2

つきのいし×3

キーストーン×3

ツメのかせき×1

さらさらいわ×1

ヘルガーナイト×1

かなり大量に採れたな。特にきんのたまが多い。

進化の石も結構採れた。

キーストーンとメガストーンがあると言うことはメガ進化できるのか？

ヤミラミナイトを探さなきゃな、ヤミラミのメガ進化を見たい。

乙リングがあるならば乙技があるのか？ポーズとかしなきゃダメなのか？

さてと、疲れたし後1回採掘して帰ろう。

どーせきんのたまだろうし、帰ったら爺ちゃんに頼んで換金してもらおう。

「何の用だ貴様?」

地団に赤い点が輝いていたのでそこに行ってみると、広間になっていた。

「黙るな、答えよ」

白く大きい馬っぽい奴がいた。

まあプレートがあるから可能性はあるとは思っていた。

「無視か? いい度胸ではないか」

……アルセウスでした。

「ええつとアルセウスでいいのか?」

「如何にも」

「何でここにいるんだ?」

神話クラスのポケモンだろお前。

「知らぬ、寝ていたらいつの間にかここにいた」

現実とポケモン世界が混じったから巻き込まれたのだろう。

「それで貴様は何処からきた? ここは出入り口が見られないが?」

俺はたんけんセットを使用しここに来た事を話す。

「ほう、お主出れるのか。私も連れていってはくれないか？」

「えっ、マジで!？」

「お主には邪気が見られんし暇過ぎるのでな、ただし条件付きでだ」
条件付き？

「プレートを買おう。それで我の力が発揮させられる」

「この事？」

今さっき見つけたこわもてプレート出す。

というか俺運良くない？

「おおっ、持っていたか。これからよろしく頼むぞ我が主よ」

「よろしくなアルセウス」

物語の序盤に魔王が仲間になった気分だ。

こうしてアルセウスを仲間に加えたのだった。

道具の有用性

「いやあ太陽の光が眩しいな」

「ああそうだな、アメ食う？」

「頂こう」

俺達はダンジョンから出て来た。

そして隣には白い着物を着た長い黒髪の美女がいる。

「お前人間化出来たんだな」

「ああ、その方がエネルギーの消費が少ない、この方が話しやすいであろう」

「何でもありだなアルセウス」

まさか擬人化出来るとはな、さすが神話クラス。

結構萌えもん好きなんだ俺。

「とりあえずアルセウスはご飯食べる？ 昼だし」

「頂くぞ我が主よ」

□ □ □

「うんまつ、主のご飯メチャクチャ美味だぞ！」

今日のご飯は山菜ご飯だ。

そろそろ米が少なくなってきたな。なんとかしないと。

ステータスを見てみるとバッジのアイコンにお知らせがある。そういえばアルセウスはLv60だから条件を満たしたか。全部で4つ手にいれた訳だ。

それで追加される機能は、

2つ目の機能は自転車、マツハとダート両方。

3つ目の機能は釣竿、だかどんな釣竿かはランダムらしい。

4つ目の機能は技を思い出させる機能だそうだ。

自転車は移動には嬉しい。色んな所へ行く予定だしな。

釣竿はルーアーや錘が付いており、一式揃っている。釣りをしたことない俺にもやり方が分かるように説明書もある。

技の思い出す機能はバトルではバリエーションが広がり重宝するな。

「主、お代わり」

「はいはい」

それでアルセウスだ。ツキ過ぎて怖くなってきた。

「テレビというのかコレは？」

「これでチャンネルを変えられるんだ」

「おおっ！」

よし、ご馳走さま。今2時か、間に合うな。

爺ちゃん家に行つてきんのたまの換金を頼もう。

未成年が金なんか売ると怪しまれそうだからな。

「アルセウス、ちよつと出かけてくる。留守番して待つてくれないか？」

「了解したぞ主よ、テレビを見ながら待つているぞ」

「こうして爺ちゃん家に行くことにした。」



「爺ちゃん久しぶり」

「お、広人ではないか」

俺の爺ちゃん、影山鍊三。不動産会社社長だ。まあ一人で営業してるから社長だ。生活費はこの人に支給されている。

「まあよくきた、お菓子出してやろう」

「ありがとー爺ちゃん」

お茶とカステラ、おはぎ、団子、ケーキが出てくる。

……多くない？ 太らせて俺を食べたいの？

「いやあもうそろそろ賞味期限が切れそうなのでな、うっかりしとった」
「……………」

「悪かったわい、たくさん食べていいからな」

まあいい食いだめしておくか。

貴重なエネルギー源だしな。

そして時間をかけて完食する。上手かった。

「それで今日は何の用じゃ？」

俺はこれまでの事を話す。

「ほほう、わかった預かろう。そういつた知り合いがいるのでな」

「頼むよ」

「それで一人暮らしはもう慣れたか」

「ぼちぼちかな、特に困った事ないし」

庭の手入れとかは自分でやってる。

管理する条件で借りてるからね。

「んじゃ、これ渡しておくよ」

きんのたまをどうぐのアイコンから取り出す。

全部で6個位渡す。合計で重さは3kg程だろうか。

「わかったぞい、明後日くらいにまた訪ねてくれ」

「ありがとう。お菓子ご馳走さま」

「また来いよ」

□ □ □

俺は誰もいない住宅街を歩く。

それにしても結構食べた。しばらく甘いものは食べたくない。

早く帰ろう。アルセウスが待っている。

歩いていると向こう側から人が歩いてくる。

外見は金髪でセーラー服の女子高生で、顔は暗くてよく見えない。

夕方です暗いのに出歩いていたら危ないな。

ん？ 後ろから足音がするな。しかも早い音で。

後ろを見ると暗いから顔は見えないが体つきで男性だろう。そんなもって俺を追い抜き、徐々に足の動きが早くなる。

あつ、そのまま女子高生にぶつかった。何処に目を付けているんだ？

そして男は全速力で逃げる。どうしたんだ急に？

「えっ？」

今のは女子高生の声だ。

声を出した後倒れる。

「おい！ 何があつた！」

俺は駆け寄る。何かがおかしい。

女子高生の腹を見ると刃物が刺さっている。

嘘だろ通り魔かよ！

「ううっ……」

よく見ると鳩尾に深く刺さっている。

まずいなここは確か急所だつたはずだ。

ここは救急車呼ぶか。あつ携帯修理に出してたっけ。あの時クソガキに壊されていたんだと思う。

「いやだ……」

かすり声だ。

「……死にたくないよ」

顔が青ざめてくる。まずいな瀕死の状態だ。

……待てよ、瀕死って事はだ。

俺はステータスの道具アイコンからとある道具を出す。効くかどうか一か八か賭けてみるか。

げんきのかけらをアイテムアイコンから出して女子高生に触れる。

するとかけらが突然光り出し、傷が塞がっていく。

これ人間にも効くのかよ……。

「ああ、良かった」

顔色も赤みが出て来たしもう大丈夫だろう。

ここは道路だし寝かせるのは不味いから移動するか。



「うん？」

目覚めたようだ。今公園のベンチに横たわっている。一時間程眠っていたな。

「あのう、あなたが助けてくれたんですか？」

よく顔を見たらかなりの美少女だなあ。寝ているときに目の保養をさせてもらった。

「さあ倒れていたから運んだだけだよ」

「いえ、とぼけても無駄ですよ。なにか出して治してましたよね？」

あの時意識あつたのか。

「この度は助けて頂きありがとうございます。ごきモガッ！」

俺は今さつき拾ったオボンのみを口に入れて逃げる。

美少女にお礼言われるなんて恥ずかしくてたまらないし、アルセウスが家で待っている。

俺はダッシュで帰るのだった。

2体目の御三家

「先輩！ここにちはー」

女子高生を救った翌日、今日は玉川と一緒にレベル上げに行く約束をしていた。

「すみませんお手洗い借ります」

靴を脱いで玄関に上がる。

廊下を歩いていると何かを見つけた様だ。

「えくとあの人誰です？」

「zzz」

ああコイツか。

「アルセウスと言つて俺のポケモンだ……」

「何でもありますね……」

「zzz」

テレビをつけながらよだれを垂らし眠り込んでいる。電気代がもつたいな。

さてレベル上げ行くか。



と言う事で今日は海にやって来た。

周りを見てみるとキャモメやポツポ、ニヤース、ナゾノクサが見られる。確認の為に戦った所、デルビルにはちようにいい相手だ。

それで海に来た理由はこのアイテムだ。

すごいっぴりざお

バツジシステムで手にいれたので試しておこうとの事だ。水タイプが欲しい。

「デルビル、ひのこー!」

もう始めてやがる。さあこつちもフィッシングスタートだ。

□ □ □

「ベトベター、どくづき」

「ベター」

コイキングにぶちかます。あまりいいの釣れないな。

つれたとしたらコイキング・ギバニア・バスラオ・メノクラゲあたりだろうか。全員Lvが高いがベトベターにより一撃で倒し海に一目散に逃げる。

「おつ、でかいな」

かなりの引きだ、大物の予感がする。

「フイッーシュー！」

「ギャオオオ」

あつギャラドスが出た。どつかの川や湖で出て来た記憶がある。やっぱ野生で出現

するんだな。ちなみにLv40。

ギャラドスのアクアテール！

「ベトオー！」

やべ先制された！　だがHPバーがそこまで減っていないためあまり効いてないよ
うだ。

「ベトベター、いわなだれ！」

「ベター！」

いわなだれを技マシンで覚えさせておいた。効果抜群の為HPが0になり、海に逃げ
ていく。

よくやったなベトベター。

「せ、先輩！　平気ですか!？」

今のバトルを見ていたように駆け寄ってくる。

「海にはすごいそうなおポケモンがいるんですね……」

「今のよりヤバイ奴がいるよ……」

アルセウスがいるんだからカイオーガとかいそうだな。

「それで、レベル上げはどうなったんだ？」

「はい、Lv12まで上がりました」

ん？ レベルの上がり大きいな？

ニヤビーよりも成長が早い様な気がする。

「ああ、もう夕方か……」

後1，2匹程釣ってから帰るとするか。

暗くなるとポケモンがLvが高くなるから殆どの人が夜に家から外出しないみたいだ。夜しか出ない奴もいるし。

「先輩、ウキが沈んでいますよ」

「あ、本当だ」

竿を挙げてみるが感触が少し軽いな。リールを巻いていくと姿が見えてきた。

水色？ でも赤い所が無いからメノクラゲではないな。

そしてポケモンか水中から釣り上げられる。

「……………ケロ」

ケロマツじゃないか。

第6世代の御三家でサトシの持っていたポケモンだ。

ゲッコウガって俺好きなんだよな。アニメとかゲームを見ていると活躍しているポケモンだ。

「ケロッ！」

あれ？ 殺る気満々だ。

「出てこいニャビー！」

□ □ □

「くらえ、ネットボール！」

今さっき拾ったネットボールを投げてケロマツに当たり、ボールの中に入る。そして3回程揺れて動きが止まる。

やったケロマツゲットだぜ！

まさか御三家を2匹手に入るとはラッキーだ。

それで俺はケロマツをボールから出す。

「よろしくなケロマツ」

「ケロ」

俺らは握手をする。

「もう暗くなつたから玉川の家まで送って行くよ」

「あ、ありがとうございます」

こうしてまた強力な味方が増えたのだつた。

進化

「爺ちゃん、来たよ」

今日はきんのたまを換金したお金を受け取りに来た。

「おお、きたか広人よ」

待ちに待ったこの日だ。楽しみにしてた。アルセウスが来てから食料の消費が激しく底が尽きそうだった。山菜だけじゃ飯が回らなくなってきた。調味料はあるが炭水化物が欲しい。

「実はな……これを見てくれ」

「ええつと、ほえ？ 一千万？」

確認してみると百万とかではなく間違いなく事実みたいだ。

「アイツに聞いてみたところかなり質が良い金だそうだな、また持って来て欲しいこの事じゃ。最近是需要が多いそうでの」

「へえー」

ダンジョンの金はそんなに良かったのか……。まだきんのたまはたくさんあるけど

ね。

まあ金は色々使用する用途があるから気持ちが変わる。例えば工業用品や医療、食用、装飾品、宇宙開発等に使われているらしい。

そういうえば金を食べるポケモンがいたよう気がする。何だっけ？

「とりあえず大半は預かるう。大金を持つているとどんなやつに目をつけられるか分からん」

うわあ、言うと思った。だよね高校生が大金を持つていたら怪しいよね。

そういつた事になったので150万程貰える事になった。少しでも貰えるように粘った結果だ。

「ありがとね爺ちゃん、また頼むよ」

「ああまた来いよ」

こうしてきんのたまの換金を頼み、爺ちゃん家を後にするのだった。

やっぱり米を買うかな、もう無いしな。後は冤罪防止の為に秘密兵器を買いたい。もう泣き寝入りはしたくないからな。



さてと時間があるしポケモンのレベル上げをしますかね。それで優先的にレベル上げするのはコイツらだ。

ニャビー Lv16

ケロマツ Lv15

ニャビーはそろそろ進化だな。楽しみだ。

ケロマツは捕まえた時はLvが高く、たまご技はどくびしを覚えていた。「とりあえず今回はお前らが中心で戦う。ベトベターはサポートで」

「ニャー！」

「ケロ！」

「ベトオ！」

殺る気満々でよろしい。

「ムックルー！」

あつ、野生のムックルが表れた。

「ケロマツ、みずのはどう！」

□
□
□

「ニャア！」

イシツブテににどげりを食らわせる。

ポケモンバトルに熱中しすぎたため山のほうへ入り込んでしまった。山だとポケモンの数が多く町の方と違いがある。

あつLvが上がったらしくニャビーが光り出した。ついでにケロマツも光り出す。

そして光りが消え、進化した姿が見えてきた。

「ニャア！」

「ゲコ！」

ニャヒートとゲコガシラに進化した。

良かった進化出来て、でもまだ悪タイプはついていないからまだ踏ん張らなければならぬ。

「ナゾ！」

ナゾノクサ Lv15

感動していた所だかポケモンは待ってくれないようだ。

「ベトベター、かみくだく！」

「ベトオ」

噛みついて一撃で戦闘不能にした。やっぱり成長しているな。おつ、Lvが38になったようだ。

「ベト」

ベトベターが光り出す。

あつ、そういえば38になったら進化するんだったよな。うっかり忘れてた。

そして光りが消えて行きカラフルなやつが姿を表す。

「ベトオ！」

アローラのベトヘトンだ。よく対戦で使われているポケモンだ。

「頑張ったな」

「ベトオ」

色鮮やかになったから触りにくいが撫でてやる。

「ドクウ！」

うわドクケイルだよ。撫でている時に邪魔をするな。

「ニヤヒート、ほのおのきばだ！」

「ニャア！」

□
□
□

「ただいまー」

「主遅いー」

結局熱中し過ぎて暗くなるまでポケモンバトルをしていた。帰る途中で米をたくさん買ってきたためさらに遅くなってしまった。

「早く飯作ってー」

お前は子供かい。

たけど俺を待つてくれるやつがいるのは幸せだ。

そう思いながら米を洗うのだった。

夜戦

さて今日は趣向を変えてみて夜に出て見ようかな。その前に昨日金が入ったため通販でとある物を頼んでいるため3時くらいには家にいなければならぬ。俺も疲れがたまってしまったので休んでいよう。

それで昨日バツジシステムで5個目の機能を手にいれた。その機能はダウジングマシんだ。

正直ボール等が少なくなってきたので助かる。夜にそれを使って色々探してみよう。ああ楽しみだ。

「主、朝飯まだか？」

「もうできている」

今日は焼き魚と玉ねぎ入りの味噌汁と卵焼きと白米だ。

「な、なんだこの卵焼き旨いぞ」

卵焼きには鶏ガラスープの素とベーコンを入れた。かなりご飯に合うだろう。

「おかわり！」

早っ。

-
-
-

時間が経つのも早くもう夜で通販で買ったものを装備し公園に立っている。

これがあればもう悔しい思いをすることは無い。気分は聖なるバリアマミラーフォー
スを伏せた気分だ。はははははははははは。

「ホウー」

おっホーホーだ。

ホーホー L v 1 8

昼間よりポケモンのレベルが違うな。少し高めだ。

「ヤミラミ、バークアウト！」

「ヤミー！」

ホーホーにヒットし、HPバーが無くなり一目散に逃げて行く。戦闘終了だ。

とりあえずダウジングマシンを使ってみよう。アイコンを押し出して見るとL字の棒が出てくる。

ええつと確かここを持ってと……あつ反応があつた。落ち葉に隠れているみたいだ。

探してみると布みたいなのを発見した。なんだこれ？

れいかいのぬの

あー確かサマヨールに持たして通信交換だっけ？ でも一応何かに役に立つかもしれないから持っておこう。

おつ、また反応があつた次は土の中みたいだ。そこを探検セットに付いていたスコップで掘る。

メタルコート

まあこれも役に立つかもしれないから持っておこう。

ちなみにこの前来たお知らせのアイコンで神様達の仕業で道具が落ちているらしい。

正直嬉しいがどんな原理だろうか？

「ズバツ!!」

次はズバツトか。ちなみにLv19だ。

「ベトヘトン、いわなだれ！」

効果抜群だな。このようにバツタバツタと倒していくのだった。

□
□
□

ふうーもう11時かもう遅くなってしまった。停学くらってだか毎日が日曜日みたいに感じる。気楽にいこう。

とりあえず道具が大漁に見つけられた。ボールが少なくなってきたため嬉しい。

他にも対戦で使えそうな道具を数個見つけたため、対人戦で有利になりそうだ。

それにしても歩いてみると人がいないな。夜だからってこともあるけど前にここを歩いた時はまだ人がいた。トレーナーが増えれば人が出てくるだろうか？

「きやああああ!!」

人がいないはずなのに悲鳴が聞こえた。何なのさ？

俺は声が出された方向へ行ってみる。

「おいおいお嬢ちゃんこんな時間にあぶないなあ〜」

「俺んち来なよお〜ヒヤハハハ」

「ダイジヨブだよお優しくするからさ〜」

中学生程の女の子が顔が世紀末の怖い人の3人組に囲まれている。夜道でこんなのと会ったら悲鳴を上げるだろうな。

「嫌ーッ! 離して!!」

手を捕まれ抵抗している。

「安心しなよお、兄貴はポケモントレーナーだからさあ」

「ボール拾ってさゲットしちゃたんだ〜」

そういえばネットにポケモンの捕まえかたが載ってたっけ、普通にポケモンと交渉すれば無傷でつかまえられるからな。

「あ」

女の子と目があつた。

「助けて!!」

捕まれていた手を振りほどき逃げて、俺の後ろに隠れる。

「なんだお前は?」

後ろの女の子は震えている。余程怖かったのだろうな。

「や、やだなあ。怖がつてるじゃないですか、無理矢理するのは良くないですよ」

あまり手荒にはしたくないので下手にでる。

すると取り巻きの男が近づき俺の前に立つ。そして顔をいきなり殴る。

「失せろ」

玄人だと何も言わずに袋叩きにして女を恐怖で連れやすくするらしいが、コイツらは

警告している時点で紳士的だ。

「ニヤアア!!」

ニヤヒートがよくもやりやがったなとネコパンチをお見舞いし男が吹っ飛ぶ。ピク

ピクしているから死んではないようだ。

「てめえ!!」

「やりやがったな!!」

いきなり殴り掛かってきたのはお前らだろうに、キレられるのは筋違いだ。

ポケモントレーナーのマサシか勝負をしかけてきた

あつ文章が出て来た。ここまでゲームと一緒になのか。

「許さねえ！ 行け、イトマル！」

「やれ、ニヤヒート」

よく考えれば初の対人戦だな。

イトマルのLvは10。

「イトマル、どくばり！」

「ニャア！」

簡単に針を避ける、余裕そうだな。

反撃するか。

「ほのおのきばー！」

「ニャオ！」

炎に牙を纏わせ頭に噛みつく。

「キシヤアアア！」

効果抜群、そして倒れてHPバーが無くなった。

「さてまだやるか？」

「に、逃げろ！」

倒れたやつを連れていき3人組は逃げ去った。

賞金5000円を手にいれた

そういえば担当の神が賞金の事を言っていたがこの事か。

「あ、あの」

ああ忘れてた、いたんだっけ。

「あ、ありがとうございます！」

「そうかい、早く家に帰りなよ」

□
□
□

「それでいつまでついてくる気だ？」

「ええつと……」

今さつきから俺の後をつけてくる。

「まさか家出か？」

「ギクツ」

凶星かよ……すごい困った顔している。

「わかった迷惑をかけないことが条件で少しだけだぞ」
「ぱあつと顔が明るくなる。」

「だけど迷惑かけたら酷い目に合わせてやるからな。」

□
□
□

「ただいまー」

と言つてみるがアルセウスはもう寝ているらしい。晩飯を作つて出かけたからね。

「とりあえずシャワー浴びてこい、着替え用意してやるよ」

「うん、ありがとう」

適当に服を持つて渡す。後は何か作つてやるか。

そして風呂場に入つていった。

「ヤミラミ、ちよつと頼みがある」

「ヤミ?」

□ □ □

余り物だがレンジでチンして渡す。

「うわつ、美味しい!」

すごい勢いで食事をする。相当空腹だったみたいだ。

そして完食する。

「ところでお前の名前は？」

「真田 唯です……」

嘘はついていないようだ。ヤミラミにサイフを取ってくるように指示し、中身を見たため間違いない。自宅の電話番号と住所も書かれていたためデジカメで撮った。

もちろん元に戻した。

話を聞くことによると親と喧嘩したらしく、あまり金を持たずに家出したらしい。

そして数日経ち途方にくれたところであそこで絡まれていたらしい。

「お願いしますー！」

いきなり土下座される。

「私をこの家に置いてください！ 何でもしますー！」

悲痛な訴えを感じる。

相当家に帰るのが嫌みたいだ。

「もうあんな生活したくない……」

うーんどうしようかな、掃除とかの管理させるかな？ 不利益を与えるならこつちも

考えがあるし。

「あーわかったよ、ただし俺の言う事を聞くこと」

「あ、ありがとうございます!!」
また同居人が増えたのだった。

人海戦術

「それじゃ掃除頼むわ」

「は〜い」

昨日居候してきた唯をコキ使う事にした。

今俺は一人暮らしのため部屋が散らかっており、家も大きいため掃除が面倒臭いから雇った。

ついでに洗濯や買い物等をやらせておこう。

「それにしてもなんでこんなにポケモンがいるの？」

説明するの忘れていたから教えておく。

「ええっ！ 凄い人に助けられた！」

「あとこれを洗濯お願い」

「主朝飯〜」

アルセウスが起きてきた。意外と早起きなんだよな。

「誰じゃソイツ？」

「昨日道で拾った。今日からここに住む事になった居候2号だ」

「ええつとこの人は？」

「居候1号だ」

「えっへん！」

威張ることじゃない。そろそろ戦わせるかな？

テレビを食い入るように見ていたから邪魔したら悪いと思って留守番とかさせていたが近いうちに戦わせよう。

「アルセウスだ、よろしくな2号」

「真田唯です、よろしくお願ひします」

仲良くなったところで後で草むしりと買い物頼もう。働いてもらわなきゃな。

□ □ □

「それにしても私の家よりもすごい美味しい」

味噌汁を唯が啜る。普通に作ったけどそんなに言われるとこっちは嬉しい。

「ぷはーご馳走様だ主よ」

結構食べたな、まだおかわりはあるんだがな。

「ご馳走様でした」

お粗末様でした。きれいに食べてくれた。

少し多目に作ったから余った。どうしようかな。ポケモンは全員腹がいっぱいだし。

ガサツ

ん？ 庭に何かいるのか？

よく見ると茶色と白が見える。ああ、このポケモンは……

「グマー！」

ジグザグマじゃないか。別に珍しくないな。

朝飯の匂いに釣られたのだろうか？

まあ自分の家で戦うのも嫌だし、穏便に帰ってもらうかな。

「ほらこれやるから帰れ」

朝飯の残りを渡し、匂いを確認し食べる。

「グ〜マツ」

幸せそうな鳴き声を出す。良かったな。

あれ？ 胸のあたりを探ってる、なにやっているのだろうか？あつ、モンスターボールを出した。

そして俺の方に転がす。

「くれるのか？」

「グマ」

肯定のようだ。確か特性のものひろいだったよな。沢山いれば多くの道具が手に入るんだけどな……あつ、良いこと考えた!!

「なあ、ジグザグマお願いがあるんだが？」

「グマツ？」

□ □ □

時刻は夕方、庭の少し広い場所にジグザグマ等のポケモンが集まった。

「ようし集まったな」

集めたのは他でもなく、取引をするだけだ。

「それじゃ聞いてくれ、いきなりだがお前らに道具を集めてきて欲しい」

ジグザグマ等のポケモン達がざわめく。

「ああ、安心してくれタダじゃない。見返りを渡すからこれを見てくれ」

見せるのはエサ機能だ。

そしてエサを敷いてある紙の上に出す。

「俺はエサを生み出す事ができる。それとかなりいい道具を持ってきたらもつと美味しいエサをやろう。これを食べてみてくれ」

朝飯の残りを出す。

「グマー！」

「グマグマー！」

「グマツ」

「グマアアアアア！」

反応を見ると好評みたいだ。

上手く行けば楽しんで道具が手に入る。

「それじゃ頼むぞお前ら」

「「「「グマー！」「」」」」

念のためとある技マシンの技を覚えさせておいた。

技マシンは自分のポケモンじゃなくても使えるみたいだ。

□ □ □

そして翌日、朝になった。

「さあてあいつら何拾ったかな」

指定された場所と時間に道具を置くように指示しておいた。代わりにそこにエサを大量に置いておく。

「おおっ、たくさんある」

ボールに傷薬、きのみ、少ないが技マシンが集まっている。

よく見てみるとハイパーボールやすごいきずぐすり等の高価なものまである。ラッ

キーとかしか言えない。

基本的にボールが多い。まあ食べられないし、ポケモンじゃ使い道無いか。

きのみは全体的に少ない。まあケガしたり状態異常になったりするかもしれないから仕方ないか。

それにしてもいい仕事をするなあいつら。何か旨い飯をでも作ってやろう。

リアル鬼ごっこ

レベル上げ帰り。道路を歩いていたら横に黒い車が止まった。

「ああああああ見つけた!!」

「あつやべ」

この前通り魔から助けた女の子だ。

よし逃げよう。

「だからなんで逃げるんですか!？」

何って？ 勘かな、変なことに巻き込まれそうな感じだし。

後は溜めてたゲームを消化したいからさ。

「捕まえて!!」

「了解しましたお嬢」

な、なんだ怖いお兄さんが2人程出て来たぞ。

「おい！ 待ちやがれ！」

だが加護で肉体を強化されている俺には追い付かない。マジでチートだな。

「早えええ！」

「クソ！ 応援呼ぶぞ！」

はい？

□
□
□

「見つけたぞ！」

「逃がすなあああ！」

「待てコラアアア」

「少し時間取るだけだからよおおお！」

15分くらい経っただろうか。

結論から言うと30人位怖いお兄さんが増えた。

あの娘何者？ どれだけ権力持ってるの!?

あつ、しまった行き止まりだ。

「やつと追い詰めたぜ」

「観念して捕まりな」

いや、まだ手がある。前後左右塞がれているならば、

「何?! 上だと!!」

手頃な台があつたから助かつた。塀の上を走り、屋根を渡り歩く。

これってフリーランニングだっただけ?

こうして完全に逃げきるのだった。

□ □ □

ふうーもういいかな。念のためしばらく廃工場に隠れていたがもう大丈夫だろう。それより何者だあいつら?

まあいい帰ろう。夕飯作らないといけないからな。

そう思い帰ろうとしたその時、

「ううっ……」

気づかなかった先客がいたのか。見てみると横に男性がいた。

……満身創痍でだ、血とか出てる。

ええーなんで俺はこんなにトラブルに巻き込まれるのさ？

「すまねえ親父い……」

この人に何があつたんだよ!? とりあえずすごいきずぐすりを使っておこう。

「ううっ」

吹き掛けて見るとあら不思議。傷が塞がっていくではありませんか。

「な、なんだ兄ちゃん助けてくれたのか……」

それにしても効くなこの傷薬。

それよりもこの傷ただの傷じゃないな穴みたいな傷だ。

まさかこれって……。

「兄ちゃん助けてもらって悪いんだが逃げろ」

待って? 何から逃げるの?

パァン

「見つけたぞ黒田ア!」

発砲音がしたので振り向くとオーガみたいな奴がのしのし歩いてくる。

マジかよ拳銃持ってやがる！ ヤバい非常にヤバい。

「ああ？　なんだお前？」

こつちを見てきた。勘弁してくれ頼むから。

「仕方ねえ口封じに殺るか」

クソツ！　逃げ場無しかよ！

俺が死んだらこの人も死ぬ、戦うしかない。

「行け、ヤミラミ！」

「ヤミ！」

ポケモンで戦うけど。

「ヤミラミ、おにび！」

「ヤミ！」

「なっ！　アチイ！」

おにびが奴に当たり地面を転げ回る。その隙を見逃す俺ではない。くらええええええ

えええ！

「オラアアアッ!!」

腹部に蹴りをぶちこむ。そして思ったより吹っ飛ぶ。

「がばはっ!!」

生きの良い鳴き声と一緒にドラム缶にストライクする。死んでないよね……。

「兄ちゃん今のうちに逃げる……」

は？ KOじゃないの？

奴がドラム缶を退かして出てくる。うわータフだコイツ。

「ち、畜生、やりやがったな……」

「アイツは裏社会じゃ有名な殺し屋だ。ちよつとの事じゃ死なないぞ」

裏社会の殺し屋!? 俺はマズイ所まで足を踏み込んでいるらしい。

ちなみに3割程度で蹴ったんだけど優しかったのか? おっ手軽な石見つけ。

拳大の大きさの石を拾い、投げつける。

持っていた拳銃に当たり弾く。

「やりやがったなアアア!!」

あ、ナイフを抜きやがった。

「ヤミー!」

「いや、俺がやるから任せろ」

たまには俺が戦うよ。

ナイフを持って相手が突っ込んでくる。

突き、斬るをしてくるが俺には当たらない。ゆっくりナイフが見える。

「どうした？ 当たらないぞ」

「クソツ！」

もう終わらせるかな？ 唯とアルセウスがご飯を待っている。

ナイフを突いた瞬間相手の間合いの中に入り込み、顎をアッパーで打ち抜く。

3 m位宙に浮き、地面に落ちる。

「嘘だろ……」悪鬼の比山を倒しやがった」

コイツそんな二つ名を持っていたのか……。

とりあえず気を失っており、鎖が落ちていたから縛ることにした。

「兄ちゃん……何者だい？」

「とりあえず立てます？」

「ああ」

と思つたが立ちにくく足を引きずる。ケガは治っているがすごいきずぐすりも万能ではないようだ。

「仕方ないや送って行くよ」

「重ね重ねすまない」

この人を家に送つたらダツシユで帰ろう。殺し屋に狙われるとか普通の人間ではな

いだろう。

ちなみに殺し屋は鎖で縛ってドラム缶の中に入れ、口を落ちていたガムテープで塞いでおいた。

誰か親切な人に助けてもらおう事を祈っている。

□ □ □

「ここでもいいの?」

「ああ助かったぜ兄ちゃん」

玉川の家よりも大きいや。武家屋敷と言うのだろうか。

門の前にいるのだからその横に立て掛けてある看板には「黒田組」と書かれている。

確か黒田組ってここら辺じゃ有名な極道だという話を聞いたことがある。穏健派で抗争をしないとか。

「若! 大丈夫ですか!!」

「ああ平気だ歩きにくいが問題ない」

玄関に入ったからお兄さん達が慌てて駆け寄ってくる。この助けたおっちゃんも相当地位が高いらしい。

「ああ兄ちゃん、親父に会わせたいから上がってくれ」

「いえ、用事があるので失礼します」

あんまり関わりとか持ちたくないし、夕飯作りたいしね。この人置いたら帰るか。ん？ 後ろから多数の気配を感じる。

「ああ逃がしちゃいましたね」

「あのガキ足速かったですね、他にもジャンプ力ありましたし」

「人相書きで探してますかい？」

「次見かけたら40人位導入して!! 必ず捕まえ……あつ」

「あつ」

今さつき鬼ごっこしてた人達が後ろから来た。

「パパアア! ソイツ捕まえて!!」

「パパ?」

「ガシッ」

「少しだけ上がっていけや兄ちゃん、娘の話とか聞きたいしな、遅くなったら送って行く」

「よ」

お前コイツの父親だったの？ なにこの偶然？

こうして俺は捕縛されるのであった。

□ □ □

「ほう、お前さんが儂の息子と孫の命を助けてくれたのか」

今俺は組長の前に座っている。逃げられないように多くの組員に囲まれてだ。

「本当に助かった礼を言う」

そう言つて頭を下げられる。

まあ礼を言われるためにやったことではないため少し困る。場所の事もあるため速く帰りたい。

「うふふ」

それで隣にその孫がいる。名前は黒田アリスと言うらしい、金髪なのはハーフだからだそうだ。

助けられた後から俺を探していたらしい。

「あのーそろそろ遅いので帰りたいのですが」

「おおっそうかわかった。車を用意しよう」

少し話した後、もう夜だと気づいた。

「何かあったら頼ってくれ、力になろう」

「ははっどうも」

そしてこの屋敷を後にするのだった。

□ □ □

「親父、調べ終わったぞ」

「それで？ あの子の素性は？」

組長が調査の資料を読む。

「ほお、選ばれたポケモントレーナーの1人か」

「ああ、相当不運な目にあってるらしい」

「ん？ 影山錬三の孫か……」

「知り合いですかい？」

「少し交流があつたな。ずっと前だが」

懐かしいな、と言い。

「アリスのやつも惚れているみたいだし、このままくつつけて良いかもしれんな」

「いいんですかい？ 若が聞いたら複雑な顔しますよ」
「大丈夫だろ、上手く言っておく。それにあの男は絶対に伸びる、かなりの地位まで行くだろうな」

□ □ □

車の中、アリスさんがベツタリと腕を絡めてくる。胸が豊満なため幸せを感じる。

「え〜とアリスさんは年いくつ？」

「アリスでいいですよ。18です」

「年上じゃん」

「いいんですよ。命の恩人ですから」

腕の絡みが強くなる。

「あつこれ私の電話番号とLINEIDです。何かあつたら連絡ください」

「あつどうも」

「着きましたよお嬢」

「ええーもう!!」

ホントだ、もう家の前だ。

「それじゃ送ってくれてありがとう」

「はい、また今度お会いしましょう」

車が去っていった。

さーて晩飯作るかな。

アルセウスの実力

「グガアアアア」

これは何の音かわかるだろうか？

アルセウスのイビキである。

今は夕方なのだがお昼寝の延長で寝ているらしい。

そう言えば深夜番組を観ていたから体内時間が狂ったのだろうか？ 甘えさせてい

るのが問題だろうか。

「アルセウス、起きろ」

「ふあ？ なんじゃ？」

「今日の夜出かけるぞ」

「眠い」

そろそろ戦わせてみるか。



「ええー主よ本当にやるのか？」

「ああ本当だ」

今俺たちがどこにいるのかというところと夜の海にいる。

アルセウスの実力をみるために暴れても問題ない場所に来てみた。

「ここ誰も来ないわよね？」

唯も一緒に連れてきた。ちなみにコイツも弟子にするためポケモンをゲットを手伝い、レベル上げさせている。

「あつ帰って来た。人いなかった？」

「カアツ」

ヤミカラスが首を縦に振る。そう、コイツのポケモンだ。今日の昼頃ゲットした。

「カアカアツ！」

今Lv15で特性きょううんで、たまご技ははねやすめがあった。

「それじゃアルセウス、元の姿になつて」

「わかったぞ」

まばゆい光に包まれ元の馬みたいな姿になる。

「うわっデカ」

それもそのはず美女が高さ3.2 m、重さ320 kgのモンスターになって現れたらみんな驚くだろう。

たしかラティアスとゾロアとかも変身能力を持っていた記憶があるが実際にどうなのだろうか？

「主よ何をすれば良い？」

「とりあえず最初はハイパーボイスを海に放ってみてくれ」

「了解したぞ」

まず最初は威力90の技だ。

今こわもてプレートを持たせており、悪タイプの加護が入るためステータスが上がる。

「ガアアアア!!」

うわっうるさい。

だけど海を見てみると水飛沫が上がり、相当の威力があることが解る。

あつ経験値が入って来た。ポケモンに迷惑だけでもまだ続ける。

「凄い……」

「俺もそう思う」

まだ実験は終わっていないのだよ。

「じゃあ次はかいこうせんを海にぶちこめ」

「了解じゃ」

次に威力150の技を使う。

ステータス2倍で射つので高威力だから危ないため海に来た。

「ガアアアアアッ!!」

海を光線で一直線に切り裂くように放たれる。

するとどうだろうかモーゼのように海が割れた。

「……」

これにはもう無言だ。

「少し休ませてくれないかのう? 反動で動けん」

「ほらオレンのみだ」

HP満タンだからもつたいないけどあげる。

さてとあと実験は2つだ。

「次行くぞ、あくのはどうだ」

「了解」

あくのはどうは威力80だ。

ステータス2倍、悪タイプの技威力2倍、そしてタイプ一致で1.5倍。

これはどうなのだろうか気になる。

「ガアアアアアッ!!」

黒い光線がアルセウスの口から放たれ、はかいこうせんよりも威力があることが見るとよく解る。

海に一直線に放たれまたモーゼのようになってしまうが、

ドオオオオオン

「うわっ!!」

「きゃあ!!」

な、なんだこの揺れは!? ヤバいものでもぶっ壊してしまったのだろうか?

「と、とりあえず最後の実験だ」

速く逃げよう。

「アルセウス、俺と唯を乗せてそらをとぶだ!!」

「わかったのじゃ」

「ホントにやるの!?!」

俺と唯がアルセウスに股がると宙に浮き、段々と地面から遠くになってきた。
「ふう、これでひと安心だ」

さあ帰ろうかな。

「アルセウス、自宅まで」

「了解なのじゃ」

それにしてもアルセウスがそらをとぶを覚えるなんて驚いた。結構何でも技マシンを覚えるポケモンだよな。

「ねえ、下見て」

「ん?」

下を見てみるとかなりの夜景が広がっている。

これぞ絶景と言うのだろうか。

「綺麗……」

「本当だよな」

美しい景色を見ながら帰路に着くのだった。



「おはようー」

「今日の朝飯はピザトーストだぞ」

「わーい」

ついでに味噌汁も付いている。

唯の食事の準備を用意したら俺も準備しコーヒーをいれて一服する。

「それで？ 昨日大丈夫だったの？」

「夜だし暗かったら大丈夫だろ」

見えていないはずだ。平気だよな……。

テレビつけてニュースでも見よう。

『それでは次のニュースです。昨日深夜頃〇市〇町の海岸で爆発音が3回ほどあり地震が発生しました』

ニュースになっちゃった。

……やっちゃった。

『海上保安庁の調べによりますと浅瀬の海底の地形が変わっており、何かが海のプレート
トを壊し地震を起こした可能性があり、なお付近で飛行物体を見かけたとの目撃情報
があり調査を進めております』

「……………」

「ふあくおはよう主」

「とりあえず昨日の事は忘れよう」

「うん」

「主よ朝飯くれい」

「味噌汁お代わり」

「ハイハイ」

練習試合

さてと今日は弟子の修行に付き合おう。

「へえ〜ヤミカラスって言うんですか〜」

「玉川さん今日はお願ひしますね」

玉川と唯はすっかり打ち解け仲良くなっている。

弟子同士だし穏やかにやってくれ。

玉川のデルビルはすっかりLvが上がり22となっている。もうそろそろ進化だろう。

唯のヤミカラスは今はLv19になり、昨日たんけんセットでやみのいしを採掘したためもう進化の準備は整った。

ただドゴガシラやニヤヒートよりもLvの上がりがいのような気がする。こつちの方が戦っているという自信はあるがなんだろうか。

……まあいいレベル上げしようか。



もうそろそろ夕方になりそうだし帰るか。

「デルビル、かみつく!!」

デルビルがポツポにかみつuki、ポツポが逃げていく。

「あー!」

玉川の声で振り向くとデルビルが光輝く。

光が消えてくると、

「ガヴツ!」

ヘルガーに進化した。やったじゃないか玉川。

玉川はヘルガーをよくやったと抱擁している。

さあ帰るかな。

「あの玉川さん。お願いがあるんですけど」

「なんですか?」

「私とポケモンバトルしてください」

へ？

□ □ □

時刻は夕方、今俺の庭の広い場所に来ている。

そこで俺はバトルの審判をすることになった。

唯曰くトレーナーとバトルしたいとの事で、玉川もやってみたいと乗り気だ。

そうだ勝った方に賞品をあげよう。

昨日拾ったポケモンがいるからどうしようか迷っていたんだ。

「先輩準備OKです」

「こっちも」

おっ準備が整ったか。

「じゃあルールは簡単。使用ポケモンは1体、道具の使用は無しの方向で」
「うん」

「わかりました」

そういえば他のトレーナーのバトルを見るのは初めてだ。

「それじゃ両者ポケモンを」

「行って！ ヘルガー！」

「行け！ ヤミカラス！」

ヘルガー Lv24

ヤミカラス Lv20

両者とも前よりもLvが上がってきた。

師として嬉しい。

「それでは初め！」

さあバトル開始だ。

実はステータスで他人同士のバトルを見ることが出来る観戦モードがありそれを使用する。

「ヘルガー！ かみつく！」

「ヤミカラス！ そらをとぶ！」

ヘルガーが嘯みつこうとするが、唯のやつはそらをとぶをして回避している。そらをとぶを技マシんで覚えさせていた。

そして急降下して体当たりしてくる。

「ヘルガー！ ひのこ！」

威力は低いけどやや遠くに当てられる事ができる。

「カアツ！」

「ヤミカラス！」

あつ当たった。攻撃するとき下に降りてくるからそこを狙いか。

「カアツ……」

あれ？ なんか様子がおかしい。

あつやけどになっっているみたいだ。

「ヘルガー！ スモッグ！」

ヘルガーが畳み掛ける。攻撃が半減するためチャンスだ。

スモッグがヤミカラスにもろに当たる。

「ヘルガー！ かみなりのきば！」

「ガヴツ！」

黒いガス状のため視界が無くなる。そこを狙いに来たのだろう。

「カアアアアアッ！」

「ヤミカラス！」

飛行だからこうかばつぐんだ。これは効いただろう。

……と思ったがHPが僅かに残った。

だけど、

「カア」

やけどのダメージがあるため倒れてしまった。

玉川のヘルガーの勝利だ。

今回の戦いの勝因は運が良かったというところだろうか。やけどになったり、電気タ
イプを持っていたのが大きい。

だがヤミカラスはきょううんを持っていたから攻撃が当たるとどうなっていたかは
わからない。

次戦う時は楽しみにしていよう。

「二人共頑張ったな」

「ええ強かったです」

「またやりましょう」

「さあ家に帰るか。」

「玉川、夕飯どうだ？」

「あついただきます」

□ □ □

今日の晩御飯はカレーライスだ。

隠し味はインスタントコーヒーを入れている。香りと深いコクが特徴だ。

「うわっ美味しいですね」

「うまい」

「主よお代わり」

もつと味わって食ってくれ。

「ヤミー！」

「ニャー！」

「ブイ！」

「ゲコ！」

昼飯が余ったためポケモンにあげた。

反応を見ると好評のようだ。

「それで先輩その子は新しいポケモンですか？」

「ブイ？」

そうソイツが本題だ。

イーブイを拾ったんだ。

「玉川、コイツを育てろ」

「この子をですか？」

実力がついてきたお前にプレゼントする。

「わかりました。大切にします」

「頼むぞ」

「だけど可愛いわね、どこで拾ったの？」

それにしてもあの時はスツキリしたな。



昨日俺はスーパーの帰りに公園近くを歩いてた。

『肉が4割引のタイムセールスがあつてラッキーだったな』

結構多目に買ってしまった。しばらくは肉を使った料理をするか。

『イエエエエー！』

あつ！ 頭が悪そうな声が聞こえたと思つたらいつぞやのクソガキとその取り巻きじゃないか。

俺に冤罪をなすりつけやがつてこのクソが。何処かに鉄パイプはないだろうか？

それで何をしようとしているんだ？ なんだあの箱？

『ブイブイッ！』

あつイーブイだ。箱の中に入っている。

隠れて話をこっそり聞くとドブ川に捨てるきらしい。

俺は学習した。バレなければ犯罪じゃないと。

買い物袋から紙袋を取りだし目が見えるように穴を開け被る。絶望くんと言えはわかるだろうか。

さあミツシヨンスタートだ。

『ギャハハハハ』

ガシッ

『ハハハ……ぎゃああああ!!』

クソガキを片手で持ち上げドブ川に投げる。そこまで深くないし、はしごで登って戻ることができるだろう。

『うわああああ!!』

当然取り巻きも投げ捨てる。

さあ帰るか。

『『ギャアアアア!!』』

なんだろうと見てみると二人共クラブにケツをはさまれ悲鳴をあげていた。

そしてはしごを使いあがろうとするが、

『おい！ 退けよ!!』

『ふざけんな俺が先だ!!』

見事にケツをはさまれたまま争いあっている。

俺は爆笑しながら逃げるのであった。

□
□
□

「と言う訳だ」

「何それ自業自得じゃない」

ちなみに今朝牛乳飲んでいたら吹き出しそうになった。

ああースッキリした。

「それで勢いで連れてきたからどうしようかなって迷っていたんだけどバトルに勝った方に渡そうかなと」

「良いなー私も欲しい」

「また今度な」

いいポケモン拾ったら唯にもあげよう。

「主よお代わり」

「あつ私も」

「私も少しお願います」

人気だな俺のカレーは。

こうしてイーブイは玉川のパケモンとなった。

600族

「お願いしますよお！ ゲット手伝って下さいよ！」

今日はアリスが遊びに来ている。

「先輩……また女ですか」

「モテるわね……」

「選ばれたポケモントレーナーなんですよね？ だったらお願いしますよ！」
ん？

「待て、何故俺が選ばれたポケモントレーナーだと知ってる？」

市役所の人間や知り合い以外には一度も言っではないはずだ。

何処でその事を知った？

「ウチの組には太いパイプがたくさん有るんで市役所の情報なんて筒抜けなんですよ
うっ、ヤバイ事を聞いてしまった。

あの市役所は個人情報はどうなっているのだろうか？

「それで私を弟子にすると色々得ですよ？」

「わかったよ、ただし言うことを聞くように」

「はいお願いします」

3人目の弟子ができた。

これから騒がしくなりそうだ。

「あつそう言えば」

「どうした？」

玉川が何か思い出したようだ。

「聖沢先輩の事なんですけど従兄弟が選ばれたポケモントレーナーなんだそうです」

へえ〜それで？

「それでつい最近ポケモントレーナーなってバッジを2個ゲットしたって話を聞きました」

あのバカに付き合わされるポケモンが可哀想だ。

ちなみに俺はバッジ6個目をてにくれた。

追加された機能はお菓子作り機能と化石復元機能だ。

お菓子作り機能でポフィンやポフレを作る様になり、ミロカロスやニンフィアに進化させることが可能になるだろう。

ちなみに今試作品を食べており玉川達に好評だ。

化石はたんけんセットで何個か調達ができる。他のトレーナーとの取引に使えるか

もしれない。

「それで周りの女の子にポケモンゲットを手伝っているそうです」

「アイツらしいな」

アイツはハーレムのお願いをよく聞くタイプだ。それにハーレムが言った事を信じて疑わなかったため例え嘘でも信じて疑わない。根拠が無くても殴りかかる事がよくある。

本当に面倒くさい野郎だ。

「そう言えばこの県のもう一人の選ばれたトレーナーも女の子のゲットの手伝いをするそうですよ」

「それも市役所からの情報？」

「ええ、チャラ男らしいです。二つの意味で」

チャラ男？ 二つの意味？

「グマグマツ!!」

あれジグザグマ？ どうした急に？

「森に乱暴者が出て来たと言っておるぞ」

「乱暴者？」

アルセウスはポケモンのため言っている事がわかるらしく通訳を頼んでいる。口ケツト団のニヤースのようだ。

それでその乱暴者が俺の森で絶賛大暴れ中らしい。

最近知った事なのだがウチの森は大人しいポケモンが集まり暮らしており、平和だそうだ。

山の方に行くくと高レベルのポケモンの縄張りがあり争いが多く激戦区らしい。そのため避難してくるポケモンが多いとかなんとか。

「OK, わかった行こう」

俺の土地で争いが起こり、荒らされると腹が立つ。行って何とかしなければ。

□ □ □

「ガアアアア！」

「ギラツ！」

乱暴者の正体はジヘッドだった。

Lvは58だ。何故か身体中に傷を付けており中々強そうだ。

そいつに対抗するのはヨーギラスだ。Lv20はあるが攻撃は効いておらず跳ね返さ

れる。

「ギラー!!」

必死の攻撃が効かず簡単に吹き飛ばされる。

Lvに差があるため勝負にならない。

「ギ………ラ」

「おっと危ない!」

踏ん張ったが限界がきたらしく倒れそうになった所をアリスが支える。Lvに大差あるのにかなり頑張ったじゃないか。さて次は俺が戦う番か。

「行け! ヤミラミー!」

「ヤミイー!」

「おにびだ!」

ただいまLv38だ。

眠らした方が捕まえやすいけど眠らせる技を持ったポケモンがない。ダークライは何処にいるのだろうか?

とまあおにびか直撃しやけどになる。確かサザンドラと違い種族値は攻撃の方が高かったはず。

ジヘットのりゆうのはどう!

だよね、特殊技持っているよね。

「ヤミラミ、ふいうち！」

技を出す前に叩く、後ろに突然現れ攻撃する。HPバーが1/4ほど減った。

「畳み掛ける、バークアウト」

「ヤミ！」

バークアウトがジヘッドの胴体に命中する。

文章が出てきて急所に当たったらしくHPが減っていく。

やけどのダメージも追加される。

もうそろそろゲットできるだろうか？

やけどを負っているためボールを投げる回数は2・3回しかないだろう。

まずはハイパーボールを投げてみるか。

投げて当たり、ボールに吸い込まれる。

1回動いた。だがその後ボールから飛び出る。

「ギャオオオ！」

ダメだったか……。初っぱなからクイックボールを投げて置くべきだった。

もう一度ハイパーボールを投げる。……が1回も動かずボールから出てくる。HPから計算すると1回しかボールを投げるチャンスがない。

最後のボールを投げる。

……あつゴージャスボール投げちやった。少し似ているから間違えた。

ジヘッドに当たりゴージャスボールに吸い込まれる。

1 回動くが出てこない。2 回目も動くが出てこない。3 回目来たが出てこない。あれー？ これはもしかして……、

カチツ

あつゲットしちやった。ゴージャスボールよりハイパーボールの方が捕獲率が高いのだが運が良かったらしい。

こうしてジヘッドを手に入れるのであった。

□ □ □

「ギラギラッ」

「ん？ なんですか？」

ヨーギラスがアリスの靴下を引っ張る。

それじゃ動けないだろ。

「ギラッ」

「何言ってるかわからないんですけど」

「一緒に連れて行ってくれと言っておるぞ」

便利だな通訳は。だけど丁度良い。

「ほらボールだ」

「ありがとうございます」

ヨーギラスは育てると最終進化は強いポケモンに成るだろう。かなり性格は凶暴だが強い味方だ。

「あのー広人さん？」

「なんだ？」

「これからよろしくお願いしますね」

「……ああ」

笑顔がまぶしい。

こうしてアリスがトレーナーになったのだった。

社会の動向

ポケモンが現れてもうそろそろ3週間になるだろうか。

人類は適応力を持っておりここまでの間にかんりの進歩をしてきた。

まずは一つめは道具の量産。

ボールやきずぐすりが複製出来るようになってきた。

正直俺はダウジンクマシンやジグザグマ達がいるから困っていないから買うこともない。

それに道具の値段がかなり高い。

モンスターボール 600円

スーパーボール 1800円

ハイパーボール 2400円

きずぐすり 600円

いいきずぐすり 2100円

すごいきずぐすり 3500円

ご覧のとおりゲームで買うより高く全部3倍である。

これなら拾った方がましだ。製造のコストがかなりかかっているらしく、作った人も色々あったのだろう。

二つ目はポケモントレーナーが増えた事。

主には選ばれたトレーナーがゲットの手伝いをしているらしく最近増えまくっている。戦わなくてもボールさえあれば交渉してポケモンをゲットできるためポケモントレーナーの人数が増えていき、道を歩くとポケモンを連れてくる人間がちらほら見かける。

ちなみにケガをする人間がたくさん出ているが死人は出ていないそうだ。

反面、光あれば影ありなのでポケモンを悪事に使うトレーナーが出てきており、警察が結構苦勞をしているらしい。

スリーパーとか凶鑑の説明を見るとヤバイことをしているので心配だ。大丈夫だろうか。

三つ目は、

『フシギソウ、つるのムチ！』

『カラナクシ、どろぼくだん!』

『おーっと技と技の激突だああああ!!』

見事に盛り上がっているが俺にはとても興奮しない。

どちらもLv10台であり玉川達の方が強く、簡単に返り討ちにできるだろう。

今youtube等の動画サイトを観ているのだが選ばれたトレーナーが動画を投稿しており再生回数を伸ばしている。

最近ポケモンバトルがかなりの人気があり街中でよくバトルが見られ、俺も勝負を仕掛けられる事が多くなった。

しかしこっちの方が強いため全て返り討ちにしたんまり賞金をもらおう。最近の学生は金を持っているため稼がせてもらっている。

ちなみにトレーナー同士のバトルから逃げると自動的に賞金が取られてしまうみたいだ。

「おーい主よ、たまには森を散歩しよう」

「いいぜちよっと待ってろ」

俺から話したい事もあるし。

□
□
□

「お前から誘うのって珍しいな」

「まあ話したい事があつたからな」

「俺もだ」

今森の中におり、木陰を歩いている。

「じゃあ儂から、最近誰かに見られているみたいじゃ」

「俺も言おうと思つてた」

寝ている時によく視線を感じることもある。アルセウスも言うから間違いないだろう。

「特に侵入された覚えはないしヤミラミ以外のゴーストタイプのおいはしてないぞ」
「さすが自宅警備員」

しつかり仕事をしているようだなによりだ。

……ゴーストタイプのおい？

だけど俺達を監視している奴は誰だろうか？

そして何の目的で監視しているのだろうか？

「主よあれを見ろ!!」

「ん?……ゲツ!!」

アルセウスが指を指している所を見てみると木が折れている。見ればわかるが老朽化で折れているのではなくその他の原因で折られているようだ。

道中追い討ちをかけるようにごみがよく捨てられている。だが今はそんな事気にしている場合ではない。

「おい早くゲツコウガを出せ!」

「行けっ! ゲツコウガ!」

この前ゲツコウガに進化した。やつぱりカツコいいと思う。

「ゲツコウガ、ハイドロポンプ!!」

「クガッ!」

メラメラ焼ける炎に水をかける。

なんで火があるんだよふざけんなコラアツ!

そして3分たった。

焼けた場所を確認し火種が無いか確認する。そこからまた火事が起きる可能性があるからだ。

最近なのだか不法侵入者が多い。理由はタブンネの群れが最近ここで暮らしているからだ。

何処かのサイトでタブンネを倒すと経験値上がるといいう情報が流れ、よくここに踏み込んでくるトレーナーが多い。

情報は真実なのだか俺とタブンネ達にとってはいい迷惑だ。

「主よ、匂いからしてポケモンとトレーナーの作業だ」

「うわあ」

侵入した上に森の中で炎を出すのは本当にやめて欲しい。

ごみを捨てるのも環境に良くない。

そのためある計画を建てていた。

□ □ □

「こんにちはー広人さん！」

「来たか」

火事があった翌日、アリスを呼び出した。
ある取引をするためだ。

「この子達でいいんですか？」

「ああ、いいつらだ」

今庭に居るのだがそこにはたくさんのポケモンがいる。

近くの保健所を回って連れてきた殺処分寸前だったポケモンだ。選ばれしトレーナーの権限で集めた。

この世界になる前に色々気になっており人間の都合により捨てられ殺処分になる犬や猫が可哀想だと感じていた。子犬も殺処分されているらしく悲しい。

いい機会なのでアリスの組に頼んで引き取ってもらう事にしボールを渡す。たくさんあるため飽和状態だ。

「わかりました。では若い衆をトレーナーにしますね」

「ついでにこれ持ってきてくれ、無理言ったお詫びだ」

「なんですかコレ？」

「純金」

「え？」

10個くらい用意して渡す。1000万は越えているだろう。

「でもこんなに貰えませんかよ！」

「最近組が縮小したんだって？」

「……………」

こいつの組は評判は悪くないが世間の風当たりが強くて今では弱体化している。

珍しく昔ながらの仁義を通す侠客タイプであり仕事が少なくなつて苦しんでいると

言う話をよく聞く。

「お願いしたのはこつちだ。筋が通っているが？」

「……………わかりました。仕方ありません」

性格上タカりはしないだろう。

「借りが増えましたよもう」

そしてポケモンをトラックに入れていく。

「あれ？ この子達はいいんですか？」

「コイツらは俺が育てるからいい」

計画に必要なポケモンだから俺が鍛える。

そして黒田組のトラックは帰って行った。

「ワウン！」

「バウ」

「ウオオン！」

「キャウン！」

さてとコイツらを警備員として鍛えなければ行けないんだよな。

ポチエナ40匹である。

「さてと頑張りますか」

調教をな。

色違い

ザクザクツ

「ガオガエン、そろそろ休憩にしよう」

「ガオウ」

「はい麦茶」

「ガオ」

つい最近の事だがガオガエンに進化した。

ゲッコウガもカッコいいと思うがガオガエンもまた違ったカッコよさがある。プロレスラーみたいなポケモンでたくましさを感じる。

今何をしようとしているのかと言うと罠作りだ。

落とし穴である。

この前の一件により警戒しなければならなかったため対策を打つ。ポチエナ共が育つまで先手を取る。

「さてと続きをやりましょうか」

「ガオ」

とりあえず半径1M程の穴に3Mの深さ程掘る。その後穴に土や草や枝を被せその上におびき寄せるために道具を置いておく。

使い終わったすごいきずぐすりでも置いとくか。

罨と言うのは人を動かして嵌める物だ。

いい道具を置いていけば警戒もしないでまっすぐ進み罨にかかるだろう。

「ガオ」

「こんくらいにしておくか」

一応ジグザグマとかには近づくなと言っており、何かあったら知らせる様にしていく。
る。

土・草・枝を使い巧妙に隠し、水を入れたすごいきずぐすりの容器をセットする。

このような罨を3つ程作った。



「爺ちゃん、来たよ」

「お来たか」

今日は金を納めに来た。

まだ金に余裕があるが爺ちゃんの顔とかも見たいからついでに金を納める。

それでお菓子も用意されている。

おもてなしと言う物はいい文明だ。

「それで最近どうじゃ？」

「ポケモンが進化したくらいかな」

「……黒田組と関係持ったろ」

「……………」

やべっなんでバレてんの？

「組長は悪人ではないがほどほどにしておいた方がいい」

噂じゃ悪い事は聞かないが気をつけたほうがいいか。

つーか組長の事知っているのか？

「いやいやその孫と仲良いだけだからさ」

「まあそのくらいだったらいいがのう」

それにしてもうまいなこのお菓子。

ポケモンにもあげたいから包んでもおう。

「まあ何かあつたら教えてくれ。相談に乗ろう」

「うんありがとう」

きんのたまを渡し、お菓子をタツパに入れてもらった。



さあさあやって来ましたよ山にレベル上げするとしますか。

「スバツ！」

オオスバメ Lv23

あまり山に深く入っていないのにいい数字じゃないか。

「ガオガエン、のしかかり!!」

「ガオ！」

オオスバメが避けようと飛ぶがガオガエンの方が早く巨体が覆い被さり圧する。HPバーが無くなる。

瀕死のためふらつきながら飛びながら逃げる。

あつ木にぶつかった。俺もふらついて物にぶつかった事がよくあるよ。

まあ戦いながら道具集めるか。備えあれば憂いなし。

ガオガエンの強さを実感しながらダウジンクマシンを使用するのだった。

□ □ □

「きゃああああああ!!」

女の声!? 声から見てピンチみたいだ。

「急ぐぞ、ガオガエン」

「ガオツ!」

「ここら辺はLvが高いから初心者向けではない。

誰だよここに来る奴は？」

走っていくと見えてきた。まだポケモンが頑張つて奮戦している。あつ吹き飛ばされた。

「ガオガエン！　かわらわり!!」

「ガオツ!!」

「キイ！」

よーし間に合った!

敵はマンキーだったが一撃でHPが無くなり逃げる。

偉いなこのポケモン。飼い主をよく守る為に頑張つたよ。……………おい、このポケモンは……………

「あー助かったわつてカス山!」

俺の名前は影山だ。間違えるなよ。

つーかこの呼び方は学校でよく呼ばれる名だ。

誰だっけこいつ?

「あんたクソのくせに強いポケモン持つてるじゃないの、生意気ね」

「は？」

助けたのに何故そんな事を言われなければならぬのだろうか?

「は?　じゃないでしょ。調子に乗るとかカス山がいい身分ね」

怒り通り越して呆れてきた。どんな教育をされればこんな奴に育つのだろうか？
それで誰なのこいつ？

「あの時のあんた本当に不様ね。響夜君の弟を傷つけたんだし自業自得よ。この犯罪者予備軍」

思い出した。コイツ聖沢のハーレムの1人で序列1位の女だ。あの時最初に駆け寄って来た女だ。

家が富豪であり、叔父がウチの学校の理事長でありやりたい放題やっているクソビッチだ。

噂では性格が悪く、裏でヤバイ事をしており何人か退学にされた奴いると聞いた事がある。

現に聖沢の前では猫を被っており、本性を見せない。

嫌なやつを助けてしまった。

念のためアレを使っておくか。

「なんでこんな所にいるんだ？ 危ないぞ」

「レベル上げに決まってるじゃないこのカス」

「そうか邪魔したな」

頑張って下山しろよクソビッチ。

スピアーの巣に入らないように祈ってる。アイツら凶暴だからな。

「待ちなさいよカス山」

「はあ？ こっちは忙しいんだレベル上げてろよ」

「ポケモン寄越しなさい」

……は？ なに言ってるんだコイツ？

「だーから下山するからポケモン寄越しなさいってば」

「下山するなら俺についてこい。安全な所に送っていくぞ」

正直送りたくないけど多少の縁。俺からの最低限の慈悲だ。

「アンタみたいなグズが強いポケモンを持つてなんてどうかと思うわよ。私みたいな

トレーナーが持つに相応しいわ。だから寄越しなさい」

ナニ言ってるのこの子？

助けられた上に安全な場所に送って行こうとしている人になんて事言ってるのだろうか？

助けたのにここまでされる筋合いは無いね。

「あらいいの？ こっここでアンタに襲われたって証言するわよ。アンタみたいな最底辺の言ってる事なんて信じるかしら。退学ね」

コイツは助ける価値の無い女だ。正直放って置けば良かった。

「ほらボール渡しなさい」

うざい奴だ。ビリリダマを渡したらどうなるだろうか？

……………あ、良いこと考えた。

「だが断る」

「はあ？」

俺はガオガエンをボールに戻し、ステータス画面にボールを入れる。実はステータスの中に道具の他にもポケモンを6匹まで入れる事が出来る。

「大事な仲間だ。渡すわけないだろ」

「あのね、状況わかってるの？ 痴漢とあなたは今一緒なの。襲われなかった証拠がない。ビデオカメラでも持っているの？」

「くっ」

「さっさとしなさいよカス山!!」

ステータスからボールを出し渡す。

「はっ、わかればいいのよ」

ボールを強くぶんどりそのまま去って行く。

バカだコイツ。気付いていない。

……あれ？

「おいポケモン忘れてるぞ」

「要らないわ」

「はい？」

「見た目が良いだけで使えないわコイツ」

トレーナーを守るために必死で頑張った部下になんて事言うのだろうか。

このポケモンは雑魚ではないし超レアだぞ。

「あげるわ。あなたみたいなカスにびったりよ」

奴の配下のポケモンがすり寄ってくる。

そりゃそうだ認めたトレーナーについてくるのがポケモンだ。

「邪魔よ」

クソビッチがポケモンを蹴り上げる。

「ブイツ!!」

「あなた使えないのよ。もう付いて来ないで」

そして俺の方へ来て俺の腹を押すように蹴る。

それで木の根っこに引っ掛かり倒れてしまう。

「カス山の分際て手間かけさせないでよ、身の程を知りなさい」

こうしてクソ女は去って見えなくなつた。

名前が最後まで思い出せなかつた。

ちなみにクソ女に渡したボールは未使用のモンスターボールであり、ポケモンなんて入っていない。見事に騙されてやんの。無人発電所のビリリダマを思い出す。

もう少し人を疑つた方がいいぞバカめ。確認しろ。

「ブイ……」

泣いてやがる。

さてコイツをどうするか。

「取り敢えず家来るか？」

俺はイーブイを抱き抱えてその場を後にした。

□ □ □

「なにこの子可愛いいいいっ！」

「やらんぞ、お前はこの前3匹目ゲットしたろうが」

唯がイーブイに抱きついている。まあ気持ちわかるし人気だからな。

「でもこの子玉川さんのイーブイと違って白いよ?」

そうコイツは色違いのイーブイだ。

珍しいうえに珍しいポケモンであり滅多に会えないだろう。ソイツを捨てるなんてアホとかしか言えない。

ちなみに玉川のイーブイはエーフィかブラッキーになると思っていたがアイツに進化するとは予想してなかった。

「ブイ……」

………やっぱりショックだろうな。信じていたトレーナーに捨てられるなんて泣きたくなるだろう。

「なあイーブイ」

「ブイ?」

「強くなりたいか?」

あの時俺も見ていて腹が立っていた。

「ブイ」

イーブイは頷く。

「俺がお前を育てる。頑張る限り捨てないし強くしてみせる。だから俺と一緒に来てく

れないか？」

「ブ……イ」

迷ってるな。一押しするか。

「ほら自家製のケーキだ」

昨日アルセウスに頼まれて作った余りだ。

「ブイブイブイ」ガツガツ

なんかすごい勢いで食べている。

旨いのか？ それとも腹が減っているのだろうか？

そして食べ終わったらしくゲツプしていた。

「ブイ」

少し考えた後に首を縦に降った。

「よろしくなイブイ」

また仲間が新しく増えたのだった。

「それ儂が後で食べよう思ったケーキ……………」

「あ」

後日またケーキを作った。

侵入者

「やっぱり主の作るものはみんな旨いなー」

「幸せだよー」

唯とアルセウスから好評のケーキを俺も頬張る。確かに旨い。イチゴの普通のケーキなのだが材料は特にこだわらず金がかかっていない。

「これ店を開けるレベルよ」

「今度皆で食べに行くか」

金があるから外食したり出前を取ったりするのもいいかもしれない。出前を一度取って見たかったんだ。

まあまた今度でいいかな。

俺はコーヒースする。うまい。

「私もコーヒース欲しい」

「ミルクと砂糖は？」

「どっちも」

どっちもなのかい。なんにも入れなくても美味しいと思うのだが。

「そう言えばそろそろ1ヶ月経つわね」

「ああそろそろ学校だな面倒臭い」

「違うわよポケモンよ」

ああそつちか。ポケモンが出て来て1ヶ月経つだろうか。それにしても長い1ヶ月だったな。かなり濃い経験をいろいろな出逢いをした。こんな生活が続くと良かったのだが学校がある。

毎日が夏休みだったのだが残念だ。サザエさん症候群と言うのだろうか。

なお時間があったため予習復習を行ったのだが頭の働きが冴えており、すらすら内容を理解し記憶が定着する。

これも加護の効果らしい。頭にまで作用するとかすごいな。

今では大抵の英単語と漢字等を覚えてしまいテストで満点が取れそうだ。

もう大学の入試も簡単ではないだろうか。

「グマグマ！」

「ほう侵入者が罨にかかったそうだ」

ジグザグマが報告しに来た。ちよつと見に行ってみるか。

「ちよつと待っていてくれこれ食べ終わったら」

「あ、俺も」

「私皿洗いしてるわ」

「やっぱこのケーキ旨い。」

□ □ □

「おおおーい誰かあー!!」

「本当に落とし穴に入るとはな……。水入りのすごいきずぐすりですらで本当にご苦労な事だ。」

「助けてえええ!!」

「どれどれどんな奴が入ったのかな？」

「覗いてみよう。」

「あ」

「あ」

「どこかで見た顔だと思ったら。」

「なにやっつてんだクソガキ」

俺に冤罪を被せてくれたクソガキだ。

なに俺の庭に不法侵入しちやてるの？

「おいしい！ 俺を助ける！」

「助けてください、だろ？」

「いいから助ける！」

さてと2時間くらい経ったらまた来るか。

ケーキに残りがあつたから食べよう。

□ □ □

「助けてくださいいいい！」

2時間後。素直になつたらしい。

反省してないようだったらここで夜を越す事になっていた。勿論食事は無い。

「取り敢えず冤罪を被せた事を俺に謝れ」

「すいませんでしたああー！」

「もう迷惑かけないと誓うなら助けるが？」

「誓いますう！」

ロープを木に縛り穴に入れる。

そして土で汚れた服で出てくる。

「ところで取り巻き」

取り巻きはどうしたか？ と聞こうとしたが。

「てめえやりやがったな！」

エアガンを撃ってきた。まあ避けただけだね。

「つーか不法侵入したくせに何様だコイツ？」

「オラッ！」

続けてエアガンを打ち込んできたが、

「小僧、喧嘩売っているのか？」

アルセウスが手で止めた。

めちやくちやキレているようだ。

「うっ！」

ビビってる。自業自得だ。

クソガキは後ろに下がるが……あれ？

「グマアアアア!!」

後ろに下がった先にはリングマとヒメグマの親子？ 何でここにいるのさ？

ちなみに俺の庭でよく見かけるポケモンだ。

「グマグマ」

「グマアアア！」

「てめえチクったな！」

ヒメグマがクソガキを指差した。

ヒメグマに少し傷ついている。

なるほど虐められたから親を呼んだのか。

「来んなああ!!」

あつクソガキが逃げた。

………確かそつちの方向はまずい。

「おい！ 止まれええええ!!」

「ぎゃああああああ」

時すでに遅し、そつちは10m程の崖だ。

まあそこは問題ではない。

「ぎゃああ痛てええええ!!」

スピーアの巢がある。いきなり人間が降ってきたらどうなるだろうか。

普通に刺されるのがオチだろう。

「助けてえええ!」

何発か刺されるがダツシユで逃げる。

その方向は道路だから早く失せろ。

「はあまつたく迷惑なガキじゃ」

「同感だ」

あの態度は無いな。不法侵入した上にエアガンを撃ってきた。あれで良い子なのだろうか？

「まあいい帰ろう。今日の夕飯はグラタンだ」

「楽しみじゃのう」

親とかにチクる可能性があるが、もし訴えられてもこっちには考えがある。そうなたら泣くのはあっちの方だ。

こうして家に戻って夕飯の仕度をするのだった。

復学

今日は待ちに待った登校日だ。行きたくないし寝ていたい。夏休み明けの小学生の気持ちがよく解る。

「先輩、おはようございます!」

って事で玉川と一緒に登校する事にした。目線が気になりそうだし寂しいからね。

「もー寝癖ついてますよ」

くしとワックスを出して整えてくれる。

……女子ってみんな持っているのだろうか？

「それで先輩、ポケモンは持ちましたか？」

「6匹いつも持つてる」

外に出るときは念のため多く持っている。

いつ何が起こってもいいように用心深く臆病に。

「たまにポケモンバトルを仕掛けるトレーナーがいるので気をつけてください。多対一でカツアゲみたいな事をする酷いトレーナーもいますが先輩だったら平気だと思いますま

す」

「当然返り討ちだ」

上等だよ。いくら財布に入るだろうか？

そうだおまもりこばん拾ったつけ。持たせておこう。

「主よ、いつてらっしやい！」

アルセウスは留守番だ。いいなあ自宅警備員は。

□ □ □

ウチの学校はかなりの敷地を持ち、多くの人間が通っており全校生徒が10000人を超えるマンモス校だ。

部活動等で使う運動場が複数見られ、他にも色々な施設が存在し、迷う生徒とかもいる。

「1ヶ月ぶりだなあ」

「あーわかります。夏休み明けの気分ですね」

なんかもう帰りたい気分だ。

予習復習はしたから勉強は大丈夫。

「カス山くううんおひさああああ！」

「なんでいんのお前？」

「ゴミは焼却炉に帰れ」

「キャハハハ」

あれ？ よく俺を苛めてくれる不良共じゃないか。

相変わらず頭の悪そうな外見と言語だな。

時間の無駄だから無視して行こう。

「待てよくカス山くうん。ポケモンバトルしようぜ。皆でなく」

皆？

「俺に味方はいるの？」

「いるわけねーだろバーカ」

へー。

「せ、先輩。顔がにやけてますよ」小声

こいつら意外と金持ってるんだよな。

「断る、多数でいたぶる卑怯な奴なんか相手にしたくないんだよ」

「卑怯なんて弱者が吐く言葉だ。つまりお前は雑魚だし奪われても文句は言えねえよ」
「調子に乗んなグズが!!」

一応拒否しておくが連行される。

俺は拉致されていくが笑みが止まらなかった。

「せ、先輩!」

「ありがとう玉川。教室へ行っててくれ」

いくら持っているだろうか?

□
□
□

ちなみに聖沢はいつも俺を助けない。

理由は俺の不真面目さを直すために不良は頑張っていると思っ
ているらしく助けないとか。

俺も不真面目な事をする時もある。まあ色々やったから仕方ない
とはいえ性善説にも程があるだろう。

「ひーふーみー、10万くらいかな」

「嘘だろ……………」

結果から言うのと瞬殺だった。合計して15匹くらいいたが3分も掛からなかった。

「もう終わりか？ まだ物足りないんだけど？」

「クガッ」

「汚えぞお前!! 隠してやがったな!？」

「汚いも何も俺はバトルしたくないって言ったぞ。お前らが強制してきたんだろうが」

僕は悪くない。悪いのはお前らの性根だ。

さあ教室行こう。

□ □ □

ガヤガヤガヤ

ふうやつと昼飯だ。

本当に嫌なやつが多く大変だった。

下駄箱にゴミが捨てられていたが隣の下駄箱に捨てておいた。まったく酷い事をする奴がいる。

教室の机に水が入った瓶や花が供えられていた。まあ捨てたけど。

他にも授業中居眠りしていると数学教師から難しい問題を出されるが普通に解くと顔を真っ赤にし、東大に出るような問題を出してきたがまた普通に解くとキレられた。俺の何がいけないのだろうか？

まあいい、昼飯を何処かで食べよう。弁当を持ってきたから屋上あたりに行こうか。と思つた矢先に、

「影山ああああああああ!!」

見覚えがある顔が教室に飛び込んできた。

あれ聖沢君じゃありませんか。

「何かようか?」

「ふざけるなあああああ!!」

殴りかかってきたが避ける。

出会い頭に殴りかかるとかビックリするわ。

「待て待て話し合おう。意味がわからない」

「お、落ち着いて響夜君！」

あ、ハーレムが来た。これで落ち着くだろう。

「それで何があつたんだ？」

「とぼけるな!! 俺の弟を傷つけやがって！」

「何の話だよ」

あれは自業自得だ。俺は悪くない。

「傷つけた上に交通事故を起こさせやがってなんて奴だ!!」

交通事故? 意味がわからないんだが。

「それに明日香のポケモンを盗みやがって!!」

「明日香って誰？」

知らない人間の事を言われても困るんだが。

「この前お前が奪ったポケモンのトレーナーだ!!」

奪った? ポケモンを?

「イーブイの事だ! お前が明日香から盗ったんだろうが!!」

はあ何で!?

いやいや違うよクソビッチが捨てたんだよ。

「まだあるぞ。お前玉川さんを脅しているだろ!!」

「何の話だよ……」

「お前みたいに不真面目な人間に着いてくるわけないだろうが!!」

偏見とかしか言えない。何様だろうか？

教室の前に人がたくさん集まってきた。

「他にも家で女を飼っていると聞くぞ。人として恥ずかしいとは思わないのかよ!!」

アルセウスの事だな。あいつは普段は飯食ってるか、寝てるか、テレビ見てるかだからな。

まあコロツケが好きな助手よりは働いているだろう。

「あのさー、お前の弟と女が本当の事を言っていると思うのか？ 俺から聞いていると

身に覚えがない事なんだが……」

「黙れ!! 弟と明日香が嘘を吐く訳ないだろ!!」

俺の机を蹴り上げる。

聞く耳を持ちやしない。話にならないわ。

「許さない……」

「そろそろ昼飯行きたいんだけど……」

もう五月蠅いから行こう。時間の無駄だ。

教室から出ていこうとすると、

「決闘だ!!」

「はい?」

何だろう? 遊戯王でもやるのだろうか? それだったら俺のワイトデッキで返り討ちにしてやる。

「ポケモンバトルだ! 4時に第3運動場だ。ルールは6対6のシングルだ。俺が勝ったら要求を呑んでもらう」

「ほう、その要求は?」

一応聞いておこう。

どうせクソみたいな要求だろう。

「この学校から出ていけ」

怒気みたいなのが出ている。

そこまで嫌いならお前が出てけよ。

「次にポケモンを全部置いていけ。お前みたいな悪人が持つていい訳ないだろ。そして玉川さんにもう近づかないと誓え。彼女が可哀想だろ」

……………もう着いていけない。何様だろうか?

玉川を助けて英雄にでもなろうとしてるのか?

ちなみに玉川の外見は髪がショートカットにしてありスタイルも良く、それで美少女

のため少なからずファンがいる。

英雄が不憫な美少女を救う。絵になるだろう。

「こつちも聞くけどさ、俺にメリットある戦いなのか？ 勝ったら何かもらえるの？」

「はあ？ あるわけないだろ。これからも好きにすればいいだろう」

「あのさ、これカツアゲと同じだよ。難癖つけて脅して金を巻き上げる最低なやり方だぞ」

「黙れ!! 最低なのはお前だ!!」

なんでメリットが無いのに動かなければいけないんだ？

コイツのやってる事はただの弱いものいじめだろう。

「わかったな!! 4時に第3運動場だ！ 絶対来いよ」

やれやれようやく消えてくれたか。やっと昼飯がたべられる。

「おい聞いたか、聖沢がポケモンバトルだつてさ」

「カス山が退学だつてさ、やったー」

「終わったなコイツ」

「公開処刑だつてさ。拡散拡散」

「4時に第3運動場だつてさ行こうぜ」

ギャラリーが騒いでる。

本当に不愉快だ。

□ □ □

そして放課後、校門前。

「ちよつと待ちなさいよ！」

「ああ？ 何か用か？」

この前のクソビッチに呼び止められる。他にも3人程聖沢のハーレムメンバーがいる。

それで何の用だ雌豚が、今日の夕飯の買い出しに行くから邪魔するな。

「あんた逃げるの？ 情けないわね」

「何でクソみたいなバトルしななければならないんだ？」

第一バトルの約束なんてした覚えはないね。

「いいのかしらねえ、そんなこと言つて」

「ん？ 何だ？」

何か含みがある言い方だ。

「アンタの家に居る女の子の事なんだけど……」

理不尽な決闘

第3運動場はテニスコートがあり、そこには観客席がある。そこでポケモンバトルがよくおこなわれている。

最近は何ケモンバトルが世間でブームがあり、人気になっている。

今はちょうど4時だ。観客が集まってきた。

SNSで拡散されているらしく、結構な数が来ているみたいだ。教師も見られる人が多から先鋒はアイツにしようかな。

「せ、先輩！ 何があっただんですか!?!」

「色々あった」

「いやわかるように言ってくださいよ!?!」

あの豚め……。

□
□
□

『はあ？ 唯がお嬢様!?!』

『ええそうよ。真田グループのご令嬢よ』

確か真田グループって言ったら超が付く程の大企業のはずだ。色んな業種を持つて
いるとか。

『家が厳しいらしいわ。だから家出したみたいよ』

そう言えば土下座しながら懇願していた。もう戻るのは嫌だって事だろう。誰だつ
て束縛とかされたくないし。

『搜索願いが出されているらしいって、よほど大切なのね』

追われているって事だ。

アイツにそんな秘密があったとは……。

『で？ どうするの?』

『……………』

『バトルするなら黙っていてもいいけど?』



『逃げずによく来たな影山!』

逃げたけどね。お前の女のせいだ。

聖沢はマイクを使い喋っている。確か放送委員会に許可取らないと使えないぞそれ。よく許したな。

『待っててくれ玉川さん! 絶対助けるからね!』

「何言ってるんですかあの人?」

「俺が知りたいよ」

人を証拠もなしに悪人扱いしやがって退学しろだと? ポケモンも寄越せとかふざけているのか?

『みんなああ聞いてくれ』

聖沢は俺の悪行を話し出した。ほとんどは冤罪だがな。さらに俺が負けたらどうなるか語りだす。

「ふざけんな影山ああああ」

「このカス野郎!」

「地獄に墜ちろ!!」

「最低！」

冤罪だと知ったらどんな顔をするだろうか？

ここで冤罪だと暴露しても言い訳にしか聞こえないし、俺にメリットをつけるように言ってもビッチが何かしてくるかもしれない。約束を守るとは限らないし。

『影山』

「何だ？」

『皆の前で土下座しろ。そしたらバトルはしなくていいし見逃す。後で弟と明日香にも謝ってもらうがな』

落ち着け俺。

手がプルプル震えている。殴りてえ。

「……………」

『俺はバッチを4個集めた。お前は何個だ？』

「バッチの数で勝負はわからないぞ」

俺はもう8個手に入れた。

7個目はきのみ畑とがくしゆうそうちだ。

きのみを植える畑がステータスの中の空間にあり、そこに植える。植えたきのみの種類の数により空間が拡張するボーナスがあるようだ。

がくしゆうそうちは説明しなくてもわかるだろう。

8 個目は教え技と凶鑑のグレードアップだ。

教え技が 20 個ほどあり教えることができる。

凶鑑のグレードアップはポケモンを見つけただけで大まかな分布がわかり、レベルアップや技マシんで覚える技が書いてある。他にも努力値もわかる。

聖沢ともう差がついてしまった。

もつと強敵と戦いたい。

『つて事だわかったか?』

「ごめん話聞いてなかった」

『ふざけやがつてええええええ!!』

ぶちギレそうなのは俺だよ。何でこんなクソみたいな事になってんだよ。

『俺が……裁く』

ジョジョの真似してんじゃねえよ。喧嘩売ってるのかコイツ? あつマイクを誰かに渡した。

そしてポケモンバトルの音楽が鳴り響く。

「頼むぞー! ピジョンー!」

「ピジョンー!」

ピジョン Lv25

俺何度かピジョンのLv25以上をよく倒してるんだけど…………。

『さーあ始まりました聖沢対影山。バトルスタートです!!』

え？ 実況放送入るの？

『解説の中野さん。聖沢選手はピジョンからのスタートですがどう見ますか』

『聖沢選手の3番目に強いポケモンでしたね。いつもは一番レベルが低いワンリキーで来るはずですが……早めに畳み掛けたいのでしょうか』

『ですが影山選手は6体ポケモンを持っています。対戦成績もなく未知の相手であり、なおあの様子です。何かあるのでは？』

『可能性はあります。ですがバッチ4個までかなりの実力と時間をかけなければなりません。影山選手が選ばれたトレーナーでなければまず勝利は不可能でしょう』

『では中野さん。試合はどう動きますでしょうか？』

『影山選手次第ですが聖沢選手の有利でしょう』

解説もいるんだ…………実況乙。

俺がその選ばれたトレーナーなんだけど。

「先輩」

「どうした？」

「ピジョン、ブレイブバード！」

「ピジョオ！」

『おっーと十八番のブレイブバードだ！』

「ガオガエン、かみなりパンチ」

上から潰すように殴る。

教え技で覚えさせておいた。

そしてHPがZEROになる。

「な、なんだと……………」

『な、なんとピジョンを倒してしまいましたあああ！』

『予想外ですね』

当たり前だ。誰に喧嘩売ったかようやくわかったようだな。

「戻れ、ピジョン」

さあ次は何で来るか？

「行けッ！ ガントル！」

「ガッ！」

『次は難攻不落を誇るガントルだあああ！』

がんじようでもあるのだろうか？

次はガントルかLvは29。Lv25で進化するため通信交換してないようだ。何故だ？

「かわらわり」

「ガオ」

ただ受けるのも嫌だし先制攻撃をプレゼントする。

HPが減りひんしの状態になってしまう。

「ガ」

「ガントル！」

がんにようじゃないのか？

ピジョンが3番目に強いならコイツは1. 2番目に強いのだろうか？ 相手にならない。

「戻れガントル！」

「どうしたもう終わりか？ 後4匹だぞ」

「クソ！ 行けッワンリキー！」

「リキー！」

『おーっと次はワンリキーだ！』

Lvは18。コイツが一番弱いのか？

「かわらわり」

またHPがゼロになってしまおう。

玉川達より弱いんじゃないか？

「ワ、ワンリキー！」

「あと3匹。もう止めたほうがいいんじゃないか？ ポケモンが可哀想だぞ」

「黙れ！ 行け、サボネア！」

「サボネ！」

Lvは24だ。

まだ続けるのか……………。

「サボネア！ ニードルアーム！」

「サボネ！」

『ニードルアームがガオガエンを襲うーっ！』

ニードルアームでガオガエンを叩くが全然効いている様子はない。マツサージして
るみたいだ。

「ガオ」

ガオガエンはつまんなさそうに欠伸をした。確かガオガエンは格下と戦うのが嫌いと
凶鑑に書いてあった。

早く終わらせよう。

「のしかかり」

「ガオ」

またひんしになり、サボネアを戻す。

『また一撃！ 勢いが止まらないいいいい！』

「後2匹」

「クソ！ 行け！ ラクライ！」

確認するとLv23。

次はラクライを繰り出した。

「ガオガエン、じしん」

「ガオ！」

ひんし状態になり、ボールに戻って行く。

後1匹。コイツの最後のポケモンで終わりだ。

「ハイハイもう終わりか？ 最後1匹だぞ」

「くっ！」

さっさと家に帰りたい。

「諦めないで響夜君！ 行け、ヒマナツツ！」

「響夜を助ける！ ニヨロモ！」

「響夜君を助けて、行つてガーディ！」

「頑張つて、ムツクル！」

はあ？ ハーレムどもが参戦してきやがった。反則だぞクソビッチ共が！！

「み、みんな」

次にお前は「神聖な決闘を侮辱するな貴様らあああ!!」と言う。こんな事されて水をさされるなんて互いに腹が立つだろう。

「ありがとう！ さあ影山を皆で倒そう！」

駄目だこりゃ。

「ガオ！」

ガオガエンはやる気満々みたいだ。

まあこのくらいのほうが退屈せずにすむか。

「先輩、手助け必要ですか？」

「ガオガエンだけで十分」

ガオガエンが聖沢に中指を立てた。

どこで覚えたのそれ？

「行け！ ヌマクロー！」

「ヌマツ！」

最後はヌマクローか……。御三家の一匹を持っているとは予想外だ。Lvは34でありそろそろ進化だろうか？

「ヌマクロー！ どろばくだん！」

「ヌマツ」

ガオガエンにヒットする。ちよつとだけHPが減ったようだ。そして8匹程のポケモンが襲いかかってくる。

□ □ □

「ガオガエン、じしん」

「ヌマツア!!」

ヌマクローを攻撃し戦闘不能にする。

もう全部倒してしまった。

「俺の勝ちだ、帰る」

「待て影山！」

「何だ？」

「玉川さんを解放しろ！」

「はあ？」

まだ言ってるのかコイツ？

約束を守る気はあるのか？

「あの聖沢先輩？ 何の話か私もわからないですけど？」

「君は影山に脅されてるんじゃないのか!？」

「はい？」

「だっていつも一緒にいるじゃないか！」

「一緒にいちゃ悪いんですか？ こっちは好きで一緒に居るんですよ！」

「影山みたいな不真面目な奴と一緒にいるなんて脅されてるとかしか思えない！」

「それじゃあ脅されてる証拠を出してください。後あなたのハーレムも多いですよね？」

何人脅して仲間に入れたんですか？」

「なっそんな事する訳ないだろ！」

「先輩に不平等な決闘をしかけたのは誰でしょうか？ 後、暴力の常習者が言っても何

も説得力ありませんよ」

「キヤアアアア先輩！ 私大丈夫ですから!!」

ん？ あれ俺何やってたんだっけ？

えくと玉川に手を引かれて、そして聖沢が玉川を……………あ。

「大丈夫です！ だからもう止めて下さい!!」

何をだ？

あれ？ 左手になんか掴んでいる感触がある。

左手をみたら血だらけでポコポコにされて顔がわからない人間を掴んでいた。左腕と右足が変な方向に曲がっている。

誰だコイツ？

「おい玉川、コイツ誰だ？」

「ええっ！ 覚えてないんですか!?! 聖沢先輩ですよ!」

マジで!?! 周りを見てみると観客が青い顔をしている。あつ吐いた。

「……………帰ろう」

「……はい」

逃げよう。

□ □ □

「なあ玉川」

「はい？　なんででしょう？」

「いつもありがとう」

「それは私のセリフですよ」

本当に良い子だな。

俺には勿体ないくらいだ。

「そう言えば先輩が勝ったら私を好きにして良いんでしたね。どうぞ」

待て待て何を言い出すんだ？

そうだな……。

「んじゃ、あれに行こう」

俺は行きたい建物を見る。

「ちよつ！ あれホテルじゃないですか!? 心の準備はまだ……」

「違うよその隣のファミレス。奢るから付き合え」

「……………」

悪い事言ってしまっただろうか？

「先輩は鈍感ですね……………それが良いんですけど」

「な、何だよいきなり」

「何でも無いですよ。あのファミレスは期間限定のパフェがあるんですよ。行きましよう」

「ああ」

臨時収入があるから懐が暖かい。幸せだな。

それにしてもあのクソ共は冤罪をまた着せてくるのか……。面倒だし許せなくなってきた。

……………そろそろ行動に移すかな？

「先輩っ！ 早く！」

まあ後でいいか。今はこの幸せを噛み締めよう。

後日談

朝、自分の下駄箱前。

自分の上靴を取ろうとすると、

「何だこれ？ 手紙か？」

「あつ、先輩っ！ お早うございます！」

「おはよう」

「先輩、それなんですか？」

何だろう？ 告訴状か何かか？

裏を見るとハートのシールで止められている。

「えっ!! 南恵里菜って書いてますよ!?!」

「知っているのか？」

「読者モデルですよ、知らないんですか!?!」

「名前は少し」

あまり流行には敏感じゃない。

全校生徒を把握してるわけじゃないし。

「1年の中だと1番可愛いって評判ですよ。ほらSNSにも写真ありますよ」
スマホを玉川から見せてもらおうと可愛らしいギャルが載っている。多分盛っているな。

「カモン、ベトベトン」

「ベト」

「あれ？ 何でベトベトンを？」

「お食べ」

「ベトー」

ラブレターをベトベトンに食べさせる。

アローラのベトベトンはゴミを食う。

「うえ!? 何を!」

「どうせイタズラだろう」

前にもラブレターが入っていたことがあったが大体はランチの招待状か罰ゲームだ。カミソリが入っていたことがあったけ。

「第一色々あったし無いだろう」

「ですけど聖沢先輩は生徒全員に好かれている訳ではありませんでしたし……」

ポケモントレーナーに成る前は玉川しか助けてくれなかった。今まで無視してきて

手のひら返しはどうかと思う。

それに玉川1人か読モ10人をどっちか選ぶとしたら俺は迷わず玉川を選ぶ。性格も良いし美少女だし何より俺が這いつくばっていた時に手を差し伸べてくれた。読モ10人の命よりも重い」

「ええええええっ!!」

あれ口に出してた? うっかりしてた。

玉川の顔が赤い。

「わ、私教室にいつてます。それでは放課後の買い出しにまたー!」

「あ、ああ」

玉川は早歩きで行ってしまった。

そんな恥ずかしい事言ってたか?

玉川が大事だつて事を普通に言っても問題無いと思うけど……………。

俺も教室行くか。

聖沢とのバトルから1週間たった。

俺は行動に移した。

□
□
□

数日前、

「うーす聖沢元気？」

「！」

ここは玉川の親族が経営している病院なので頼んで入らしてもらった。大怪我しているため所々に包帯やギブスをはめている。声も出ないようだ。

「！」

「喧嘩売りに来たんじゃない。真実を教えに来たんだ」

「？」

玉川の病院からノーパソを借りてUSBを差し込みとある動画を見せる。

『アンタみたいなグズが強いポケモンを持つてるなんてどうかと思うわよ。私みたいなトレーナーが持つに相応しいわ。だから寄越しなさい』

『ブイツ!!』

『あなた使えないのよ。もう付いて来ないで』

クソ女の一部始終と、

『取り敢えず冤罪を被せた事を俺に謝れ』

『すいませんでしたああ!』

『もう迷惑かけないと誓うなら助けるが?』

『誓いますう!』

『てめえやりやがったな!』

『ぎゃああ痛てええええ!!』

とクソガキの一部始終を見せた。

どう録画していたかと言うと時計型のビデオカメラだ。

前にスパイ映画を見た後スパイ道具をネットで探してたら見つけた。こんなのあるんだと科学の進歩に驚いた。

他にもキーホルダー型や眼鏡型のビデオカメラとかあるらしい。

金が入ったりしたため余裕ができたので通販で買った。これで冤罪防止し、このような事ができた。

ふとみると聖沢が泣いている。

そりゃそうだろう信じていた人間かアレだし。

「これが真実だ。これでも俺が悪いのか?」

「……」

何か可哀想になつてきた。

よく考えたらコイツも被害者かもしれない。家族や仲間を信じるのは当たり前前行
為だろうし……。

「もつと信じる相手を疑う事をおすすめする。評判が悪いと有名だからな」

「……」

「俺は行く。じゃあな」

ちなみに余談だが聖沢かフルボッコにされた後、ハーレムが2人程介抱していた。
クソ女やその他のハーレムの女は聖沢を落胆した目で見て何もしていなかった。

まだ2人程着いてきてくれるので聖沢は上っ面な人間では無かったかもしれない。

□ □ □

「こんにちはー広人さん！」

「来たかアリス」

「やだなあ広人さんの呼び出しなら毎日でもOKデスヨッ！」

コイツテンション高いな。

「それで何の用です？」

「まずはこれを見てくれ」

クソ女の動画を見せる。

「あれ？ この娘ミスリル電機の明日香さん？」

「知り合いか？」

「いいえ、友達が中学の同級生だったみたいなんですけど大金持ちを鼻にかけて威張っていたそうです」

高校と変わらないな。

性格も高校デビューしろ。

「何人か転校させたとか黒い噂を聞きますし、他の高校でも有名ですよ」

「うわあ」

あの女めちやめちや有名じゃないか。

「それでこの動画を見せて何をするんですか？」

「これで脅せないか？ ミスリル電機を」

「……………」

アリスが考え込む。

「この動画いくらかで買わないか？ 脅迫が成功するかわからないけど」

「でも成功するかわからないですよね……。ですので安くしてください。一万で」

「売った」

相手は大富豪のため成功するかどうかわからないから安くしよう。

「情報屋に知り合いがいるので闇に葬られた事とか調べておきますよ」

「頼むぞ」

情報屋に知り合いが居るんだ……。すげえ。

□ □ □

さてとクソガキの動画を小学校と教育委員会に送っておくか。エアガンを人に向けて打つとか危ない。

動画を見てこれで良い子だと思おうのだろうか？

□ □ □

聖沢は転校した。

体は沢山骨が折れたりしているため全治4カ月だそう。まだ着いてきてくれるハーレムもいるらしい。

クソ女は退学となった。

黒田組の脅しが効いたらしく理事長が変わり、アリスの父親が理事長になった。

ミスリル電機の当期純利益から数割だけ黒田組に入るそう。組のみんなは喜んでいそう。

情報屋が調べてみると裏ではヤバイ事をしていたのが発覚したのが脅しの決まり手だったらしい。それで余罪が多く出てきたので退学処分となった。理事長だけではなく教師も数人クビになったそう。

クソガキは全治3カ月の怪我で、その後更生用の寺に預けられる事になった。

人に発砲（暴行）

BB弾（不法投棄）

不法侵入

の3連コンボだ。

それで親にゲームを目の前で壊されたらしい。

さらに交通事故には本当にあつたらしく、クソガキの飛び出しらしい。悔しかったらしく俺のせいにしたそうさ。

電気が通らない山奥の寺らしく、2年間は帰ってこないみたいだ。南無。

クソガキの取り巻きは先に自首したらしくこれまでの悪事を白状したらしい。川に落とされた時に縁は切れたそうで説教だけで済んだらしい。

俺は聖沢をポッコポコにしたが先に玉川が殴られた件や、クソガキをしばいた件の真実が暴露されて冤罪が確定との事で、既に1カ月停学しているのもう処分は受けたとの事になった。

こうして俺の無実が確定したのだった。

□
□
□

放課後。

「それでは先輩の無実が晴れた事を祝して〜」

「乾杯!」

つて事でパーティーをすることになった。

テーブルには買ったリデリバリーした料理が並んでいる。どれも美味しそうだ。

「ピザよりも先輩の料理の方が美味しいですね……」

「ヤミ」

ピザ屋に失礼だろう。

他にも寿司とか中華とかタコ焼きとかあるから食え。

「うん、うまい」

「カア」

唯は俺が作った唐揚げを頬張っている。

そんな他人が作った料理が嫌かよ!?

「ガオ」

ガオガエンが背中に手を置いて慰める。

俺が作った唐揚げを食べながら。

その他のポケモンも俺の作った料理を食べている。

少し疲れたので縁側に座る。

よく考えたら俺も聖沢やクソ女と同じくりア充か……。金や権力で色々やってしまつたし、多少罪悪感が感じられる。

どこかのアニメでも人を撃つていいのは撃たれる覚悟のあるやつだと言っていた。俺は何も覚悟して無かった。

あー俺もクズの仲間入りか……………。

「違いますよ」

「アリス？」

いきなり後ろから抱き締められる。

「ど、どうした？」

「声に出てましたよ」

うげっ聞こえてたか……………。

「色々聞きましたけど広人さんは何も間違えてませんよ。もしクズだったら皆はここにい

ません」

「……」

「もし誰かが広人さんが悪だと言うのならその正義が間違っています。誰かに酷い事をされたら私に言ってください。黒田組が味方になります」

「ありがとうございます」

「もつと頼ったり甘えて下さい」

心に空いた穴が埋められるようだ。

「さあ、アルセウスさんがいちごミルクのイッキ飲みをなさいますよ。行きましょう」

「……待った、もう少しこの状態を」

少し涙が出たから見られたくない。

しばらくは後ろから抱き締められた状態でのだった。

閑話 後輩

今日は先輩と山へレベル上げに来ています。

「ゲッコウガ、みずしゆりけん！」

「ヘルガー、かみくだく！」

2匹の連携によりLv30のドンファンが倒れます。山の中に象とかいるように成ったんですねこの世界……。

「玉川、昼飯にしようか」

「はい」

そう言えばお腹が空いてきましたね。

時計を見ると2時です。

私は敷物を引いて先輩は食事を用意します。

「今日は時間がなかったからおにぎりだわ」

「と言いだしたのは三角の形になったおにぎりです。私三角を作るのは難しいんですよね。」

「とまあお腹が空いているため食べましょう。」

「！ 美味しい」

「そうか？ 簡単に作ったやつだけど……」

外は固くて中はふわつとして塩加減が効いています。具のツナマヨもクリーミーですし。今まで食べてきたおにぎりの中でも断トツですよ先輩。

「これ本当に簡単に作ったんですか？」

「全部を何分位で作ったんですか？」

「ん〜と10分位か？」

料理の天才じゃありませんか!?

女として自信とか無くなりますよ。

「料理する時にコツとかってあるんですか？ 前から気になってたんですけど……」

「いや？ 特に普通に作っているだけだぞ」

「普通って……」

普通に作って料理ってこんなに美味しくなるもんなんですかね？ 不思議ですよ。

□ □ □

「あ〜このお茶も美味しいですね」

「そうか？」

食後何だか動きたくなくなりました。もう少しのんびりしたいですね。

「そう言えばさ玉川」

「なんでしよう？」

「何で俺ばつか構うんだ？」

「あれ？ 覚えていないんですか？」

「あれでここまで構うのか？」

□ □ □

私が入学当初、道がわからなくなり路地に入ってしまった。

「よお姉ちゃんどつか遊びに行こうぜ」

「兄貴が奢ってくれるってさあ」

「や、やめてください！」

案の定顔が怖い人達に絡まれました。

通行人がチラチラ見るだけで通りすぎていきます。

「もーいやここで遊ぼうぜえ」

「ヒヤツハー！」

いきなり服を引つ張られ、ボタンが取れ下着が見えてしまいました。不味い逃げないと。

「おつくと逃がさないぜ」

逃げようとする羽交い締めになされて身動きが出来ない。もがいても振りほどけない。

誰か……助けて……。

「やめろおおお！」

不意をついて出て来て羽交い絞めを解き、そして助けてくれた人間の後ろに付く。

「あ？ 何だお前は？」

「テメエく邪魔した覚悟はできてんだろうな？」

覚悟って……私に乱暴しようとしたのに何言っているんだろう？

「お前ら女子によつてたかつて恥ずかしくないのかよ！ 警察に通報してやろうかクソ

どグボハッ！」

「うるせえ黙れクソが!!」

「調子に乗んなよカスが!!」

喋ってる途中殴られる。

リンチされていてもまだ意識はあり、口で私に逃げろと伝えてくる。

本当に最低ですけど逃げます。

「あつ逃げるぞ。あ、テメエ足を掴むな!」

□ □ □

「あの時逃げてしまいすいませんでした」

「いや、逃げていなかったら嫌な目に逢っていただろ。間違っていない」

先輩の優しさに感謝します。普通の人だったら無視する所を助けて貰い、あのまま放つて置かれたら酷い目にあつたでしょう。

あの後先輩を見つけて感謝し謝ると、それでも気にしていない様な態度を取って逃げてしまいました。

それから先輩をよく追いかけるようになっていくようになりました。

「先輩って意外と照れ屋なんですネ」

「はあ？」

感謝されると恥ずかしい様な顔とかして居るじゃないですか。気付かないでも思っ
ていたんです？

「でもまだあるんですよね理由が」

「まだあんの？」

「先輩、1年の頃の授業中に隣の席の女子の頭にバケツで水をかけましたよね？」

「……ああ、あつたな」

「あの人は私の従姉妹です」

「!？」

やっぱ驚くだろうな……。その事件で先輩が苛められるようになりましたし……。
それで従姉妹が罪悪感でその後転校してしまい、全校生徒に知れ渡りましたからね。そ
して色んな人間にボコボコにされたと聞きましたよ。

「ああ大丈夫ですよ、従姉妹から真実を聞きましたから。先輩に何度も感謝したかつた
らしいですよ」

「そ、そうか……」

先輩はいつも抱え込むタイプですよ……。でも抱え込んでくれたからこそ従姉妹

の名誉が守られた様なものですよ。

先輩は本当に損をできる人ですよ。良くも悪くも。

「そろそろ休憩終わるか」

「はい」

□ □ □

「結構有意義なレベル上げだったな」

「はい、レベルが少し上がりました」

先輩が道具を多く拾ったので分けてもらった。

悪いので安いボールを貰いましたけど……。一番安いモンスターボールでも600円しますし絶対には捕まえられないので貰ったり拾ったほうが得ですね。

私は今バッジが4個のためにまだダウジングマシンはまだゲットしていません。

あー欲しい。

「そうだ玉川これを渡しておく」

「なんですこの玉？」

2つの球を渡されましたけどなんですこれ？

「メガストーンとキーストーンって言ってヘルガーを進化させる道具だ」
「ヘルガーを？」

「ああメガシンカってやつだ。前よりもパワーアップするし姿も変わる」
そんな進化があるのか……奥が深いですねポケモンは。

「ちよつとメガシンカさせて見るか」

「え？ どうやるんです？」

「ヘルガーにスカーフ付きのメガストーンを巻いてキーストーンに進化と念じて見ろ」
えつと念じて……うわっ！

キーストーンから光が出て来てヘルガーを包み込み輝き、そして前と違った姿で出てくる。

これがメカシンカ……。

「わうん」

姿形は違ってもヘルガーだと言う事には変わりはないし強く見えます。頼もしい限りですよ。

「キシヤアアアッ！」

「おつ、野生のエアームドか。練習相手に丁度いいか、やってみろ」

ちなみにLv35、ヘルガーはLv29。

「ヘルガー！ あくのはどうー！」

先輩に覚えさせられた技を使う。威力が強い技だ。

放たれた波動がエアームドに当たり、そのまま一目散に逃げてしまいました。戦闘終了みたいですね……。

「おっ、一撃で戦闘不能か」

「先輩、やりましたよ」

「よくやったな」

ヘルガーは強くなりましたよ。全部先輩のおかげです。ついていきますよ。

「……そろそろ帰るか、晩飯の時間だ」

「はいー！」

こうして私は先輩にまた夕食をご馳走になりました。

特に青椒肉絲が美味しかったです。

第二部

加護の追加と真実

「おっはようございまーす!!」

眠いから後にしてくれ。

「もう一度……おっはようございまーす!!」

アルセウスと唯でマリオパーティーを夜中までやっていたんだ……。情けをかけてくれ。

「起きませんね……」

アルセウス結構強かったな。現代社会にもう溶け込んでるみたいだ。

まあ、俺が全勝したけど。

「ふうふうふう」

息を吸う音が聞こえる。

「起きてくださああああああい!!」

目を開けるとどっかで見えた場所だ。

「ハハ」は……。

「やっと起きてくれました………」

目の前に担当の神様がいた。

少し泣き目だった。

□ □ □

担当の神様はちゃぶ台にお茶とカステラを用意してくれた。

「旨いなこのカステラ」

「ええ、秘蔵のお菓子です」

お茶に菓子つて合うよね。ついでに茶も美味しい。

周りを見てみると綺麗になっている。江戸時代風の部屋なのだが前来たときよりも片付けられている。

服も少し綺麗になつてる様な気がする。

「それで今日は何かあったのか？」

「はい！ 色々あります。まず最初は加護の追加です」

加護の追加を？

「それって確か大勢を助ければ貰える物だったよな？ 何かやったっけ？」

「アリスさんのお父さんを助けた時なんですけど」

そう言えば殺し屋に追われてたけどなにやってたんだろう？

「実はとあるウイルス兵器のワクチンのデータが入ったUSBが持ってまして盗られて

いたら何十万人も死んでました」

「マジで!？」

そんな事があったのかよ……。

フラインプレーしてたんだな俺。

「殺し屋は餓死寸前で助けられたようです」

「どうでもいいや」

あそこ人通りないんだけどな。

GPSでもあつたのだろうか？

「それで？ 貰う加護ってなんなの？」

「はい！ 天啓って加護です」

「神様と話せる様なスキル？」

「はい、時間制限はありますが」

電話か……。

「でも何の役に立つんだ？」

「困った時に相談してくれば手助けできる事があれば手伝いますし、お得な情報があれば連絡しますよ」

それはそれで嬉しい。大量発生とかゲームで連絡が来た記憶がある。金銀をやつて勝手に貯めてたお金を使われた事があつたな。

「それと全トレーナーに翻訳の加護が与えられたので海外の人と交流を持てるようになりました」

「確かに言語つて多いから翻訳が大変だよな」

地球上には約8千位言語あると聞いたことがある。ほんやくコンニャクを食べたような感じだろう。

俺はお茶を飲み干した。

渋くてうまい。

□
□
□

「それで悪タイプに加護の事で聞きたいんだけどさ」

「はい？」

「弟子にも加護が付くだろう」

「ええ、配下のポケモンですから付きまますよ」

「やっぱり。弟子も配下に入るよな。」

「配下のポケモンだから理屈上ある。」

「それに気付いて弟子を作っている人も選ばれたトレーナーにいますよ。絆が高ければ高いほど加護に近づけます」

「って事は他のタイプに加護を持っているトレーナーもいるのか？」

「……はい、世界中にもいますし日本にも数人程いますよ」

「ん？ 目を反らした？」

「後ろめたい事でもあるのか？」

「ちなみに広人さんの弟子は3人共に8割程加護を使えますよ」

「あいつらも結構強くなった。」

「玉川とアリスの奴はとある型のパーティーになりそうだし、唯にはとあるメガストーンとキーストーンを渡しておいた。」

並大抵のトレーナーでは太刀打ち出来ないだろう。

「3人共に良い子ですから大切にしてください」

「言われなくてわかってる」

「最近神様達の中で人気が出てきましたよ。ハーレムクソ野郎って言われています」

ハーレムって……、一夫多妻なんて存在すると聞いたことがあるが成立するなんて思っていない。何らかのデメリットがあるだろう。

金や権力があっても女性がどう思うかわからない。

「どうせ成立しないだろう」

「世界の数割の地域が一夫多妻ですから問題ないのでは？」

数割って事だから結構あるな。

「黄金体の加護で下半身も怪物クラスみたいですし、満足させられますよ。加護は遺伝するのでハーレムを作った方が効率良いですし、ついでに少子化もありますのでメリツトづくしです」

いやいや怪物クラスとか……………。

これって妥協したほうがいいのだろうか？



まだ元の所へ帰るまで時間があるらしい。

神様が羊羹を出してくれた。甘過ぎず口触りも良いしお茶にも合う。いいね。

「そう言えば神様の名前ってなんなの？」

「ええつと二葉って言います」

「可愛い名前だな」

「あ、ありがとうございます」

あまり神様の事を知らないから聞いてみよう。コミュニケーションは大事だしさ。

「家族とかいるのか？」

「ええ、姉妹が上に一人と下に二人……四つ子で私が次女です」

四姉妹いるんだ。

「四姉妹で選ばれたトレーナーの担当をやってるんです」

「へえ〜」

「一番上の姉の担当しているトレーナーは選ばれたトレーナーの中でもかなりのトップクラスだと言われてます」

「下の二人は？」

「強さも中々で侮れないトレーナーですね」

そんな奴がいるのか……。戦ってみたいな。

今俺とまともに戦えるのは玉川達だし。

「広人さんもトップクラスの中に入ってますよ」

トップクラスか……。どんな奴等がいるのだろうか？オラワクワクしてきたぞ。

「あつ、もう戻る時間みたいですね」

何か視界が白くなってきた。

「お菓子とお茶ご馳走さま」

「いえいえ私も話せて楽しかったです」

ここは結構居心地が良い空間だからまた来たいな。神様も良い子だし。

「さ、最後に」

「ん？」

「二葉って呼んでください。神様って言われると堅苦しいですし、フレンドリーな関係の方が楽です」

「そ、そうか？」

視界の白さが濃くなってきた。

「わかったよ二葉」

「それではお元気で」

「二葉もな」

今回の事で仲良くなれた気がした。

期待を裏切らないように努力しよう。

「そう言えばまだヒロインは増えるそうですよ」

「ごめんそれ詳しく教え」

目の前が真っ白になった。

ゲーセン

「うわ〜ここがゲーセンか！」

「ああ楽しそうだろ」

「広いわねこのゲームセンター」

今日はアルセウスと唯をつれてゲーセンに遊びに来た。

アルセウスがテレビでゲーセンが映ってる所を見て行きたいと言ってきたから連れてきてやった。

「ねえ最初にエアホッケーやらない？」

「おっいいじゃないか」

アルセウスVS唯でエアホッケーを行う事になった。

よくゲーセンで見かけるゲームだ。

「いくぞっ！」

アルセウスの先攻だ。

マレットでパックを打つ。

「オラアッ!!」

うわっ！ 何だこの勢いは!?

「キヤア!!」

唯のマレットを弾き、ゴールに突き刺さる。

人間技じゃない、ポケモンだし。

「何よあのシヨットは……」

「まずは一点じゃ」

「…………あれ〜? パックが無いよお〜」

? わざとらしい言い方だな。

何企んでるコイツ。

「こつちにはないぞ」

「隙有り!」

嘘かよ! お前が持ってたか。

アルセウスが見てない時に打ちやがった……。

そしてアルセウスのゴールに入る。

「うわあああ汚いぞお前えええ!!」

「イエーイ♪」

ちよつと大人げないんじゃないか?

「ちくしよおおおおおー！」

アルセウスが力を込めて打ち込む。

「ガード!!」

おい、持ってきたバックを盾にしやがった。反則だ。

バックで防いだバックが自陣に戻って来たためアルセウスが横の壁の反射を使用し
ゴールを決める。

勝負の結果はアルセウスの圧勝だった。

□ □ □

「どんな筋力してんの……」

「ふっ凄いじゃろ」

ただいま水分補給中だ。

唯の奴は疲れてるな。まだゲーセンは始まったばかりなのに。

「やっぱ楽しいなゲーセン。毎日来たいな……」

「あつ儂も」

唯も敵しい家が嫌だから家出したのでこのような場所はあまり来ないだろう。お嬢様って聞いたし、ゲーセン来てから楽しそうにキョロキョロしている。

アルセウスは家ばかりにいるから暇だろう。ちなみに最近インターネットを覚え始めた。タイピングは苦手だが。

「あつ、次あれやりたい」

唯が指を指したのはレースゲームだ。

甲羅を投げたりバナナを置いたりして妨害するレースゲームだ。64でよくやった記憶がある。

「よし、んじや1位取ったら夕食は好きな店に連れて行ってやるよ」

「えー主の飯がいい」

「右に同じで」

別にめんどくさい訳じやなくて俺は外食とかも好きなんだわ。俺が1位になったら行きたい店も決めてある。

「んじやスタートだ」

信号がピカピカなり、全機がスタートした。

とりあえず先頭走るか。

「喰らえ甲羅!!」

甲羅が当たり、動きが止まる。

あつアルセウスお前! 妨害かよ!?

いい度胸だなテメエ。

まあいい追い抜けばいい話だし、怒る必要ないね。ゲームだから気楽にやるか。

「はいタライー」

加速しそうな時にタライが落ちてきた。

スタンして動けなくなつた。

唯の奴やりやがつたな……。

その後俺はバナナやオイル、がびよう等のトラップをアルセウスと唯のコンビネーションを喰らいまくつた。

また先頭走つても甲羅で撃墜されてしまう。

何この嫌がらせ?

とまあこんな感じで最後の一周に入った。

「ふつー騎打ちじゃな」

「喰らえ甲羅!!」

「あつ！ お前！」

唯がアルセウスに甲羅アタックを仕掛けてアルセウスのカートがストップする。計算通り仲違いしたな。こっちは持っているアイテムは……………甲羅だ。

「いつけえー！」

「うわっ！」

唯のカートに当たり走りが止まった。

獲物を倒す前後が一番隙がデカイ。

ハンター試験でヒソカを狙うゴンが良い例だ。

だが時すでに遅く、俺がゴールに行く前にCPUがゴールしやがった。

結局1位は誰も取れなかった。

□ □ □

唯が立ち止まる。

「あつ可愛いなこの人形」

クレーンゲームか……。

結構可愛い人形が景品だ。

「主よ農はこれが欲しい」

アルセウスはお菓子だ。最近食い物にはまっており味にうるさくなってきた。

どれ一つ取ってやるか。

人形がある機体にワンコイン入れる。アームが少し開いているため力が弱いのだろうか？

とりあえず外れない様にガッチリと掴ませる。そのままアームが上に上がり取り出し口に近づき、

ボト

うわっ取り出し口の前で落ちた。惜しい。

そしてもう一度ワンコイン入れて掴み、ようやくゲットした。

「わあ！ ありがとう!!」

人形をぎゅつと抱き締める。

女子がぬいぐるみを持つとなにかと絵になる。

「主、次は農」

「帰り道に何か買ってやるぞ?」

「嫌だこれ食いたい」

ちついやしんぼめ。

それでクレインのタイプはアームですらし下に落とすやつだ。アームがどこまでの可動域か把握するのが大事だ。

それで計算して動かすと……よしドンピシャ。

お菓子が落ちる。大きいチョコバーなので後で分けてもらおう。

「ありがとう主よ！」

へへっ、その代わり働けよ。

アルセウスがチョコバーを食べ始める。

「この人形欲しかったんだ。嬉しい」

「うまいなこのチョコ」

嬉しそうでなによりだ。そこまで苦労はしていないがやったかいがある。

「そうだアルセウス、一口ちようだい」

「私も！」

「へっ？ 全部食ったぞ？」

……………早っ。

□
□
□

「ねえ最後にプリクラ撮りたい！」

「しようがねえな」

俺あまりプリクラとかした事なかったな。入ってみよう。

中に入り機械音で説明される。

「じゃあこうして撮ろう」

俺と唯の手でハートの形を作る。

は、恥ずかしい。

その他にも色んなポーズをとったり落書きを書いたりして楽しんだ。

終わったのでそれをプリントアウトしてみた。

「目がデケエ」

「……うん」

プリクラって人の目をキレイに大きくできるんだなあ。整形してるような気分だ。

うわっ肌も白い。

「ん？ 終わったか？」

唯が二人で撮りたいとの事でアルセウスにはプリクラの前で待ってもらった。

「おいおいこの写真別人じゃ……」

「本人だ」

凄いなプリクラは。

□ □ □

俺達はゲーセンのベンチに座る。

今さつきクレーンゲームでお菓子を取ってきて食べている。

「なあゲーセン楽しかったか？」

今回は家族サービスのような感じで連れてきたし感想が聞きたい。

「うん！ 始めて来たけど楽しかった！」

「濃もじゃ。また来たいぞ」

………連れてきた甲斐があつた。嬉しい。

「さてとそろそろ帰るか。夕飯は何が良い？」

「ハンバーグ」

「カレー」

「それじゃハンバーグカレーしよう」

夕飯の買い物をして家に帰るのだった。

だが、俺達はまだ知らなかった。

この後自分の家で起こる事を……………。

破壊の遺伝子？

スーパーで肉が特売していて助かった。

まあ、金はあるが安売りしていると買いたくなる習性なのだ。

「主よ今度は映画館に行ってみよう」

「あつ、私も私も」

いいね俺も見たい映画館があるし丁度いい。

「じゃあ今日の日曜でいいか？」

「やったあ」

平日は学校だし休みの日にいった方がよい。

まあ平日の映画というのも乙なものだ。サボって見るのも悪くないかもしれない。

いや悪いか。

「ねえ手を繋いでいい？」

「……家までだぞ」

「ひゅーひゅー」

アルセウスか茶化してくる。

照れ恥ずかしいからやめて。

……………女子と手を繋ぐの久しぶりだな。

アイツ以来か。

すると過去の思い出が急にフラッシュバックする。特にクソみたいな記憶が溢れる様に……………。

「ど、どうかしたの!？」

「どうした主!」

「い、いや何でもない」

「顔めちやくちや怖いよ!」

顔に出てた? マジで?

嫌な思い出だからな……………。

「……………そんなに私と手を繋ぐの嫌だった?」

「いやいやいや違うって! 嫌な事思い出したただけだ!」

「だったら良いけど……………」

気分悪くさせたかな?

「じゃあ近いうちに遊園地行こうか」

「うわーい!」

「イヤッホー！」

機嫌良くなったらしく腕に巻き付いてくる。

その際に胸が当たるのが小さく、僅かに感触がある。それはそれで良い。しかし玉川とアリスの方が遥かに圧勝しているんだよね……。

「主よ儂の身体について変な事考えてないか？」

お前の事じゃねえよ。

□
□
□

「ただいま」

いなくてももたまに言っちやうよね。よくある。

「あれ？」

「どうした？」

「あそこの戸、閉めたはずじゃ……」

あつ確かに閉めた記憶がある。

ってことはつまり……。

「主よ後ろに下がれ」

アルセウス？ いつものクソニートモードじゃない？

「ナニカいるみたいじゃぞ居間か？」

「とりあえず行ってみよう」

侵入者がいるみたいだ。

そしてアルセウスを前衛にし居間の前にやって来た。

居間に入る戸は開けていたのだから閉められており、中から物音がする。ポケモン出しておこう。

「開けるぞ」

ガラリッ！

「……………え？」

白い体、長めの尻尾を持ちそして鋭い目。

ポケモンを知っている人間だったらマスターボールを投げてゲットする超強力なポケモン。

「ずずずずず」

？ あれ俺の秘蔵の紅茶と菓子じゃないか？ 何故食ってやがる!?

「ん？」

喋った!? アルセウスと同じく喋られるのか?

っーかなんでコイツは俺の家でくつろいでるんだ?

「君達……誰？」

「他人の家でくつろいでいる奴のセリフじゃない」

ミュウツーさんでした。

ええええええなんで俺の家に!?

「おい何で遺伝子ポケモンが俺の家にいやがる？」

ずずずずつ

ミュウツーは紅茶を飲む。

「ふう……ん? 何って言った？」

うっわー苛つく。

そう言えば何処から入ったんだコイツ?

「お前何処から侵入した？」

「そっ」

「ヤミラミ、パークアウトを最小限で」

「ヤミィ！」

「グハッ！」

見てみると窓ガラスが割れている。

最小限で打ったのは家で戦うつもりは無く、暴れたら散らかるためである。

「何すんだよ痛いじゃないか？」

「空き巣がなにいつとるんじゃない?！」

唯は事態に対応できずフリーズしている。

□ □ □

「くちやくちやく」

「それで何で俺の家に行った？」

その場のノリで夕食を一緒に食べる事になった。

くちやくちやくさいなコイツ。

「まあ簡単に言えばポケモントレーナーを見て回っているんだ」

「トレーナーを？」

「実は僕さ、神様に現実へ送り出されたポケモンなんだ」

退屈している神様だからありえるな。確かにそうした方がトレーナーはワクワクしてきそうだし。

他にも何かやってそうな気がする。

「まあ、僕はゲットされてるんだけどね」

「もうゲットされてるのか!？」

ミュウツーって強くなかったっけ？

どんなトレーナーだよ……………。

「それで神様から個人情報が入ったタブレットを貰ってさ、マスターの許可もらって世界を回っているんだ」

「へえ〜どんな奴がいるんだ？」

「……加護を持つている奴の何割かが狂っていてさ」

「何それ？」

狂ってる？ どゆこと？

「うん異常なんだ。簡単に言えば変人奇人って事」

「変態か」

神様も目を背けたよな……………だからか？

いずれ会うこともあるだろう。正直楽しみだ。

「どんな変態がいるんだ?」

「まず近寄りが見たいのは格闘・岩使いかな。次点でフェアリー使い。三人共極悪人じゃないけど異常者なんだ」

「他の奴は?」

「ピンからキリまでかな? タイプの加護を持っているトレーナーは大半は頭のネジが外れている。まともに見えるのは君と虫使いかな?」

虫使いか……、内面がどうか気になる所だ。

「タイプの加護以外にもまだ加護はあるのか?」

「例えばイーブイ進化系オンリーの加護を持っているトレーナーがいたな」

「うっわーいいな」

イーブイに囲まれるとか鼻血が出そうだ。

「他にも600族オンリーや魚オンリーとかあったよ」

いろんなトレーナーがいるな。

魚オンリーだと海でしか役に立たなそうだ。

「とまあこんなところかな。ハンバーグカレーご馳走さま。美味しかったよ」

「お粗末さまでした」

そう言えば選ばれたトレーナーに一人もまだ会っていない。まともな人間だったらいいんだけど……。

□
□
□

夜中。自室。

「ねえ起きてる?」

「何だ?」

「好きな娘とかいる?」

「寝ろ!!」

結局ミュウツーは泊まり、朝食を食べたら帰った。

チャラ男 前編

さーて今日は土曜日だ。

明日はアルセウスと唯で映画館だ。

P r r r r r P r r r r r

ん？ 電話？

『ああ影山君？ 市役所です』

「何かありましたか？」

『明日の交流会で変更があつたので連絡を』

ん、交流会？

「あのを交流会って？」

『トレーナー同士の交流が市役所であつて選ばれたトレーナーは参加するんですけど2週間前に携帯に連絡しましたよね？』

「いえ、知りませんが？」

初耳ですが？ 留守電にもそんなの無かつたけど……。

交流会なんて始めて聞きましたにやー。

『いやー困りますね。忘れるのは私もよくありますけど』

「だから知りませんってば」

『事前に連絡したのに覚えていないのはどうかと思いますよ』

「連絡されてませんか？」

記憶に無いな。

『明日〇〇市役所に8時に変更になりましたので』

「ちよつと？ 明日用事があるんですけど？」

『先約はこつちですが……選ばれたトレーナーがいないと交流会が困るので私達が恥を書くんですよね……』

うわっ！ ウザい。なにこの態度。

連絡されてないのに酷い。

アイツに相談だな。

『それではまた明日』ガチャ

明日映画館なんだけど。クソツタレ。

楽しみにしていたアルセウスと唯に謝らなければ。

「主よ……」

後ろを振り返るとアルセウスと唯が。

「大丈夫だよ、次の休みに行けば」

「気持ちだけでも嬉しいぞ」

「お前ら……」

「ごめんなお前ら。絶対連れていくからな。」

□ □ □

翌日。

ちなみに調べてみたが留守電にも連絡は無いし通話履歴にも無い。家電の留守電と調べたり、アルセウスや唯にも聞いたがそんな話無かったそうだ。理不尽だなオイ。

ちなみに交通費は自費だ。悲しい。

「ここが〇〇市役所か」

片道1000円くらいだろうか。金があるから出費は痛くはないが映画がおじやんなった為精神的につらい。

あそこが受け付けか。

とりあえず済ましておくか。

ドス

「おい邪魔だ」

後ろから追突された。

俺ずつと止まって立っていたけど？

「あーん？　なんだその目は」

チャラチャラしていて柄が悪い奴だな。

ぶつかってきたのはそっちだ。

「肩ぶつけといてあやまんねえのかお前？」

「よそ見していたのはそっちだろう？」

「生意気だなくお前。顔は覚えたからな？」

偉そうだなあ。

受け付け済ませよう。

□
□
□

中庭の方に行くとは沢山のトレーナーとポケモンがいた。この県に多くのトレーナーがいるようになったなあ。

レディバ、ベロリンガ、パチリス、ヒノアラシ、ヤドン、スバメ、アーボ、ブルー等色々いる。

「おっ色違いのトランセルだ……ん？」

今さっきぶつかった柄の悪いチャラ男が女子に囲まれちやほやされている様子だ。

そう言えばアリスが選ばれたトレーナーがチャラ男と言っていたな………奴か？

「え？」

おいおいよく見てみたら退学したクソ女がいるぞ!!
いつも聖沢に取り入っているような顔してるな。

尻軽過ぎないだろうかコイツ。

「あ!!」

ビツチが俺に気づいた。

そして釣られる様にチャラ男も視線を俺に向く。

「何やってるのよカス山!」

「何しようが俺の自由だボケ」

コイツの名前なんだっけか？
未だに思い出せない。

「あつお前さっきの！ テメエがカス山か……」
ん？ 俺の事知ってるのか？

「お前が明日香に濡れ衣着せて退学にした男だな!!」

「はい？」

何か真実が歪んでませんかクソビッチ？

取り入る為に虚偽言うのかお前は？

ふとクソ女を見てみると困惑した顔をしている。虚偽だと分かる証拠はもう揃っているし、沢山の悪事の証拠を掴んでいる。言い逃れは出来ない。

「他にも聞いているぜ、悪事を指摘した生徒をポケモンバトルで公開処刑して学校から追出したそうじゃねえか」

真実だけど俺が悪者みたいじゃねえか!?

後で覚えているよクソ女。

「影山くん！ いたいた。探したよ」

あつ俺の住んでいる市の市役所の人間だ。正直腹立ってきた。

「あれ茶頼君じゃない？ この前はありがとう」

「どうってこと無いですよ。…………あのくコイツのフルネームって何ですか？」

「? 影山広人君だけど」

一瞬表情が真顔に戻る。

そして、

「ぶっはっはっはははは！」

な、なんだ急に笑いだした!?

どうゆうことだ?

「何がおかしい?」

「お前の担当の神様は貧乏神なんだろ!? ド底辺の人間を選んだって神様の間じゃ有名

だぜ！」

貧乏神?

そう言えば服とか家の中とか古かったような…………。

だけど俺は神様のおかげで貧乏な生活を送ってはいないんだけどな。でかいきんの

たまが最近多く発掘できた。

ありがとう二葉。

「だったら何だ?」

「帰れ、不幸が移るんだよ貧乏神のトレーナーwwww」

よーし帰ろう。

用事を潰してまで参加したのにこの扱いだ。無理して付き合う必要は無い。自分の市の市役所のメンツなんてどうでもいいし関係ない。

「ちよつと!?! 困るつてば影山君」

「知るか」

あそこまで言われたんだぞ。やってられるか。

職員が駆け寄ってくる。そしてふと書類が見えた。

ん?!

「なあアイツの名前何なの?」

茶頼つて言つてたんだよな。

書類に茶頼つて苗字があつたけど下の名前まで見ていなかった。

「ええつと茶頼呂己男つて名前だけど?」

茶頼呂己男……

チャライロミオ……

チャラオ……

チャラ男!?!

あくだから二つの意味でチャラ男か。納得。

皆からチャラ男とか呼ばれてるんだろうな。

「じゃあなチャラ男。せいぜい猿山のボスを気取っている」
「は？」

チャラ男の顔がみるみる赤くなる。

本当に猿みたいになった。

「チャラ男だと……人をバカにしているのか？」

「先にバカにしたのはお前だバカ」

めんどくさいなコイツ。

「人が気になっている事を……許せねえ……」

「だったら何だ？」

「ポケモンバトルだ!!」

「はあ？」

ポケモンバトルするの？ 何故？ Why？

「俺が勝てば土下座しろ。明日香にもだ」

「こつちが勝ったら？」

「手持ちの道具全部やるよ」

風の噂でバッジ6個と聞いたからダウンジングマシンは持っているだろう。だけど、

「断る。面倒臭い」

「は？」

道具はかなり沢山あるし木の実も技マシンも増えてきた。戦っても普通に勝てるしそっちが損するだけだ。

「あーわかった担当の神様はカスだもん！ 選んだトレーナーもカスでチキン野郎か！」

ぶちっ

チャラ男の大声の挑発で俺の中の何かギレた。

そっちの為に戦わないのにそこまで言うのなら戦つてやろう。覚悟しろチャラ男。

チャラ男 後編

「影山君！ 今すぐ茶頼君に謝って！」

「断る。どんな失礼をしたんだ？」

市役所の人間が変な事言ってくる。

救いの女神をバカにされたんだぞ。黙ってられるかよ。

「皆のポケモンのゲットを手伝ったのよ！ 悪く言うのはやめて！」

「はあ〜」

ため息が出てきた。

悪事をして悪人扱いされるのは良いけど、何もしていないのに悪口言われるのは嫌だ。

「第一何もしていない影山君が偉そうなのはどうかと思いますよ!! 交流会の事も忘れていたし真面目にやる気はあるんですか!! 茶頼君がどれだけ色んな人のために動いたか解るの！ その時影山君は何していたの!?! 何も協力しなかったじゃないの!?!」

「道具が無いのに自分に何をしろと？ それに交流会の連絡はされていません。って言うかボールが無いから始めから期待していませんでしたよね？」

ダウジングマシンの事はもう市役所の耳には入っているだろう。それを聞いた時点

で俺に連絡を入れるべきでは？

少しは手伝おうと思いましたがよ。

「影山君は自己中心よ！ そんなの社会で通用しないわ！」

「あつそ」

色々やってきたから否定はしない。

それに自分中心で何が悪い？ 人は自分の都合で職場や恋人等を選んでいるだろうし、自分の人生を他人の都合に決められる筋合いは無い。

人助けをするのも自分勝手に動くだろうし。

さて、交流会のトリで選ばれたトレーナー同士が戦うらしい。

恩人をバカにしたんだ。ぶっ潰してやる。

□ □ □

『さあー今日のメインイベント！ 選ばれたトレーナー同士のポケモンバトルです！』

始まった。

さてとアイツを先鋒で行きますか。

『勝負のルールは3対3のシングルバトルです。先に全部倒したトレーナーの勝利となります。解説の中野さん、このシンプルなバトルに両者どう出てきますでしょうか?』
『茶頼選手はパワーで戦う戦法を取り数々のトレーナーから勝利を頂きました。パワーな戦いが予想されます。対して影山選手はガオガエン1匹でバッジ4個のトレーナーのポケモンを6匹倒す実力です。一筋縄ではいかないでしょう』

パワータイプか……単純に力任せと言うのも厄介かもしれない。頭は良くても体を鍛えていない人とかいるだろうし。

『茶頼選手と今さっきの話したのですがとっておきのポケモンを手に入れたそうです。自信を持って話をしていましたよ』

とっておき? 何だろうか。

「おい始めるぞ!」

「とっておきって何だ?」

「教えねえよ!」

秘密じゃないととっておきには成らないだろうね。楽しみにしていよう。

おくとポケモンバトルの音楽がなり始めた。

さてと潰しますか。

「行け！ ニドキング！」

「殺れ、ゲツコウガ」

おっ技のデパートじゃないか。

ガオガエンでも良かったのだがコイツもやる気があるから出してみた。

つきのいし無いと進化出来ないよねコイツ。ゲームの経験者か？ 因みにLv3

5。

「なっ……Lv45!？」

こっちの方が格上である。

「ゲツコウガ、れいとうビーム！」

「クガッ！」

ニドキングはどく・じめんなので効果抜群である。

例外無く普通に戦闘不能になる。

「ドォ！」

「ニドキング!!」

『れいとうビームが炸裂だああああ！』

さあ次は何だ？ パワータイプだろ？

「行け！ エビワラー！」

かくとうタイプか、相性はいいが通用するかな？

L v 3 6 だし……………試してみるか。

「ゲッコウガ、技を受けてみる」

「クガツ！」

「舐めやがって！ エビワラー、かみなりパンチ！」

「ワラアツ！」

ダメージを受けるが少ししか減らない。

ゲッコウガも平気のようだ。

「続ける！ インファイト！」

「ワラアツ！」

『どうしたゲッコウガ！ 技を受け続けている！』

あつ今さつきよりはダメージが受けたみたいだ。

やるじゃんチャラ男。

「チャンスだ！ きあいパンチ！」

「ワラーアツ！」

どうしようか、ここで攻撃するのも悪くないかもしれない。でも頑張っているから待つてあげよう。

そして10秒たってやっとな動きがあった。
やっときあいが貯まったみたいだ。

「ワラッ!!」

「いつけえー!」

ゲッコウガにきあいパンチが突き刺さる。

だけど、

「クガッ」

普通に平気だ。でもさつきよりダメージを受けた。

そろそろ反撃するかな。

「ゲッコウガ、なみのり」

「クガッ!」

ビッググウェーブが出て来てエビワラーを飲み込む。案の定瀕死になる。後1体だけ。

「クソッ! これが俺のとっておきだ!!」

やっとな出てきたかとおき。

チャラ男がボールを投げた。何が出てくる?

「ギャオオオ!」

『最後はギャラドスの登場だああああ!』

Lv45

ほおギャラドスLv45か、良いセンスしてるじゃん。

レートとかでよく使われてるポケモンだね。

あれ？ ギャラドスの頭のキズどつかで見た覚えがあるような…………。

「ふっ、このギャラドスは前に海に行った時に捕まえたんだ。丁度瀕死だったから、げんきのかけらを使ってそのままゲットしたぜ！」

あっ思い出した。コイツ前にベトベトンが海で倒した奴じゃなかったけ？

「ギャオ!？」

ギャラドスは思い出したみたいで少し引いた。

俺の事覚えていたんだなお前。

「ギャラドス、かみくだくだ!!」

「ギャオオ!!」

ギャラドスは「マジで行くの!？」って顔してるぜ。敗戦が身に染みてやがる。

「ギャオオオオ!!」

覚悟を決めたみたいで、弾丸の様に突進してくる。

まあ迎撃するんですけどね。

「ゲッコウガ! あくのはどう!」

「クウウウガアアアア!!」

あくのが刺さり、吹き飛ぶ。

ギャラドスのHPかゼロになった。

「ギャラドス!!」

『おおおつと勝負あり!! 影山選手の勝利だあああああ!!』

俺の勝ちだ。

道具全部貰うぞ。

□ □ □

さてと俺は勝利してその後案内されて応接室みたいな所にいる。何の用だろうか？
すると扉からチャラ男と偉そうなおっさんが入ってくる。あれ？ このおっさん
どつかで見たことあるような……。そんでもって俺の向かいに音を立てて座り、膨ら
んだ封筒を机に放った。

「100万ある」

何だ急に？

「道具を全部寄越す約束だけど許してくれって事か？」

「何の話だ？ 息子の呂己男にポケモンを寄越せと言う事だ」

何言ってるんだこのおっさん？ って親子なの!？」

チャラ男が笑っているんだけどウザい。

「それであなたは誰？」

「この市の市長だか？ そんな事もわからないのか君は？」

見た事はあるけど知りませんでしたね。

他の市の市長の顔を覚えろと言われてもね。

「それで答えは？」

「ノーに決まっているでしょう」

「はあくバカな奴だな」

バカだと？ 嫌に決まってるんだろうが。

親子って似るんだね。イラツとくる。

「君をブラックリストに乗せよう。もう県内の市役所では手続きやサービス等は受けられなくなる。君にもう居場所は無くなるぞ」

「アンタにそこまでの権力はあるのかよ？」

「上の方に弱味を握っている人間が居てね」

嫌な人間だな。虎の威を借りるようなものだろう。まあその方が案外楽かもしれない。
い。

さ、帰ろう。付き合つてられないや。

地震や台風が来たときにこの市役所をアルセウスで壊す事を検討しておこう。

「良いのかい〜？ 君の大事な人間に不幸があるかもしれないよ？」

「！ テメエ……………」

何だとコイツ!? 腐つてやがる!

何でこんな奴が市長になつてんだよ!?

自宅をぶち壊してやろうかお前?

p r r r r p r r r r

ん? 内線が鳴り始めた。

クソ市長が受話器をとる。

「ん? 何だね? 分かつた少し待つて貰つてくれ. は!?! お通し
してくれ」

驚いた顔をしているのだが、誰か来るの？

重要人物だろうか。

市長が暫く沈黙し待っている足音が聞こえてくる。

扉から入ってきたのは、

「こんにちわ〜広人さん」

あれアリス？ 何で顔見知りがここにいるのさ。

「アリス？ 何故ここに？」

「選ばれたトレーナー同士が戦うと聞いたので来ちゃいました。……まあ用事があつて遅れましたがね」

「バトル終わったぞ」

「ええ、市長と会っていると聞いたので無理矢理入つて来ました」

何で無理矢理に？

「……………市長に何か言われてませんか？」

「言われた。嫌な取り引きを持ちかけた上に、俺の大事な人に何か不幸が有るかもしれないってさ」

アリスの目が鋭くなり、市長の顔が青くなつた。

ん、知り合い？

「おいっ何だお前は!? いきなりでてきてでしやばるんじやねえよ!」

「は? 躰が成つていませんね。おい市長、コイツ殴れ」

「何を言ってるんだおまぐバハツ!」

チャラ男が床に叩きつけられる。

え!? クソ市長がチャラ男の顔面を殴つた!!

ちよつと! ナニが起きているの!? 全然話がわからないんだけど。

「ああ、実はコイツ黒田組の奴隷なんですよ」

「奴隷?」

「脅してるんですよ、逆らえないんですよコイツ」

何か悪さをしてカモられているんだな。

「親父! いきなり何をするんだ!!」

「お前のためだ、許せ」

「まだ反抗しますか？ もう一度殴ってください」

「待ってくださいアリス様！ よく言っておきますので」

「脱税」

「親父待つグバツ!!」

二度目もぶった。

相当根深い脅迫されているみたいだ。

自業自得と言うのはこのような事なのだろうか。あまり悪事は働くべきでは無いな。

「広人さんはこれで満足ですか？」

「ああ、だがチャラ男の道具を全部貰わないと」

約束だし貰わないと。

「はあ？ ふざけんなよテメエ」

「ふざけてねえよ。約束だろ」

「まだ親に殴られたいんですか？」

「っ！」

チャラ男はしぶしぶ道具を出した。



黒田組の車の中。

「ふうく助かったぜアリス」

「良いんですよ広人さんの為ですし」

チャラ男の道具を少しだけ分けてあげよう。

良いもの見れた御礼だ。

「何かあったらまた駆けつけますよ」

「うわっ頼もしい」

コイツが忠犬見たいに見える。いや、助けてくれた人間に失礼だな。

「あっそうだ、パパが広人さんに話があるって言ってましたよ」

「アリスの親父さんが？」

「はい、大事な話だそうです」

何だろうか？ 明日学校にいるだろうから聞いてみよう。

「それで黒田組に頼みがあるんだけど……」

「私に出来ることならば」

後に分かった事だか交流会の連絡は本当にされていなく、勘違いだったそうだ。

って事で市役所の電話の件だか黒田組が依頼を仲介する事を頼み、それで仲介料で組に金が入るようになった。

そしてクソ女の会社だが、しばらく赤字経営が続いたらしい。

抗争

波の音をが聞こえ、船の汽笛音が遠くから鳴る。横を見ると倉庫が連なっていた。港と言うのはこのような場所を言うのだろうか。

「広人さあああん頑張つてえええ！」

「やっちまえー!!」

「沈めろおー!!」

「ぶっ殺せえ!!」

アリスと怖いお兄さん達が俺を応援してくれる。

絶対勝たなければ。

「さあ準備はいいかお兄ちゃんよ」

「速く倒してしまえ権東！」

「はい！」

ガタイの良い怖いお兄さんが、身なりの良い太った中年のおっさんに命令された。

ああ何故このような事になったのだろうか？

それは3日前に遡る。



学校

「それで何の用です？」

「実は他の組と抗争する事になってしまいました……」

あれー？ 抗争しない穏健派って聞いたけど。

「喧嘩を売ってきたのは数と権力が桁違いの赤馬組です」

聞いたことある。勢力が強くて有名な組でブラックな仕事をやっている噂されている。

「身に覚えのない濡れ衣を着せてきた上に、周辺住民に危害を加えると」

大変だな黒田組も。嫌な奴に目をつけられたようだ。

どんな所にもタチの悪い奴らがいるもんだ。

「実は相手の組の組長のバカ息子がうちのアリスを自分の女に欲しいらしくて」

「それで身に覚えのない冤罪を被せたって事？」

「ええ、アリスの知り合いの情報屋に聞いたから間違いありません」
冤罪か……許せないな。

「それで何故俺にその話を？」

「実は……」

簡単に纏めると互いに被害を出すのは嫌だからポケモンバトルで決めようとの抗争になった。

そして黒田組が勝ったら咎め無し。

負けたらアリスはバカ息子の愛人に、組は吸収されるらしい。何この不平等？
皆の頭がデュエル脳みたいになってるのか？

最近よく思うんだよなあ。俺がおかしいのかな？

「それで相手の組は選ばれたトレーナーが出るそうで」

「確実に勝ちたいからって事か？」

「恥ずかしながら」

しかたないか、コイツらをよく利用しているから無くなったら困る。

ここは一肌脱いだ方がいいな。

□ □ □

そして3日後冒頭に戻る。

「おい権東!! 速く潰してしまえ!!」

「了解しました若」

相手はバツジ7個。俺が倒せる範囲内。

アリスに手を出そうとした上に、濡れ衣着せて喧嘩を売ってきたんだ。返り討ちに
てやるよ。

「おいお兄ちゃん」

何だ? 舐めた言い方しやがって。

まあいいか、言わせてやろう。

「黒田組は吸収され配下になる。いつも調子に乗っているし痛い目に会うだろう。お兄
ちゃんも巻き込まれて酷い目に会うよ」

「だから?」

「逃げるんなら逃げていいぜお兄ちゃん」

俺が負ける前提で話してるよコイツ。

相当自信家のようなだ。まあいい、ポケモンバトルで語ろうか。
バトルの音楽が鳴り始めた。さ、ヤリますか。

「行け！ ゴローン！」

「ゴロー！」

「潰して来い、ベトベトン」

「ベトオ」

ゴローン Lv41

ベトベトン Lv58

いやよく育ったなアローラベトベトン。

結構山奥行つて育てたよ。

「なっ……………」

相手は口を開けて驚いている。

レベル差あれば皆驚くだろうよ。

つてゴローンが進化していない？

通信交換すれば進化するんだけど。

「クソッ！ アームハンマー！」

はいベトベトンの急所には当たりましたが、少ししかHPが減りませんし、特に問題

ありません。

「バケモンかコイツは?!　じしんだゴローン!」

「ゴロオ」

これは効果抜群であるが少ししか効いていない。
受けるのも何だし反撃しますか。

「ベトベトン、かわらわり」

「ベトオ!」

バキッ

「ゴロオ!?!」

「ゴローン!!」

ゴローンの額の方に当たりそのままKOする。
岩タイプだし効果抜群なのよね。

「行け!　ネンドール!」

「ドオ!!」

「ネンドールか」

ネンドール　Lv41

じめん・エスパーのポケモンか。

「ベトベトン、かみくだく」

「ベトオ」

カモだな。一撃でご退場願おう。
そしてネンドールが瀕死になる。

「ネンドール!!」

「さあ、あと2体」

「くっ!」

さあ次は何で来る?

「行け! ブニヤット!」

「ニャ!」

猫で来ましたか。

進化すると太るんだよねコイツ。Lvは39。

「さいみんじゅつだ!!」

「ニャア」

あつそう言えばさいみんじゅつを覚えるんだっけ。忘れてた。
だけど命中率が6割だから微妙なんだよね。

「ベトオZZZZZZ」

あれ？ かかった!?

まあ危なかったら戻せばいい話だ。

「チャンスだ、きりさく!!」

「ニヤ!」

攻撃するも僅かに減る。

「まだだ、だましようち!」

「ニヤ!」

今さつきとダメージが変わらない。

「ねこのてだ!!」

「ニヤア!」

おっくと地面から振動が来てベトベトンに当たる。じしんが出たようだ。

しかしあまり効いていない様子だ。

「ベトオ?」

あ、起きた。

「かわらわり」

「ベト」

バキッ

「ニャア!？」

「ブニャット!!」

「あと1体。ピンチだな、逃げてもいいぜ？」

「くっ……………」

最後の1匹。Lv40以上は確定だ。

「行け！ ガマゲロゲ！」

「ガアマツ！」

ガマゲロゲ Lv45

おっ強そうなポケモンが出てきた。

みず・じめんだからくさが弱点だ。

「ガマゲロゲ！ マッドショット！」

「ガマツ」

泥がベトベトンに投げられ、素早さが下がる。

効果抜群だか威力は無いようだ。

「攻めろ、ドレインパンチ！」

「ガアマツ！」

ダメージの半分を体力回復に当てる技だが、特にダメージは入っていないので少しし

か回復しない。

「ベトベトン、かみくだく」

「ベトオ」

「ガ、ガマ!？」

「ガマゲロゲローー!」

別に効果抜群じゃなくてもごり押しすれば戦闘不能になる。さあこれで全員瀕死だ。

よーし勝利。ガッツポーズ。

「広人さん！ 最高です！」

アリスが抱きついてきた。

胸を押しつけられ、いい感じだ。

「さて、帰りますか。勝ったし用は無いし」

「ええ、送っていきますよ」

他県まで来たんだしお土産を買っていこう。

お菓子もいいがおかずみたいなお土産も選んでおこう。

あー疲れた。帰ったら唯にマッサージしてもらおうかな。

バアアアアアン

うわっ何だ!?

後ろから聞こえたため振り返るとバカ息子が銃弾を空に放っていた。

「何の用だよ？」

「ふざけるなあああ!! 卑怯者が!!」

どこが? 反則はしてないはずだけど……………。

「何処が卑怯なんだ？」

「強さが可笑しすぎるだろうが!! あり得んだろう!!」

「強くても勝負は勝負だ」

加護があるから強いけど、それがどうした?

個人によって得手不得手があるのと一緒だ。

それに濡れ衣を着せておいて、不平等な戦いを挑んで卑怯って何なの? 矛盾してな

い??

「もう一度だ!! 権東、倒せ!」

「いえ……………無理です。格上ですコイツ、何かの加護を持っています」

「この役立たずが!!」

鉄パイプで後頭部を殴り、悶絶してしまう。

いくらなんでもやりすぎだろう。自分が戦えないくせに何故威張れるのだろうか?

「お前がバトルすればいいじゃん」

「黙れ卑怯者!!」

「言ってる」

「じゃあ私が代わりにバトルするのは？ 選ばれたトレーナーではありませんし」

「ほお、良いだろう」

「約束は守れよ、追加で今後一切黒田組には手を出すな」

「わかってるわ!」

アリスがバトルするのか。

どうせ大したこと無い相手だと思おうし大丈夫だろう。

(アリス平気か?)

(大丈夫ですよ)

アリスも強くなったし戦うところを見てみたい。

あつポケモンバトルの音楽が鳴り始めた。

「行け! ガラガラ!」

「ガラッ!」

「頑張つて、コマタナ!」

「タナッ!」

ガラガラ Lv30

コマタナ Lv35

バカ息子が少し苦い顔をした。

ちなみに相手は全部で2体でアリスは3体持っている。弟子にも加護が付くからLvだけで見ていたら危険だ。

「ガラガラ、ホネブーメラーン！」

「ガラ！」

鋼には地面技が有効。だが致命傷にはならない。

「コマタナ、だましようち！」

「タナツ！」

コマタナがガラガラの後ろへ表れ、後頭部を攻撃する。

「そのままメタルクロー！」

「タナアツ！」

もう一度後頭部に攻撃を入れる。

急所に当たったようだ。そのままガラガラはダウンする。

「あれえくどうしたんですか？ ポケモンを出してから10秒程しか経ってませんよ？」

「ぐぬうう」

「ネークストプリーズ」

強くなったなアリスは。

後煽りが俺よりも上手くないか？

「クソツッ！ 行け、ナゲキ！」

「ゲキツッ！」

かくとうか………あーあ終わったな。

「ちきゆうなげだ！」

「サイコカッター」

「タナツッ！」

このコマタナはたまご技にサイコカッターを覚えていた。エスパー技だから効果抜群である。

ナイフの様な物体が出て来てナゲキを切り裂く。急所に当たったみたいだ。

そのままHPはゼロになる。

「よーし勝ちましたよ広人さん！」

「よくやったぞ」

本当によく育っている。弟子の成長を見るのは師として嬉しいことだ。

俺はバカ息子に近づき前に立つ。

「わかってるな、約束は守れよ。絶対手を出すな」
「な、何だと汚い手を使いやがって……」

俺はポケットに偶然入っていた10円玉を出す。

10円を持ってそのまま相手に見せる。

そして

グシヤリ!

「だったらルールを決めておくんだな。特にルールは無いし何でもアリのはずだ。俺達には非はない」

二つ折りにされた10円玉を地面に落とす。

さあ帰ろう。疲れたよ。

意外な強敵

「5のダブル」

「八切りのダブルから4で勝ち」

「マジで!？」

唯め……………8を二枚持ってやがった。
これで二連敗か。

p r r r r p r r r r

あれ？ 玉川から電話だ。

どうかしたのだろうか？

『先輩明日暇ですか？』

「？ 暇だけど」

『実は伝えたい事があつて……………』

話を纏めるところだ。

今連休中なので従兄弟が玉川ん家に遊びに来ているらしい。その従兄弟がトレーナーなので玉川に勝負を仕掛けてきたそうさ。

そして結果は惨敗、目茶苦茶強かったらしい。ちなみに選ばれたトレーナーでは無いそうさ。

今玉川の手持ちは全部で4体。その内悪タイプはヘルガーのみ。しかし従兄弟のポケモンを1体は倒したらしい。

『蝶みたいなポケモンに殆どやられてしまつて……』

「虫タイプか……」

悪タイプには相性悪いよな。

『つて事で先輩に連絡したんです。強敵と戦いたいわつて言つてましたので』

最近自分がバトルジャンキーみたいな感じがする。

だが玉川が負ける相手か……相当手練れのトレーナーだな。

『明日の午後に帰るので午前中に来てもらえると助かります』

「わかつた、9時に行くよ」

どんなトレーナーか楽しみだ。

□ □ □

「あなたが影山さんですね！」

第一声がコレだし、俺の事を知っているようだ。

「君が森屋君でいいの？」

「はい！」

今さつき玉川に教えてもらったがコイツの名前は森屋浩介。玉川の従兄弟で県外の中学に通っているらしい。連休を利用し家族とここに来ているようだ。

稀に玉川と話している時にコイツの話聞く事がある。

「玉川によく勝てたな」

「ええ強かったですけどヘルガー主流の戦い方だったので」

「確かにヘルガーを潰されると痛い」

玉川はにほんばれを使用した戦いをするので天気も変えられると困る。なおもう一匹にほんばれを利用するポケモンは居るが相手は虫タイプなので戦うのは難しい。

ちなみに起点のポケモンにはあついいわを持たせている。

「それじゃポケモンバトルするか？」

「ええ」

□ □ □

「それじゃお願いします」

ポケモンバトルの音楽が鳴り始めた。

「行け、ゴウカザル！」

「ゴー！ ガオガエン」

ガオガエンLv55

ゴウカザルLv42

御三家同志の戦いか。

しかもLvも高い。だがそれだけじゃ玉川は倒せないはずだ。

「ゴウカザル、マツハパンチ！」

「ガア！」

ガオガエンにマツハパンチが突き刺さる。

HPを見ると想像していたよりもダメージがあるので、特性がてつこのぶしかもしれない。

「とんぼがえりだ！」

等倍だからそこまでダメージを受けないだろ。

「ガオツ！」

「え？」

あ、あれ？ 結構喰らいHPが思ったより減った…………。

何故だ？

ゴウカザルがボールへ戻っていく。

「行け、アゲハント！」

「アゲエ」

アゲハントか、多分むしのさざめきやあさのひざしとか使ってきたそうさ。Lv43。

「いとをはく！」

え？ 覚えてたの？

糸がガオガエンにくつつく。

何をする気だ？

「ガオガエンの回りをアクロバット！」

回りを？……………そうかわかった！

時すでに遅く上体を巻き付かれてしまった。

……………やるじゃないか。

「むしのさざめきー！」

「いばるだ」

危ない危ない。

よかつたー覚えさせておいて。

「それで攻撃手段はありますか？」

「あるよ。行け！かみくだくだ！！」

等倍だけどダメージは入る。だが一撃では倒れなかった。

「ギィー！」

あ、こんらんのダメージで瀕死になった。

「アゲハント、ゆつくり休んでくれ」

「やるなお前」

「ありがとうございます」

ガオガエンがこれ程戦ったのは久しぶりだ。

見るとイキイキしている。

「ゴウカザル、行け！」

またゴウカザルが来たか。

まだ糸で動けないがやってみたいことがある。

「ゴウカザル、とんぼがえりだ！」

「ガア！」

「ガオガエン、足でシャドークロー！」

足にも爪があるから実験したら出来た。

ガオガエンのシャドークローが腹部にヒットする。

急所に当たったようだ。

腕が使えないのによくガオガエンは頑張ってるよ。

「やっぱ強いですね。報告しておきますか」

「？」

報告？ ……そうか、わかった。

ようやく糸がつながった。

「行け、アリアドス！」

「キシヤアアア」

アリアドスか、Lv44だ。

口から糸を吐く蜘蛛か。

「スマートホーン！」

「キシヤア！」

「ガオガエン、それで糸を切れ」

「ガオ！」

その技を利用させてもらう。

相手の力を利用して投げるのが柔道とかでよくやる。

それでガオガエンがアリアドスの攻撃でうまく糸を削っていき、

「ガオ」

よし脱出成功。

あれ？ 毒状態になっている。

そう言えば途中空どくづきをしていたような……………。

まあいい、HPも少ないし戦おう。

「アリアドス、きりさくだ！」

「ガオガエン、かわらわり！」

らちが明かない。仕方ない使うか。

「ガオガエン！ フレアドライブ!!」

「なっ!」

反動でダメージを受けるのであまり使いたくないがしょうがない。効果抜群だし。

「アリアドス!」

あぶねえ、HPギリギリだ。

よし勝った。

「影山さん、ありがとうございます!」

「ああいい腕だ、頑張れよ」

「はい!」

「先輩、家でお茶飲みませんか?」

「ちようど良かった、飲むわ」

家に向かって2、3歩歩くと、

「ガオオツ」

「あ」

ガオガエンが毒で瀕死になった。

……強敵だったな。



「それで聞きたいんですけど」

「はい？」

「師匠の虫使いのトレーナーってどんな奴？」

「……やっぱりわかります？」

まあ虫タイプが強かったし、技マシンでしか覚えさせられない技も使っていたからさ。加護を受けていた上に技マシンを貸してもらったのだろう。

玉川が言っていたがゴウカザルがソーラービームを使っていたと聞いてピンときた。

「木羽さんって人なんですけど」

話を聞くと趣味が昆虫採集の高校生で、森屋家の山に入ってしまったらしく、そればかりで交友が始まったらしい。相当トレーナーの実力があるらしく、色々なトレーナーを倒しているとか。

「この前なんてとてつもないポケモンをゲットしたって言ってましたよ」

「へえ〜」

ウルガモス辺りだろうか。結構強いし。

まあ近いうち会うかもな。

「それにしてもこの団子うまいな」

「ええ、いつも来たときにお土産は甘いものを持ってくるんですよ」

「甘いのが好きなんですよ。ちなみに僕は玉子焼きはいつも砂糖です」

ちなみに俺はめんつゆで味を付けている。

すっぱい味付けもあるそうだ。

「あつもう時間だ。影山さん今日はありがとうございました」

「ああまたやろう」

こうして森屋君は帰っていった。

砂場デート

「広人さん、今日は付き合ってもらってすみません」

「いや、俺も行ってみたかったからいいぞ」

今日はアリスとポケモンを捕まえに遠出している。今車の中だ。

まあ目的地は県内なのだが。

「とりあえずこれ渡しておく」

「ゴーグル？」

ゴーゴーゴーグルだ。チャラ男が持っていたのを奪ったやつだ。2つあった。

目的地には必ず必要だしな。

「了解しました。ああそれと伝えて置かないといけないことが」

「？」

「トレーナー狩りの事です」

話を聞くと調子に乗っているトレーナーを潰しているトレーナーがいるらしく、選ばれたトレーナーらしく飛行タイプを主に使用するとか。勝負に負けたら履いているズ

ボンを奪われるとの事。

何だそりゃ？ ボンタン狩りかよ。

トレーナー狩りはヤンキーに違いないな。

飛行（非行）に走っているからな（笑）

「それでこの前チャラ男が狩られたそうです」

「ざまあ」

「関東と中部のトレーナーが主に狩られているそうです。戦って勝ったトレーナーもいます。さすが苦戦したらしいです」

「上等だよ」

「聞いていると相当な実力だか負ける気は無い。

血がたぎるな。」

「まあ悪事をしなければ狩られないそうなので広人さんは平気デスネ」

「ああ」

心当たりが少しあるな。

「と言つても小学生等から賞金を巻き上げている事くらいだか。あいつら挑発するとすぐキレて挑んでくるんだ。」

「この前なんか冤罪ですもんね。他にも広人さんには色んな噂があるんですよ」

「どんなのあるんだ？」

「例えばマフィアと繋がっているって噂もありましたし、幼馴染を強姦して妊娠させたとか、自宅で何人も女を調教してるとか、一番酷いのは親に役立たずだから捨てられたって噂です。本当に迷わ……………え？」

ああ嫌だな、本当に嫌な事思い出しちゃった。

糞が、なんで俺が何故あんな目に合わなければならぬんだ。クソクソクソクソクソクソ

「ひ、広人さん、何か私変な事言いましたか？」

「え？」

「顔が怖かったもので……………」

「あっ」

しまった、反射的に。

「ゴメン、また嫌な事思い出しちゃってさ」

「この前も言いましたか困ったら相談してくださいね」

「……………ありがとう」

本当にいい娘だ。

「あ、もう着いたみたいですよ行きましょう」

□ □ □

「ここ砂丘だよな……………」

「ええ……………」

今見ている景色が問題だ。

一面砂嵐状態です。

「ゴーグルを着けよう」

「ええ」

砂漠だし地面タイプがいるだろう。それが今回の目的だ。

取り敢えずダウジングマシン使うか。使ってみると……………見つけた。掘ってみると、

とくせいカプセル

これって特性を入れ換える道具だっけ？

特殊な道具だよな。

「広人さん、あのポケモンですよね！」

「ん、ああそっだ」

やっと思つた。カバルドンだ。

特性すなおこしで起点として優秀なポケモンだ。

今回の目的の一つだ。

ステロが使えるしアリスのパーティーにピッタリだ。

「カバ！」

いきなり戦うみたいだ。好戦的だわ。

たしかカバって強いと言う話を聞く。

「手伝うか？」

「いえいえ平気デスヨ」

実力あるしな平気だろう。

「行け！ ワルビアル！」

「ビアツ！」

アリス三匹の中の1匹でメグロコの時に公園の砂場を巣にしていたらしく、ヨーギラスでしばいて仲間にしたそっだ。

ワルビアル Lv40

カバルドン Lv38

つい最近ワルビアルに進化した。

ワルビアルは目が良く、顎が発達しているので戦闘ではかなりの勝率があるとか。

「ワルビアル、かみくだく！」

「ビアツル」

先制攻撃をしたのはワルビアルだ。

……今砂のなかを泳いだぞ？

カバルドンのあくび

HPがギリギリ残った。

「アリス、眠らされるぞ！」

「一応カゴの実持ってます」

こいつも考えているようだ。

いつ何が起こつてもいいように道具を持っていた方がいい。

「いつけーモンスターボール！」

カバルドンに当たり、ボールが左右に揺れる。

さあ、どうだ。

カチッ

「やーりましたよ広人さん！ 褒めてくださいい！」

「よしよしよしよし」

何処かの殺人カビのスタンド使い程ではないが褒めよう。角砂糖あげたい。

さて目的は達成したしそろそろ帰るか。

「広人さんお腹空い……え？」

ずざざざざ

あれ？ 歩こうとすると進めない？

戻されている様な感覚だ。

「クラッ！」

「ナックラーか」

特性すなじごくのポケモンで敵を逃がさない。

アリジゴクがモデルだ。Lv20。

「アリス、やるか？」

「イグサクトリーですよ」

フライゴンとか実は好きなんだ。

「いつけえーモンスターボール!!」

あ、弱らせないんだ。

ゲームしている時に自分もめんどくさいからやった記憶がある。クイックボールと

か投げた。

ボールがナックラーに当たり、そのまま入る。

ボールが左右に数回揺れ、

カチツ

「イエーイゲツトー♪」

地面だからすなあらしの効果は受けられないいい選択だと思う。

「さてと腹減ったからそろそろそろ戻るか」

「どこか食べに行きましようよ」

「金あるし高いやつでもいいぞ」

「ネットですらべて見ましよう……ん？」

「どうかしたのか？」

「いえ、バッテリーの減りが速いなど」

機体が古いかそんな感じじゃないか？ もしくはアプリを多くとるとかさ。

「ここがいいでしょうか？ 高いですけど味は良いらしいですよ」

「行こう、腹減った」

アリスは腕を絡める。この前よりも強く抱きついてくる。本当にいい気分だ。

□ □ □

「ドウスルノ？　トラレチャウヨ」

「……まだ余裕」

「ダケドテキガオオイシ、ハヤクシタホウガイイヨ」

「……大丈夫策はある」

「コロシチャダメダヨ」

「……私をなんだと思っている」

「デ、ナニヲヤルノマスター？」

「……兄貴を差し向ける」

とあるトレーナーが水面下で企んでいた。

広人と会うのはそう遠くない未来だ。

襲撃

p r r r r r p r r r r r

あん誰だ？ こんな朝っぱらから電話が鳴った。

えーとアリスからか。

『広人さああん無事ですか!?!』

「何だ朝から大声出して」

『今応援に行きますので踏ん張ってください!!』

ガチャ

え、何の話？

応援って俺なんかやったっけ？

夜中アルセウスとゲームはやったから眠い。

また二度寝しようとしたその時、

p r r r r r p r r r r r

次は玉川か、朝から電話つてのもなんか嫌だ。

「玉川、なんかあったのか？」

『先輩！ 無事ですか!?』

「何が起こっているんだ？」

『お爺ちゃん連れてきますので持ちこたえてください!』

ガチャン

お爺ちゃん連れてきて何するんだ？

玉川の祖父って確か有名な外科医って聞いたけど…………。

「主!! 起きろ!!」

「どうした？ 今日には早起きじゃあないか」

「塀の向こう側に大勢人間がいるぞ!!」

「はあ？」

眠かったので集中し気配を探ると、多数の人間の気配を感じた。門の前に多く集まっている。

ピンポーン

あつチャイムが鳴った。

とりあえず準備をしておくか。

「待って!」

「唯？」

「多分私を取り戻す為に来たみたい」

「何でわかるんだ？」

「堀の向こうから顔を出していた人間がいて知っている顔だったから」

クソツ取り戻しに来たのか。

何故ここにいるのがわかったのだろうか。

「金持ち家族が搜索願出しているそうぞ」

「！ 知ってたの!？」

まあ互いに黙ってましたけどね。

「警察にも顔が利くし手段は選ばないと思うから気をつけて」

「わかった。一応家の中に隠れてて」

「了解」

「アルセウスついてやってくれ」

「わかったぞ」

さてと準備をして門を開けよう。

無理に入ってきたら奴らの餌食だ。

ピンポーン ピンポーン

うるせえな、出ますよ。

「はいどなた？」

「警察です。誘拐の疑いの通報があったので家宅捜索に来ました」

「誘拐？ 何の話ですか？」

「真田唯さんの事です。入りますのでそこを動かさないでください！」

「ストップ！ 入っちゃダメ!!」

「あつ抵抗したぞ！ 確保!!」

無理に入ろうとしたので止めた。

ここから先はキリングゾーンなのだ。

警察官が庭内に入っていく。

カアアアアア!!

唯のポケモンではないヤマカラスが鳴き声をあげる。

確か前アルセウスに翻訳させたら、

「今だ！ 撃てええ!!」

「え？」

警察官が拳銃を構えていた。

嘘でしょ?!

バアツン!

ギヤアアアアアアアアアアア痛ええええええええええ!! つてあれ? 頭に当たって死んでない? 硬質ゴム弾かよ。

なーんだ殺す気はないのか良かった。

そして俺は立ち上がる。

「うわああああ実弾受けて立ち上がったぞ?!」

「化物かコイツは!!」

実弾!? 俺の体はどうなってるの?

ブルマと始めてあつた悟空みたいだ。

「ガウツ」

「なっ銃が!」

おっと遅いぞグラエナ。

どろぼうの技をグラエナ等の配下に覚えさせたのだ。一瞬で拳銃を奪い取る。

「な、何だこいつは」

そうコイツらは保健所から引き取ってきたポチエナ共だ。今警備を任せている。

相当強くなっており、侵入者を撃退している。

「グラエナ、あくび」

「グワツ」

面倒だから眠らせよう。

そして警官共が夢の世界に旅立っていく。

さて庭の方はどうなっているかな。

「グラエナ、他の奴等にもあくびをよろしく」

「ガウ」

でだ、さっきのヤミカラスの鳴き声を翻訳すると
戦争だ、だそうだ。

□ □ □

「ギヤアアアアアアア!!」

「痛いよママアアア!!」

「止めでええええええ!!」

「うわああああ!!」

うわっ予想以上に地獄絵図だ……………。

全員武器を奪われた上に服まで奪われている。

そしてグラエナ達に嘔みつかれている。

まあ本気で嘔んでいないみたいだが血が出ているようだ。

だから俺は入るのを止めたんだよ。危ないし。

「ん、お前が影山広人か？」

「誰だお前ら？」

6人程おり、特殊部隊の様な格好している。

「私らは真田グループのトレーナー部隊だ。お嬢様は何処に居る？」

「知らないね」

「ふん、しらばっくれるか」

やっぱり企業でもポケモントレーナーは優遇するよな。便利そうだし。

「隊長、こいつ本当に強いんですか？」

「脆そうだけ」

「油断するなよお前ら」

「平気ですって、俺の実力わかるでしょう」

「僕だけでやろうか？」

「よしジャンケンだ」

「いや6人がかりで倒す。念の為だ」

「もー隊長つたら慎重」

「きやははは」

コイツら好き勝手に言ってるやがる。

格下扱いされるのは慣れてるけどさ。

「おい影山広人」

「何だ？」

「かなりの悪さをしてるそうだな」

リーダーらしき男が偉そうに話してくる。

ブチのめすぞお前。

「安心した。お前のようなクズは遠慮なく倒せる」

「……………」

「見せてやろう。本当のトレーナーの格と言うものを!!」

援軍

あ、いたいた見つけた。

唯が太ったおっさんと話している。

「唯、迎えに来たぞ！ さあ早く帰るぞ」

「嫌だ!! 帰れ!!」

「もういいだろう。拐った男はトレーナー部隊がギタギタにしているぞ。原型留めていないだろうな」

「後ろでピンピンしてるぞハゲ!!」

「は!?!」

唯ってこんなに口悪かったんだ。

まあこんくらいが可愛いんだよ。

「なっ、貴様どうやって……………」

「あいつらか？ 弱かったぞ」

5分くらいだろうか。

トレーナーの格とかよくわからなかった。

あいつらポケモンが全滅した後にダイレクトアタックしてきたから返り討ちにしてやったよ。悲しいねえ戦争って。

今は奴らはそこら辺でおねんねしてる。

「もつと強いヤツいないの？」

「ぐぬう……………」

「ぐぬうじゃなくてさ、土足で室内入るの止めてくれる？」

「貴様あ……………」

うーんどうしよう。話聞いてくれるのかな？

「唯何か言っただれ」

「私は帰らない!!」

「いいのか唯!？」

まあ自分で決めたことだし尊重してほしい。

「だが約束がある……………戻ってもらおう」

約束？

「ポケモンバトルだ」

「は?」

いきなり? もうみんなデュエル脳みたいだ。

神様の仕業だろうか。何なんだろうこの世界。

(何言ってるんだよお前の父親)

(こっちが聞きたいわよ)

唯の頭はデュエル脳になってないらしい。

玉川とアリスはもう頭を侵食されている。

「略取・誘拐罪だ。私は警察にも顔が利く。受けてもらうぞ」

「唯は勝手に着いてきたんだが」

「未成年者を保護者の許可無しで連れてきた時点でアウトだ」

やばい正論じゃねえか。

確かにこっちに非があるな。

「わかった、ただし勝ったら帰れよ」

負ける想像がつかない。

アルセウスを出せば勝ったも同然だ。

……あれ？ アルセウスは何処に居るんだ？

「さあ唯、勝負だ」

「はい？」

「何を呆けてるんだ？ 親子の問題だぞ、当たり前だ」

「どうするっ？」

そう来るか。俺とやっても勝ち目はないと悟ったのだろうか。

唯のポケモンは全部で2匹。

とあるメガストーンと道具を与えている。

このハゲには敗北の星しか無いな。

「やるに決まってんじゃん！」

「行くぞ唯!!」

「外でやれよお前ら」

□ □ □

「行け、ドータクン！」

「行け！ アブソル！」

はい始まりましたポケモンバトル。

唯、パパは3匹、ドータクンLv45か。ジャイロボールには気を付けた方がいいな。

「だいはくはつを使う可能性もある。

対して唯はアブソルだ。

森にいたのでスカウトした。Lvは42。

「ドータクン！ ジャイロボール!!」

「つじぎりー！」

残念ながらアブソルの方が早い。

ドータクンの回転し始めた時を狙いつじぎりが決まる。

そしてドータクンの回転が失速する。

きゆうしよにあたった。

「ドオ?!」

「何だと!？」

そう特性はきょううんである。

簡単に言えば急所に当たりやすいのだ。つじぎりで攻撃したから更に当たりやすい。

「クソ、戻れ。行け！ ムーランド！」

懐かしい。なみのり覚えるんだよなこの犬。

「かたきうちだ！」

「つじぎり」

技を出す前に倒すのが正論だろう。

一閃そしてムーランドは倒れる。

「またか、戻れ!?! いけ! エンニュート!!」

最後のポケモンはエンニュートか。

こいつの毒ガスって薄めれば香水が出来るんだって。不思議だねポケモンって。

ん? 唯はキーストーン使うみたいだな。

決める気か。

「アブソル、メガシンカ!」

「!?!」

アブソルが光の玉にに包まれる。

徐々に光が消えていき、出てきてメガアブソルの登場だ。

「見せかけだ! いばる!」

あーコイツ知らないな。

こいつの特性は、

「な、どうしたエンニュート!?!」

「ギア!?!」

そうマジックミラーだ。

変化技を跳ね返す恐ろしい特性だ。

どくどくを出されたら意味は無かったが。

「サイコカッター!」

「ギィア!」

「エンニユート!?!」

サイコカッターも急所に当たりやすい技の一つだ。

そうして急所に当たりエンニユートのHPがゼロになる。

「これで私の勝ちよ……文句は無いわね」

「くっ」

約束だ帰ってもらおう。

守ってくれるよな?

「駄目だ」

「は?」

「約束は守れない」

えーこの人面倒くさい。

唯も口が悪くなるのもわかるような気がする。

「私は唯を守らなければならない」

昔に何かあつたようだが唯には迷惑だ。

家に帰るのが嫌だから土下座したんだぞ。

「全権力を使つて貴様を破滅に」

「もういいんじゃないのかね真田劍兵君？」

「? 誰だ、は!？」

あれ、この声聞いたことが。

後ろを見てみると、

「いやー間に合いましたよ」

「久しぶりだな影山広人君」

アリスと黒田組の組長!?

何故ここに居る。

「な、何故“赤刀”の黒田がここに!」

「ん? 孫に呼ばれたからさ」

この組長はそんな二つ名で呼ばれているのか。

でも有名なのかこの組長?

「くつ、だが貴様が居ても少し被害が出るだけで変わらん!」

「じゃあワシがいたらどうかの?」

え？ この声は爺ちゃん!?

なんでいるの？

「なっ」不動産の皇帝”が何故ここに居る!? くだばってなかったのか!」

「失礼な。黒田の奴に呼ばれただけじゃい」

「くっ!」

爺ちゃんにもそんな二つ名が…………。

そういえば昔に相当有名だったと聞いたことがある。

唯、パパの顔が険しくなる。

だが気合いで耐えている様な感じだ。

…………何があつたのだろうか。

「間に合いましたよ先輩」

「久しぶりだね真田さん」

「な、玉川先生!」

「腎臓の調子はどうかね? おかしな所は無いかい?」

「何で”慈悲の右腕”の先生がここに…………」

「孫に頼まれてね」

玉川と壮年の男性が現れた。

少し話がわからなくなってきた。

「よお廉三久しぶりだな」

「お前も苦労しているな、何回も斬りあつたと聞いたぞ」

「お前もあの土地を買つたそうだな。ビックリしたぞ」

「二人とも元気そうで何よりかね」

三人共に知り合いなのか。

なんだろうかこの偶然は。

「嘘だろ……………この3人が居るなんて……………」

相当有名なんだねこの爺共は。

なんかカリスマ性ありそうなんだけど。

まあそれは置いといて、

「唯、父親に言つてやるんだ。自分が何をしたいかを」

「私は……………」

唯が言わないと意味無いしき。

「私は色んな場所に遊びに行きたい！ 男の子とデートしてみたい！ 化粧もしてみたい！ 友達を作りたい！ 昼まで寝ていたい！ 私だって女の子だし青春を楽しみたい！！籠の鳥は嫌だ！！」

「唯、だけど社会は危険が沢山あるんだ」

「籠の鳥の方がストレス溜まるわ！」

唯が涙目になっている。

これが本音だ。

「そのやりたい事を全部この人が満たしてくれた。もう前のような生活は嫌よ！」

「唯……………」

「昨日だって夜通し一緒に楽しんだんだから！ 凄かったわよテクニクが！」

「「え？」」

俺、玉川、アリスが絶句した。

ゲームの事だよ。真に受けないでね。

もう唯のパパは諦めている顔だ。

「だからもう大丈夫！ 私は平気だから。もしだめでもこの人が守ってくれる」

「いいのか……………」

「うん、死んだママは許してくれると思う」

「うっ……………」

唯。パパの目に涙が出る。

親にしかわからないことだし俺には理解できない。

だけど唯の事を大事に思っていることは確かだ。

でも守る＝束縛って訳じゃないし自由を奪って言いって事じゃない。多分この人は不器用な人間だと思う。

「おい……小僧」

「何でしよう」

「唯を一時任せる。後疎かにしたら全権力で貴様を叩く」

「その前に愛人関係を何とかしろよ。結構いるだろうが」

「唯!? 何故知ってる!」

「この人も女関係多いんだな。」

「ともかく唯を不幸にしたら許さんぞ。わかったな」

「努力する」

「このおっさんの愛情は確かなようだ。」

「こうして唯のパパは帰っていった。」

□ □ □

「先輩、大丈夫でした？」

「平気、額に実弾喰らったけど」

「「は？」」

やっぱり驚くよな。

この加護凄いやな。もう超人だ。

「ねえ」

「何だ唯？」

「あの時何で私を拾ってくれたの？」

何ってお前。

「助けて欲しい様な顔してたし」

「そ、そう」

捨てられている犬や猫と同じ表情だった。

放置していたら可哀想だし。

第一可愛い美少女を放っておけない。

「ねえヒロ」

何だ気軽に呼んで？

「ありがとう」

なんだろうか女子に笑顔でお礼言われるのってってスゴい嬉しい。
俺はハズくて目を反らすのだった

ちなみにアルセウスは森の方からの侵入者を撃退していたらしい。

ぼうそうぞく 前編

「いやあ、昨日は大変でしたね先輩」

「また唯パパが遊びに来るってさ」

「ははは……」

唯パパの襲撃の翌日、玉川と帰り道歩いていた。

かなり暴れたので襲撃者側に直してもらった。壊れたものとかは後日直しくるとか。

トレーナー部隊の奴らはボコボコにしたのでしばらく再起不能だそうだ。

「まったく家の中に多人数入られるとはびっくりしたぜ」

「ガサ入れみたいですな」

「まったくだ」

俺が誘拐したようなものだからな。

まさか見つかるとはな。

だが情報源は何処からだ？

「そういえば先輩の上の先輩に仲が良いって人がいるって聞いたんですけど、居るんで

すか？」

「懐かしいなクズゴミカストリオカ」

「え？ 何ですその悪意混じった呼び方は？」

それを言ったら爆笑だったなああの先輩達は。

とりあえず玉川に説明して置こう。

まず一人目にクズこと九頭竜大輔先輩だ。

二つ上の先輩でありかなり頭の悪い。しかしケンカは強く暴行事件が多く恐れられており、俺を助けるために流血事件とかよく起こしていた。

卒業後は自転車で日本一周するとか言つて旅に出た。数ヶ月前北海道から絵葉書が来て以来消息不明だ。

今何処にいるのだろうか？

それで二人目はゴミこと六堂寺和水《なごみ》先輩。

一つ上の先輩であり、体が弱くよく休んでおり中々学校に姿を見せない。しかし実家が剣術道場で幼い頃から剣を握っており、剣の神童とも言われる程の才能がある。よく木の棒で不良をボコボコにしていた。

今は休学中で体を休めている。

「とまあこんなところかな」

「変わった先輩何ですな……」

俺も思う。九頭竜先輩は頭は悪いけどいい人だし、なごみん先輩は病弱で血とか吐くし。二人とも攻撃力がかなり高かった。

「聞いてましたけどいい人ですな」

「スゴい世話になった」

退学してないのはこの人達のお陰だ。

□ □ □

さて家に帰って来ましたがポストに変な封筒が入っているな。取り出してみると、
『挑戦状』

………ん？ 何だこれ？ 開けてみよう。

ええつとナニナニ、

『ポケモンを使い調子に乗っているためポケモンバトルを申し込む。今日20時に迎えるを寄越す』

うん、これこの前アリスが言っていたトレーナー狩りじゃないか。今日疲れたから早く寝たいんだけど。

それでアリスから聞いた事だがこれに無視すれば直接乗り込んでくるらしい。そして問答無用でボンタン狩りをしてくるってさ。

メンドクサイな本当に。

「主よ飯」

「お腹すいたー」

「待ってる今日は秋刀魚の炊き込みご飯だからな」

「イヤツホウー」

さ、ご飯を作ろう。

□ □ □

20時

ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピン

ポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン

うるせえなオイ！ ガキかよ。

ハイハイ出ますよクソツタレ。

戸を開けると不良みたいな奴等が数人。

「影山広人だな？ 連行する。鬼島さんがお呼びだ」

挑戦状を送ったのはソイツか。

送ってもらおうのでハイエースも用意されている。

「……あつ待っててくれ準備とガス消してなかった」

「わかった早くしろよ」

戸を閉め、俺は部屋に入り布団をかぶりタイマーを1時間でセットする。

俺は仮眠をとることにした。

□ □ □

「着いたぞ」

声がなんかキレてる。まあ一時間も待たしたんだし文句は言いたいだろう。それで何時間か車に揺れたけどどこだろうか？

周りは沢山人がいる。

「こつちだ来い」

着いていくと直径20mの穴みたいなバトルフィールドが用意されている。

そしてリーゼントの大柄な男が腕を組んで待ち構えていた。

「よお待ちくたびれたぜ」

「挑戦状とか粹な真似するじゃないか」

古風だけど嫌いではない。

「さあ始めようぜぶっ潰してやる」

「待て、俺が何をしたんだ？」

「そりや色々だ。そつちも聞いているだろ」

「ほお……」

「女に乱暴したとかよく聞くなあ」

コノヤロウ……また冤罪が広がってやがる。

心の底から本当に不愉快だ。

「おおっ殺る気あるじゃねえか」

「……………」

腹立ってきたな。

もう言い返して良いよね。

「あのさーお前の髪型自分でかつこいいと思ってるのか？」

「……………あ？」

「本当と事言うけどさ……………ダサイ!!」

観客のヤンキー達がワンピースのギャラリィみたいに驚いている。やっぱ貶されると怒るのかな？

「なん……だと」

「その頭、野鳥になら巢として使ってもらえるんじゃないかい？」

「てめえ……………」

「このリーゼント豚野郎が！ そのアトムみたいな頭を刈り上げっぞー！」
「言いやがったなあああああ!!」

あつポケモンバトルの音楽が鳴り始めた。

「行け！ ゲッコウガ！」

「ガオツ」

「潰せ！ チルタリス！」

「クア」

さて返り討ちだ。Lv50だ。

「チルタリス！ ムーンフォース！」

「チル！」

はっ、その程度で俺のゲッコウガを倒せると思ってんのかこのアトムヘアーは。

ドドドドド

ムーンフォースが降り注ぐ。

「クガッ!？」

ボタン

ゲッコウガのHPがゼロになる。

……………え？

ぼうそうぞく 後編

「すげえや鬼島さん！」

「ああいつも通り一撃で決めやがった」

「鬼島さんがんばれー！」

マジかよ……ゲツコウガが一撃でやられただど!?

「おいどうした？ 次は何だ？」

「……………」

もしかしてこいつは飛行タイプの加護持つてるんじゃないか？ それならゲツコウ

ガがやられた理由がわかる。

クソ、れいとうビームが使えない。

「行け！ ベトベトン！」

こいつに賭ける。

「ベトベトン！ いわなだれ!!」

「ベトツ!!」

「ナニイ!？」

「チル!？」

いわなだれは効果抜群だ。

一撃で地面にひれ伏させる。

「次はお前だメガヤンマ!!」

「キシャアアアア」

でっかいトンボが現れた。Lv48。

昔のトンボもこんなだったのだろうか。

「かげぶんしん!」

うっ、増えやがった!

校庭でトンボが大量発生していた思い出が出てくる。

「そしてきりさくだ!」

沢山のメガヤンマがベトベトンをきりさく。

あ! 急所に当たりやがった!

「ベト」

「ん?」

アイコンタクトか? 任してくれって事?

「ベート」

ベトベトンがどくしゆを使い、

トンボを攻撃し当たった。

え、よく当てられたな。

メガヤンマへの攻撃は急所に当たったらしく、どく状態になっているみたいだ。

「クソツ戻れ」

そのまま戦つても勝ち目無いし戻した方がいい。

さあ次は何が来る？

「行け！ トゲチツク！」

「チエツキツ！」

トゲチツクか………特性はなんだか気になるところだ。ちなみにLv45。

しかし、

「ベトベトン、どくづき」

「ベト」

「トゲチツク!!」

効果抜群だ。

カモなのだ。早めに退場してもらおう。

……トゲキツスに進化してないって事はひかりのいしを見つけてないって事だろう

か。

それともゲームを知らないとかそんなもんか？

あり得るな。たまに通信交換で進化するポケモンが進化していない時もよく見れる。

選ばれたトレーナーがゲームを知ってて教えないか知らないから教えられないと言
うことも有るかもしれない。

まあ後で聞か。

後4体。内1匹は毒状態になっている。

「行け！ エアームド！」

「クオウ！」

毒が聞かないやつが来やがった。Lv52。

「エアームド！ つばめがえし！」

「ドオ！」

「ベト!?!」

「しまった！ベトベトン！」

メガヤンマの攻撃で体力を減らされていたのでHPがゼロになってしまった。やつ
ば飛行タイプの加護を持っているようだ。

俺は後4体。

「戻れベトベトン。行け！ サザンドラ！」

「ラアアアア！」

この前だがジヘットから進化した。

とある道具を持たせて戦わせる。

「サザンドラ！ かえんほうしゃ！」

「ラアアア！」

良かったー覚えさせておいて。

とくこうは強いんだよなサザンドラは。

「エアームド！」

後は3体いる。メガヤンマは出さないだろう。

「ピジョット、行けッ！」

「ピジョー！」

「サザンドラ、もう一回かえんほうしゃ」

「ラアアアア！」

今持たせているのはこだわり眼鏡だ。

同じ技しか出せないが特攻の威力は上がると言う道具。戻すタイミングが重要だな。

「く、暴風だ！」

まだHPが残っていたようだ。

サザンドラに当たり、多目にダメージを受ける。

やばいそろそろHPが危ない。

「かえんほうしやだ！」

「ラアアアア！」

「ピジヨ!!」

「ピジヨット!?!」

かえんほうしやが当たり瀕死の状態になる。

結構強いなこのリーゼント。しかしアリスの話によるとこいつに勝った奴もいるらしい。まだこの日本には強いトレーナーがいるってことか？

「ふう、ここまでやるとはやるなお前」

「そっくりそのまま返すぞ」

ボンタン狩りはされたくないんでな。

「さ、このポケモンで戦うトレーナーはお前で4人目だ」

リーゼントがしみじみとボールを見て持っている。

「コイツは九州に行った遠征時に戦って捕まえたポケモンだ」

ずいぶんと遠くまで行ったな。

「刮目しろ！ 出てこい！」

ボールを上投げる。

そうして出てきたのは、

「キシヤアアアア！」

ゲームでこのポケモンを初めて会ったのはチャンピオンロードだ。次にともしびやま、シロガネ山。火山に住むと言われている鳥ポケモン。

かえんポケモン、ファイヤー。

……えつマジかよ！ 準伝説のポケモンがいんのかよ！

アルセウスがいるんだからゲットされていてもおかしくない。なおLvは60。

「戻れ、サザンドラ！」

もう戻す潮時だろう。

「行け！ ヤミラミ！」

「ヤミ！」

頑張ってくれヤミラミ。

「ファイヤー！ かえんほうしゃ！」

「ヤミラミ、いばる！」

ヤミラミの特性いたざらごころ。変化技を先に出す特性だ。つまり先制するって事

だ。

「キシヤアア!?!」

「ファイヤー! かえんほうしゃ!」

さて一か八かだ。こんらんのダメージで自分を攻撃するか、攻撃されるかだ。

「キシヤアア!」

あつかえんほうしゃを吐いてきた。八の方が。

うおっ結構ダメージ喰らった。

「ヤミラミ、じこさいせい」

「ヤミ」

残念ながらヤミラミにはこれがある。

持久戦と行こうか。

「ファイヤー! エアスラッシュユ!」

「キシヤア!?!」

あ、自分を攻撃した。

「ヤミラミ、どくどく」

「ヤミー」

念のために後続のポケモンが有利になると思うのでやっておく。いばるとどくどく

を喰らうとどんなポケモンでも倒れる。

「ファイヤー！ エアスラッシュだ！」

「シヤアアアア！」

おつとヤミラミに当たっちまった。

半分以上持つてかれたみたいだ。

「ヤミラミ、じこさいせい！」

「ヤミミ」

またじこさいせいを実施する。

イラつくだろうな。ダメージ与えたと思っただら回復するんだし。

「ファイヤー、かえんほうしゃ！」

「ヤミラミ、ふいうち」

「ヤミミ！」

少しながらだがダメージを与えていく。次出てくるガオガエンはかみなりパンチを覚えているため有利に働く。

「ヤミミ!?!」

おつとかえんほうしゃが当たったみたいだ。

「よし、こんらんが直った！」

「キシヤアアアアア！」

もう直りやがったか。

「ヤミラミ、もう一度いばるだ」

「ヤミミ」

「畜生っ！」

ここのゆうポケモンだからしょうがない。

搦め手を使うポケモンって怖いね。

「キシヤアア!？」

また混乱によるダメージを受けた。

重ねて攻撃力を上げた上にどくどくのダメージあるので苦しいだろう。

「ファイヤー！ エアスラッシュ！」

「ヤミラミ、ふいうちだ」

そうしてヤミラミのふいうちが決まる。

だが、

「ヤミ!？」

うわっ、エアスラッシュが急所に当たってしまった。

ヤミラミが瀕死になった。

しかし仕事はしてくれた。ファイヤーはもうHPが少ない。よくやったヤミラミ。

「行け！ガオガエン！」

「ガオ」

さあ頼むぜ。

「ファイヤー、げんしのちから！」

「ガオガエン！ かみなりパンチ！」

「キシャアアアア！」

「ガオオオオオオ！」

両者が一閃する。

それで立っていたのは……。

「ガオ」

「ファイヤー!!」

ガオガエンの勝利だ。

「さーて残りのメガヤンマは毒状態で俺はあと3匹。どうする？ まだやるか？」

「……………いや降参だ」

こうして俺は勝利したのだった。

□ □ □

「ほら着いたぞ」

決闘が終わり家に戻ってきた。

色々な事を教えたり、ひかりの石を渡したりしたら連絡先を交換する事になった。

「あっおかえりヒロ」

「まだ起きてたのか」

「うん心配だから待ってた」

「いい子だなー」

「ミルクティー淹れてやるよ」

「わーい」

「ご褒美に淹れてやるか。」

「こーして夜が更けていくのだった。」

た。近いうちにリーゼントとまた会い、その時に一悶着あるのだが俺はまだ知らなかった。

遊園地

「わーい」

「イヤッハー」

「ああやつと来れた」

待ちに待ったみんなで遊園地である。

前は色々用事があつたので来たくとも来れなかつたのである。ようやく来れたぜ。

「よしあれ乗ろうよ」

「主あれ乗りたい」

「わかつたジャンケンで決めな」

今日は一日中付き合つてやろう。待たせてしまったからな。

「よーし私だ」

唯からか。行こう。

さーて今日は楽しむぞ。

□
□
□

初っぱなからジェットコースターか唯。

「うん、一回乗ってみたかったんだ」

ジェットコースターの方を見ると結構並んでいるな。

見てみると一時間くらい待つそうだ。

「主、僕は座っている」

「ああ、これジュース代な」

暇だろうしジュースくらいは飲ませてやろう。

「さあ並ぶか」

「うん」

おつきたきた。後ろの座席か。

ジェットコースターで後ろの座席は怖いらしい。

車両が急降下を始める際、前方の車両が先に下り始めると、後方の車両はそれに引つ張られるように加速しながら下る。

その際にゼロGやマイナスGが発生するため、乗客は強烈に引き込まれたり、上方向に飛び出されるような感覚となるので、一般的に後方の座席の方が怖いとされる。

なお、車両の連結が長ければ長いほど怖さも増す。スリルを求めるマニアの間では、後方の座席を好む人が多いとか。

遊園地に行くのでジェットコースターの雑学を調べてみた。

「私乗ったこと無いんだ……」

「俺もあんまり乗らないな」

カタカタ

そろそろコースターが上に着きそうだ。

そして、

「きゃあああああ」

凄いGだな。

□
□
□

「ん、終わったか」

「す、凄かった」

「次は儂だな、あれ行きたい」

お前あれお化け屋敷じゃないか。

まあ付き合おう。唯はその辺で休むみたいだ。

そういえばアルセウスって何が怖いのだろうか？

メチャクチャ強いし苦手な物ってあるのか。

ちなみに食べ物の好き嫌いはない。

「おお儂らの番じゃ」

このお化け屋敷は病院をモチーフにしたやつだ。元々はホテルだったらしい。

それでキャストも白衣だ。

確か何かの記録でギネスブックにのったんじゃないかな。このお化け屋敷？

「ん、御守り売ってるぞ」

「別にいいや」

どうせ脅かし方が弱くなるとかそんな感じだろう。

とまあ俺達は入口に入った。

「いやーキャストが凝っていたな」

「ああ少し不気味だったの」

俺達はリタイアせずに完走した。

長かったな……。途中にリタイア用のドアを数個見つけた。

「それにしても螺旋階段の所にいた女ってなんだったんだ？ キャストとしては個性無いような気がするけど」

「……………女なんて居なかったぞ？」

え？

□ □ □

「おー凄いぞこれ」

お次はゴーカートだ。

アルセウスが調子に乗って走り回している。

俺と唯は2人乗りの奴に乗る。

「マリオカートやってみたいだ」

「ねえレースしようよ」

公道をよく走っているのをテレビとかで見ると、あれは普通自動車の分類に入るらしく免許が必要らしい。

外国人に人気だそうだ。

「じゃあいくぞ」

「3. 2. 1スタート!」

よく考えれば俺ら2人乗りだから不利じゃん。

ってことでアルセウスが有利で最後の一直線だ。

「よし勝……り?」

うわぁ時間切れでゴーカートが動かなくなつた。

そして俺達がゴールした。



「んじや最後は3人で観覧車乗ろうか」

「もう夜になりそうだから夜景みたいな」

最後は観覧車で締めだ。

あと一時間で閉園だからガラガラだ。

すぐに俺達の番がきた。

「で？ 隣に来るんだ2人共」

二人とも俺の隣に座る。

「いいじゃん美少女二人に挟まれてさ」

「少しは甘えていいじゃろう」

取り敢えずこのままでいいか。

この観覧車の全長は高い方で夜景の絶景スポットだ。

アルセウスで見た方が早いと思うが雰囲気というやつだ。

それであつという間に一番上に着いた。

「わあ綺麗」

「ここら辺は人が多く住んでいるので街灯が多い。

「あ、前のカップル……」

「前？ あ」

前を見るとアベックがキスしている。

クソツリア充め。

「どうする、キスする？」

「……………」

上目遣いで見つめられる。

いやいやそんなこと言われたら困惑するよ。

正直したいけどさ。

「つーか儂が居ないところでやったらどうだ」

□ □ □

「今日はどうだった？」

「最高！」

「また行きたい！」

そうかよかった。連れてきたかいがあった。

「さ、帰るか。その前に夕食食べてくか」

「えー」

「だって食材買ってないし疲れたもん」

こうして今晚のご飯はマックだった。

ナイトメア

「ん？ 誰か来ているのか」

見慣れない靴がある。誰だろう。

「来たか小僧」

「あれ？ 何かご用件でも？」

唯。パパじゃないですか。

来るなら言ってくれ。

「ああ少し頼みたい事があつてな」

「何か飲みます？」

「ふん、いらん」

「私抹茶ミルク」

「ミルクティー」

「ハイハイ」

□
□
□

「んで、頼みたい事って」

「実はな……」

唯。パパの話はこうだ。

知り合いの娘がとあるポケモンを助けたらしい。それで着いてきてしまい、いつも寝ている時に枕の近くに立っているそう。しかしそのポケモンが近くに立っている時に悪夢が起き、よく寝れないそう。

迷惑なのでなんとかして欲しいらしい。

「それでこのようなポケモンだそう」

唯。パパが絵を見せると、

「こいつゴーストタイプ？」

「いや……」

確かにゴーストタイプに見えるんだけど悪タイプなんだよ。

やつと会えたわ。ダークライ。

「だけど何かおかしくないか？」

「どうして？」

「色々ポケモンを見てきたけど殆どが義理堅いんだ。助けられたのに悪夢なんて見せる

のか？」

ポケモンバトルしてるけどトレーナーに忠誠心があるポケモンが多い。苦しめるよ
うな真似はしれないと思うんだよな。

「つて事は別の理由で近くにいるつて事？」

「あり得るな」

「取り敢えず行ってみるか」

つて事で現地に行くことになった。

□ □ □

「うっわーデカイ家」

アリスの家よりでかくないか。

なんつていうか黒服の人間が沢山いるんだけど。黒田組とは格が違うような気がす
る場所だな（こ）。

「それでこの家の主人の職業つて何？」

「……知らない方がいい」

扉を開けると豪華な庭園が目に入った。京都とかでこんな庭園を見たことがある。芸術的だ。

そして家に入ると絵とか飾られており、高そうなツボとか所々にあり、入ってきた俺らを圧倒する。

この家の主人は大金持ちみたいだ。

「おお来てくれたか」

「ええ助っ人を連れてきました」

「どーも」

恰幅のいい初老の男性だ。

隣に小学生位の女の子がいる。

「それでダーククライの事を聞きたいんだけど」

□
□
□

そして夜になった。

「そろそろ現れるみたいだな」

「うまいなこのあんパン」

「山崎みたいになるなよ」

「山崎？」

わからないならいい。

今回はアルセウスを連れてきており、通訳を頼む事にした。どうしても気になることがあるんだ。

「ん？ 出てきてるみたいじゃ」

「よし行こう」

アルセウスが感知したようだ。乗り込んで話を聞こうと思う。就寝中のため静かに扉を開ける。

「……」

そこには黒い体に白い頭。首回りが赤いポケモンが佇んでいた。見たからには悪そうだが実は危害は加えない孤高のポケモン。

あんこくポケモン、ダークライ。

「……」

喋らないなコイツ、睡眠中だし気を使っているのだろうか。

「……」グイ

手で外を指しているようだし、寝ているときに迷惑だしな。外行こうか。
扉を開け、外に出て縁側に座る。

ジュースとか持ってくれば良かった。

「つて事で何であの娘に憑いてるか教えてもらおうか」

「……クラ」

「何て言ってる？」

「面倒くさい事になっているらしいな」

「ダークラツクラ」

「は？」

「ダークラツ」

「なんじゃと？」

「ダークラツイ」

「いやいや貴様は悪くない。当然の行いをしてるぞ！」

「ダークラツクライ！」

「成る程な」

全然何言ってるのかわからん。

「取り敢えず不味いことになっている」

「？」

「説明をしておこうか」

□ □ □

「おおつ皆の者、私の娘に憑いていたポケモンは消えた！ もう心配することはない」

この家の当主が全員に話す。

取り敢えず罨を張ることに決めた。ダークライの無実を証明するために人芝居打つて貰うことになった。

炙り出すために。

「娘は静かな場所で寝たいと言うから寝室の周りには近づかないように頼むぞ」

今のうちにカメラ設置しよう。

□ □ □

「さてどうまくいくかな？」

俺は今真田家の特別な車にいた。一見トラックなのだが中にはカメラの映像を送っているモニターが沢山見られ、家の周りや寝室周りの映像が映っている。

「だけど動くかな？」

「慎重だったら今日はしないだろう」

センサーとかもあるから寝てしまっても平気だろう。

とまあ数時間が経った。

「おい引つ掛かったぞ！」

「マジか」

マジで来るとは思ってた。なかった。

さて片付けに行きますか。

俺はボールを用意した。

□
□
□

さあ今回ダーククライがやった事を説明しておこう。

ダーククライは女の子に助けられ、それで義理堅い性格なのでその子に着いてきた。

しかしダーククライは見てしまった。その子を殺そうとするポケモンを。ゴーストタイプを使った暗殺らしい。

ダーククライは見捨てられないので夜だけでも近くににいるようにし守ることにした。

捕まえた暗殺者兼トレーナーから聞いたのだが、その子を殺すと喜ぶ人間がいるとか。遺産関係らしく、親戚が依頼主だそうだ。

ダーククライも自身の特性を知っていたのだが、頼れる奴は居なかつた。

犯人を捕まえたため依頼主を芋づる式に引っこ抜いた。近いうち処罰されるそうだから。こうしてこの事件は終わった。



「ダークライ、俺と一緒に来ないか？」

「……」フルフル

だよ。寝返るわけないか。

アホな事聞いたな。

「ダークラツ」

「何て言ってる?」

「私は裏切れない。しかし恩義がある。仲間のダークライに声をかけておく、だって」

仲間いるんだ。

そりゃ楽しみですよ。

「じゃあなダークライ楽しみにしてるぞ」

「……」フリフリ

ダークライとまた会う約束をして、この屋敷を後にした。

水族館

「せーんぱい、お早うございます」

「おはよう」

今日の玉川の服装は白いワンピースに灰色のカーデイガンで決めている。相当気合が入ってますな。

「よく似合ってるぞ」

「えー！ いやー嬉しいです！」

「髪も整えているし綺麗だ」

「ど、どうも。先輩何分前から居たんですか？」

「今さっき来たところ」

嘘である。本当は一時間ほど待った。

暇だから朝食を軽く摂った。

「それにしても唯さんとアルセウスさんで遊園地とかいいですよー」

そうアルセウスの口が滑ったのである。

そしたら玉川と一緒に行ききたいと言ってきた。

置いてけぼりは嫌だそうだ。

「さ、今日は水族館ですね、ポケモンの説明をお願いしますね」

「善処はしてやる」

今日は水族館にデートに行くことになった。

□ □ □

「わあ凄い水槽！」

「確かにデカイな」

うわー色んな水タイプのポケモンいるな。

ホエルコ、タツツー、テッポウオ、マンタイン、ホエルオー、ヨワシ、ラブカス、ママンボウ、うわっプロトローガまでもいる。

確か水タイプって全タイプの中で一番多く、全てのタイプの複合があるとか。

水タイプの加護を持つトレーナーはどんな奴だろうか。

「先輩、あれ何ですか？」

「どれだ？」

「あれですよ、あれ。あ、居なくなっちゃった」

逃げ足が早いポケモンなのだろうか。

「どんな奴だった？」

「えっと水色でクリオネみたいなのポケモンでした。あと二つ触角がありました」

「……………」

あれ、もしかしてマナフィ？

確か珍しいよね。俺も見なかった。

□ □ □

「見てください、ヒトデですよ」

「ヒトデマンか」

ふれあいコーナーにヒトデマンがいた。

ヒトデマンは面白いポケモンで赤いコアを壊されない限り再生する。そのためネオ

ラントに囓られても全然気にしないそうだ。

赤い点滅をするのは夜空の星と交信する為だとか言われているんだって。

「へー無機質なポケモンですね」パキ

「あ」

玉川がヒトデマンを触ったら少し欠けた。

「シュワッ」

俺の顔に軽くみずてっぼうがかかった。

何故俺に？

□ □ □

「あれってトドですよね」

「実はセイウチ」

寒い動物がいる場所に俺達は来ていた。

玉川がアシカ見たいってさ。

それで今見ているのはトドゼルガだ。

トドが付くが、長いキバが生えるのはセイウチであり、トドとは別種である。（トドはアシカ科、セイウチはセイウチ科）

トドゼルガはその牙で10トンの氷塊を砕くらしい。

「先輩？ アザラシが転がって来ましたよ」

タマザラシだな。

泳ぐよりも転がった方が早いと言われている。

その転がってきたタマザラシをトドゼルガが上手くいなしへディングの様にして、数回上下したら尾の方に持っていき尾で投げてタマザラシを水の中へ入れる。

直後水槽のトドゼルガ達はこつちを見て様子を伺っている。

……リアクション待ち？

「……………」パチパチパチ

うん、凄いや。



さてお次は深海コーナーだ。

深海を模しているのか暗めの照明になっており、薄暗い感じがある。

俺もルビサファやってたけどダイビングとかできそうだな。海の中にも道具とか落ちてそう。

「へー深海にはこんなのがいるんですね」

パールル、サクラビス、ハンテール、チョンチー、ランターンが見られた。海底に居そうだよな。

また予習をしてきたのだが地球の海の平均水深は 3,729 m であり、深海は海面面積の約80% を占める。

21世紀の現在でも大水深に阻まれて深海探査は容易でなく、大深度潜水が可能な人や無人の潜水艇や探査船を保有する国は数少ないなどから、深海のほとんどは未踏の領域であるそうだ。

そこにカイオーガがいる可能性が高い。

「先輩、あれ見てください」

「ん、おっ！」

ミロカロスじゃあないか。リュウグウノツカイがモデルのポケモンであり、美しいポ

ケモンと言われ、争いを鎮めるとか。

「綺麗ですね〜」

「ああ」

リュウグウノツカイって食えるって話を聞いたことがあるが本当なのだろうか？
旨いらしい。

□ □ □

次はショーをやるらしく、座っている。

なんのポケモンが出てくるのだろうか。

「あれってクジラっぽくありません？」

「クジラだな」

ホエルコである。

ミナモシテイで調教されている場面を思い出す。

何か鈍そうなイメージがあるが大丈夫なのか？

そして音楽が鳴り始めた。楽しい感じのやつだ。
サバン

え、陸の方に上がった！

ブシャー

潮吹いたな。クジラだし。

おっと次は水中に入ったぞ？

何するんだ？

バシヤアアアアン

水の中から垂直跳び!?

その上にはボールがあつて体に当てる。結構な高さを跳んだな……。

次はなんだ？ トレーナーが水中に潜ったぞ。

暫く潜ったままだ。

ザバン

うおっ！ 泳いでいるホエルコの上にトレーナーが乗って立っている。もしかして

なみのり使えんの？

とまあ予想外に色んな事をやっていた。

□ □ □

「凄かったですよね。普通の動物からポケモンに変わったんで面白味があったという
か」

「他にもそんな施設あるかもな」

色々な発見をして楽しかったな。

面白そうな施設とかまだありそうだし機会があつたら行ってみよう。

「さて、締めにあそこに行きますか」

「え、まさか……」

「ああ、あのレストランだ。ハンバーガーが美味しいってさ」

玉川が一時硬直した。

変な事は言っていないぞ？

「この鈍感」ボソツ

「ゴメン、何だつて？」

「何でもないですよ、行きましょう」

ハンバーガーは美味しかった。

山登り

「広人さん、お待たせしました」

「さてと、行きますか」

今日は晴天。水筒持ったし弁当持ったしポケモンも持った。

今日はアリスと山登りをする事になった。

アルセウスが口を滑らしたのが原因である。

玉川と同様に置いてけぼりは嫌だそうだ。

「それじゃ山の入り口まで送って行きますね」

「助かるね」

山奥は強いポケモンが居るのだが、俺ら二人の配下には敵わない。

まあエンカウトしてウザイとは思っているのでゴールドスプレーを掛けておこう。



「それにしても空気が美味しいですよね」

「誰も来ないし開放感があるよな」

「フツフツフツ今ここで襲つても良いんですよ」

「あつ、エレキツドだ」

「スルーですか」

確かにアリスって美少女だよな。ハーフって聞いたけど何人とのハーフなんだろう？

聞いてみよう。

「そういえばアリスって何人とのハーフなんだ？」

「私はママがイタリア人です。パパと大恋愛して私が産まれたつて聞きました」

「へー」

「ママはマフィアの娘なんで相当揉めたそうです」

マフィアの娘!?

あの親父さんも凄い経験してるんだな。

「つて事はアリスって外国語を喋れるの？」

「いえ？ 日本生まれの日本育ちなので外国語なんてワカリマセーン」

「英語は？」

「十段階で4つてところでしょうか」

「英語教えてあげようか？」

「えー広人さん頭いいんですか？」

「この前テストで総合1位だったし、英語の新聞とか普通に読めるぞ」

「え？」

最近ネットとかで見る。

語彙力とかリーディング力が上がるんだってさ。

「是非お願いします。最近成績が悪くって」

「高三だからそろそろ受験だしな」

「お代は体でい・い・で・す・か？」

「あつ、ピチューだ」

「あ、可愛いですね……………」

まだ登山始まったばかりだ。

□
□
□

「少し休憩しようか」

「賛成デース」

アリスは水筒を一杯飲む。

「何淹れてきたんだ？」

「私はジャスミンティーです。香りが好きなので。広人さんは何淹れてきたんですか？」

「俺は麦茶」

「普通ですね」

簡単に作れるから俺は好きだ。

麦茶最高。

「そういえば気になっていたんですけど」

「ん？」

「広人さんって家族いるんですか？」

「……身内は爺ちゃんだけだ」

正直気分が悪くなってきたけど俺の身内は爺ちゃんだけだ。その他の家族はい

ない。

爺ちゃんがなければ俺はどうなっていただろうか？

「……………すいません変な事を聞いちゃって」

「いいさ、気になるところだからな」

玉川にも聞かれたし唯も聞いてきた。

それだけ俺は気にかかっているな。……………幸せだな俺は。

「たまに広人さんの家に遊びに行つていいですか？ 一緒に添い寝したいです」

「唯も添い寝してくるんだ」

「唯さんもですか……………」

あいつもたまにベッドに入り込んでくる。

最近スキンシップが多くなってきた。

「ライバルは多いですね、頑張らなくては」

そういえば二葉がまだハーレム要員が増えるとか言つてたけどどんな奴がいるんだろうか、俺の勘だが濃い奴が来そうな感じがするんだよな。

まともな人間を求む。

「そういえば広人さんってどんなタイプの女子が好きなんですか？」

「んーあまり拘らないけど人を裏切るようなビッチは嫌いだ」

「多分皆そうだと思えますよ。裏切られるのは嫌ですし」

「やっぱり俺間違えてないよな。ビッチ死すべし。」

「殺つて欲しい人間がいたら相談してくださいね。ツテとかありますんで」

「怖えよ」

「確かコイツってコミュ力が高いんだよな。」

「ガチで殺し屋とか知り合いに居そう。」

「だけどアリスと会えてよかった。」

□ □ □

「山頂にとうちやーく!」

「意外と時間がかかったな」

「道草食つてたからだろうな。」

「休憩もあつたことだし。」

「さあ、飯食べましょう!」

「ほら、シート広げるぞ」

天気は晴れてるし絶好の弁当日和だ。

「それで弁当は何が入っているんですか？」

「今日はサンドイッチだ」

少し早めに起きて作ったサンドイッチだ。

少し多目を作ってしまったが食べられなかつたらポケモンにでも食べさせよう。

「ポリウム有りますねこの玉子サンド」

「自信作」

「それでは頂きます……ん！」

どうだろうか。

「うんま!! なんですかこのサンドイッチは!?! 明らかに私を殺しかかっていますよ」

「大袈裟に言うなよ」

「本当ですよ! イメージ的には剣で服を切り刻まれて全裸になるような感覚ですよ!」

食戟のソーマか!?

あつ、でもはだけるのは面白いよな。

「この玉子すごいふんわりっていうかオムレツですかコレ？」

「関西風玉子サンドな」

「次はこれを、焼肉とレタスを挟んでますね。頂きまーす」

焼肉サンドである。少しだがにんにく風味にしておいた。

「うおっ！ これもすごく美味しいです！」

「レンジが欲しいな」

「イメージ的には碟にされてジューシーな肉の弾丸を喰らってるようなイメージです」
美味しい処刑法だね。俺も喰らってみたい。

とまあ全部食べたな。

弁当箱の中身は空である。

「眠くなってきたしちよつと寝るか」

「！ それじゃ広人さんこちらへ」

アリスが正座して腿をポンポン叩いている。

「恥ずかしいからいいや」

「えええ!!」

「わかったよ。お言葉に甘えてつと」

そんな悲壮そうな声を出したら無理にでも甘えなくなるじやない。

「おっ、いいな」

「ありがとうございます」

うん、いい眺めだ。ずっと見ていたい。

いい香りがするな。

俺はエロ親父みたいだ。

落ち着いたのか俺は寝てしまった。

アルピニスト

「広人さん、起きてください」

「あ、気持ちよかった」

「……もう夕方ですよ」

「げ」

「足が痺れてきました……」

空を見るとオレンジの色だ。相当寝たな。

そろそろ夜だし下山した方がいい。

「待ってください、足が痺れて歩きにくいです」

痺れが取れるまで待っていたら殆ど夜になってしまった。一応ガオガエンを連れてきたのは正解だ。

-
-
-

迷った。

しまった早く起きてればよかった。

「木の実でも焼きますか」

「俺焼きリンゴ食いたい」

「焼きバナナとか美味しいらしいですよ」

キウイとか焼くとトマトの味がするらしい。

それで絶賛焚き火中である。

ポケモンが来ないようにスプレーを自身に掛けてある。

それにしてもサバイバルとか久しぶりだな。金が無いときには庭の森から生き物や植物で飢えを凌いだっけ。

「すまんなアリス。今日は野宿みたいだ」

「平気ですよ、下山は明日にしましょう」

「その必要は無あああいい!!」

「へ? キャアアアアア!」

いきなり後ろから声をかけられ後ろを向くと……

「ふむ、こんな山奥で何をしているのかな?」

「ブーメラン」

30代と言ったところだろうか。背が高く筋肉が物凄くついており、益荒男と言っても過言じゃない。

それよりも目立つところは、

「……なんで服着てないんだ？」

「はっはっは山と一体化出来るからな！」

禪一丁なのである。アリスが悲鳴を挙げるのも可笑しくないと思う。

夜の山でこんなのにあつたら白目を剥きたくなる。

「それでなんか用か？」

「ああ下山を手伝おうと思つてな。麓まで案内しよう」

あれ？ 頭はおかしいけど結構良い奴じゃね？

何なのコイツ？

（広人さん、この人選ばれたポケモントレーナーです）

（マジで!?!）

（はい、色んな山を歩き回っている人間だそうです。噂だと岩タイプのみを使うとか）

岩使いか。この前のリーゼントと同じやつか？

同じ二の鉄は踏んではいけないな。

そう言えばミュウツーが岩使いは異常者とか言っていた記憶がある。うん、その通り

だ。

「ほう、貴様もトレーナーか。やるか、ポケモンバトル？」

「勝ったら服を着てもらおうか」

「上等ではないか」

□
□
□

このおっさんの名前は鞍田隆一郎と言うらしい。

岩タイプ中心でポケモンを組まれている。

全部でポケモンは4体だ。

「行け、プテラ！」

「ゲッコウガ、ゴー」

最初はプテラか、Lvは50。

コイツは素早さが高いんだよな。特に表示とか出てないし、特性はいしあたまだろう
か？

「プテラ！ かみなりのキバ！」

「プラッ」

「クガッ!？」

しまった。キバ技あつたけ。

だけど数割程喰らつたけど致命的ではない。

「ゲッコウガ、なみのり！」

「プラッ!？」

「しまった、プテラ！」

よし、急所にも入つたらしくプテラが倒れた。

今戦つた感触だとこのおっさんは加護を持つているようだ。

「次はお前だゴローニャ！」

「ゴロー」

!？ アローラバージュンだ！

やべえ。

「戻れ、ゲッコウガ！」

あぶねえ、電気タイプは戦わない方がいい。

アイツを出そう。

「行け、ガオガエン！」

「ガオツ」

出してくるなよアレを出すなよ。

「ゴローニヤ、すてみタックル！」

「ゴロー！」

危ない危ない、じしんを出されていたら不味かった。

だけど結構ダメージ食らったな。半分までは行かないけど。

「ガオガエン、じしんだ！」

「ガオツ」

「ゴロ!？」

よーし四倍ダメージなのだ。

ゴローニヤは瀕死になり倒れる。

「ほう、やるではないか。行け、トリデプス！」

「グルウ」

トリデプスか……相当防御力が高いのが出てきた。

鋼・岩タイプで防御・特防がある奴だ。

「ガオガエン、じしん」

「ガオツ！」

「グルウウ」

耐えただど!? 四倍ダメージだぞ!?

半分もダメージがいつてないし。

「メタルバーストだ!!」

「グルウ！」

「ガオツ!?!」

しまったこれがあつたか!

まずい、HPは一割も無くなってしまった。

「戻れ、ガオガエン！」

戻すし、無理強いはしたくないし。

「頼むぞ、サザンドラ」

「ギャオ！」

行つけえ特殊アタッカー!

「サザンドラ! きあいだま！」

「ギャオ!!」

よかつたよ覚えさせておいて。

これで1割以下だ。

「メタルバーストだ！」

「グルウ！」

「ギャオ！」

ダメージは受けたが瀕死にはならない。

止めだ。

「かえんほうしやだ！」

「ギャオ！」

よし、倒れた。あと一匹。

取り敢えず戻そう。

「戻れ、サザンドラ。来いゲッコウガ」

さて次は何がくる？

「このポケモンを出すのはこれで三人目か」

あれ？ リーゼントもそんな事言ってたような。

切り札ってこと……………？

「行け、粉碎せよ！」

そして出てきたのは、岩の体。そして点が集まったような顔をしている無機質な岩ポ

ケモン。

いわやまポケモン、レジロック。

マジで!? 準伝説がまた出てきたぞ。

コイツ何処で手に入れやがった。

「レジロック、かみなりパンチ!」

「しまった!?!」

「クガツ!」

レジロックってかみなりパンチ覚えんのかよ。

だけどゲツコウガのHPは残った。

「ゲツコウガ! くさむすび!」

「クガツ」

レジロックは多分200キロ越えてるはず。こける。

案の定倒れた。よし、瀕死になったようだ。

特防は普通だったような気がするし。効果抜群だし。

それはともかく勝った。

□
□
□

「はっはっは私はこれで失礼するよ」

結局山の麓まで送ってもらった。

外見はアレだか親切だな。

「さ、帰りますか」

「家に帰ったら怒られそうですよ」

もう12時過ぎてる。早く帰ろう。

「アリス、送っていくぞ」

「いえ、迎えを呼んだんで送って行きますよ」

「いいの？　ありがとう」

「どういたしまして」

正体

某県某所フアミレス

「よお来てくれたか」

「呼び出すとか本当にいい度胸だな」

「主よ、パフェ食いたい。チョコパフェ」

アルセウスのそらをとぶで移動したので着いてきた。

今日俺を隣の県に呼び出したのはこの前戦った鳥使いのリーゼント。木嶋である。

普通は俺の本拠地で話し合うのが通常じゃないの？

「悪かったよ、理由があつてな」

理由？ 何だろうか？

「取り敢えず何か注文していいぞ」

「えっと俺はマロンパフェとドリンクバーで」

「俺はチョコパフェとドリンクバー」

喉乾いちちゃったぜ。アイスってどの季節でも美味しいよね♪

ジュースも取りに行こう。

俺はコーラだ。アルセウスはメロンソーダだ。
そして席に戻る。

ん、木嶋が紙とペンを取り出して文字を書いた。

『携帯の電源を消せ』

? どうしたんだ?

まあ要求通りに消す。

「すまん、実は理由があつてな」

どんな理由だよ。盗聴でもされてるのか?

お前もボンタン狩りとかやっているから人に恨まれているのか。

「いきなり、親の話からするんだかいいか?」

「親?」

「チヨコパフェまだか?」

何故に親の話になる?

「実は俺の父親、海外の犯罪組織の幹部やってさ」

「……………」

……なんだそのカミングアウトは?

どうリアクションすればいいんだ。

「暴走族やってるからさ、警察の弱味とか握ってくれてるんだわ」

こつちも裏に極道いるから文句は言わない。

つーか警察はしつかりしろ。

「親は海外だし、いつも家にいない。妹と二人暮らしなんだ」

木嶋はポケットから写真を取り出して机に置いた。

写っているのは……長い白髪的美少女だ。中学生、もしくは小学生か？

眠っている写真を隠し撮りしたのかお前。

もしネットとかに流したりすると俺はキレる。

「俺の妹なんだ。名前は雪って書いてスノウって読むんだ」

「キラキラネーム」

「あつパフエ来た」

へー可愛い妹じゃないか。

「単刀直入に頼む。会って欲しいんだ」

「ほえ？」

なんでさ？ 何故そうなったか教えて欲しい。

「実はスノウはハッカーなんだ」

「ハッカー？ それがどうしたんだ？」

「オメーの携帯とかパソコンをハッキングして盗撮したりしてる」

……………へ？

「マジで？」

「パソコンをチラ見したらパソコン目線や携帯目線の画像が見つかった」

「ストーカーやん」

「ドリンクバーお代わり」

確かにアルセウスと同じく視線は感じた。

場所によって視線がある所とない所があったからそうゆう事かよ……………

「あいつ学校で色々苛められているんだ。だからひきこもっちゃった」

「…………」

「親もいつもいない、俺ら二人だけだ。だからアイツになにかしてやりたい」

俺もこんな兄貴欲しい。家族か…………。

幸せだよこの娘。

「で、呼んだってことか」

「その通りだ、毎日のようにオメーの写真を見る」

まあ会ってみるか。

話してみるだけいいだろう。

「そう言えば気になってるんじゃないが」

なんだアルセウス？

パフェ食い終わったか。俺も食べよう。

「お前の本名ってなんだ？」

「……………」

木嶋は紙に書いた。

『木嶋聖騎士』

これなんて読むの？

多分キラキラネームだよな。

「ホーリーナイトって読むのか？」

「パラディンだ……………」

「……………」

お前の親はなんで面白い名前をつけるんだよ。

頭狂ってんじゃないの？

「個性的だな」

「気にしてるからこの話は終わりにしてくれ……………」

こうして木嶋の家に行くことになった。

□ □ □

「意外と豪邸なんだな」

「ああ親父が買ってくれたんだ」

アメリカのテレビ番組で不倫中の夫の所にカチこむのを見たことあるがそんな感じだ。あれ凄い修羅場だよな。

って事で木嶋邸にやって来た。

「さ、行くぞ」

「お邪魔します」

へー中って結構豪華だな。

ピッカピッカの廊下が目立つ。

「……………」だ

「……か」

「開けるぞ」

いよいよ盗撮魔とご対面だ。

木嶋はドアを開ける。

パソコンに向かっていている様だ。

「おいスノウ、影山広人を連れてきたぞ」

あれ？ 動かない。

寝てるのか？

……何か嫌な予感がする。

そう言えば木嶋が俺の盗撮写真を見たと言うが、ヤバい写真を普通に見られるのって
どうなんだ。俺だったらわからないように隠す。

ハッカーなのに情報流失してるって事はまずいんじゃないか……。

「おい、スノウ、どうし」

ボド

……人形？

え、何で？

ブス ブス ブス

「え？」

針が打ち込まれた？ 俺には二本、木嶋には一本。

ん！ 体に力が入らない！
バタ バタ

「zzz」

木嶋が寝た!?

麻酔針か!? コナンみたい。

「……………二本でも眠らないか」

「なっお前……………」

「……………兄貴を差し向けた甲斐があった」

こいつがスノウか!?

クソツコイツがやったのか!

「……………やつと会えた」

「真っ正面に来いよ」

「……………コミュ症」

こいつも苦労はしてるんだな。

「……………思い出さない?」

「?」

? 何を?

「……………わからないならいい」

「それで俺を痺れさせてなんのつもりだ？」

「……………決まってるんだろ」

「俺には想像がつかないな」

「……………犯すんだよ」

何故に!?

「なんでさ？」

「……………一目惚れ」

「やり方が真っ直ぐすぎない？」

不器用じゃないか。

つてオイ！　ズボンを脱がすな！

「……………まな板の鯉」

ヤバい犯される。

俺はズボンを脱がされトランクスが出てしまう。

「……………興奮しないの？」

「我慢できる」

「……………ほお」

「なっ!？」

ええっ!?! 短パンの紐に手をかけた!

そして出てきたのは、

「……………ほら、見ていいぞ」

目に写ったのは青いレースの柄だ。

パンツだ……………生で初めて見た……………。

「くっ俺は負けない!!」

「……………その余裕、いつまで持つかな?」

「zzzzzz」

クソツ木嶋は役に立たねえ。

いつまで寝てんだ。

「……………止めを差してやる」

スノウはパンツの紐に手をかけた。

止めじゃないか。

「……………私の処女をプレゼントだ」

そしてスノウのパンツか下に、

「させるかあああああ!」

下げられなかった。

アルセウスクツジョブ。

万が一の事を考え家の外に待機させた。

□ □ □

「……………どーもすいませんでした」

「本当にすまん！」

木嶋兄妹がリビングにて謝罪している。

「もういい、気を付けろ」

「もうイチゴミルク無いのか？」

アルセウス、お前飲み食いしてばっかだな。

「取り敢えず、会いたいなら真っ正面から来な」

「……………わかった」

わかったならいい。

ハッカーだし頼る事もあるかもしれない。仲良くして損はない。

「……………ねえ」

「ん？」

「……………今度遊びに行つていい？」

「いいぜ来な」

「……………ありがとう」

この後一緒に飯を食べに行つた。

そしてこいつらと長い付き合いとなるのだった。

虫取り青年

「先輩、私これ乗ったこと無いんですよ」

「俺も全然乗ったことない」

今日は玉川と一緒に来ている。

で、今特殊なバスに乗っており、只今道路を走行中だ。

さてそろそろかな。

バスが湖に向かっていき、そのまま湖の中へ入った。

そう、これは水陸両用のバスである。

近くに来たので玉川に頼み一緒に乗ってみた。

「なんか船に乗ってる気分ですね」

「まったくだ」

次は何処に行くかな？

待ち合わせは午後だし。

「ここまで来たしほうとう食べたいな」

「あ、私いい店知ってますよ」

「そこ行こう」

今日ここに来たのは理由がある。

森屋君の家に行くことになった。

□ □ □

ある日玉川から森屋家へのお誘いを受けた。

そこに例の虫使いのトレーナーが来るらしく、そいつからあげたい物があるとか。

ついでにポケモンバトルをしてみたいそうだ。

森屋家に着いたが大きい家だな。

「お久しぶりです。柚子姉、影山さん」

「うーす」

「久しぶり浩ちゃん」

柚子? ……あ、玉川の下の名前か。

あまり呼ばないから忘れてた。って失礼だな。

「こつちです。木場さんもいますよ」

うわー芝生が広い。

日向ぼっこや色んな事出来そう。

森屋君に案内されると、髪が真っ白な青年が立っていた。

背が高いな、細身だ。

「やあ、君が広人君かい？」

「ああそうだ」

「木羽明人です。よろしく」

「よろしくな」

あ、あれフレンドリーだな。

今までのトレーナーと比べると紳士的な人間だ。性格は良くても人格は駄目なものだし。

ミュウツーが普通って言ってたけど本当に普通だ。

「虫は好きかい？」

「え？ まあ嗜む程度はあるけど」

虫達には本当にお世話になった。

サバイバル時には食料を手に入れる必用があるのだが、手っ取り早く栄養を摂るには

実は昆虫が最適だ。

捕獲するのもたいして体力を消耗しないし加熱さえすれば、大抵の虫は食べられる。

バッタは一番抵抗なく受け入れやすいだろう、イナゴの佃煮は普通に売られていたり、素揚げすると川エビのような香ばしい食感で、塩を振って食べると美味しい。

「ああ僕も、好きさ。小さいのに力が強いしハイスペックだし地球上で一番成功した生物と言っても過言じゃあない」

「蚕とか可愛いよね」

「話が分かるな」

「カブトムシとか食ったことある？」

「もちろん。世界中飛び回って食べたよ」

「先輩、話がついていけないんですけど」

やるなコイツ。

「うん、虫タイプだけでポケモンリーグをクリアしたよ。いやあ時間が掛かったよ」

「ええ〜マジで？」

「最初のもらったポケモンなんて虫タイプ捕まえたら捨てたよ」

コイツ普通じゃねえよ。

どんだけ虫好きなんだよ。

「さ、虫の強さを教えよう。ポケモンバトルだ」

□ □ □

森屋家バトルフィールド。

ポケモンリーグみたいに線とか引いてあり気分が出てくる。
ちなみに三対三の勝負である。

「行け、テツカニン！」

「カッ」

ほう、最初はテツカニンか。Lv55。

かそく、そしてまもる、みがわり、バトンタッチを使って来そうだ。

「行け！ ベトベトン！」

「ベトオ」

ベトベトンだ。いわなだれを持っているので出しておく。

「テツカニン、まもるだ」

「カツ」

くつ、これで素早さが高くなってしまふ。

「よし、みがわりだ！」

「カツ」

くつ、バトンタッチ行く気だな。させるか！

「ベトベトン、いわなだれ！」

「ベトオ」

みがわりは壊れた。四分の一無くなったのはよかったけど。

「カツ」

ん、よく見たら少し回復してる？

たべのこしか……………

「まもるだ！」

「カツ」

連続しようすると失敗するからな。

「みがわりだ」

「いわなだれだ！」

せめてもの反抗はみがわりを消すことだ。

数回このような事が続いた。

「よし、バトンタッチだ！」

「カツ」

なにか出てくるんだ？

「行け、イワパレス！」

「ペアツ」

イワパレスか、バトンタッチで素早さが高くなっているから早くなっているだろう。

「じしんだ！」

「しまった！ ベトベトン！」

「ベツトオ!!」

危なかった。HPが四分の一残った……

戻そう。

「戻れベトベトン。行け、サザンドラ！」

「ガアアア」

行け！ 特殊アタッカー！

「サザンドラ！ なみのりだ！」

「ガアアアア！」

まさかなみのりを覚えるなんてな。
凄いなポケモンって。

イワパレスは特防は高くなかったし、サザンドラは特攻高い。
効果抜群であり、案の定瀕死になった。

「ゆつくり休んでくれイワパレス」

さあ、あと一匹なに出てる？

「グソクムシヤ、行つてこい」

「シヤア！」

グソクムシヤか、だとすると次やってくるのは。

「グソクムシヤ、であいがしら！」

「シヤア」

「ガア!?!」

先制技の中で威力高いひとつだ。

攻撃力も高い方だし。

サザンドラは半分以上ダメージを受ける。

「サザンドラ！ あくのはどう！」

「ガアアア！」

「シャアアー！」

効果抜群の技が無いため、ゴリ押しである。

半分以上ダメージを受けた為、特性ききかいひで戻る。

テツカニンはもうHP無いから来ないだろうけどどうする？

「ダメだ参った。降参だ」

□ □ □

「はい、ツメの化石やるよ。発掘したんだ」

「え!? いいの? 助かるなあ」

バトル後情報や道具の交換行う。

「よしじゃあ僕からはこれをあげる」

木羽はモンスターボールを2つ取り出した。

マスターボール

ウルトラボール

……。

え？ 何で持ってるの？

「実は探検セットつてのがあってさ。ボールのみ発掘する事が出来るんだ」
「俺の奴は石だ」

あれ？ 探検セットによつて発掘出来るのつて違うんだ。木の実とか技マシンとか
のものもあるかもしれないな。

「はい、キーストーンと何個かメガストーンもやるよ。これで釣り合うし」
「いいの!? なんか良い話あったら連絡するよ」

連絡先を交換しあつて、玉川と一緒に森屋邸を後にした。

さて、アルセウスと唯の為にお土産買おうか。

信玄餅でいいかな？

□ □ □

「……それで木羽さん」

「どうしたの？」

「本気出してませんでしたよね？」

「あ、バレてた？」

実は本気を出していなかった木羽である。

「いつも最初はツボツボ出しますし、あの二匹も出してないし……」

「様子見だよ。どんなトレーナーか知りたかったしさ」

木羽は少し笑いながら、

「次は勝つからさ」

お泊まり

「いやあこのグラタン美味しいですね！」

「海老もプリっプリですよ」

「最高」

「おかわり！」

「無い」

夕食に玉川、唯、アリス、アルセウスがグラタンについて好評をしてくれている。

「一応腹八分目までにしてくれよ、お菓子とか食べると思うし」

そう、今日はお泊まり会なのである。

みんなでお菓子やジュースを持ち寄ってお茶会とかするのだ。

皆からの希望があった。

やっぱり仲間同士で友好を育みたいだろうし。

そして夕食後。

「よし、ゲームやろう」

「いつもマリカだしスマブラやるか」

参加者は俺、アルセウス、唯、玉川だ。

ちなみに64である。古いな。

使用キャラはこの通り。

俺　マリオ

アルセウス　ネス

唯　リンク

玉川　カービィ

残機は3、ステージはランダム。

ルールはバトルロワイアルである。

さーて誰から落とそうかな？

「よし、じゃ始めるぞ」

そしてゲームが始まった。

えつとここは宇宙空間で船の上か。スターフォックスだったけ？

「くらえ、ブーメラン」

「あっ！」

唯、やりやがったな。

「ほら吸い込みますよ」

「しまった」

マリオがカービィに吸われてしまった。

このカービィって何でもありだな。

「よし、アタックー！」

ネスが体当たりをしてきた。

俺のマリオは落ちていった。

こうして俺は一番最初に脱落してしまった。

……………お前ら組んでたな？

「えー！ 掴んで投げられた!?!」

最後は玉川と唯の一騎討ちになったが、カービィが投げ技を使用し、場外へ落とす。

玉川強いな、コントローラー捌きが熟練している。

「いやあこのゲームなんですけど家にあるんですよ。親と沢山やりこみました」

「経験者か」

「ええ、父親を何度か悲しい顔にさせたのがいい思い出ですね」

鬼かよ玉川。

「じゃあ次私やりまーす」

「俺と変わってくれ、夜食作ってくる」

タコ焼きでいいかな？

タコ買い忘れたけどね。

□ □ □

お好み焼きソースをかけて、マヨネーズを多目にかける。

このたこ焼きはチーズも入れておいた。

自信作と言っても過言ではない。

「さあ皆出来たぞ」

俺は扉を開ける。

「わあスノウさん強いですね」

「……………一般スキル」

「謙遜ですね」

あれ、スノウ？ 何でここにいるんだ？

お前の家と俺の家って結構離れてるぞ。

「……………うっす」

「正面から来いと行つたけど……………」

「……………一応チャイム鳴らした」

気づかなかつたな。

「……………今回はパソコンのセキュリティを見に来た」

そう言えば家のパソコンはハッキングされてたんだっけ。

ハッカーって企業でも優遇されてるよな、デイフェンス面で。

「……………今日は泊まってく、兄貴にも言った」

「連絡欲しかつたな」

困るな、夜中に来られても。

ん、何でこんな時間に？

「お前どうやってここに来た？」

「……………コイツ」

スノウはボールを取り出し放る。

「……………」

「……………コイツのおかげ」

ネイティだ。ひこう・エスパーのポケモン。
なるほど、テレポート使ったか。

これだったら毎日来れるんじゃない？

「取り敢えず、タコ焼き食いな」

「……………ゴチになります」

「これタコ入ってませんけど美味しいですね」

「あつこれチーズ入ってる」

「あつつ！ はふうはふう」

賑やかなのも良いものだ。

□ □ □

「人狼やりませんか？ 一回やってみたかったんですよ」

アリス、準備万端じゃないか。

道具とか用意しているようだ。

アリスが進行をするみたいだ。
カードを引いた。

『市民』

今回は市民2、占い師1、狂人1、人狼1の設定だ。

「さあ皆さん隠れてください」

取り敢えず指定された場所に行く。

確認にアリスがくる。

(広人さんは市民ですか)

(ああ無難だな)

さて始まるみたいだ。

「皆さん集まってください！」

ぞろぞろと五人が集まる。

誰だ人狼は？

「はい、それでは皆さん話し合いスタートです」

「占い師です。先輩黒です」

「な、占いCO、唯は黒」

「はあ!?!」

俺と唯がハモった。

占いCOは玉川とアルセウス。

どっちにスノウが入れるかで勝負が決まる。

玉川あお前狂人か……。

唯が人狼って訳か。

スノウは思考してる。

「……………よし、決めた」

「投票しまーす」

俺 2票

唯 3票

勝った。

「はい、勝負ありです。人狼は駆逐されました」

「スノウ、よくわかったな」

「……………玉川さんが妙に落ち着いていた」

その冷静さが仇となつと言うわけか。

よく見ているな。

「それじゃ第二戦やりますか」

俺達はまた指定された場所に移動した。

(広人さん、引いてください)

(OK)

『』

よし、やりますか。

そして五人が集まってくる。

「はい、それでは話し合いスタートです」

「……………占い師、唯白」

「占いCOだ。スノウは白」

「どっちが狂人ですよね」

さあ判定が難しい所だろうか。

外したら負けるな。

「取り敢えず今のところは分からないし、好きなグレーに投票か？」

「仕方ないですよね」

「時間でーす。投票してください」

アルセウス 3票

玉川 2票

「く、仕方ないか」

アルセウスが処刑（仮）された。

「それでは夜時間です」

アリスがそれぞれの場所に行って確認をする。

「ハイ、それではみなさん集まってください」

アリスが皆を呼び出す。

要るのは俺、玉川、スノウだ。

うん、勝ったな。

「狂人COだ。人狼は玉川でいいのか？」

「私達の勝利ですな」

「……………しまった」

俺、狂人

玉川、人狼

占い師、スノウ

市民、唯・アルセウス

こうして色々楽しんだのだった。

□ □ □

「うーんよく寝れたな……ん？」

「zzz」

スノウがいるな。

「……………あ、おはよう」

「おはよう」

何事もなかったように挨拶してくるな。

「……………セキュリティ関係で問題あり」

マジで!? さすがハツカー。

「……………私以外にもハツキングしてる奴がいるみたい」

「え？」

「……………防御力を上げておいた」

え、スノウ以外にもいるの？

防御力上げたとかゲームみただ。

「……………逆探知出来ないから相当なスキルを持つてる」

「そうか、ありがとなスノウ」

「……………そう」

ん、顔赤くした？ 肌白いから分かりやすい。

「……………腹減った」

□ □ □

「このエッグベネディクト美味しいですね」

「サラダとドレッシングがマッチしてますね」

「このピザトースト美味しい」

「サラダおかわり！」

朝食なのだか相当好評だ。

こんな朝もありかもしれない。

学校へ

「せーんぱい！ お早うございまーす」

「グツドモーニングくふあく眠い」

「やだなあ目尻が汚れてますよ」

「おっとすまないねえ」

朝、玉川が起こしに来てくれた。

最近いつも一緒に登校している。

「今日集会有るみたいですね。早めに行きましょう」

「眠い」

何かりア充みたいになつてきたな俺。

良い事なのか悪い事なのかよくわからなくなつてきた。

「いってらっしゃい主」

「お前も自宅警備を頑張れよ」

□
□
□

「それでベルガーが驚いちゃいましたね」

「マジで？」

ようやく学校に着いた。

話をしているとすぐに着くんだよな。

「おい、止めてくれ!!」

「うるせえ雑魚が！」

「弱いのにポケモン持つんじゃねえよ」

「あつはつははははよっわ！」

「財布が喋ってんじゃねえよ」

片隅でポケモンバトルが行われているようだ。

一方的に攻められているおり、弱いものいじめになつてるような感じである。

カツアゲだな。

前にも玉川から聞いたけどやっぱり行われているんだな。

「ちよつと小銭稼いでくるか、放課後なんか奢るよ。先行つてくれ」

「えっ？ 可哀想ですから程々にしてあげてくださいよ」

程々？ 断る。

「オイ、お前らなにやってるんだ？」

「ん？ な！ 影山!？」

「お前には関係ないだろ。首突っ込んでくるな」

「寄って集って何やってんだよ？」

「この不良共弱い者イジメとかよくやる傾向にあるからな。」

「よしわかった。俺がポケモンバトルしてやる」

「はあ？ 受ける分けないだろバアーカ」

「ハンデ付きだ。俺はゲッコウガを出すけど絶対攻撃しないし指示をしない。これでどうだ？」

「攻撃しないんだよな？ なんかことがあっても？」

「しないな」

「よしその勝負受けた、皆仲間を呼べ、金を稼ぐぞ！」



「この卑怯者があああああああああああああ！」

「えつと25万くらいか？ 結構ゲツトだぜ」

確かにゲツコウガは攻撃しなかった。

しかしベトベトンが攻撃した。

シングルバトルとは言っていないし、相手も多数で掛かってきたし問題ない。

おまもりこぼんで大量に賞金を手にいれた。

玉川と何食べに行こうか？

久しぶりに回らない寿司屋でも行こうかな？

「先輩、終わりました？ 集会始まっちゃいますよ」

□ □ □

昼休み。

「影山先輩！ 私と付き合ってください！」

「ゴメン」

ラブレターを貰って撃破中である。

中にはかなりの上玉がいるが、顔だけで俺は見ないしフツている。

どうせ聖沢をカッコよく倒した経歴で近づいて来てるんだろうし。ビッチめ。なおリンチの可能性もあるので、玉川が近くにスタンバイしている。

「今日で何人断つたんですか？」

「二人だ。少ない方だ」

「もう昼食行きましょうか……」

たまに他校からも来るのだ。

顔も知らない他校の人間に俺がOKすると思ったのだろうか？

もっと関係を深めて告白すると思うけど。

「そういえば先輩って他のトレーナーと交流とかしないんですか？」

「してるぞ？ 強いやつ多いし」

結構戦っているな。

「そういえばアリスに聞いたんだけど踏まれるのが好きな選ばれしトレーナーがいるんだって」

「濃いですね……」

アリスから聞いたのだが外国にも変態がいるらしい。それで踏まれるのが好きなのは二人いるとか。

「他にもメガネ好きだったり大人に成れない子供とかいるんだって」

「ついてけませんよ……」

キヤラ濃い奴多そうだな。

一波乱ありそうだ。

まあいい屋上に着いたんだ。

お弁当を食べようじゃあないか。

今日は豆腐ハンバーグとポテトのベーコン焼き、きんぴらである。

「先輩、ポテトのベーコン焼き貰って良いですか？」

「いいぞ、卵焼きちようだい」

人ん家の弁当も乙なものだ。

「うんまつ！ 最高ですよ。胡椒も味が効いているし体に染みますよ」

大袈裟じゃない？ 手間かけたけど。

玉川の卵焼きも普通にうまい。

「それじゃーハンバーグも……」

「この唐揚げ貰うぞ」

「ですよー」

□ □ □

「そういえば1週間後くらいに全国のトレーナーが集まる会議があるんだってさ」

「へえ、何人くらい来るんでしょうか」

「ざっと100位だって」

うちの県には二人しかいないが、東京や大阪等の人が多く住む所には多いらしい。

「玉川も来ない？ 付き添いOKだってさ」

「え！ 良いんですか？」

「唯もアリスも来るみたいだぞ」

「あまり東京なんて行ったこと無かったですから楽しみです」

「……………」

東京か……………行きたくないなあ……………

「あれ？ どうかしたんですか？」

「まあ色々あつてさ……………」

「……………そうですか」

まあいい、色んなトレーナーがいるし知り合いとか作っておこう。

よく考えれば変態としか仲良くなっていけないな……………。

この際普通のトレーナーと交流して情報の提供や交換して友好を深めていこうと思

う。

石とかもあるし、あげて話題をふっかける準備もある。

「いやあ楽しみですね」

「……そうだな」

交流するのは楽しみだけど東京は行きたくない……

□ □ □

あーあ疲れた。ここは進学校のはずなんだけど授業が簡単に思えてきた。

退屈だし今大学に受験しても受かるような気がする。

今度ずる休みしたくなってきた。

「先輩お疲れ様です！ どっか寄っていきましよう」

「いいぜ、どこでも」

でもコイツと会えるからこの学校に行く価値はあるんだ。

「よし、ゲーセン行こう！」

「やったー、新しいプリクラ入ったそうなんで行きましょう」
「こういう学校帰りってのも良いもんだ。」

紳士

「イヤッホオオオ」

「金を出せええええええ」

「フウウウウウウウ！」

え？ 俺は何に巻き込まれているって？

そんなの決まってるじゃないか。

「さっさと金を出せやああああ！」

「そこ動くな！」

銀行強盗ですよ。

数は3人程いらつしやいますね。

ちなみに整理券持ってちゃんと待ってた行儀良い強盗なんだけど……

どうしよう……ポケモン全部家に置いてきちゃった。

鉛玉喰らっても平気だが回りの人が危ないし。

「オイクソガキ！ 詰める手伝え！」

「チッ」

「テメエ殺されてえのか！」

「ハイハイ」

だつたらもつと人連れてこいよ。

「さあずらかるぞー！」

「ヒヤッホウ！」

金はどうするのだろうか？

埋めて時効まで待つか？ それともどつかでロンダリングするのか？

つかさつさと警察来いよ。

このバカ共を捕まえろ。

「お待ちなさい」

誰だ？

振り向いてみるとガタイの良い中年の紳士が立っていた。

……全然気配が無かったな。

「行けませんな。人様の金を無理やり奪う行為は」

「うるせええどけえ！」

「何故金が欲しいのですかな？ 理由をお聞きしたい」

「あ？ 遊んで暮らしたいに決まってるだろ！」

「そうですか……正当な理由がよかったですかな」

「あ？」

一瞬紳士は常人では見えない速さで動いた。

そして銀行強盗が空中に舞う。

……俺にはわかる。

コイツは手練れだと、この前戦った殺し屋より強い。

「甘いですな。もつと鍛えて出直した方がよろしいですな」

「バカめ！ まだ仲間が居ないと思ったのか!!」

「しまった!」

あれ？ 四人目!? まだ隠れてたのか! まあ待機してた方が下手した時に便利だね。

そして四人目が人質を取ろうと近づくと、

「やらせねえよ」

はい、ここで俺が回し蹴りをプレゼントする。

待機要員はダウンする。

「おおつやりますな」

「そつちも手練れじゃないか？」

今の動きは一般人じゃ出せない。

何者だこのおじ様は？

多分どつかの軍隊か傭兵か？

おっとサイレンの音が聞こえてきた。

遅くないか？ パンピーが強盗を鎮静化させたぞ？

「おっとパトカーですな、逃げますか」

「へ？」

……すごい速さで銀行から飛び出た。

何故？

こうして警察から軽く事情聴取を受けて解放された。

ブティックで待っていた唯とアルセウスに遅いと怒られてしまった。

□ □ □

「それにしてもあの紳士なんで警察から逃げたんだろう？」

「犯罪者だから？」

「犯罪者が銀行強盗を止めるか？　むしろ横取りするだろ」

「主、カレー食いたい」

「今日は麻婆豆腐だ」

すっかり夕方になってしまった。

家に着いたら飯を速く作らなくては。

「ただいまー」

「待て主、侵入者だ……」

「また!？」

「あの破壊の遺伝子が……」

「いや、この臭いは人間みたいだぞ」

空き巣かよ。

警備にポケモンがいるはずなんだが……

まあポケモンがいるし問題ないから進む。

そして扉を開けると、

「おや？　お待ちしてましたぞ」

「あの時の……」

銀行強盗をやった紳士じゃないか!?

「おいどうやって侵入した?」

「玄関からピッキングですな」

「アルセウス、パンチ」

「ふんっ!」

「グフッ!」

□ □ □

「それで何の用だ?」

「見に来たんですよ他のトレーナーをね」

紳士と麻婆豆腐を食べている。

結構自信作なのだ。

「私はゴースト使いです。他のタイプ別の加護の人間と色々話をしてるのでですよ」

「どうやって俺の住所知った?」

「前にミュウツーに会いましてね、その時に教えて貰いましたな」

ミュウツー……………お前俺の個人情報バラシてんじゃねえよ。

マスターはどんな奴なんだ？

「ミュウツーのトレーナーなのですが相当の変わり者と聞きます。ミュウツーから直接聞きましたよ」

「へー」

もしかしたらエスパーの加護を持っているかも知れない。

エスパーっていったら結構伝説とかいるよな。

ミュウとかいたりして。

「そう言えば色々なトレーナーを見て回ったのですが気づいたことがありますな」

「気づいたこと？」

「ええ、基本的に顔が整っているようですな」

そう言えば神様を選んだっけ？

確か You tuber みたいになるとか言ってたし美男美女の方が視聴率が上がる。

「ですが性格が悪い人間が多いですな」

「確かに……………」

確かに嫌な奴がいたな。

タイプの加護を持っている人間は性格は良いだろう。

東京に行くのが不安になってきた…………

いやいや全員って訳じゃないから大丈夫だし。

「この麻婆豆腐旨いですな」

「お代わりはあるぞ」

「是非お願いします」

「儂も」

こうして連絡先を交換し、紳士は帰って行ったのだった。

あつ名前聞いて無かった。

□ □ □

「ねえあの人どっかで見たような……………」

「? 俺は初対面だけど……………」

「どこだったっけ? 昔だったような……………」

唯には見覚えがあるようだ。

「ほら夜食のフランクフルトだ」

「いったただきまーす」

「うんまあ肉汁たっぷりじゃ」

ドッグラン

「うわぁー結構いるな」

「ブラー」

今日俺はドッグランに来ていた。

他のトレーナーとの交流をしてみたいからだ。

「ブラ」

「ああそうだな。ここで止まっけていても仕方ないか」

ご覧の通りブラッキーである。

かわらずのいしを使い、とある技を教えたら進化させた。

ただいまLv45である。

逃げないように施された扉を開けると数十匹陸上で過ごすポケモンがいるようだ。

えつとミネズミ、チラチーノ、ヤナップ、ポニータ、ヨーテリー、ラッタ、ミミロル、メリープ、ヘルガーとかいるようだ……あ。

「あつ先輩、奇遇ですねー」

「玉川？」

「よく来るんですよここに」

玉川を発見した。

「あつここのボスだ」

「このドッグランのヌシだな」

「ここも縄張りになるのか……」

？　なんか凄い事を言っていないか？

縄張り、ヌシ？

「なんかここでやったのか？」

「この常連なんですけど売られたバトルを買っていたら祭り上げられちゃって……」

「そ、そうか」

多分連戦連勝だな。

支配域とか広げる事をできるな。

「たまーに挑戦者がやって来るんですけどね」

気分はチャンピオンだ。

「ブラッ！　ブラブラー」

「キー！」

な、なんだ!?!　後ろでブラッキーがなんかやったみたいだ。

「コラ！ 何やってんのよ私のニャースに」

「ん？ 何やったかわかります？」

「いきなり、噛みついたのよ！ 何考えて育ててるのよ」

いきなり噛みついたのか？ 結構行儀が良いんだけどなブラッキーは。

そこまで狂暴じゃないんだけど……

「待ってください、そのニャースはこの前他のポケモンを苛めましたよね？ 新米の

ポケモンとかによくちよっかいとか出してるのよく見ますよ？」

「そうよ！ 今ちよっかい出してたの見たわ！」

「そのニャース薄ら笑いしてるわよ」

「うっ……」

諦めなババア。

玉川、お前結構ここ通ってるんだな。

「玉川、ありがとう」

「いえいえ縄張りなので」

又シとして色々良いじゃないか。

風格が出てると言うかなんと言うか。

良い弟子を持って俺は鼻が高い。

「おいつお前がここのボスだな！ 勝負しろや!!」

「あつ」

振り向くと派手な兄ちゃんがいた。

ん、どこかで見たと思つたらこの前フルボッコにしたチャラ男君ではありませんか。

「よおチャラ男。おひさ」

「あつ!! テメエ！ 道具返せや！」

「は？」

正当な賭けだと思いましたがね。

あの後は相当汚い脅しを受けたんだが？ 親も子供も嫌な奴だ。

「なんだ、またボロクソにやられたいのかチャラ男？」

「チツ、今回はお前には用はない」

まあ玉川を倒しに来たんだろうしそうだろう。

俺を倒せるとでも思つてんのか？

「ポケモン勝負しろや！」

「いいですけど私が勝つたら先輩に敬語使ってくださいいよ？」

振り返りに会うのが目に見える。

チャラ男、従順になるのかな？



勝負は二対一。

「行け、ヘルガー！」

「行け、グランブル！」

玉川は主戦力を出してきたな。

チャラ男はグランブル、確か臆病なポケモンだったよな。顎の力は強いけどね。顔が怖いけど臆病だからそのギャップで人気があるらしい。

「グランブル、じゃれつく！」

「グラーアアア」

「ヘルガー、ヘドロばくだん」

「ガアツ」

グランブルは戦闘不能になり、倒れる。

一応技マシンを貸してフェアリー対策に教えておいた。

楽勝だと思ってニヤついた顔かあつというまに真顔に戻る。

……………あつもう終わりか。

「センパァーイ、勝ちましたよ。今日は私の奢りでたこ焼きでも食べに行きましようか。良い所知ってるんですよ」

「いいの？　じゃあお言葉に甘えて」

俺たこ焼き好きなんだ。

中身がトロットロになって、マヨネーズをかける。

うん考えると至福だ。

「クソツ……もう一勝負だ！」

「嫌です。たこ焼き食べる用事が出来ましたから」

俺も小腹が空いてきた。

□ □ □

「美味しいですね」

「うん、俺もこの味好きだ」

「ブラブラ」

「ガルツ」

意外といけるなコレ。

唯とアルセウスにお土産にテイクアウトしておこう。

「ところで玉川、来週は東京だけど午後からだから午前中は皆で観光しないか？」

「良いですね。浅草とか行ってみたいです」

地方民って東京に憧れるんだよな……………

「LINEとかで確認したけど濃い奴等も来るそうだ……………」

「浩ちゃんも言っていましたよそれ……………」

またアイツらと会うんだな。

他に会っていない変態はいるのだろうか？

まあ変態以外にも最も仲良くしなければ。

「先輩、たい焼きもどうです」

「ゴチになります」

たい焼きも美味しかった。

東京観光

「へーここが浅草ですか」

「修学旅行とかで来たこと無いんですか？」

「小学校の修学旅行ではあったんですけどインフルエンザで休んじゃいまして……」

「主よ人形焼き食べたい」

「私はあれを食べたいな」

「はいはい金がありますよ」

今日は東京に来ており、全国よりポケモントレーナーが集まってくる会議が午後からあるため午前中は観光する事にした。

玉川、アリス、唯、アルセウスと一緒に行動する事になった。

「ところでスノウさんは？」

「アイツは兄貴と一緒に来るってさ、後で合流するって」

そうあの濃い奴等も選ばれたポケモントレーナーなので来るのだ。

スノウの他にも森屋君も来るってさ。

「ねえヒロ、人形焼き美味しいよ」

「ん、うまいな」

唯が口に直接入れてくる。

口の中にカステラとつぶあんの味がほんのりと実感がある。

ホツカホカなのが評価が高い。

「広人さん、雷門の場所と一緒に写真取りませんか？」

「皆で行きましょうか」

雷門か、東京に修学旅行に行ったこと無いしそんな記念撮影なんかしたことは無い。

修学旅行と言えば大阪とか京都等だろう。

「はいチーズ」

とまあ撮った。

こういうのが普通の学生なんだろうか。

「次あそこ行きませんか？」

「あそこ？」

□ □ □

「うっわー高いですね。350mでしたっけ？」

「東京タワー以上だったよな」

この会話を聞いてれば俺達が何処にいるかすぐにわかるだろう。

「634 mの電波塔なんですよね。一番高い

ギネスワールドレコーズ社より認定された高さ634 mの世界一高いタワーだ。地上350 mの天望デッキからは関東を一望することができ、天気の良い日はさらに遠くの富士山を眺めることができる。

時期によってはライトアップの色が違うらしい。

「そう言えばあまり高い場所に登りませんね」

俺や唯はアルセウスに乗って空を飛んで夜景とか見ることがある。もう慣れたな高さには。

「主よもつと高い場所に行きたい」

「お前いつも高い場所好きだもんな」

「ああ、気持ちいいな」

バカとなんとかは高い所が好きとよく聞く。アルセウスはそっちかもしれない。

いつも何か食ってるか寝てるかゲームしてるかだもんな。

まあ自宅警備員の仕事をしてるから文句は言えない。

……そろそろ小腹が空いてきたな。

「そろそろ食事にはないか皆？」

「賛成デース」

□ □ □

うむ、東京だから色々な店があるようだ。

天丼、ウナギ、中華、洋食、ステーキ、釜めし。

「どれにしますか先輩？」

「迷うな……………」

勿論金はあるから奢る。

こういう何を食べるか迷ってる時ってのは結構楽しいんだ。

「無難に蕎麦行くか」

温かくても冷たくても美味しいのが蕎麦である。

蕎麦に決定だな。入ろう。

ガラガラ

「あ」

「ん？」

「……………広人」

あれあれ木嶋兄妹が蕎麦食っている。

「お前らも無難に蕎麦か」

「まあな。ざるそば好きだからな」

「……………一緒に食おう」

こういう偶然あるもんだな。

俺達は席に腰掛ける。

「いつぐらいに着いたんだ？」

「……………さつきほど」

「東京に近いからな」

多分バイクで2人乗りで来たんだと思う。

取り敢えず蕎麦注文するか。

で、皆ざるそばみたいだ。

「そう言えばトレーナー狩りしてたんだよな。強い奴っていたのか？」

「やつぱ4人だな。岩と虫とゴースト使いとお前だ」

ほお、岩はともかく虫タイプが飛行タイプに勝ったか。

木羽も結構やるようだ。

「その他のトレーナーは大したこと無かったな、沢山ボンタンを奪ってやったよ」
「よかったな」

「調子ついてる奴等だからすつきりしたぜ」

コイツはボンタンになんの思い入れがあるんだ……………

まあスノウにも話を振ろう。

「あ、スノウつてもしかして俺と会った事あるつけ」

「……………その通り」

あつ、少し怒ってる。

注文した蕎麦が来たようだ。

「……………さっさと思い出せ」

「すまん、わかんない」

「……………いいよ。私は寛容だ」

言ってる割には怒ってるね。

早く、早く思い出さねば。

「あれ、先輩？ 食べないんですか？」

「え？」

み、みんな食べ終わってる!?

俺だけ？

「ゆっくりでいいですよ」

「迷惑かけるな」

「いえいえ」

二つ名

「おー結構トレーナーとポケモンがいる」

「100人程いるって聞きましたし」

って事でやって来ました会議に。

神様を選んだから皆美男美女である。

ポケモンのゲームの話題を降る事の出来る奴等なのである。

色々仲良くならないといけないな。

「取り敢えず声を掛けて交流を深めてくるわ」

「わかりました。私達はアソコにいるので」

アリスはベンチを指差す。

「それじゃ行ってくる」

輪の中に入ってみると御三家だったりレート戦で使われるようなポケモンがちらほらいるようだ。

おっイーブイ発見。

中学生程の女子の集団だ。

何に進化させるのか聞いてみよう。

「やっぱイーブイだよねー」

「いやいやピカチュウだよ」

「アチャモだよー」

多分可愛いのが何か話しているな。

話を降ってみよう。

「あれーイーブイじゃん。何に進化させるの？ 進化の石あるけど譲ろうか？」

「……………」

「あれ？」

……………え？ 空気が変わった？

話しかけた瞬間女の子達の目から光が失われ、無表情になる。

……………見た事あるぞ。アニメとかでよく見るレイプ目だ。

つーかなんで話しかけただけでこんなになるの？

「うわ……………」

「ていおう」だ……………」

「……………」

”ていおう”？

「行こう……」

「空気みてよ……」

「警察呼びたいわ……」

えっどつかに行っちゃった。

俺は何やったの？

”ていおう”ってなんだ？ 確かにポケモンバトルは強い方だけど……。

まあいい!! 次行くか。

ん？ 次は男子高校生かな。

同年代だから話が合うかもしれない。

「お前ボール持っていないのダッセエー」

「ダウジングマシン使えよー」

「近くに山とか海とか無いんだ……時間もないし」

ほうほうボールが無いと。

もしかしたら他の道具も無いかもしれない。

仲良くなるチャンスだ。

「よう、ボール無いんだって？ 結構余ってるからあげようか？」

「……」

「ん？」

あ、あれ？ また今さっきと同じく目にハイライトが無い？

男子高校生のレイプ目なんて誰得なんだ？

「チツ”ていおう”か……………」

「うっぎ」

「話しかけてくんな」

「行こうぜ」

「ああ」

「キメエ」

んー？ あれれどういう事？

そう言えば変な噂が流れてるんだっけ？

それが原因が？

噂は噂だよな。

信じるやつは子供かそこらだ。

次は大人に話しかけよう。

探して見るといた。

社会人見たいな人達発見。

「ピチューってどう進化するんだっただけ？」

「なつきですよ。なついた状態で進化です」

「すっごーい物知りね！」

「いやぁ好きでやってるんですよ」

「ねえ！ みつあつめって何？」

「きあいだめってどういう技？」

「せんせいをつめってどんな道具なの？」

「えっーと困ったな……………」

ハーレム状態で困ってるようだ。

手助けして上げよう。

「すみません、みつあつめはあまいミツを集める特性。きあいだめと言うのは急所に当たりやすくなるようか技で、せんせいのツメはたまに先制攻撃ができる道具ですよ」

「……………」

「あれ？」

またレイプ目だ。

俺この人達に何もやってないよ!?

「私トイレ行きたくなってきた」

「私も」

「ウチも」

「あ……………」

どっか行っちゃった。

なんで逃げるんだよ。

「しやしやり出てくんなよ」ていおう」がよ……………」

え？ その名前なんなの。

つーかなんなの全然話が出来ない。

相手側が話そうともしてくれない。

「なんなんだよホント」

「まあ理由があるんだよね」

後ろから肩を叩かれ、振り替えると。

「やあこの前ぶり」

「木羽……………」

「立ってるのもなんだしあっちの方座ろう」

「ああ」



俺はサイダーを買って変態達と座る。

玉川達も一緒にいる。

「まさか私達がこんなに敬遠されてるとは」

「心外ですな」

「しかたないぜ、好きなこと楽しんでるんだが他人にはわかんないだろ」

「あははは………元気そうだね」

「本当に元気そうだな」

そう、鞍田のおっさん、紳士のおっさん、木嶋、木羽、そして俺。

加護持ちが勢揃いである。

「それにしても何なの”ていおう”って?」

「広人って悪い噂あるだろ。そこから来ているらしい」

「……………」

は? 何故に俺が変な噂たてられなきやならないんだ?

ふざけんな。

「それで僕達の様な底辺と仲良くしている上にポケモンバトルが強いだろ? だから底

辺の王、略して”底王”だつてさ。心の底から失礼だね」

はあ？ なんなのその二つ名は!?

ふざけんなボケエ!!

第一にコイツらそこまで底辺じゃないぞ!

変態だけど性格はいいぞ?

「多分殆どの悪い噂は嘘だと思うけど、どうなの?」

「……さあな」

確かにカツアゲとか唯を匿つたりしたけど。

多分アイツらが関わってるか?

「で? 鞍田さんはズボンを履いて上半身だけ裸になってるけどなにがあつたの?」

「服を全部着ろとは言っていない!」

「何だそのこだわりは。約束は守ってるけど」

確かに服を着るといふ約束だが全部着ろとは言っていない。問題あるがな。

「ちよつとジュース買ってくる」

「あつ私も行きます」



「結構いい人達ですね」

「まあ変態だけど」

「先輩も変わってる方ですけどね」

「そうか？」

俺はグレープジュースを。

玉川は緑茶を買った。

「今さつきから皆レイプ目だよ。まったく失礼な奴等だ」

「でもおかしくありません？ 噂ですよ、信じる根拠あるんですかね？」

確かに噂でレイプ目って可笑しい。

何なんだろうか？

ジュースを飲んでいると後ろから気配が。

「あゝれゝ広人じゃないか。何でお前みたいなカスがこんな所に居るんだ？ マジキモ

イゝ」

「プツ！ 広人じゃん？ まだ生きてたの!? 早く死ねよ！」

なっ!! お前ら!! なぜここに居るんだよ!?

「先輩? 誰ですこの人ら?」

「……………」

俺はこの男女らと深い因縁がある。

玉川達にはその事をなにも話してはいない。

「あれれ〜もしかして彼女? 脅されてるの〜」

「は?」

「広人みたいなグズが彼女なんて出来る訳ないじゃん」

「もしかしてレンタル彼女?」

「先輩、この人達知り合いですか? 低俗ですし距離を取った方が良いですよ。」

「何だとクソアマ……………S5を知らねえのか?」

「痛い名前ですね」

「広人さ、何で皆から避けられてるか分かるか?」

「このカス共は何か知ってるのか?」

「俺の神様は上位のランクの神様でな。権限があるからお前が雅美に過去にした事を他の神様に言いふらしてるんだよ。それで神様経由で他のトレーナーに伝わってるんだ

よ」

「……………テメエ」

「何キレてんだキモイ」

「身の程をわきまえろよ」

コイツ……………何様のつもりだ？ 証拠も無いのに何故そんなことが出来る？

何度でも言つてやる俺は無実だ。

「頼んだら話を拡散してくれてさく本当に助かるよ」

「先輩、行きましよう。こんな人達と一緒に居ると不愉快ですし」

俺は玉川に連れられてフェードアウトする。

玉川はいい判断したかもしれない。

数十秒後俺はキレて暴れ回っていたかもしれないし。

□ □ □

「S5？ 確か日本でトップクラスの強さを持つトレーナーって聞いたかな。Sはストロングの略だって」

木羽君にS5の事を聞いてみた。

えくと、あのカスがトツプクラス？

「S5って言ったら俺戦ったな」

「勝敗は？」

「全員チルタリス一匹で完封した」

「弱っ」

アイツらには普通に勝てるな。

調子乗ってきたら挑発してフルボッコにしよう。

「あつ僕も戦いましたよ」

「森屋君も？」

「ええ、アゲハントで完封でしたけど」

奴等は負けた事を黙ってるな。

選ばれたトレーナーでも無いのに負けたんだし。

「そう言えば、皆は何県から来てるの？」

それ結構気になっていた。

「私は長野県だ」

鞍田のおっさんは長野県。

「私は愛知県ですな」

紳士のおっさんは愛知県。

「俺は神奈川」

木嶋は神奈川県。

「僕は山梨県」

木羽は山梨県。この前お邪魔したな。

それで俺は……………。

皆こつちを見ている。言うしかないか。

「静岡だ……………」

困まれてしまったな。

コイツらとは長い付き合いになりそうだ。

腐った正義

「へー木嶋ってBFなんだ。俺はワイト」

「おーワイトキング強いよな」

ポケモンの集まりなのだがその他の話をしていた。

「木羽と森屋君は？」

「閃刀姫」

「オルターガイストです」

「広人、何言ってるかわかるか？」

「全然」

しばらく遊戯王離れているとよくわからなくなってくるのだ。

木羽のデッキってインセクターだと思ってた。

「……ちなみに私は転生炎獣」

「わからねえ」

「俺も」

さっぱりわからない。

「この紅茶いけますな」

「おおつわかりますか？」

中年組は紅茶を飲んでいるようだ。

仲良さそうだな。

玉川達はポケモン談義で盛り上がっている。

「止めて！ 返してくれ！」

するとどこからか叫び声が出てくる。

声が出た方を見ると柄の悪い奴から財布を盗られたようだ。

「いきなりぶつかりやがって。財布を没収だ！」

「勉強料だ、有り難く思え」

「返してよ！」

よく俺もカツアゲしてるから人の事言えない。

「結構入っているな。プツ、何だこの写真」

「なんだこのババアは？」

「返してくれ！ 死んだ母さんの写真なんだ」

「キモオオオオオイ！」

「このマザコン野郎が！ こんな物こうしてやる！」

ビリッ

「なっ!? ウワアアアアアア!」

マジで写真を破りやがった!?

なお周りの人間は見て見ぬふりや嘲笑してる。

クソ共が。

「広人、止めるぞ」

「仕方ないな」

あれで演技だったら俺は泣く。

「おいやめろ」

「ひっこんでろバカが!」

柄の悪い人間Aは木嶋の腹を殴る。

木嶋君には効いている様子は見られない。

「グフッ!」

柄の悪い人間Aは木嶋にぶん殴られ吹っ飛ばされる。

「テメエ! いきなり何を!」

柄の悪い人間Bも加勢するが木嶋に殴られる。

「やりやがったなグハツ!」

柄の悪い人間Cをクロスカウンターで俺が殴る。

「おい平気……………か？」

あれ虐められていた奴がいなくなっている。

何処へ行つたんだ？

「今さっきの奴が何処行つた？」

「いつの間に何処かへ？」

「警備員さんこつちです！」

「お前ら何やってる！」

「こつち来い！」

俺達は警備員に連れられていくのだった。

□ □ □

「で何があつたのか説明してもらおうか」

「この三人と遊んでいたらいきなり殴りかかってきたんです」

「はあ!？」

虐められていた少年が大変な事を言い出した。

止めるように言っただけそのあと木嶋を殴ってきたんだぞ？

「待って、僕らも見てたよ。殴って来たから殴り返してただけだよ」

「私達も見てました！」

木羽達やアリス達も目撃していた。

しかし、

「周囲の証言だと君ら二人が一方的に暴行を加えたと証言しているよ」

「はあ？ 助けたのになんでこんな仕打ちをされるんだよ。評判悪いのも程がある。」

「なあお前さ、財布を取り上げられた上に母さんまで侮辱された。悔しくないのか？」

「遊びといじめの区別のつかない人に言われたくない」

「殺してえ……柄の悪い奴ABCと一緒にカツアゲすればよかった。」

コイツを助けたのは本当に失敗だったな。

「話は聞かせてもらった!!」

ドアから出てきたのはイケメンと狸の様なおっさんが出てくる。

「いきなり人を殴っておいてなんて澄まし顔だ！ 恥を知れ！」

「だから殴ってないと言ってますよね？ 見ても無いのによく言えますね！」

「だか周囲の証言は？ そっちの数より多いんだぞ？ それはどういう事だ!!」

何かおかしい………仕組みれてるのか？

「もういい………出ていけ。この会場から」

「よしみんな帰ろうぜ」

「先輩、アメ横へお土産買いにいきたいです」

「私も、組の方にお土産を」

「私秋葉原行ってみたい」

「………私も秋葉原へ」

「僕も秋葉原行こうかな。虫のフィギュア見たいな」

「僕も行きたいです」

「私はアメ横かな」

「私もですな」

みんな帰るそうだな。

じいちゃんのお土産を何にしようかな？

「待ちなさい！」

「あ？ なんだよ」

するとボディーガードが前方を塞ぐ。

「ポケモンと道具を置いていきなさい」

「は？」

「私達に協力するつもりはないのでしよう。だったら役に立てるように置いていくのが筋ではないですか？」

「……………仰る意味がわからない。」

仲良くするつもりが無いのはそつち。

レイプ目をするような人間に何故協力をしなければならぬ？

「ポケモンバトルだ……………」

は？

「許せない、こんな奴等がいるなんて。ポケモンも可哀想だ!! 解放しろ極悪人共!!」

「そうですね。その方がよろしい。道具も恵まれない人に分けた方がいい」

俺を見て狸のおっさんはニヤリと笑う。

あつ! 俺の探検セットか。

確かに金を生む卵だし、それが理由か。

じいちゃん経由で情報が漏れたか？

「あれれ〜広人やらかしたのか〜このクス!!」

「サイテー」

またカス2匹が出てきた。

「広樹、知り合いか？」

「まあな。コイツが例の強姦魔だ」

「コイツが……許せない！」

今ここで乱闘するか？

我慢できなくなってきた。

このカスが。調子に乗りやがって……

「帰ろうぜ。お前らと話してもなんの価値もねえよ」

「逃げんのかよ卑怯者！」

「卑怯者で結構だ」

木嶋が察してフォローする。

しかし黒服のボディガードは退いてくれない。

引き受けるまで退かないって事か？

「きゃあ!？」

しまった玉川!？」

「どうします？ 勝負をするのなら解放しましょう。暴行も警察には言いませんよ」

「お前え……」

人質使うとか非常識だな。

コイツの方が”底王”の二つ名がふさわしい。

「……………受ける広人」

「スノウ……………」

「……………広人は負けない」

確かに受けるしかないようだ。

「……………どっちみち笑うのはこっち

「？」

なんか秘策があるようだ。

「……………返り討ちにして恥搔かせろ」

□ □ □

「広人さん、あの二人は何なんですか!？」

「……………」

「話してください……………私達は味方です」

やっぱ話すしかないか……………

「アイツらは……………」

思い出すだけで吐き気がする。

気分悪いや。

「兄貴と元カノだ」

全員『……………え?』

予想外の事にみんな絶句した。

あの二人には深い因縁があるからな。

過去

「えっ？ ちょっと待ってください！? 家族いないって言ってませんでしたっけ？」

「いない。勘当されたんだ」

「えっ……」

「だから家族はじいちゃんだけだ」

取り敢えず因縁は十年以上前に遡る。

□ □ □

15年前。

「ねえまさみちゃんぼくひろと」

「こんにちはひろとくん」

雅美とは家が隣同士だった。

そもそもそれが原因かもしれない。

「おかしあげるよ」

「ありがとうひろしくん」

この時は俺は幸せだった。

名前を間違えられた時点で殴つとけばよかった。

10年前。

「こいつー」

「あんたむかつくのよ」

「こないでー」

「うええええんいたいよおおお！」

雅美は小中学生時かなりいじめられた。

「やめろ！ よわいものいじめするな！」

「なによどきなさいよー！」

「いやだー」

俺は時々いじめられている雅美を守っていた。

大事な幼馴染だったから全力で。

だけど今思うと一緒に集団でリンチしとけば良かったと思った。
雅美の本性をまだ知らなかった。

3年前。

「雅美、好きだ付き合ってくれ！」

「えつと……………いいよ」

俺は雅美に告った。

中学2年生の時だった。

これが後悔することになった事はまだ俺は知らない。

2年前。

「やっぱアンタとは別れるわ」

「は……………な、なんで？」

「だって金も無いし顔も悪い。それを他人からバカにされてんのよ？ 私の迷惑を考え

なさいよ」

「お前……………金と顔で見てるのかよ」

「当たり前じゃない！」

「何で俺と付き合ってたんだよ？」

「ノリかしら、広樹君。出てきていいよ」

「は？」

隣の部屋の扉が開く音がした。

で、兄貴が出てきた。

「この人が新しい彼氏」

「よお広人。俺がコイツと付き合うから残念だったな」

「は……………」

「お前みたいな劣等遺伝子が俺の弟だと恥ずかしいな！」

「本当よ！ そんな劣等遺伝子が私とヤリたかつたんだって。アツハハハハお門違
いよ！ アンタみたいな人間となって誰も相手するわけないじゃない!!」

キレた。

俺は雅美に殴りかかる。

「このクズが！」

「うぐっ……………」

兄貴に殴り返される。

続けて足蹴りを複数回される。

「何怒ってんだよキメエ」

「もう広樹君の部屋行こう。こんな奴の部屋にいたら体が臭くなるわ」

「アツハハハ言い過ぎだな。可哀想だろ〜」

俺の部屋の扉が閉まる。

俺は体の痛みよりも心が痛かった。

涙が大量に出てきて止まらなかった。

隣の部屋からギシギシする音や高い叫声がBGMになって眠れなかった。

俺が体感しているのは地獄。

しかし更なる地獄はこれからだった。

それから1週間後、

「広人!!」

「? 何なの父さん?」

「このクズ野郎が!!」

「うぐっ!」

いきなり部屋にいる所を殴られた。

「何だ急に!?!」

「本当に覚えは無いのか!」

といつても悪さした覚えはない。

広樹が悪さしても殴らないし怒らない父親だ。

「雅美ちゃんに乱暴したろ！」

「は？」

「コイツ!!」

「つつ!？」

雅美に？ なにもしていない。

むしろこつちが被害者だ。

それで被害者の俺に拳を奮ってくる。

「そして妊娠したんだぞ！ どう責任取るんだ!!」

「……………は？」

えっ？ 何の話だ……………。

まだ俺は童貞なのに妊娠を？

「ふざけんなよ広人！ 俺の雅美に何をするんだ！ このクスが!!」

クス兄貴も一緒にリンチに混ざってくる。

「お前みたいな人間なんざ育てなければよかつた!!」

「お前が弟なんて未代までの恥だ！」

家族として最低なセリフだ。

正直聞きたくない。

「待て、俺は乱暴な事なんてしていない！ だったらその証拠を出してくれ。殴るのは

それからだ！」

「このクズが!!」

「うぐっ……」

証拠も無いのに人を責めるのか？

話を聞かない時点でおかしいな。

「証拠ならあるぞ。広樹が見ていたからな」

「……………は？」

お前が元凶だったのか…………。

だったら止める筈だろ。

「窓から見てたけど駆けつけるのが遅かった……」

「いや、広樹は悪くない。悪いのは全部コイツだ」

「だから知らないって。証拠だせよ証言じゃなくてさ。お腹の子供をDNA鑑定すれば

一発でわかるだろ」

「往生際が悪いぞ広人!!」

また殴られた。

話を聞く様子が見られない。

「あなた……………もう嫌……………」

「父さん……………俺もコイツ嫌だ……………」

「……………」

俺もこんな人間と一緒にいたくない。

「広人、この家から出てけ。勘当だ」

「は？」

「高校の学費なんて出さない。生活費も自分でなんとかしろ」

よくよく考えてみれば兄貴だけ優遇されていた。

兄貴は小遣いは月一万、俺は二千円だ。

兄貴はゲームを買ってもらえるが俺は自費。

兄貴は名門の私立。俺は普通の高校に入学予定だ。

今、俺はかませ犬だって事を知った。

「おい！ 雅美ちゃんに謝りに行くぞ！」

拒否したが行くまで何回も殴られた。

雅美の両親と雅美の目の前で、何回も地面に頭を叩きつけられ無理矢理土下座させら

れた。

後でわかった事だが頭を何針か縫った上に頭蓋骨にヒビが入った。

「明日には出てけ！ 支度しろ！」

そして支度中。

「おい、広人。これもらつてくぞ」

「俺のだ。やるわけないだろ」

「フンッ！」

いきなり殴られた。

「荷物が嵩張るから手伝つたのによ……お前はクズだな広人」

それを言った後に殴る蹴るの嵐だ。

そのまま色々持つて行つて部屋から出てしまった。

そして、

「もう二度と顔見せるなよ広人」

翌日、玄関に俺は出ており、家を出る。

両親、広樹はお見送りだ。

「ほらさつさと行け」

「……………」

俺は玄関の扉を開け、外に出る。

そして扉を閉めると、

「やったあああああ！」

「ふふっ」

「ようやく金食い虫がいなくなったな。今日は寿司だ！」

「大トロ食べたいわ」

とそのような声が聞こえた。

□ □ □

「それで仲良かったじいちゃんに引き取ってもらったんだ。元々父親とは仲が悪かったらしいし」

とまあみんなに説明した。

しつこく聞かれたのでつい吐いてしまった。

「ひどい……証拠も無いのに」

「何ですかその家族は！ 最低ですよ！」

「……………」

スノウは何か考え事をしているようだ。

あの後じいちゃんに抱き締められて泣いた。

「でも俺の事を信じるのか？」

「当たり前じゃないですか!! 先輩善行値高い方ですよ」

「私と暮らしていても手を出さないじゃない!」

「俺達も同じく」

あの家から追放されて良かったかもしれない。

コイツらと会えた。

「勝負の方法聞いてきた。選ばれたトレーナーで5対5の団体戦みたい」

「勝ったな」

どうせ木嶋に負けても他の奴が勝てば良いとかそんな感じの考えだろうか。

木嶋君以外のトレーナーの実力も知っておくべきだったな。

浅はかなり。

先鋒戦

敵、相談中。

「よし、みんな聞いてくれ」

「遊星、どの順番で行くんだけ？」

「選ばれたトレーナーで絞るからあの5人と戦う事になる。一番強いのは木嶋だ。だから他の4人を倒す作戦で行こうと思う」

「賛成だ。強いから最後辺りに出てくるだろうし」

「だから先鋒、次鋒、中堅で勝つ。だから俺、広樹、富美江の精鋭で行く」

「私がか？ 精鋭なのか？」

「富美江、お前は数ヶ月で相当な強さになった。自信を持っていいぞ」

「そ、そ、そうか嬉しいな……………」

段々話が決まっていき、聖沢遊星、菱田富美江、影山広樹の順番で挑むことになった。

「なあみんな聞いてくれ」

「何だ？」

「俺はアイツらが許せない。ここで恥を掻かして反省させてやりたい……………好き勝手やつ

「ているんだ懲らしめてやる」

「すまないな俺の弟が。監督不届きだ。本当に申し訳ない」

「お前は悪くないよ広樹。全部自己責任だからな奴が悪い」

「そうだな」

「気にすんなよ」

「広樹君は悪くないよ。全部アイツが悪いから」

「雅美……………」

「よし、皆で円陣だ！」

□ □ □

「……………との事だか」

「殺してえ」

「何様ですかこの集団は……………」

スノウのハッキングによれば盗聴も楽々である。

腹立つ集団だな。

「取り敢えず誰出る？ 俺中堅で」

「あ、私は次鋒で頼む」

「じゃ僕が先鋒行くよ」

木羽、鞍田のおじさん、俺の順次だ。

副将と大将？ 出番が来ると思うのかい？ (笑)

□ □ □

『さあやって参りましたポケモンバトル！ 実況はアナウンサー武島と』

『解説の中野でお送りします』

ちなみにテレビ局の放送が入っている。

生放送だそうで、公開処刑にびったりだ。

『さあ！ S5からは、なぐんとリーダー』万色』聖沢遊星だあああああ！』

あれが聖沢の従兄弟でいいのか？

少し顔が似ているな。

二つ名格好いいな。

『お次に変態チームからは“インセクター”木羽だあああ！ 関わりたくない！』

変態……チームだと？

「つーか木羽にもそんな二つ名が？」

「なんで”万色”って二つ名なんだ？」

「確か加護で技マシンを多く持つって聞きましたね……」

加護持ち!?

「行くぞ木羽!」

「……早く終わらして秋葉原行きたい」

奇遇だな、俺も同じ気持ちだ。

秋葉かアメ横へどっちへ行こうかな。

「いっけエ! エレキブル!!」

「ブウ!」

「ハッサム、ゴー」

「……」

エレキブル出してきたぞコイツ。

エレキブースター持つてんのかよ。

エレキブル Lv60

ハッサム Lv58

『おつーとエレキブルの登場だあああああ! ”インセクター” 万事休す』

かあああああ!!』

「エレキブル! かみなりパンチ!」

「ハッサム、バレットパンチ」

ん、パンチを避けてバレットパンチがエレキブルに当たる。

『おおおおつと先制したのはハッサム!?!』

「やるな……そんな強いのに何故悪に落ちるんだ!?!」

「はあ……」

呆れたと言う顔をしているな。

気持ちはわかる。

「もういいや。ハッサム、メガシンカ」

「……」コクリ

『な、なんだあああああ!?! ハッサムが光に包まれる!!』

なっ!?! コイツらに使うのかよ?

そして各部が直線的になり、より無機的でメカニカルな姿のメガハッサムが登場する。

本当に早く終わらしたいんだな……。

「ハッサム、ダブルアタック」

「なっ!? エレキブル?!?」

「ブル?!?」

『な、なんとエレキブルが倒れたああああ!!』

テクニシヤンの特性は威力60以下の攻撃を1.5倍にする特性だ。

「戻れエレキブル! 行け、メダグロス!」

『おっーと次はメダグロスだ!!』

うげ、600族!? ゲーム経験者ならば知っている強い方のポケモンだ。

やっぱ持ってたか。

「メダグロス、サイコキネシス!」

ハッサムが吹っ飛ばされる。

「ハッサム、どろぼう」

「……」コクリ

ハッサムは一瞬でメダグロスの前に詰める。

一撃を額に当てる。

メダグロスは倒れた。

『なんと言う事だああああ!!メダグロスが倒れる!!』

「メダグロスウ!!」

「はあ………次は？」

「クソツ、行けドテツコツ！」

ローブシンに進化させないのか？

あ！ わかった。第4世代しかわからないんだ。

だから聖沢のガントルは進化してなかったのか。

「つばめがえし」

「ガア!？」

「クソツ、ドテツコツ!？」

後3体。

顔から見るにピンチだな。

「お前だけが頼りだ！ 行けっラグラージ!!」

「グラーア！」

『次のポケモンはラグラージだ！ 起死回生なるか!!』

聖沢と同様に持っていたのか。

御三家は俺も好きだ。

「じしんだ！」

「グラーア!!」

『クリーンヒイイイトかあああああ!?!』

回りの人間はやったと顔が思っていた。

しかし、

「少し効いたただけだね。8分の1も減ってないよ?」

「ううっ……」

「ハッサム、ダブルアタック」

「ラグウ!?!」

「後2体。お前だけ頼りだとか言ってたけど? 他は頼りにならないって事?」

「……」

「だったら降参した方がいい。僕は無駄な戦いは嫌なんだ」

「行けっ! ドサイドン!」

戦闘続行か。

諦めが悪いな。

「はあ、バレットパンチ」

「ガアア!」

「クソオオオオオオ」

岩タイプなので効果抜群なのである。

出しても負けるからね。

「いつけエエエエグレイシア!!」

「クイ！」

グレイシア!?! やっぱり氷におおわれた岩もあつたのかよ!

「終わりだよ。バレットパンチ」

「グレイシアアアアアア」

『勝負ありいいいい!! 勝者はなんと”インセクター” 木羽ああああああ!!』

結局一体しか使ってないな。

取り敢えずよくやった。

次縫戦

カタカタカタカタカタ

うおう。スノウが凄い早さでタイプピングしている。

これが現役ハツカーの実力か……………。

「ふう、勝つてきたよ」

「お疲れさん」

「鞍田のおじさんも普通に勝てるね。確か今戦ったやつが一番強いって話を聞くしやっぱりか。」

確かクス兄貴は第三世代でポケモンの常識が終わっていたはず。

……………ポケモントレーナーの中で第七世代まで知ってるやつはどのくらいだ？

「……………殺……………殺……………殺……………殺……………殺……………」

「……………銃……………銃……………銃……………銃……………銃……………」

「……………葬……………」

「……………殴……………」

ん？ いつの間にかアリスとスノウがこっそりと密談している。

なんか物騒な単語が飛び交っているようだ。
変な事とかしそうだな……………。

「次は私か…………」

次鋒は鞍田のおじさんだな。

□ □ □

『さ、さあS5！ 次は巻き返しなるのか!! ん？ ほうほう。なんと次は“ハウンド
” 菱田富美江だあああああああ！ 最近人気と実力が急上昇、これはいけるか!?’

まーた格好いい二つ名だな。

「確か犬系のポケモンを使うって聞きましたね。加護ではないそうです」
「森屋君詳しいね」

犬か…………:そう言えばブイズや魚オンリーの加護があるって聞いたけど。

会って話してみたい。

『そして、対するは“山の番人” 鞍田隆一郎！ 全国の山を走り回る変態の一人だああ

ああああああ！』

や、山の番人？ 確かに山で初めて会ったけど。

……………変態チームって呼ばれているのはコイツが元凶か？

「はあ、まさか貴様の様なバカと戦うとはな」

「久しぶりだな富美江、兄は元気か？」

「何故一族の恥の貴様なんぞに父上の話をしなければならいんだ？ 頭が高い」

「……………」

あれ？ 知り合いなのか。

そう言えば自分から名乗り出てたけど。

「本当にこんな奴とは話したくない。私は早めにケリをつけてやる。覚悟しろ犯罪者予備軍」

「……………」

なんて言いぐさだ。

やっちまえ。

相手の女は手持ちは5体。

「行け、ライボルト！」

「……………行け、プテラ」

「勝たせて貰うぞ！ 10万ボルト！」

「ライ！」

10万ボルトがプテラに直撃するが。

「な、効果抜群なのに!？」

効果抜群だが思ったより効いてない様子だ。

それもそのはず岩タイプの加護を持っているから。

「プテラ、じしん」

「シャアアア！」

ライボルトにじしんがヒットする。

急所に当たったようだ。

「なっライボルト!？」

ライボルトが瀕死になり、倒れる。

敵の女は凄く驚愕した顔をしているな。

計算外だなバカめ。

「次はお前だ！ ルカリオ！」

「ギョオオオオン」

確かに犬だけどき。

「ルカリオ、ブレイズキック!!」

「グオウ！」

が、外れた。

「プテラ、じじんだ」

「シャアアアアアア！」

「ル、ルカリオ！」

効果抜群だし、瀕死になる。

コイツはタイプPの事をわかってんのか？

「行け、ムーランド」

「わっふ」

ムーランドか。

確かカナダの島が現産地の犬種がモデルだ。

実際にその犬種は水難救助が得意な為、ムーランドはなみのりを覚える。

「かみなりのキバ！」

あ、そっち？

だけど効果抜群なのだが少ししか効かない。

「じしんだ。プテラ」

「シャアアアア」

取り敢えず急所に当たったみたいだ。

瀕死になってムーランドは倒れる。

さつきからじしんしか使ってないな。

「戻れ、ムーランド。クソツ貴様、どんな外法を使った!?!」

「さあな?」

「行け、ウインディ!」

えくまたく地面タイプで一撃じゃん。

「プテラ、じしん」

「シャアアアアアア!」

「なっウインディ!?!」

おーい。またじしんかよ。

少し飽きてきた。

「先輩、あのミノムシ纏っているのが違いますよ」

「柚子姉、あれはミノムツチって——」

「唯さんちよつと……」

もう勝利がわかっているからな。

空を飛ぶと移動してたから捕まえにくい。

「10万ボルト!!」

「グオウ!」

10万ボルトが炸裂する。

しかし、

「シャアアアアアア………」

「な、んだと………」

3割ほどHPが減ったようだ。

結構やるね。

「プテラ、じじん!」

「グルオオオオ!」

「ライコウオオオオ!!」

はい一撃でございますね。

お約束。

「くそオオオオオ!!」

「兄貴に伝えてくれ。私は帰らないと」

鞍田のおじさんの勝利だ。

中堅戦

「広樹！ 後はお前だけだ！」

「頑張って！」

「あんなクズに負けるな！」

「」「広樹！ 広樹！ 広樹！」「」「」

S5 中堅は影山広樹。

この試合に勝てば次に繋ぐ事ができる。

「広樹君！」

「雅美……」

「勝って……」

「当たり前だ!!」

二人は抱き合う。

必ず勝って帰ってくるという誓いだ。

「行ってくる」

「頑張ってー!!」

「僕の計算だと勝率……90%」

「負けるわけないだろ。俺たちのNo.2が」

□ □ □

「まだあいつら勝つ気あるのか？」

「頭が大丈夫なのかアイツら」

「逆に心配になってきましたな」

わーもう中堅戦か。

まだ奴等の火が消えてないとはこれはこれで凄いな。

逆境ナインがうつすらと頭に浮かぶ。

「……殺」

「……股……」

「殺……」

「……銃……」

「……殺……」

なんか物騒な話が続いている。

今唯も話に入っていた。

あつ唯がこつちに来る。

「ね〜ヒロ」

「……なんだ？」

顔は笑ってるけど内心怒りに燃えている顔ってとこだろうか。

「クソ親父の会社の名前って何？」

「まさか……」

「はーやく」

「えっと、アダマタイト産業だったかな……」

「わかった」

クソ親父の末路が唯によって決められるとか。

ざまあ。

「広人、そろそろ」

「ああ、殺ってくる」

□
□
□

「はあく次はお前かよ。クズの広人君」

「さっさとポケモン出せよ」

『おおおおおと次の中堅戦。』 不知火”の影山広樹VS”底王”影山広人
だあああああああ』

森屋君に聞いたが、不知火と言う二つ名はかげぶんしんを使用するポケモンを主に使うらしい。

かげぶんしんを積んだ後に攻撃しまくるだそうだ。

ちなみに木嶋君が戦って勝ったので、攻略法を教えてもらった。

意外と簡単な攻略法のようにだ。

「聞こえなかったのかゴミクズ？ さっさと出せと言ったんだが？」

「広人さ、分をわきまえたらどうだ？ お前が俺に勝ったことあったか？」

『こ、この二人は兄弟だそうです！ さあ、どんな戦いになるのか!!』

さて、事故でポケモンけしかけると言うのは無しだ。

後ろにいる人間が何か企んでるみたいだからな。

そうだ良いこと考えた！

「成る程この試合勝てるって言うんだなクス兄貴。だったら俺が勝つたら言うこと聞いてくれるんだよなあこの戦いは不平等だしよ」

「はあく!? 何でそんな提案受けるかよバーカ」

「なんだ勝てないのか雑魚。やっぱいいわ」

「舐めてんのか……お前が負けたら自殺するんだったら考えてやつても良いぜ」

「いいぜ。俺が勝つたらお前の家の資産を全部寄越せ」

「……………は？」

「俺が勝つたら路頭に迷えって言ったんだよ。今言質を取ったからな。棄権するならこの話は無かったことにする」

「何言ってるんだお前……………」

「お前がポケモンを出したら合意とみなす」

全部を賭けたギャンブルだ。

負ける可能性が少ないから。

さ、答えは？

「バカには勝てないことを教えてやる。行け! キリンリキ!!」

「キイイイイ」

「はあく」

受ける、か。

大口叩いといてエスパー出すんだ。

俺が悪タイプ使うの知らないのか？

「ほうらポケモン出したぞ。臆したのかバカが」

「行け、サザンドラ」

「ほお広人にしては強そうな奴いるじゃねえか」

先手はあげるか。

「キリンリキ！　かげぶんしん！」

「リキィ」

キリンリキが10体ほどに分身する。

はあ。

「サザンドラ、打ち合わせ通りに。あれにあくのはどう」

「ギャオオオオオ」

「え」

「キィ!？」

あくのはどうがバカのキリンリキにヒットする。

実はかげぶんしんは本体にだけ影が見えるのだ。

「キリンリキいいいいいい!!」

一撃で倒れました。

舐めてるのかな?

「嘘だろ……テメエなにインチキしやがった!!」

「インチキ? お前俺をどうやって家から追い出したっけ?」

「クズが、行け! バリヤード!」

「バーリイイ」

フェアリータイプの事は知っていたか? こいつが悪タイプだってことも?

「ひかりのかべだ!」

「バーリイイ!」

おーっと頭が回るじゃないかバカが。

特殊攻撃の事は知っていたか。

「ラスターカノン」

「ギャオオオオオ」

「なっ!!? バリヤード!!」

むなしくバリヤードが倒れる。

ひかりのかべ程度で防げると思ったのか?

「クツソオオ！」

自分の無力を嘆いてな。

「行けっ！ キノガツサ！」

あれれ？ 結構強いポケモンが出てきたな。

キノコのほうしとか覚えてたらめんどくさいな。

「かえんほうしや」

「キノガツサアアアアアア!!」

まあ一撃で倒れる。

よくもまあトップクラスを名乗れるな。

「クソクソクソクソ広人の分際で……………」

「ほおおおおら後3体。臆したかバカが」

この屈辱。俺が受けてきた怒りだ。

因果応報つてのはこんなモンだ。

「クソオオオオオオオ行け、ライチュウ!!」

「ラアアイ」

なんだライチュウか。

効果抜群の技か無いが。

「サザンドラ、あくのはどう」

「ガアアアアア」

「ライチユウウウウウウウ！」

うるせえなコイツ。

殴って黙らしてあげたい。

後2体か。

「クソツタレエエエエエエ！」

次を繰り出した。？ バクフーンだ。

御三家はみんな好きなんだよね。

「あくのはどう！」

「グガアアアアアア！」

「グフア!？」

「あ……バクフーン………」

バクフーンは倒れた。

あから弱いですねクス兄貴。

骨のあるやつなんだよな〜最後の一匹はよお〜。

「おまえ、弱いな」

「ふざけんなインチキ野郎!!」

汚い手で俺達に勝負を仕掛けてきた人間に言われたくない。

「最後のポケモンを出せよ。てーのー」

「くっ……………」

「ハーリーアップ♪」

「イツケエエエエエエエ！ 俺のエースポケモン！」

エース（笑）

何が出てくるんだらうか？

「ボーマンダ！ 全員倒してこい！」

「……………」

「なんだ？ ビビってんのか？ 土下座でポケモンと道具を献上したら許してやるよ」

えっ、まだ勝つ気あつたの？

お前みたいなカスが600族持っていたのにビックリすぎて沈黙してただけ
どっ？

「ドラゴンクロオオオオオオオ！」

「グアウウウー！」

「りゅうのはどう」

「ガアアアアア！」

ドラゴンクロオオ中のボーマンダにりゆうのはどうをぶちこむ。
さてどうなるか？

「グア……………」

「ボーマンダアアアアア!!」

サザンドラの勝利だ。

「思い知ったかこの雑魚が」

「クツソオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

お前の家の資産頂きます！

□ □ □

「広人、お疲れさん」

「全然歯応えが無かった」

あれでトップクラスとか笑わせる。

「さて、アメ横寄って食べ歩きしようか」

「いいですね先輩」

小腹がすいてきた。

しかし、周りが許してくれないか。

殆どのトレーナー達に囲まれてしまった。

「広人お……」

「あの家いくら位するかな？ 二千万は超えると思うけど」

「黙れや広人!! 絶対許さねえ!!!」

許されないのはお前の頭だバカが。

周りの奴は見たよなコイツの低次元さをよ。

「テメエら空気見ろよ。お前らのせいで賭けてた金がパーだ」

「大損だ。どう責任取ってくれるんだ？」

「第一お前らは嘘ませの筈だ。S5に恥を掻かせやがって！」

「ふざけないで、あんた達卑怯者よ！」

「俺達はお前らの道具を奪うのが楽しみだったんだ」

「無事に帰れると思うのか？」

「この変態集団が！ 皆に謝りなさい！」

えっ？ コイツら何様よ。

何なんだこのクソ集団は？

「み、みんな」

聖沢リーダーが驚く。

次にお前が吐くセリフはこうだ。『消してやるぜそのニヤついた顔を』と言う。
どうだ!?

「やめろ！ 何故そんな姑息な事をするんだ皆！」

え？ まともなセリフだ。

「仕方ねえだろ遊星。このままのさばらしといていいのか？」

「コイツらが皆に迷惑をかける確率………100%」

「って事だ。許すわけないだろ」

「コイツら極悪人じゃない！ 戦ってわからなかったのか!! 皆おかしいぞ！」

「遊星、お前頭おかしいんじゃないか？ 誰かーこいつを連れていってくれ」

「何をするんだ!! やめっ！」

無理矢理連れていってしまった。

あれえ？ 良い奴じゃね。

「さて、逃げられると思うなよ」
嫌なトレーナーだな。

「……………全員固まって触って」

「あれをやるんだな」

そう、この前その事実気づいたのである。

本当に便利だなこの技。

「……………全員くつついた？」

「みんなくつついた」

「……………ネイティ、テレポート」

バイバイ。

テレポートは複数人を一緒に転送出来るのである。

□ □ □

「先輩、散々な目でしたね…………」

「あいつら顔が良いだけの猿だな」

アメ横で食事中である。

他は秋葉原行ったりしてゐる。

「それで御三方は何をしようと考えてるのさ？」

「さつきから不吉なワードしか言ってますよ……………」

今さつきからカス共が痛い目に遭うイメージが浮かぶんだけど。

「……………実はね」ゴニョニョ

「ふむふむ」

おお……………神様、仏様、二葉様……………感謝します……………。

ようやく腐った豚クズ共に裁きの鉄槌を喰らわせることが出来るんだな!!
楽しみにまっているカス共が。

アーツハツハツハツハツハツハツ。

「広人さん。凄い悪い顔ですよ」

「ナチュラルハイさ」

因果応報

「それじゃお前ら準備は出来たか？」

「「応」」

「ん？」

復讐実行の日である。

とある人間を呼び出した。

面子はアリス、スノウ、パラディン、森屋君だ。

荒事になるから男性陣を連れてきた。

それで……森屋君の靴下が片足のみ無いけど……。

ポケットが膨らんでいるし、あれを作ってるのかな？

他の奴もポケットが膨らんでるし。

「皆、ポケットに入っている凶器を出せ」

「バレてましたか」ポスツ

「……ちえ」ドサ

「バレたか」ドサツ

「有る方がスムーズに行くと思いますけどね」ドサ

やっぱり森屋君はブラックジャック作ってやがった。

膨らみ具合から小石だろうか？

さて、木嶋君から出したものを確認してみよう。

「これは………：メリケンサックとガスバーナーと殺虫スプレー？」

「ああビビらせた方がいいと思つてな」

少し荒くなるのはわかるんだが。

発想がヤンキーだな。

「ハイ次、スノウ。これはスタンガン？」

「………：経験上油断しない」

「前スノウはハッキングの仕事関係で襲われた事があるからな。外行くときにはよく

持つていくぜ」

コイツも修羅場潜つてんだな。

さすが凄腕ハツカーは違う。

「さ、アリスのは………：え？」

「どうかしましたか広人さん？」

「おいこれ………：」

「流石にヤバいんじゃない？」

「あれ？ 見たことないんですか。パパがマイケル君から貰ってきたんですけど」

「これ………銃じゃん」

そう、拳銃である。

嘘だろお前。銃刀法って言葉知ってんのか？

あとアリスの親父さんも変なコネクションあるのね。

「この国の警察は何をしているんだ………」

「ここら一带は買収済みデース」

また弱味を握ってるとかそんなものだろうか。

本当に敵じゃなくて良かった。

「取り敢えずその他の道具も持ったし——あ」

おっくとターゲットが来たようだ。

作戦開始だ野郎共！

□ □ □

「広人！」

「雅美……………」

このクソ女が。軽々しく俺の名前を呼ぶんじやあない！

っーかよく顔見せられたな。

「それで話したい事ってなんだ？」

「実はね…………私脅されてたの、それで妊娠させられて」

「ほう」

「ああしないと殴るって無理矢理……………」

脅されていてあの態度はなんだろう。

あの時俺達に言った言葉、思い返してくれないか？

「それで？ 何が言いたい？」

「また…………やり直したいの！」

「……………」

「私、間違ってた。金と顔よりも大事なものは内面、そんな子供でもわかる理屈をわからなかった。本当に反省してる！」

「だったら顔見せるなアバズレ!!」バキッ！

「ギャアアア!？」

俺が殴ろうとしたらアリスがメリケンサックを装備しボディーブロー。

凄低い低音が鳴ったし骨折したかな？

「アンタなによ!？」

「あのねえ広人さんに何したのか忘れたんですか?」

「仕方無いじゃない! 殴るって脅されてたのよ!」

「あなたにとつて広人さんはその程度の存在なんですね! そんな人間に広人さんの隣は絶対勤まりません」

「何よアンタ! 私はどうだけ長い時間広人と居たと思ってるのよ。一緒にお風呂も入ったしベッドで寝たこともある。アンタなんか二年以下の付き合いでしょう? 部

外者が口を出さないで!」

「そんな仲良かったのに何故捨てたんですか! 裏切られてどんなに苦しかったか広人さんの気持ちかわかるんですか!!」

「広人は優しいのよ! 何だつて許してくれたの。前不良から守ってくれて打撲だらけになったのよ? 絶対許さないなんて無いわ」

「その好意を無駄にしたのは誰だ雌豚!!」バキ!

「キヤアアアア!？」

俺がまた殴ろうとしようとするのとアリスがまたボディーブローだ。なんだろうかこの勘違い女は。

本当にビッチ過ぎて引く。

つーか裏切っておいてまたヨリを戻すなんて都合が良すぎる。

裏切りと言うのは本来リスクが高い。

信頼が無くなると信用されなくなるし、他の人間からも信用されなくなる事もある。金で信頼を作るのでは無く、信頼で金を作れと言う話とか聞いたことある。

ポルポも信頼が大事だってジヨルノに言ってたし。

この女は側に置く価値が無いな。

俺は木嶋に合図を出す。

「雅美！ 脅されてたってなんだよ!!」

「え、」

ここで彼氏の広樹君が登場だ。

家の事で相談したいと最初に呼び出しておいた。

修羅場なのや。

「なんで俺を捨てるんだよ。芝居打って責任を広人に押し付けたのに！」

「うるさいわね！ 私は嫌だって言ったわよ」

「お前だって最終的には折れたんじゃないやなかったか!？」

「だってアンタの経歴に傷がつくでしょ。それにあの時調子のもって外してやりたいだなんて言ってたわよね!? だから妊娠したんじゃない!？」

「はあ!?! だったら許可するんじゃないやねえよ!？」

「全部アンタが考えたことよ。私は脅されて話し合わせていただけ。わかった?」

「ふざけんな! 広人の物を分け前でもらったろうが!」

なんて品の無いカス達だ。

何故ここに産廃が存在するんだ?

「広人! 思い出して私との思い出を!!」

え、近づいてきてキスしてきやがった!?

ううっ舌が口の中に入ってくる。

「広人……………思い出して」

「な……………」

広樹が絶句する。

自分の女が他の男とキスするなんてショックだし。

「このアバズ……………レ!?!」

「なっ!」

「……………マジ？」

「ど、泥水で口を洗ってる……………」

そんなに驚くことか？

汚いから水で洗うのは当然だよ。

あー昨日雨降って良かった。

そうだ、うがいもしておこう。汚いし。

ガラガラペツ！

「ひ、ひどい……………」

「……………お前がやったことの方がひどい」

「何よそれ！ キスして水溜まりで口を洗うなんて非常識よ！」

「……………非常識か、じゃあ聞くが」

お前今何股だ？」

「……へ？」

ん？ どう言う事？

雅美の顔が青ざめていく。

「実はハッキングでこんな事を調べられるんですよ」

アリスは紙を雅美とクソ兄貴に渡す。

覗いてみよう。なになに。

まさみ：明日どう？

吉彦：いいよ。夜ホテル予約してるけど？

まさみ：行く行く！ よっちゃん大好き

孝弘：9時駅に集合ね

まさみ：久しぶりのデートね

孝弘：遊園地の後どうする？

まさみ：うーん。ホテル！

孝弘：おk

かつつん：今日の夜どう？

まさみ：いいよー

キャアアアアアアアアアアア！ ビッチじゃねえかよ!?

「……………LINEや裏アカで確認したところ、八股前後だが？」

「な、なによ……………でつち上げよ」

「ほおくじゃケータイ見せてくださいよ。潔白ならばやましい事は無いですよね〜？」

「……………ちなみに広人が告白した時点で4股程」

「はあ!？」

危ねえー！ ビッチだし病気もらってる可能性あるから手を出さなくて良かった。

「広人信じて！」

「あ?」

「私は脅されてたのよ!」

「脅して屈するって事はそこまで俺は大事じゃないって事じゃないのか？ それに金と

顔が悪いからフツたお前を信用できる訳無いだろ」

「ひ、ひどい……………うわああああああああああん!!」

ひどい？ 吐いた唾をまた口に入れるのか？

覆水盆に還らすって言葉知らないの？

それで雅美は逃げていった。

「広人お……………」

「なんだカス？」

「絶対許さねえ！ バトルでも恥をかかせやがって！ ふざけるなクズがああああ
！」

「俺を陥れて追い出した奴とは思えないセリフだ」

コイツに罪悪感つてものは無いのか？

あつたら罰を軽くできたんだけど。

「覚えていろ！ 絶対に後悔させてやる!!」

クズ兄貴がこの場を去る。

はあ。

何をする気だ。

多分あのタヌキみたいなおっさんが政治家って聞いたし、チクリか？

それとも爺ちゃんに直談判か（笑）

まあどつちでも外れても無駄だな。

「森屋君、例のブツをスノウに」

「ええ、バツチリですよ」

「……………編集を急いでやる」

□ □ □

一時間後。

「父さん！ 爺ちゃんの電話番号教えてくれ！ 広人を許せねえ。抗議しよう!!」

「……………」

「広樹……………」

「な、なんだよ。父さんも母さんも……………」

二人とも顔が絶望している。

「広樹……………」

「どうしたんだ？ 広人をとつちめてやろうぜ」

「父さん……………左遷されるんだ」

「は？」

左遷、辺境へ追放だと言うことだ。

「へっ、へえそうだったのか。どこへ異動するんだ」

「シベリアだ」

「…………シベリア？ 寒そうだな」

「すまないな広樹、家族みんなに移住するんだ……」

「…………はい？」

「皆一緒よ」

戸惑う。

理解できないだろう。そんな急に言われると。

「な、なんだよ!? 俺は大学の推薦があるんだぞ！」

「この前の集団暴行の件、それでこの動画だ。今さつき大学から推薦は反故すると電話がきた」

「動画？」

「これだ」

さつきから父親パソコンを見ていた。

動画を再生する。

『なんで俺を捨てるんだよ。芝居打って責任を広人に押し付けたのに!』

『うるさいわね! 私は嫌だって言ったわよ』

『お前だって最終的には折れたんじゃないやなかつたか!』

『だってアンタの経歴に傷がつくでしょ。それにあの時調子のもって外してやりたいたな
んて言ってたわよね?! だから妊娠したんじゃない!』

『はあ!? だったら許可するんじゃないやねえよ!』

『全部アンタが考えたことよ。私は脅されて話し合わせていただけ。わかつた?』

『ふざけんな! 広人の物を分け前でもらったろうが!』

題名は『冤罪の真実』

さっきのやり取りである。濡れ衣の真実だ。

リンクに色々貼られている。

「これは本当なんだな?」

「あ……………」

弁論が出来ない。

「薄々広人はやってないと気付いていた。しかし間引きは必要だったんだ。広樹の方が
優秀だから支援を広人の分を回せば間に合うと…………」

「父さん…………」

「だが弱者は切り捨てられるのが今の社会だ。広樹、お前は悪くない」
「う、う……父さん」

「会社からは五千万払えば左遷を取り消す事が出来ると言っていた。噂によると広人は金持ちだそうだし頼んで出してもらおう」

「そ、そうだ育てた恩を返してもらおう。当たり前だ」

しかし、連絡先はわからない。

祖父に連絡し、橋渡ししてもらおうことになった。

が、

『断る』

「え?」

『当たり前だろうが、証拠も無く広人を家から追い出し金を無心。DNA鑑定をしろと言ったんじゃが忘れたか?』

「だ、だけど私達家族がピンチなんだ」

『ピンチ? 息子を陥れた上に弱者ぶるのか? 下らんな』

「頼むよ! 家族じゃないか!」

『じゃあ金を返してもらおうか。五千万』

「五千万!?! 借金は二千万じゃ!」

『お前の妻がこの前借りに来たぞ』

「は？」

『何に使うかは聞いとらん。そうそう、広人が家の利権を売ってくれたぞ。それで借金総額一億つて所かの？ 広樹との賭けで勝ったそうだから聞いてみる？』

「頼むよ……血の分けた家族じゃないか。金を貸してくれよ……」

『金を返してからそれを言え。そうだ広人から伝言がある。バカめとな』ガチャリ
数秒沈黙する。

「佳子……何に金を使った……」

「投資よ……今日当たり連絡が来るわ。フフツ」

「……何処に金を投資した？」

「ドパーズ林業よ。絶対儲かるって言ってたわ。10倍になって返ってくるそうよ」
「そこは……三日前倒産したぞ……」

打ち上げ

空港、展望ラウンジ。

「広人ってコーヒー好きなの？」

「まあな。カフェイン摂ると落ち着くし健康にいいし」

「肝臓に良いって聞いたことあるな」

今空港のラウンジで飛行機を見ながらティータイムだ。

木羽と森屋君と一緒にいる。

「木羽はお茶か？」

「まあね。渋みがいいんだ」

「苦い飲み物と甘いお菓子って合うよね」

「納得ですね」

もう法則と言ってもよろしいだろう。

「あ、あの飛行機ですよ」

「あれにバカ共が入っているのか」

「シベリアの特に寒い所へ行くそうですよ」

「ぎままあ」

今日何故来たかと言うと、両親のお見送りである。

広樹は一応残留。しかし就職するらしい。無駄だがな。

「さてと集まりに行くか」

「焼き肉だそうですよ」

□ □ □

取り敢えず復讐の結果を発表しよう。

実は父親は会社では相当な邪魔者であり、セクハラやパワハラ、高学歴のくせに仕事が出来ない部長だったそうだ。

真田グループの傘下の会社だったので追放の辞令を下すことができたのだ。

唯パパ曰く、給料泥棒の社内ニートを追い出せて良かったとアダマタイト産業から喜びの声があつたらしい。

どんだけだよ。

何故五千万を支払えば異動を無かったことのできたかというところ、会社の金を使ったりしてた事が判明したとか。

おいおいおい。

ちなみにシベリア支部は無かったためクソ親父が作ることになった。なお金を使い込んでいたので会社からの援助金は無いらしい。

母親の方も着いてつてくらしい。頑張れ。

後でわかったことだが、広樹は大学に進学しようとしたが、どんな大学も入学を拒否されてしまった。

まあ当たり前だよな。日頃の行いも悪いし、大学も危機管理も考えているだろう。大学進学を諦め、就職しようとするも同じく拒否が多かった。

そして日本の生活を諦めて両親のいるシベリアで一緒に働くことになったてさ。良かったね。家族一緒に暮らせてさ。

雅美はあの後刺されたらしい。

あの時逃げだした途中で知らない男に刺されたそうさ。結果的に後遺症が残るらしい。

沢山男がいるから良かったんじゃないか？ 面倒見てくれる漢がいるかも。

あの時の虐められていた野郎の事も話しておこう。

実は相当な悪事を働いていたらしく、無理矢理なカツアゲや傷害事件等を起こしていたそうだと。

それであの不良三人組が腹を立てて取り囲んでいたそうだと。日頃の行いが悪いので周りが放っておいたそうだと。

それで俺は評判が悪いから嘘の証言とかした人間がいたみたいだ。

後日不良達には謝りに行った。話してみたら結構いい奴らだったんで道具とかあげた。

狸の様なおっさんは賄賂とかあったらしく、テレビのニュースで放送されていた。

誰かさんがタレコミでリークしたそうだと。

S5やその他の悪質トレーナーの奴らは嚴重注意をされたとか。

二葉から聞いたのだが、またそいつら担当の神様のランクが降格されたらしく、その神様達も日頃の行いが悪かったそうだと。

なお聖沢の従兄弟は降格から免れたそうだと。後で謝りに来た………良い奴じゃないか。

これはどうでもいいが、チャラ男や前俺が戦ったトレーナーは賭けで大儲けしたそう
だ。見てただけでは降格は無いとか。

□ □ □

「うめえなここの肉」

「A5の和牛だって。広人の奢り」

「あざあす！」

焼肉屋である。

選ばれしトレーナー同士のオフ会だ。

金があるので俺が企画した。

「行けますな」

「うまい！」

好評のようだ。

「そう言えば鞍田のおじさんって何者？ ハウンドって奴と知り合いか？」

「……………昔色々とな」

「そうなんだ……………」

言いにくそうだから追及するのはやめておこう。

「広人つてさ、誰と付き合ってたんの？」

「ぶふっ」

木羽くんに唐突に言われたから吹く。

いやいやストレートに言うなよ。

「なんつーか……………考えて無かった。考えたら皆良い娘だし選べない」

「確かどっかの国が加護持ちのトレーナーのみ一夫多妻制度にするとか発表してたよ？」

「国籍変えたらどう？」

「考えておく……………」

そう言えば神様もまだ増えるって言ってたな。

……………心当たりも一人いるし。

俺は優柔不断だなホントに。自己嫌悪だな。

でもどんな答えを出すかは最後に決めるのは自分だ。

考えておかないと。

p r r r r

「おっと私ですな……………それではお先に失礼」

「? 用事か」

「まあ……………野暮用ですか」

と、紳士のおじさんは退出してしまった。

「あの紳士の本名って何なんだ?」

「ゴメン。僕も知らないんだ。まあ分かっていることと言えば」

木羽くんは窓の外を指す。

あれ? 警察?

そのまま紳士のおじさんの手にワツパをかける……………!?

そしてパトカーで連行されてしまった。

待つて待つて! 話がよくわからない!?

「実は……………あの人は覗きとかでよく捕まっているんだ。でも良い所出の人間だから待遇が良いんだって」

おいおいおい変態じゃあねえか。

一番までもそうだと思っただのによ。

良い所の出ってどんな出身だろうか?

「そう言えば広人は夜打ち上げやるんだろう? スノウから聞いたぞ」

「まあな」

ワイワイガヤガヤの時間が過ぎていった。

□ □ □

「先輩の無実を祝って〜」

「「「かんばーい」」」

今回はテイクアウトや出前は無い。

全て俺の料理である。昨日から時間をかけてつくった。

この前の打ち上げよりもみんなテンションが高い。

「このフライドチキン凄い美味しいですよ!?!」

「春巻凄い美味しい!!」

「……………うめえ」

「なんでこんなにも美味しいんですか!?!」

好評のようだ。

「さてとコーラのイッキ飲みしますか」

「マジでやるんですかアルセウスさん！」

ちなみに空腹時にコーラのイッキ飲みすると危険らしい。

コーラには大量の砂糖が含まれており、空腹時にコーラなどの飲料を一気に飲み干すと、急激な糖分摂取によってインスリンレベルが上昇し、カリウムを血中から細胞内に移動させてしまい低カリウム血症の状態に導いてしまうとか。

まあ少し食べてるし500mLだし大丈夫だろう。

「はあはあ……げっふうう！」

皆樂しそう。

ヒヨイヒヨイ

スノウに手招きされる。

着いてこいつて事か？

それで俺の部屋に着いたけど……。

「……………そう言えば広人」

「なんだ？」

「……………私のパソコンハッキングされてたみたい」

「はい？」

スノウのパソコンがハッキングされてた？

「……………地獄送りを企んでいた時に」

「データとかは無事なのか？」

「……………音声とか聞かれただけ、平気」

「ふう」

だけどプロハッカーがハッキングされてるってことは相当な手練れってことだよな。

「……………私よりも腕は劣るけど頭がキレル」

同等って事か？　どんなやつだ。

「……………調べてみたらソイツに広人のパソコンもハッキングされてた」

「まだ監視者がいたのかよ」

ストーカーは一人だけじゃなかったんだ。

良かったねスノウ、仲間いてさ。

「……………だからお詫びをしたい」

「この前のパソコンのセキュリティをインストールしてくれたし別に良いし、スノウは気に病むことはないぜ」

「……………ダメ、プライドの問題」

……………やっぱプロだわコイツ。

「……………私と目線を同じにして」

「目線を？」

頭突きでもすんのかな？

いや、お詫びでそれはないわ。

何するんだ？ 一応屈んで目線を同位置にする。

「……………ん」

「んむ」

……………キスだ。

舌を口に入れない軽いキス。マウストゥーマウス。

大胆だな……………頬が赤くなつとる。

「……………ファーストキスだ」カアアアア

「……………」

「……………広人は私が守る」テテテテ

あ、逃げた。

カッコいいな今の台詞。

なんつーか守られるつてのも新鮮だな。

俺がヒロインみたいだ。

仲間が増えてきた。

どっかの漫画で仲間がいると幸せは倍増し、不幸は分割されるって有ったような気がするしその通りだ。

ポケモンの世界になる前後で違いがありすぎる。

幸せだなあ。本当に。

そろそろパーティーの方へ戻ろうかな？

廊下に出ると玉川に遭遇する。

「先輩、アルセウスさんが次はカルピスのイッキ飲みを……」

「マジかよ。アイツの腹は大丈夫か？」

伝説のポケモンだからなんとかなるのか？

不思議生物め。

「心配だから見守るか」

「そうですね」

アルセウスのカルピスイッキ飲みを見学してたら、あと三分の一つとところでカルピスをむせてしまった。

宴会を夜までやってしまったので、みんな家に泊まったのだった。

閑話 迷子

「んあ？ 何処だここ？」

「あなたは選ばれました」

「ぬおっ!？」

知らない場所において、後ろから行きなり声を掛けられ驚く。

この青年は拉致られた。

「いやいや誰だよ」

「神なのですが……」

「はあ？ なに言ってるんだ胡散臭い」

「ホントですってば」

青年には疑惑しかない。

神なんている確証無いし、元いた場所とは違うし誘拐犯とかしか思えない。

「ポケモンって知ってますか？」

「知ってるけどそれがなんだ？」

「実は——」

神様達がやらかしたことを話す。

「で？ 俺に何やらせるんだ？」

「均衡を守る為にポケモントレーナーになって欲しいんです」

「俺エメラルドまでしかやったこと無いんだが」

「それでも大丈夫です」

そうこの青年はエメラルドしかやったことしか無いのだ。

なぜこの神は大丈夫と言うのか。

「実は貴方には特典があるのでなんとかなりですよ」

「特典って？」

「加護です。二つあります」

「どんな加護なんだ？」

「えつとですね……」

神様はデバイスを操作し見せてくれる。

◎ブイズ強化セット UR

・ブイズのステータス2倍

・ブイズの技威力2倍

・ブイズの経験値2倍

・ブイズの成長限界 Lv200まで

・ブイズのエンカウント上昇

◎技マシンセット C

「なんだブイズって?」

「イーブイや進化後の事です。全部で8体いますよ」

「5体しか知らねえ……」

「残り3体は条件は私もよくわかりません。他のトレーナーに聞くのが一番でしょう」

「あんたは知らんの?」

「私もエメラルドしかやったこと無いんで」

「神様もゲームするんだな」

「RPGよりも格ゲーの方が好きです」

「俺も」

ゲームの趣味が合うようである。

性格が合うからここに来たのだろうか?

「一応最初のポケモンはイーブイにしていますのでご安心を。道具も沢山持たせておいた
ので後で確認してください」

「助かる、感謝するぜ」

「あつ！ そろそろ時間です。元いた場所に戻りますので安心してください」

「だよな。戻さないと誘拐だしな」

「それでは頑張つて下さい！」

青年の目の前が真っ白になっていく。

何が起こるか知らずに……………。

□ □ □

「あれ？ ここは何処だ？」

戻った青年は戸惑う。

ここは元いた場所ではない。

そして青年はステータスに気付く。

モンスターボールを取り出し投げる。

「ブイ！」

「本物かよ……………よろしくな」

握手する。相棒である。

「で……………どこどこかわかるか？」

「ブイ？」

首を横に振る。

取り敢えず歩く事になった。

「Lv14か……………成長したな」

「ブイブイ！」

歩いてるとポケモンが襲ってくる。

なので返り討ちにした。傷ついても回復アイテムがあるため回復し平気である。

「ん？ あれは……………」

遠くを見るとトレーナーが襲われている。

ふと青年は気付き驚愕する。

「待て待て何故奴等が……………」

襲われているトレーナーは見たことがある。

襲っているトレーナー達も知っている。

「まあいい助太刀するぞ！ 行くぞブイブイ！」

「ブイ！」

青年とイーブイは助けに走るのであった。

閑話 スノウとの初対面

「……………ジューズ」

「ありがとう」

オツス、おらスノウ。

今日は広人が家に来ている。

やべえ……………興奮してきたわ。

ちなみに二人つきり。襲いたい。

「スノウの話し方っていつもそんな感じなのか？」

「……………いつも」

頭の回転は早いのだが人と喋るのは苦手であり、不登校だけど頭は良かったので特に問題は無い。

同世代の奴等が頭の色とか話し方をバカにする事があるので行きたくない。

「……………話したくないときはコイツを使う」

「コイツ？」

「ヤッホーハジメマシテ」

「うおっ！」

パソコンの画面に私の相棒が現れる。

「ポリゴンか」

「……………よく広人の監視とか任せてる」

「共犯だな」

実はポリゴンはインターネット上に入ることが出来、情報収集とかも可能だ。

ポリゴンとの初対面は企業ハッカーのアルバイトをしてる際に出会った。

私が凄腕だと見抜き、そのまま一緒にいることとなったのだ。

「アップグレードは？」

「……………何ソレ？」

グレードアップしそうな言葉だけど……………何ソレ？

「ポリゴンにアップグレードを持たせて交換するとポリゴン2に進化するんだ」

「……………マジ？」

初耳だぞオイ。

ポケモンつて道具を持たせて通信交換すると進化する奴もいるんだなあ。

他にも特殊な進化するポケモンとかいそう。

「アップグレード持つてるからやってみる？」

「……………ポリゴンは？」

「イイヨー」

「即答だな」

ポリゴンにアップグレードを持たせ、通信交換のアイコンを使用する。
トレードし、またトレードする。

すると、

ピカアアアアン

ポリゴンは光輝く、そして

「アレ？ スマートニナツテル」

「……………丸くなってる」

なんつーか少しかわいくなつたな。

似合ってるぞー（棒）

「かわいくなつた」

「……………それでも私の初対面を思い出さないか」

「ごめんさつぱり」

よしヒントを出そう。箆笥を私は探す。

ガサゴソ

取り出したのは帽子とワンピースだ。

「何か……思い出しそう」

「アキバ」

「思い出したあああ！でも分かりにくいって！」

チツ、ようやく思い出したか。

二年前の夏の事だ。

□ □ □

二年前、アキバ。

『おえええええええ』

パソコンの部品を買いに行ったのだが夏の季節や人混みの中だって事もあってあの時吐いていた。

正直インドア派なので慣れていない。

目が気になるので白髪染めして来てた。

『…………ヤバい意識が』

インドア女子にコンクリートジャングルはキツイですな…………。

『おい平気か?』

倒れそうなのを助けてくれたのが広人だった。

その他の人間は通りすぎるか写メを撮ってる。

『日陰に行くぞ』

『…………助かる』

『お前から失せろ!! 見せ物じゃねえんだよ!!』

写メ撮ってる奴らに怒鳴る。

他人の不幸にコイツら腹立つな。

広人は私をおぶってくれた。

この時の好感度は結構高くなってる。

日陰を見つけ、ベンチがあったので寝かしてくれた上に近くの自販でポカリ買って飲

ましてくれた。

やべえイケメンだわ。見ず知らずの人間にここまですると凄い。

『…………ありがとう』

『いっしょ。体調は?』

『……………だいぶ良くなった』

日陰で水を飲んだおかげか、体の調子が良くなってきた。
もう動けるだろう。

『……………一緒に店を見て回ろう?』

『フィギュア見に来ただけど引かない?』

『……………問題無し』

こつちも部品を探してきたし特には問題無し。

帰りに何か一緒に食べるか。

私の奢りでな。

ってことで一緒に歩き回った。

パソコンは不馴れなのか広人は何の機械かわからないみたいだ。

広人の方のフィギュアを見ると、造形がいいと感じる。

つーか芸術だな。スゴい。

『あーくたくただ』

『……………私も』

広人とラーメンを食っている。

私は味噌、広人は塩だ。二人共にチャーハンもついでる。
少し早いが晩飯だ。

『うまい』

『……………同意』

本当に旨いなこのラーメン。

『あつトイレ』

『……………どうぞ』

広人はトイレに入る。

あれ？ 置いていったバツクの中に財布が。無用心。

開いてみると身分証明書が。

素早く覚えて戻す。

見ただけじゃ犯罪じゃないし、何も盗っていない。

そして帰ってくる。

『……………ラーメン旨い』

『？ そうだな』

バレてないよな。

そして二人共にラーメン食ったら会計し、私の経済力を見せてやったぜ。店を出ると夕方だ……………」

『駅まで送る』

『……………ありがとう』

そして駅まで私は送られた。

□ □ □

「……………それでストーカーが始まった」

「身分証明書を見られたのは気づかなかった……………」

広人って東京出身だったんだね。

身分証見て気づいた。

「……………部屋のパソコンから盗撮してた」

レアなシーンもあったし最高だったぜ。

「程々にしろよ……………」

「……………わかってる」

今はしていない。直に会ってるからな。

「……………そうだウチで飯食ってく？」

「ゴメン、唯とアルセウスがいるからまた今度で」

「……………そうか」

「日にち決めてまた誘ってくれ」

まあ急に誘うとダメか。

今度デートに誘ってみよう。

第三部

初めての海外旅行

「広人さああああああん！ 気分はどうですかああああああ？」

「最悪だああああ来なければ良かったああああ!!」

船に乗っており、風が強い。

スツゲエ寒い。

今何処にいるかって？

「さみいいいいいよおおおお！」

「ロシアまで後少しですよおお！」

「日本海縦断かよおおお」

少し時間は遡る。



「ロシアンマフィアと交流会？」

「ええ、そこで急遽ポケモンバトルをすることになりました」

「アリスじや駄目なのか？」

「相手がタイプ別の加護を持っていまして。私事になりますが負けられないので

……………」

ケツモチだし、代理でやらないとなあ。

「わかった。で？ 何タイプの加護だ？」

「氷だそうです。ロシアでは負け無しだとか」

氷か……ガオガエンに頑張って貰わないと。



「……………厚手の上着着ても寒い」ガチガチ

「どうぞカイロです」

「サンキュー」

「パスポートプリーズ」

「どうぞで」

パスポート見せて漸く国内に入れた。

「……入国審査とかしないのかな？」

「それにしても氷タイプの子供ってどんなトレーナーなんだ？」

「んー、実は最近私も知ったのですが……」

「知り合いか？」

「ええ……」

アリスって顔広いからな。

「ハニー、アリス。お久しぶり」

「あ、シンシア」

声が聞こえた所を見ると銀髪のボブカットの――

「広人さん、コイツが氷タイプのトレーナーです……」

「……」

何で俺が沈黙したかって？

「いやあ、今日は暖かい寒さですね〜」パタパタ

「マジか」

服装が上半身がビキニで、下半身がハーフパンツなのだ。

何の子？

「……実は私の親類です」

「親類!？」

「んんん? 血縁関係だったのか。」

「よお〜お前さんが悪使いか?」

「わお」

出てきたのは筋肉質のおじさん。

服装はタンクトップと半ズボンである。よく平気だな。

「あ、ログボさん。お久しぶりです」

「アリスの嬢さんじゃないか、久しいな」

「この前の会議以来ですね」

本当に顔広いな。

「紹介しますね広人さん。この方がパープルファング・ファミリーのログボさん」

「よろしくな坊主」

「どうも」

握手をする。

手、暖かい。

「さて、バトルしますか。悪対氷。どっちがクールかな?」

「上等」



「それではポケモンバトルを開始します！ ルールは3対3の勝ち抜きとします」

『Y A A A A A A A A A』

結構な盛り上がりを見せるじゃないか。

海外でも人気あるからなポケモンバトル。

「勝負開始！」

さてさて最初ポケモンは。

「行け、ガオガエン！」

「ゴー！ パルシエン！」

うわっ！ 水タイプかよおい。

だけど、

「かみなりパンチ！」

「シエルブレード！」

水タイプなので電気系で攻撃する。

パルシエンはシエルブレードで迎撃。

「ガオ!?!」

ガオガエンの攻撃は当てた。

しかし、パルシエンは負けずに攻撃を当てた。

急所では無いが効果抜群、それで追加効果で防御力が下がってしまった。

「クソ、DDラリアットだ!!」

「ガオ!」

ドカアアアン

「パアール」

「なにイイイ!?!」

悪タイプ技の威力があるはずなのに少しだけHPが残った。

確か防御力高かったな。

「パルシエン、つららばり!」

「ガオオ!!」

つららばりがガオガエンに五発打ち込まれる。

五発打ち込められ、ヒットポイントがゼロに近くなった。

「かわらわり!」

「ガオ！」

「ジエラ!?」

一応トドメを差した。

まずは一体目。

「パルシエン、ありがとう」

次は？

「行け！ クレベース！」

「ガアアア」

質量がありそうなポケモンだな。

防御力もありそう。

「ガオガエン、DDラリアット！」

「ガオ！」

クレベースには当たった。

しかし、3・4割しか聞いていない。

「クレベース、なみのり！」

え？ なみのり覚えんの？

クレベースがなみのりでガオガエンを飲む混む。

「ガオツ……」

ガオガエンか倒れる。

この女強いな。

「次はお前だ……サザンドラ！」

「グアアアア」

「ドラゴンタイプ？」

シンシアも少し首を傾げたな。

「かえんほうしゃ！」

「グオオオオオオ！」

ちなみにこだわり系を持たせてるので威力は上がっている。

確かクレベースは特防は弱かったはず。

「ガアアアアアア！」

ようし、ヒット！

前のガオガエンがやってくれたのでクレベースは瀕死になった。

よしよし良くやった。

さあ、次は何が出る？

「お願い！ レジアイス！」

準伝説キタツー!?

結構準伝説持つてるトレーナー多いな!

「戦闘続行! かえんほうしゃ!」

「グオオオオオオ!」

こだわりと特攻に重点を置いたのを喰らえつ! あと効果抜群。

「……………」

六割程しか減ってない。

確かレジアイスって特防強かったな……………。

「れいとうビーム!」

「……………」

なんか沈黙したままれいとうビーム出しやがった。

もちろん効果抜群だ。

「グオオオオオオ!?!」

スマン、サザンドラ。耐えてくれ。

「グオオ!」

耐えた。良くやった。後でボルシチ沢山食わしてやる。

ギリギリだけど。

キンキン!!

「は？」

凍りやがった!?

「チャンス! レジアイス、れいとうビーム！」

「サザンドラ！」

嘘だろツイてねえな。

サザンドラは戦闘不能になる。

だが有利なのは俺だ。

「行け、ベトベトン！」

「ベトオ！」

攻撃と特防がやや高いのでこいつを選んだ。

「レジアイス、きあいだま！」

「え？」

あ、覚えられたのか。

うっかりしてた。

「ベトオ……」

危ねえ、二割ほど残った。

「ベトベトン、いわなだれ！」

「ベトオ！」

よし、勝った。

やっぱり加護持ちのトレーナーは強いな。



「ボルシチ美味しいな」

「お、分かるか。俺作ってたんだ」

「ログボさん料理するんですね」

「まあ、男も料理する世の中だからな」

今、ロシアンマフィアの方々と食事中である。

外国の郷土料理を食べるのも乙だな。

「あ、ちよつとトイレ」

「あっち行って右だ」

「どせ」

えっと、こっち行って右か。

ああ、ここか。

「それでママには伝わってないわよ」

「……………良かった」

アリスとシンシアさんが会話してる。

ママ？ 何の話だ？

気配遮断スキルを使用し聞き耳を立てる。

「あまり広人さんを闇社会に引きずり込みたくないですし」

「確かに、関わらせると面倒な事になりそうよね」

闇社会って、俺関係の話をしてるよね。

「一応、恩着せて買収してるから話行く事無いよ」

「ありがとうシンシア！」

「今度夏の限定モノで」

「OK！」

この話には関わらない方がよろしいな。

俺はトイレに行くのだった。

あと、家に居る一人と一匹のお土産をどうしようかと悩むのだった。

お見舞い

「ハムエッグ美味しいのー」

「幸せ」

「好評で何より」

ロシアから帰って朝食時、日曜なのでテレビを見ながら団欒していた。唯もアルセウスもゆったりしている。

「そう言えば唯」

「どうしたの？」

「ポケモン欲しくない？」

実は木場君からお願いがとされたのだ。

とあるポケモンが虫タイプでは無くなったので加護があまり効かなくなったので貰って欲しいと。

そのポケモンは悪タイプだそうで、俺に話が振ってきたのだ。

酷い話だと言いたいが、こっちの方が輝けると思う。

「欲しい。2体だけじゃ不安だし」

「3体だけでも不安だし、もう少し欲しいかな」

結構俺もポケモン増えてきたし、安心が持てる。

「なあ、主よ」

「なんだ？」

「ハムエッグおかわり」

「……………」

仕方ないな。

一回だけだぞ。

「そう言えば世界会議があるって聞いたけど。なんか聞いてる？」

「ああ、アリス経由で聞いている。世界中の選ばれたトレーナーが出てくるんだって」

「日本の選ばれたトレーナーがアレだからね」

「ああ、心配だな」

近いうちにトレーナーが世界で集まる事になった。日本のトレーナー達もまた参加する。開催地はアメリカ。

無視するという手もあるが、他の加護持ちトレーナーの面を見たいと思うので参加する予定だ。

この前二葉との会話で聞いたのだが、その際四つ子の神様の担当トレーナーでオフ会

する事になったのだ。

「ただだけヤバいのがいるか楽しみだ。」

「アリスから聞いたけど加護持ちは変わった奴が多いそうだ」

「どんなのいるの？」

「格闘使いはよく発狂するとか。毒使いは五月蠅いとか」

「何それ？」

「ノーマル使いはよく警官にしょっぴかれるって」

「変わったヤツ多いね」

ホントだな。

ロシアのシンシアも神経おかしかったが、神様は変わったヤツが多いのかな。



さてと、今日はなごみん先輩へお見舞いに行くか。

最近放置してたからそろそろ構ってやらないとな。

「お見舞いに果物でいいかな？」

最近病院へ入院したそうだ。

たまには顔見せないと。

「ついでにジュースも買っていこう」

コーヒー牛乳とイチゴ牛乳とバナナ牛乳だな。

全部甘い。

他にも美味しいもの買っていこう。

ビスケットとかいいかな？



「こんにちはー」

「あ、ヒロ君じゃないですか！」

「お見舞い来ましたぜ」

「ありがとうごカフツ!」

「うわっ」

この人が六道寺なごみ先輩。

歳は一つ上の先輩だ。

虚弱体質で、学校をよく休むのだ。

今のように血とか吐いたりしてる事がよく見られる。

よく吐くので俺や周りの人間も皆気にしなくなつたが。

「元氣じゃなさそうですね」

「最近走ることも出来なくなつて」

「辛いわ」

確かに走ることも出来ないストレス溜まりそう。

「イチゴ牛乳飲みます?」

「あ、いただきます」

「俺はコーヒー牛乳を」

んー。美味しい。

心が洗われる。

「そう言えばテレビ見ましたよ。市役所と会合」

「そう? 感想は?」

「なんか強くなつたなつて」

前と比べて、強さとか権力が半端ないからな。

バックに色々というし。

「日本の集まりつて嫌な人ばかりだね」

「一部は大丈夫だけど」

あの変態達も意外と良い奴なのだ。

人間は外つ面ではない。

「遠くに行つちやつた様な感じするな」

「……………」

「嬉しいのか悲しいのか」

俺はどこも行かないんだけどなあ。

「別に呼ばれたら来ますよ」

「嬉しいですよ」

「バタークッキーどうです?」

「いただきます」

結構恩あるからな。

俺は駆けつけるか。

「そう言えば九頭龍先輩は?」

「ん〜数ヶ月前から絵葉書来たつきり音信不通なんですよね」

話を変える。

そつちも同じか。

本当に九頭龍先輩はどこに行つたんだ？

なんかのトラブルに巻き込まれている可能性が高い。

あの人結構首突つ込むからな。

凄い心配。

「でもなんかひよっこり帰つて来そうですね」

「あーありそう」

丈夫だからね。平気そうだ。

「あ、コーヒー牛乳無くなっちゃった」

「私もイチゴ牛乳が」

「バナナ牛乳飲みますか」

俺はバナナ牛乳にストローを入れる。

「これ新商品だけど美味しいな」

「私も少し飲みたいです」

「はい」

ストローつけっぱなしでジュースを渡す。

「あ、これ美味しいですね」 チュー

「……………」

間接キツスじゃないですか。

普通はストロー変えると思うけど。

「……………」モグモグ

「あ、全部飲んじやいましたね」

あんまり牛乳モノを飲むと腹壊すぞ。

「お腹痛くなつたんでトイレ行ってきます……………」

「俺も行きますよ」

ほら互いに言わんこつちやない。

俺は肩を貸す。

「そう言えば体は治るんですか？」

「凄い難病なんで治った例は無いそうです……………スーパーデトroid病つて言うんですが」

「……………」

くっそ、世話になったのに何も出来ないのかよ。

病気の薬、なんかポケモンの道具で無かったけ？

元気の塊は怪我の治療だし、一応二葉に聞いてみてもいいかもしれない。



「それじゃ俺はこれにて」

「久しぶりに楽しかったですよ」

俺は病室を後にする。

玉川にも聞いてみますか。

「さてと、晩飯の材料を」

P r r r r r r r r r r

誰だろうか。

『……………やあ、広人』

「スノウ？」

なんだろうか。

『……………聞いていたぞ、デトロイト病って』

「盗聴かよ」

バッテリーの減りも早いしハッキングしてるのか？

「それで？」

『……………その病気の治療法があるとしたら？』

「！」

マジ？ お前調べたの。

『……………ひでんのくすりってアイテムが必要』

「あー」

デンリユウとかコダックにあげたあの薬？

『……………それを使って名医が手術すれば治るって』

「ありがとうスノウ」

『……………今度何かで埋め合わせ』

「OK」

『……………武運を祈る』ガチャ

さて、買い物して戻るか。

後、ジグザグマの大海戦術の範囲を広げてみよう。

他のトレーナーにも聞いてみるでしょう。

どつちみち

「さうて、行きますか」

「負けませんよ」

「何やってるの?」

「まあ、色々」

実はそろそろ世界会議なのだ。

マネージャーがついて行って良いらしく、もう一枠あるらしい。

なので玉川とアリスがそれを賭けてバトルするらしい。

「行きますよ……………」

「負けませんよ」

俺が金を出すので一緒に行けばいいと言ったのだか。

譲れない事なのか? 俺の隣は。

ちなみに勝負は2対2の戦い。

頼むから庭は壊さないでくれよ。

お、バトルの音楽がなり始めたぞ。

「行け、バンギラス！」

「ヘルガー！ 行つて」

わお、エースポケモン同士の戦いじゃないですか。

「あくのはどう！」

「あくのはどう！」

ドカアアアアアアン

あくタイプのアアアアアアアンの攻撃同士、高威力だ。

加護で強化されているからな。相殺された。

「かえんほうしゃ！」

「ストーンエッジ！」

ストーンエッジの方が強かったのか勢いが止まらず、ヘルガーにダメージが入る。

確かバンギラスは攻撃力高かったな。

そしてヘルガーは特攻が高かった。

「かみくだく！」

「だいもんじ！」

だいもんじは高威力の技。

かみくだく前に当たりダメージを与える。

動画とかで見るとポケモンバトルよりも迫力があるな。

この前聞いた話だと、海外でも実は大会がよく開かれており、賞金稼ぎのトレーナーも既にいるとか。

この前見た戦いだと優勝賞金が三千万程だった。

Lv40程度のポケモンだったので、俺らでも弟子たちでも余裕で優勝できる。強くて有名なトレーナーだと二つ名を付けられるらしい。

木島君は『鳥頭』、紳士のおじさんは『幽騎士』。

この前会ったシンシアは『氷結の魔女』だそうだ。

アリスは最近『処刑人』とか二つ名を付けられたそうだ。かっこいい。

他のトレーナーはどんな二つ名を付けられるのだろうか？

「あくのはどう!」

「ストーンエッジ!」

お、いつの間にか2人のポケモンのHPが四分の一以下になったぞ。

つーかメガシンカしないのか？

「ガウ……」

バンギラスがやけどを受けてた。

「かみくだく！」

「あつ！」

ヘルガーにかみくだくが入った。

戦闘不能になる。

「ガウ……………」

バンギラスがやけどのダメージで倒れた。

両者後は一体つつ。

「ゴー、キリキザン！」

「行け、ダーテング！」

コマタナが進化しキリキザンへ。

玉川はタネボーを前から捕まえて育てていた。

コノハナ、そしてダーテングへ。

今玉川は4体ポケモンがいる。

アリスは5体である。

総合力ではアリスが高いがこの戦いはどうなるか。

「アイアンヘッド！」

「ローキック！」

おっと、キリキザンには効果抜群だな。
わざマシンで教えていた。

キリキザンはすつ転ぶ。

しかしローキックは威力の弱い攻撃、素早さを下げるが低ダメージ。

「もう一度ローキック！」

「させない！ 飛び込んでシザークロス！」

まあ、ローキックは足を蹴るからな。

飛び込んでくるから払うこともできないだろう。

「カウア！」

キリキザンのシザークロスがダーテングに当たる。

ん？

「ガワツ！」

当たったけど後ろに反らして衝撃を逃がし、そのまま両手を使い倒立のような感じになる。

それで体を捻りキリキザンの足を攻撃。

なんだこの神業。

「やりますね」

「そっちこそ」

互いにダメージを多く受けている。

俺ら選ばれたタイプ別のトレーナーの次にトップクラスだ。

「シザークロス！」

「だましようちー！」

あ、シザークロスをして突っ込んでくるのに対し、ダーテングは空中でクルクル回転し、腰部へ蹴りを入れる。

あ、キリキザンのヒットポイントがゼロになった。

玉川の勝利だ。

「いやあやっぱり強いですね」

「いやいやどっちが負けても可笑しくありませんでした。ツイていただけです」

「手強いですね……………」

礼節も玉川はわきまえている。

やるね。

「お前らよく頑張ったな」

「先輩！」

「広人さん……………」

「そんなお前らにプレゼントだ」

俺は二人にあるものを配る。

「え？ なんですかコレ？」

「食いかけてデスヨ？」

食べ残しだ。

ポケモンに持たせておくと、毎ターン終了時にHPが最大の1/16回復する。カビゴンだったり、ゴンベだったり関わったりして持ち物である。

偶然ジグザグマ共が持ってきた。

他にも珍しいかったり、高価な道具を拾ってくる。

アイツらレベル上がったし、いいのを持ってくるし優秀だな。

「あー持たせると回復する道具」

「そんな道具あるんですね……………」

不思議ですね。

こつちもよく分からない事が沢山あるんだ。

「さ、今日も夕方だし飯食ってくか？」

「いいんですか？ やったあー！」

まあ、多く食材を買いすぎたし問題ない。



「うっひょー、この好み焼き美味しいですね！」

「ソースとマヨネーズが合いますね」

「ありがとうございます」

「美味しい美味しい！」

「チーズとエビ入れてみようつと」

俺も後で食おう。

「そう言えば飛行機降りてから世界会議まで時間ありますよね」

「あ、そうだな。ニューヨーク観光しようかなって思ってるんだけどどこ行きたい？」

「ブロードウェイミュージカル！」

「自由の女神！」

「タイムズスクエア！」

「セントラルパーク！」

アルセウスまで答えた。

「この世界に結構浸かってるねキミ。」

取り敢えず予定立てておくか。

俺はチーズと海老が入ったお好み焼きを頼張るのだった。
うめえ。

飛行機

「さてと、ゲーム持っていこう」

「充電器あればの話なんだけどね」

今日は待ちに待ったアメリカへ。

世界会議に出席してきます！

「あ、そう言えばコンセントとか違うんだっけ？」

「飛行機の中で充電できるかな？」

「聞いてみようか」

日本とアメリカじゃコンセントの形は違うよな？

「あー機内食楽しみだのう」

「アルセウス、飛行機内はポケモンの持ち込み禁止だそうだ。身分証明書も無いし、パスポート作れなかった」

「え」

「貨物室で待っていてくれ。埋め合わせはする」

ハイジャック防止らしい。

ポケモンを持ち込んでいるかどうかわかる機械があるらしい。
配下達はエアカーゴで大人しくしている。

だから前にエサをやっていた。

……………アリスは身分証明書を偽造できる人間に知り合いがいるのか？

マファイアと知り合いの時点でいそうだ。

「取り敢えず持つていくもの確認するぞ」

アイマスクに常備薬、他にもリユックを入れる。

「あれ？ カップラーメン持つていくの？」

「小腹が空いたら食べようかなって」

たまに異様に食べたくなる事があるのだ。

お湯が切れないように気をつけなければ。

他にもウエットティッシュやマスク。

洗濯バサミ、S字フック。

「一応耳栓持つていこう」

「途中で飴でも買ってこよう」

確かファーストクラスだし、音は小さいだろうけど持つても損は無い。

物音には敏感だからな。

「先輩！ 迎えに来ましたよ！」

「広人さん。行きましょう！」

さあ、空港へ。



つてな訳で到着しました。

カウンターでチェックインしよう。

「おいパスポートもったよな？」

「持ってますよ」

「確認しましたし」

だよなー……………あれ？

「しまった。忘れてきた」ガサゴソ

「はい？」

やっべえやらかしたー！

どうしようどうしよう！

「仕方ない。俺が何とかしよう」

「アルセウス？」

アルセウスに連れられて外へ。

そして人気の無い場所に連れてかれる。

「ひとつ飛びして戻ろうか。まだ時間はあるしな」

「アルセウスさん……………」

君って重臣は……………。

「よし、乗るぞ！」

「合点承知之助！」

俺はアルセウスに乗る。

浮いて上空へ。

ビュウウウウウウウン!!

速い!?

何これ？ 新幹線超えてるんじゃないの？

アルセウスをガツチリ掴んでるので振り落とされない。

加護の力は偉大なり。

「ほら着いたぞ」

「助かった」

結構早くついた。

パスポートパスポート。



「いや、お待たせしました」

「先輩、気をつけて下さいよ」

「スマンスマン」

「広人さんなにか食べます？ まだフライトまで時間ありますが」

「チヨコレートパフェとドリンク」

「お腹壊すよ？」

「僕は軽食とデザートとかかの？ 時間かかるし燃費が悪い方だから食べておきたい」

確か13時間くらいフライトって話だし、陸の食べ物を食べておきたい。

アルセウスも燃費悪い方だし、食い溜めをした方がいいだろ。

「このパフェ美味しいな」

「このカツサンドも肉汁たつぷりじゃの。主の飯の方が美味しいが」

「小声で喋ろ」

それ言ったら失礼だろ。

外食する時の美味さってものがあるだろうに。

「そういえば主よ」

「なんだ？」

「四つ子の神の担当トレーナーとオフ会するって聞いたが？ 何食べるのじゃ？」

「ステーキだつて。企画したトレーナーがいてさ、言い出しついで費用を持つんだつて。

靴職人だから儲かってるらしい」

「へー靴職人ですか」

靴を作る仕事か。

どんな事をして靴を作るのだろうか。

仕事で思い出したが、木場君は昆虫学者になるらしい。

好きなものを仕事にするのは最高だろう。

俺は何の職業につこうか。ポケモン関係だろう。

公務員とかは？ あ、でもこの前の事もあるし嫌だな。

唯のパパのコネで就職って手もある。

それだとパパに愚痴愚痴言われそう。

最悪、きんのだま売ったりして無職のままも良いかもしれないが虚しい。

あ、きんのたまを資金源にして起業するのも良いかも。
ポケモン関係の会社もあるし。

何を売り物にしてけばいいのかわからないがな。

「ふう、腹いっぱい」

「ゲフ」



「ここがファーストクラスか」

金属探知機やパスポートしたりしたので搭乗ゲートへ。

色々入っていくと伸び伸びとした座席が。

「うっわー足伸ばせる」

「あ、パソコンとか繋げる事とか出来ますね」

あ、ファーストクラスを見渡してみると人が少ないようだ。

騒いでも平気だ。

「そういえば海外旅行とか行ったことあるのってどれくらいいる?」

「私よく海外いきますヨ?」

「へ〜」

アリスもよく行くんだ。

どうせ組関係とかだろ。マフィアとかと繋がってるし。

「イタリアとかによく遊びに行きますね。ママの本拠地なので」

そういえばアリスのママってどんな奴なんだろう。

黒田組の人間にも聞いたけど知らなかったり口を濁していた。

詮索しない方がいいな。

「そろそろ離陸らしいな。シートベルトしよう」

アナウンスが聞こえてきたので素直に従おう。

離陸したらパソコン開いて情報収集するか。

「ワクワクしますね」

「初めて飛行機乗る人はそう言う」

「緊張する……………」

唯、航空機に乗って死亡事故に遭遇する確率は0.0009%である。

結構安全だぞ？

観光

「Beef OR chicken?」

「……………」グツ

「手を握りしめるなよ……………」

アリス……………牛と鶏、どっち食べたいか聞いてるだけじゃないか。
別に家畜と聞いてるわけじゃないからな。

「beef」

「chicken please」

これが最後の機内食だな。

ファーストクラスの機内食も美味しかった。

「beef or chicken?」

「beef」

あーいい匂いしてきた。



さて、時間あるから観光するぞ！

まずは。

「うわ〜これが自由の女神ですか〜」

「結構大きいですね〜」

「写真撮るぞ」

「はいチーズ」

そう、ニューヨーク観光といえば自由の女神。

高さ48・05m 重さ225トン。

右手にはたいまつ、左手にはアメリカ合衆国の独立記念日である「1776年7月4日」とフランス革命勃発の日である「1789年7月14日」と、ローマ数字で書かれた銘板を持っている。

女神の左足をよく見ると一歩踏み出している。

足元には引きちぎられた鎖と足かせがあり、これを女神が踏みつけている。

これは全ての弾圧や抑圧からの解放と人類は皆自由で平等であることを象徴している。

「クラウンの方にも行けるらしいが予約制みたい」

「頭の方にもはいれるんですね」

登るまで長いらしい。

台座部分の中には博物館になっており、最上階で降りてから登るってさ。

7つの大陸と7つの海に「世界に自由が広まる」という意味で、女神がかぶっている冠には7つの突起があるんだって。

「……………あ、広人」

「あ、スノウ？ 何故ここに？」

「……………兄貴の付き添い」

声を掛けられたので振り返るとスノウが。

そういえば昨日アメリカに一足先に着いたって聞いたな。

兄貴の付き添い？

当の木島君はどこ行つたんですか？

「……………兄貴だったら」

……………おい、どこ指さしてる？ 上？

「あ、木島さんだ」

「よじ登ってますよ……………」

ああああ！ 本当だ!!

人が居ないからいいものを何を考えてんだ!?
大声だして呼んだら降りてきた。

「おい、危ないだろ……………」

「悪い悪い！ 高いところ登るの好きなんだ！」

流石に危ない。

命綱とかあればましだけどさ。

「チル」

「ああ、そらとぶを覚えさせてたか？」

「まあな。バランス崩した時に助けるように指示してある」

それだったらしいが。

周りの目を見ないのかね？

「それじゃ俺は他の所行くわ」

「……………じゃあな広人」

「ああ」

俺らも行こう。



はい、お次はセントラルパーク。

「美味しいなこれ」モグモグ

「アツアツがいいな」モグモグ

そういえばアルセウスに食事を与えるの忘れてた。

ハンバーガーとかこつてりしたのをモグモグしてる。

俺も一緒に小腹が空いたので頂く。

それにしても大都会なのに結構自然があるのつてのもいいもんだ。

ここには動物園や博物館、遊園地等があるつて。

博物館は映画の撮影で使われたらしい。俺も知っている映画だ。

その他の映画の撮影でも使われたそうだ。

「先輩、城に行きませんか？」

「あ、私馬車のりしたい」

「動物園行きたいデース」

「飯の補充！」

一人関係ないのいるな。

飯の補充してから行くか。

まず最初は城。

ベルヴェデーレ城だったな。

ゴシック様式とロマネスク様式が組み合わされたお城で、螺旋階段を上ると展望台、この場所からセントラルパークを一望できる。

「セントラル・パークが設計された頃にはもう既に建てられていたって」

「200年くらい前に立てられたらしいですねこの城」

ベルヴェデーレとはイタリア語で眺望の良い場所という意味がある。

そんなわけで展望台に登る。

確かタートルボンドだっけ目の前の池。

向こうを見るとニューヨークの街並みが見えた。

「もつと高いところ行きたいですね」

「後でビル街の方に行くから」

まあ、後で行くか。

次に来たのは動物園。

ここは熱帯雨林に住む動物がいるんだよな。

あとアシカのショーとか有名だ。

「先輩、あの大きなくちばしの鳥ってなんですか？」

「ドデカバシだな。南の方によく生息するポケモンだ」

やっぱり気候によって住む場所も違うらしく、寒い場所や高所の山には氷ポケモンがいて、温暖な気候はアローラ地方のポケモンがよくいるらしい。

「あれなんですか？ 四匹ポケモンが並んで踊ってますけど？」

「うわっ楽しそう」

オドリドリ四体。別々の形態だ。

オドリドリは、ある花の蜜を吸うとその姿を変えるポケモン。

ばちばちスタイル

ふらふらスタイル

めらめらスタイル

まいまいスタイル

そのオドリドリ達4体が舞台上で踊っていた。

「結構上手いですね」

そういえばミュージカルとかポケモンはやるのだろうか？

ポケモンコンテストとかもやったりして。

「動きのキレがいいですね」

しばらくオドリドリ達を見ているのだった。

次は馬車だな。

ギャロップが引いているようで、四人を軽々うごかしている。

「あまり海外旅行行ったことないからこういうの初めて」

「確かに馬車とかあまり日本にはありませんからね」

箱入り娘だったからな唯は。

「……………」タッタッタツ

アルセウスが小走りで悲しそうに走って着いてきている。

この馬車4人乗りなんだ。後でなにか買ってやるから。



タイムズスクエアに着いたのでカフェで休憩。

始めてきたけど凄い都会って感じがする。

着ぐるみの奴らとか多いが。

「そろそろ時間ですね」

「だな。ホテルに戻って必要な荷物持って行こう」

観光はタイムアップだ。

世界会議が終わってからまた時間あれば観光しよう。

「どんな奴らだろうな」

まだ見ぬ友やライバルに心が踊るのだった。

ライバル達

「ここが世界会議の場所か」

「大きなホテルですね」

世界会議に会場に来た俺たち。

その会場が高級ホテルなのだ。

「こういうホテルにはあまり来ないから緊張する」

「私は来てるけど……」

お嬢様だもんな。

品のある場所には結構来てるだろ。

「それじゃみんな入ろうか」

入口に入ると受付のようなどころがあつた。受付に俺らの名前を言う。

説明を聞くと案内してくれる人間について行くことに。

長い廊下を歩く。

流石高級ホテル。歩くだけで社交界デビューした気分だ。

あ、前方を見るとチャラ男がいる。

それとS5だっけ？ クソ兄貴を除いた奴らもいるぞ。

そういうえば兄貴は家族と仲良くシベリアにて働いているらしい。

結構寒い場所に送られたので雪が多いとか。

雪だるまやかまくらを作る事ができるな。

俺の住む地域じゃ雪はあまり降らないからな。

まあ、スノウにたまに様子を見させてるから面白いことがあつたら教えてくれるつて。

ちなみにクソ兄貴は不参加。

スノウ曰く、連絡ミスだそうだ。

「こちらです」

あれ？ チャラ男達は違う部屋に案内された？

トレーナー事に部屋が違うのか？

……………少し理解出来た。

混ぜるな危険って事？

「こちらです」

俺らが案内されたのは別の部屋。

他のトレーナーは違う扉に入っている。

まさか狂ったトレーナー共が押し込められてるんじゃないや……。

まあ、いい。

とりあえず入ろう。

ガチャ

「おっーほっほっほっほっ！ 豚のように泣きなさい!!」

「もつとお！ もつとおお!!」

ガチャ

「今の何だった？」

「……………」

「……………疲れてるんですかね？」

そうだよな。S Mプレイなんて見てないよな。

時差ボケかな？

「帰ったら温泉でも行くか」

「い、いいですね……」

ガチャ

「あーハッハッハッハッ！」

ガチャ

今、海。パンで走り回ってる中学生っぽいのがいたんだけど。

リアル海。パン野郎じゃねえか。

「普通陸で海。パンするか？」

「……………やっぱ疲れてるんですかね？」

幻覚見るほど疲れてるのか？

でも加護の力であまり疲れないんだが。

「次は閉めないぞ」

「もう諦めましょう」

そうだな現実逃避はやめよう。

少し虚しい。

さて、

ガチャ

「いやっほおおおおおおおう！」

「もつとぶつてええええええ!!」

「あっはっはっはっはっはっ」

「ひゃっはあああああああああ！」

「……………」

案の定頭のネジが吹っ飛んだ人間だ。
数十人だが騒いでいる。

「おい、ジゼルが騒がしいから止めてこいよ」

「断る。コレクションの整理で忙しいんだ」

何か写真を整理してるぞコイツ。

……盗撮か？ 紳士のおじさんに紹介しようか？

ガシ

「うおっ!!?」

「こんにちは、確か日本のトレーナーですね？」

何かを踏んだと思ったら人間が寝てた!?

なんなのコイツは？

「私、カルロと言います。草タイプの加護をもらったトレーナーです。今後よろしく」

「お、おう」

そういえば踏まれるのが好きなのとか聞いたがこいつか？ S Mプレイしてる人間もそうなのか？

踏まれるのに何か理由があるの？

「もう、日本の方だったら数人来てますよ？ ほら、あの上半身裸の」

鞍田のおじさん。

やっぱり服きてない。

あ、木羽のやつもいる。

森屋君もいるみたい。

「そうか。自己紹介いるか？」

「ええ」

「影山広人だ。悪タイプを使う」

「ほう……………」

「よろしくな」

他にも色々居そうなので声掛けてみよう。

見渡してみたら個人的なもの多いな。

「とりあえず座って何か食って飲もう」

「賛成」

あ、あの机に座ろう。

空いてる。

「よつこいしよ」

「それじゃ何か持ってくるか」

少し軽食が置いてある。
頂こう。

「えつとー」

スナック菓子多いな。

あ、ドリンクバーミツケ。

「さて、コーラ行くか」

「おい」

「ん？ わっ！」

後ろを振り返るとゴリゴリマツチヨ。

それは問題では無い。

「コーラ切れてるぞ。もうそろそろ係員が持ってきてくれる」カラン カラン

「あ、うん」

よく、赤ちゃんが着るヘビー服である。赤と白の横縞模様だ。

手に持つカランカランするのも持つてる。

大人に慣れない子供がいるとか言ってたな。

「サイダー飲むか」

「サイダーよりもメロンソーダの方がオススメだ」

勧められたの飲んでみたら美味しかった。



「そいつバーブンよ。フェアリータイプ使うのよ」

「外見からは考えられないな」

「そうね。でもいい人だからいいわよ」

女言葉なのだが男だ。しかも真つ赤な長髪のイケメン。

ヴォンさんって言うらしい。

炎タイプを使うとか。

「……………」

で、近くにいるパンクロッカーの服装の奴がロミスさん。スイッチが入ると騒がしいとか。

毒使いらしい。

この二人は大学の同級生で仲良いらしい。

「それで海パン小僧がジゼル。水タイプをつかうわ」

「すっげー元氣そうだな」

右方向の金髪の青年だ。イケメン。

「あれ何あった？」

「デイスよ。注意してなさい」

「注意？」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

発狂するトレーナーがいるって聞いたな。

「あいつよく発狂するのよね」

「濃いヤツしかいない」

「ここに普通の人間なんていないわ」

「俺も普通じゃないんだなあ」

平気で喋ってる時点で確定だな。

コイツらは特に問題無しって思ってるし。

むしろ話してて気が合う。

「他には——」

世界大会

「それでもう一人揃えば大学の三人トリオが揃うのに……」

「へ〜どんな変わったヤツだ？」

「飛び級で入った女の子なんだけど………今何やってるのかしら？」

「……………」

飛び級か〜実際にあるんだな。

小さいヤツでも大人より頭のいい人間もいるからな。

ガシヤーン

「ほお〜クズ共がいるのお!!」

な、なんだ？ 扉が開いて偉そうなオッサンが出てきた。

顔が悪そうな印象だ。

太ってるのも気にかかる。

「チツ、ゲス〜口よ」

「誰、あのおじさん」

「世界的大富豪よ？ トレーナー協会の出資者」

トレーナー協会なんてあったの？

初めて聞いた言葉。

「静かにしろカス共!!」

「いえええええええい!!」

「もつとおお! もつとぶつてえええ!!」

「わつはつはつはつ!!」

「ゲスーロ五月蠅いから止めてこいよ」

「やだね」

って言うか他のトレーナー共は奴の言葉をスルー。

まあ態度が酷いからそれが正解かもね。

無視した方がいいかも。バカは相手にしない。

「聞かんか貴様ら!!」

「いえええい!!」

「……………」カラン カラン

「ガアアアアアア!!」ドガン

「ほらほらほら! 卑しく鳴きなさい!!」

見事に暴れてる奴がいる。

だんまり決め込んでる人間もいるし。

「それで話戻そうか。飛び級なんてあるんだな」

「まあ、一応は」

「おい貴様」

ゲスーロさんでしたっけ？

俺に話しかけて来たんだけど。

相手にされないから俺に来るのか？

「聞こえんのか？ 貴様に言ってるんだが」

いきなりクズ扱いする人間なんか相手したくない。

弱そうだから突っかかり安いのか俺。

「チツ」

「なんだその態度は？ だったら貴様の大事な人間に不幸があってもいいのか。私達の計画に参加させようとおもったのになあ」

……………あ？ 今なんて言った？

何故そこまで言われなければならない。

「お、興味があるか？ 教えてやろう。貴様ら変態共のポケモントレーナーからポケモンを徴収して平等にトレーナーに分け与える。みんな幸せだ」

バカにしてるのお前？

奪われたトレーナーとポケモンは不幸だ。

「貴様なんぞ社会的に抹殺することなんか容易い」

『……………』 ザッ

あ、えれ？ 皆沈黙して集まってきた。

「お前何様のつもりだ？」

「俺らの仲間に出そうとはいいい度胸してる！」

「野望は阻止させてもらおうぞ！」

いつの間にか仲間になつてた。

「ま、どうせ世界大会で競うことになると思うけどね」

「だな」

「返り討ちだ馬鹿め」

世界大会つてなあに？

初めて聞いた単語ですけど？

「はっ、馬鹿どもが調子乗りおつて、今に見ておれ!!」

あー囲まれたからなのか逃げた。

でもコイツら言う事聞くと思うのか？

「で？ 今さっき言ってた世界大会ってのはなんなの？」

「ん〜もうそろそろ時間ね。モニターを見なさい」

モニターを？

あ、あつた。

ピンポンパンポン！

チャイムがなった。

それで左側のモニターに壮年の男性が映る。

『皆様こんにちは。トレーナー協会総帥、ロゲルタ・マルコスである』

「何この人？ 顔は見たことあるけど」

「協会が一番偉い人。世界の富の数十パーセントを握つてると言われてる人よ」

大富豪の中の大富豪だな。

見覚えはある。

ロゲルタは色々話していく、トレーナーが世界を動かす事や、何故ポケモンにこだわるか。

あ、自分のガーディについて自慢し始めた。

俺は半分くらいしか聞いていないがな。

世界大会の事を早く説明しろよ。

『———そこで！ 世界大会を開く事にした！ トレーナー達には通告してある通り1ヶ月後！』

「通告って？ そんな話聞いてないぞ？」

「あら？ 3、4ヶ月前に連絡来なかったかしら？」

「来てねえ」

アリスに目配せすると首を横に振る。

まさか国のミスか？

『更にはぐ褒美もある。優勝者には可能な範囲で願い事を叶えよう！』

「流石大富豪」

『諸君の熱き魂を楽しみにしている！』 ブチ

世界って事は色んな国の人間と戦えるってことだよな。

楽しみだ。

「それで、ゲス一口はその願い事を利用して私達のポケモンを奪う事を計画してるのよ。簡単に言えば強いポケモンの独占だって」

「配下のトレーナーも結構いるらしいぜ」

確かに実力がある人間は発言権は結構ある。

学校でも金持ちや喧嘩や頭のいい人間が威張っていたからよく分かる。

それを鼻にかけて嫌味な奴は嫌いだ。

しかし他のトレーナーが俺のポケモン使っても加護は発揮されないぞ？ 分かってんの？

「タイプの加護の事知ってるのかな？」

「ん？ 知らないと思うわ。数週間前にゲスーロに会ったけど私達が特殊な育て方やチートをしたとしか思ってるわよ。適当な答えをしておいたわ」

「俺の方も同様に1週間前に聞いてきた。どうしてそんなに強いのか質問されたぜ。無視したかな」

「あつはつはつはつはつ俺は昨日聞かれたぜ！ チートを独占するとか教えろってさ！！」

いつの間にか海パン小僧が話に入っていた。

つーか加護のこと知らないのかよアイツ。

……………負けられない。



「それじゃ行ってくる」

「気をつけてくださいいね」

「大丈夫だって、ポケモンいるから返り討ちだ」

たまに暴漢のような感じで勝負を仕掛けるトレーナーがいるらしい。

返り討ちにして賞金たんまり頂くか。

いよいよ待ちに待ったオフ会である。

「どんな奴らがいるんだろうか……………」

オフ会

「それにしてもすっげーネオン」

アメリカのニューヨークの夜の街並み。

進んだ都市だとよくわかる。

焼肉屋まで歩いて行ける距離まであつてよかつた。

しかし、銃を持つてる人間とかも多いので油断はしない。

あ、俺銃効かないか。

当たると痛いけど死なないし。

そういえばナイフとかどうなるんだろうか？

試したくない。

だが刺されても一晩で回復しそうだ。

「この国治安悪いからな……………」

「人通りの少ない道は歩かない、1人歩きは避ける、大金は持ち歩かない、現金は人前で
見せちゃダメだつて」

「ん？ 木羽？」

「奇遇だね。僕も用事があつたんだ」

ん？ 木羽君。

そつちも用事あつたんだ。

「まあな、この道まつすぐの店だから話でもしようか」

「僕もさ、いいよ」

？ 気になった事があるから聞こう。

「世界大会つて今日初めて聞いたけど、そつちは聞いてた？」

「確か市役所には通達されてないってさ」

「普通すると思う」

「森屋君の情報網でそんな話を事前に聞いた」

あのゲスロー口って奴の仕業か？

有り得るな。準備不足を狙ってるかもしれない。

まあ、無駄だな。

もう準備は完了している。

新入りも強くなつたしな。

「森屋君の情報網つて言つたけど、知り合いに権力者とかいるの？」

「知らないの？ 森屋君は政治家一族の人間だよ？」

あ、そういえば国会中継で森屋って単語があったような。しかも家が豪華だった。

「実は森屋家の山に無断で入って初めて会ったんだ」

「不法侵入……」

不法侵入か……紳士のおじさんやミュウツもやってたな。

……あれ？

「エスパークタイプの加護持つてる人っていた？」

「いや？ しらないよ？」

……………ミュウツの飼い主が来てると思ったけど。

来てないのか？ もしかして顔バレが怖い人間なのか？

国際指名手配とか。

「あ、……だ」

このステーキハウスだ。

肉汁の匂いが漂ってきた。

入口に入ろうとすると、

「あれ、着いてくるのか？」

「え？ だって……」

木羽は三本指を立てる。

ちなみにこれは前々から取り決めてたことで、四姉妹の偉い順にちなんで指を立てることにしていた。

三本って事は三女って事だ。

「担当の女神は姉妹だったんだな……………」

「ああ、偶然だね……………」

俺は二本指を立てた。

次女である。

「中入ろうか」

「うん」

店に入った。

ん〜いい匂いっ。

「すみませ〜ん。『四女神』で予約してるんですけどー」

「こちらです」

俺達は小部屋に移動することになった。

あく肉を焼きたい焼きたい焼きたい。

ついでにたい焼き食べたくなってきた。

日本に帰ったら食べよう。

「さて、この部屋か」

「人の気配があるな……」

カラカラ

「あれ、誰も居な——」

フミツ

「うおっ!？」

「わっ!」

何か踏んだ!? デジャヴ!?

「また踏まれてしまいましたね」

ここ、コイツは草タイプを使うトレーナー、カルロ!

「これも奇遇……」

カルロは四本指を立てた。

こいつもか。

なんでコイツ踏まれるのが好きなのだろうか?

「座りませんか? 水でも飲んでお話ししましょうか」

「まあ、いいけど」

長女担当トレーナーはどうなったのだろうか。

まだ来ていない。

「そういえば何で踏まれるんだ？」

「実は私は靴職人です、踏まれればどれだけいい靴かよく分かります」
「ええっ」

あゝ他の奴にも踏まれてたなコイツ。

「靴は人間が出ているので、踏まれればどんな人間が分かるんですよ」

「そうなのかよ……………」

人を見る目があるとは聞くが、踏まれて人間がわかるんだな。

「俺はどんな結果？」

「寛容……………ですね。滅多な事じゃ怒りませんよね？」

「あー確かに大した事じゃ俺は怒らない」

玉川殴られたり、二葉を馬鹿にされてキレたり。

結構怒っている事おおいけど大した事じゃないと怒らないな。

「木羽は？ 踏まれてなかったけ？」

「ええ、虫への愛にありふれています」

「当たってる」

虫タイプでポケモンリーグを制覇しただけはある。

毎日のように山に登って虫ポケの研究をしていると森屋君から聞いたし。

「待たせたわね!!」ガラガラガラ

「あ?」

ドラゴン使いのメリルだったけ?

勢いよくドアを開ける。

フミツ

「きゃあ!」

「あれ!? いつの間に!」

カルロがいつの間にかメルルに踏まれてた。

今さっきまで近くで座ってたんだけど。

「何よアンタ!」

「靴職人です」

「いや訳わかんないわよ!」

「この人は……」

赤髪のツインテール。

えっと確かメリルだっけ? ドラゴンを使うとか。

あ、一本指を立てた。

コイツが長女の担当か。

「さて、肉を頼みましようか」

「……………」



ジュージュー

お、美味そう。

音が鳴りながら皿に乗ってる。

赤身の肉のステーキ。

あまり日本じゃ食べないから珍しい。

「美味い……………」

「肉最高……………」

うめえー熟成してるぜ。

流石肉文化だなアメリカは。

ご飯欲しくなってきた。

だけどご飯食べずにおかずを食べるのもいいよね。

「そういえば広人の担当の女神ってどんな奴？」

「普通に真面目そうな奴だけど」

「……………他は？」

「私の担当は偉そうで痛い奴よ。すぐカッコつけるわ」

「私の担当は明るいですけどドライですな」

「僕の担当は口数少ないんだけど、四姉妹とも性格違うね……………」

やっぱり人も神も一緒だな。人によって性格も違うように神も違うようだ。

「四つ子って聞いたけど外見同じなのか？」

「確認しよう。紫の髪で和服、140cmくらい。左側頭部に紫のリボン。座敷童子つ

てのが正しいのかな？」

「俺もそんな外見だ。だけど二葉は緑のリボンだぞ」

「私も外見は一緒です。ですがピンクと黄色のリボンです」

「私の担当は赤と青のリボンよ？」

外見は一緒だけどリボンの色と数は違うのか。

リボンを取り替えられて喋らなかつたら判別できなさそうだ。

それにしても肉美味しいな。

「たまに殴りあいとか起きるって」

「怖いな」

二葉とかも参加してるのだろうか？ 有り得る、逆ギレして喧嘩になりそうだ。

口数少ない人間もキレたら暴れるのがなぜか想像出来る。

性格上、1番目と4番目が火種になったりして。

少しか話せなかったけど機会があればもっとゆっくり話してみたいな。

「肉ってお代わりできるかな？」

「俺もお代わり」

そして4人ともお代わりするのだった。

美味すぎるわ!!

ストリートファイター

食後、俺達はニューヨークの市街を歩いていった。

お口直しのガムをみんな噛んでいる。

「何か少し食い足りないな」

「あ、僕も」

「私も少しだけ」

「私はジュース飲みたい」

ステーキを食べ終わったのだが、少し小腹がすいた。

せっかく外国に来たんだし、まだ楽しみたい。

「あ、軽食とか売ってる店あるからそこ行こうか？ ハンバーガーとかあるって」

「いいね行こう」

「飲み物置いてあるかしら？」

アメリカに来る前に調べておいた。

予習だな。

「お姉さん」

「何かしら?」

何か呼び止められた。

キヤッチか? 無視しろ。

「良かったらストリートバトルを見てみませんか?」

「ストリートバトル?」

「あ、少し聞いたことありますね。違法の賭けポケモンバトルとか」

違法賭博!!

捕まっても文句が言えないだろ!!

「いえいえ違法ではありません。上に許可を貰ってますし」

「本当か?」

「本当ですよ」

マフィアとかギャングに上納金でも渡してるってオチだろ?

「結構観光客とか腕試しや観戦に来るんですよ」

「あ、確かにそんな話がありますね。ネットにも書いてたような……………」

ホントか?

「面白そうだから行きましょう」

「そうだね。ちよつと気になるし」

つてな感じで行く事になった。



「ボス連れてきましたぜ」

「ご苦労、ドム」

連れてこられたんだけど………ホントにココがストリートバトルの会場か？
広場だけど観客が居ないし、ガラの悪い兄ちゃん達に囲まれている。

「ココがストリートバトルの会場でいいのか？」

「ぶツ……何言ってるんだお前え？」

「クツクツアツハハハハハ」

「アツハハハハハっ？」

「ぎっぴやはははははは！」

「ヴァアアガ！」

「アパパパパ」

「うっーびびびひひ！」

笑い方変だなコイツら。

で、大体は予想つくんだけど。

「ここはストリートバトルする場所じゃねえよw」

「場所はもつと離れた所にあるんだよw」

あ、あるにはあるけどここは偽物って事か。

ややこしいな。

それで、目的はポケモンバトルで金を巻き上げるって事か？

「さて、バトルを始めようか。賞金や道具を沢山貰うとしよう」

「拒否権は無いよ〜んw」

ちなみに多人数でバトルするとその分貰える賞金が減るって話がある。

リンチはローリスクローリターン。

その代わり、多人数相手に勝利するといつもより賞金はその分沢山貰えるとか。

返り討ちはハイリスクハイリターン。

前、数十人のトレーナーを返り討ちし、結構儲けた唯やアルセウスに回らないお寿司

をご馳走した。

話を戻そう。

一見するとポケモンバトルするチームと、とおせんぼするチームで別れてるみたいだ。

全員でやるわけでは無いらしい。

(なあ、俺らが選ばれたトレーナーって知らないのか？ 似た場面がよくあるんだけど)

(私もよくあるわよ)

(僕も)

(私もです)

皆この場面とか体験してるんだね。

他の奴らも体験してそう。

コイツは変態だからチョロそうとか。

(俺はいつも無双して賞金をかさらうんだが、そっちは?)

(私も同じですよ)

このパターンだと逆に飽きてくるな。

俺も少し飽きた。

もつと多人数で挑んでいいのよ?

「さて、勝負だw」

「……………」

「ノコノコ着いてきた方が悪いんだよ〜ん！」

「馬鹿な観光客だなwww」

草生えてるなコイツら。

カモがノコノコやってきたし。

それにコイツらの所持品は高価なのが多そうだし金持ってそう。

(誰やる？ 一人で十分そうなんだけど)

(私やるわ)

メリル、確か強いつて二葉が言ってた。

ドラゴンだよな。

「行け、クサイハナ！」

「サイドン、バトルスタンバイ！」

「ゴー、ゴリキー！」

「カモン、シードラ！」

調子乗ったこと言っついて？

進化条件とかしらないかよ。

「行つて、カイリユー」

お、600族だ。

無双だな。

「しんぞくー！」

「リュ」

ヒュンヒュンヒュンヒュン

「ハナ!?!」

「グオツ!?!」

「ゴオツ!?!」

「ドオラ!?!」

「「「は?」「」」」

俺には見えていた。

「……何が起きたの?」

「さ、さあ」

ポケモン達の顎をぶっ叩いていた。

常人じゃ分からない速さだ。

「おい! お前らもかかれ!」

「へ、へい!」

とおせんぼや見張りの役も戦うようだ。

そりやそうだ。負けたら賞金取られるんだからな。

「行っけえええ!」

「カイリユウ、しんそく」

「リユ」

あ、カイリユウはおまもりこばん持っているぞ。

貯まるだろうな金。

平均してこのチンピラ共は三体ほどしかポケモンは持ってないようだ。

それで、全員のポケモンが大体が残り一体になった。

「くつ、クソオ……」

「なんだよお………」

「めちやくちやつええじゃねえか……」

さっきの調子乗ってたのが嘘みたい。

ビフォーアフターが激しい。希望に溢れた顔が絶望した顔へ。

どんだけ貰えるかな〜♪

確かポケモンが強くて、お金持ちほど多く貰える傾向が高いって聞いたことがある。

「カイリユウ、しんそく♪」

「リユ」



「このハンバーガー美味しいわね」モグモグ

「ホントだな。タレが特に」モグモグ

チンピラからは40万程巻き上げた。

結構もってたな。

「次コレ食べるか」

「俺はこれ」

「いいわよいいわよ！ じゃんじゃん奢るわ！」

アルセウスに夜食代わりにテイクアウトしてやるか。

こうして楽しく二次会をするのだった。

ダブルバトル

「さて、二日目ですね」

「それで二日目は広場でポケモンを出して全員で参加するって」

「のんびり行かない？」

「時間守る義務はないしな」

はい、二日目である。

今日はトレーナーとの交流を行う日なのだ。

皆どんなポケモンを育ててるか気になるし、トレーナー同士の情報交換なんてのもある。

バトルで偵察や小遣い稼ぎのトレーナーとかもいそう。

まあアメリカまで来たんだし、金持ってそうなトレーナーに声を掛けて挑んでみよう。

気分はラスベガスだ。多分金持ちとか多そう。

「あ、スノウさん達は観光して帰るそうですよ」

「行かないんだ。この前の事あるし」

「ブロードウェイへ行くとか言っていました」

この前の会合で絡まれたからな。

あれ気分悪いし関わりたくないか。

あ、もしかしたらまた囲まれるかもしれない。

「変装しよう」

「賛成です。その手のお店が近くにあるので行きましょう」

俺はアフロのカツラ、マスクを装備。

他は化粧や髪型を変える。

「私やった事ないわ」

「ああ、教えるので御安心を」

アリスが玉川と唯にレクチャー。

すると見違えるほどに。

「どこの美人かと思った」

「やだ、先輩つたらお上手！」

お世辞じゃないぞ。

ホントだぞ。

っつてわけで広場に。

トレーナーの数が日本と違い多い。

なので沢山ポケモンを出している。

「もしナンパされそうになったら守ってくださいね」ギユ

「ん……………まあな」

「俺の女に何をする！　っつて言ってください」

「気分が乗ったらな」

悪質なのからは遠ざけてやる。

日本のトレーナーと同じくフリーガンみたいな奴らとかもいるだろうし。

「だけど色んな人がいるね」

ホントだな。

見渡してみると準伝説や600族とかいる。

ゲームとかやった事ある人間も結構いるようだ。

「あ、色違いのペリッパですよ！」

「あそこには色違いのカクレオンが」

他にも色違いのポケモンを自慢する奴らもいるようだ。出会いとか待ってるのかね？

あ、青いヤンヤンマとピンクのユレイドルだ。

ドン

あ？　なんだあれ？

いきなりバトルフィールドが出現した。

「な、なんですかあれ!？」

「ああ、確かフィールドクリエイトって加護らしいですよ」

「何それ?」

「私も聞いた話ですけど、バトルフィールドを具現化する加護です。持つてる人によってフィールドの種類が違うとか」

どこでも戦えるってことだな。

今出現しているフィールドは砂のフィールドだ。

他にも種類とかあるのか？　水とか森とか。

さてさてトレーナーが戦い始めている。

あ、観客に被害が受けないようにバリアを張ってるな。

「YO兄ちゃん!」

「ん？」

「俺らと戦おうZE?」

「やろうYO!」

なんだろうか? ラップパーみたいなコンビが勝負を仕掛けてきたぞ。

世界会議の部屋で見かけたな。

話さなかったけど。

「げ、ロックスレイ兄弟……」ヒソヒソ

「格闘使いの唯一の傘下が何故ここに」ヒソヒソ

「この前マルチバトルの大会で優勝してたな」ヒソヒソ

あ、マルチバトルの大会ってあったんだ。

ダブルバトルの大会とかもありそうだ。

格闘使いの傘下? 加護持ちか。

「まあ、いいけど」

少しくらいはバトルしても問題無し。

「兄ちゃんYO、どっかで会ったことないかYO?」

「どっかで会ったことあるZE?」

コイツら……鋭いな。

「そのアフロどつかで見た事あるYO!」
そっちかよ。



ドオオン

つて事でフィールドクリエイトの加護持ちがいたんで頼んで作ってもらった(有料)。
金はあるので痛い出費ではない。

「行くYO!」

「準備はいいZE?」

ルールはダブルバトル。

手持ちは二対二。フィールドは草むら。

俺は一人だが、そっちは二人。

玉川達と組めつて話だが、この世界になってマルチバトルはやった事ない。

ゲームでもバトルタワーでマルチバトルは不得意だった。

向こうはマルチだが俺はダブルバトルで挑む。

不慣れ。

「行くＺＥ、カポエラーー！」

「行くＹＯ、カイリキーー！」

「ゲッコウガ、ヤミラミ。行けっ！」

カポエラーーか。

攻撃と防御を一緒にするんだよな。薬使ったのか。

カイリキーも通信交換しないと進化しないポケモンだ。バックにトレーナーがいるのは間違いない。

で、格闘使いの傘下。

玉川達レベルのトレーナーと見る。

「カポエラーー、こうそくスピンドＺＥ！」

「カイリキー、クロスチョップだＹＯ！」

「ヤミラミ、カイリキーにいばる」

「ヤミ」

特性、いたずらごころ。

変化技を先手で撃てる。

「リキィ!?!」

「ゲッコウガ、カポエラーーにじんつうりき」

「クガ」

「カポオ!?!」

カイリキー、こんらん。

カポエラー、吹っ飛ばけどしぶとく後2・3割のHP。

「カポエラー!　ギガインパクトだZE!」

「カイリキー!　かみなりパンチだYO!」

「ゲッコウガ、もう一度カポエラーにじんつうりき。ヤミラミはもう一度カイリキーに
いばる」

ヤミラミ、カイリキーにまたいばるをぶつけて攻撃力を上げる。

ゲッコウガはじんつうりきをカポエラーに当てる。案の定瀕死に。

あ、カイリキーが自分を攻撃。

ヒットポイントが三分の一に。

自分の攻撃力が仇になるとはな。

「諦めるなよYO、カイリキー!　バレットパンチだYO!」

「ヤミラミ、いばる。ゲッコウガはじんつうりき」

先制技か。こっちの方が優先だしヤミラミはまた攻撃力を上げる。

カイリキーの攻撃。

「クガ?!」

ふえ!?! 当たった!?

うおっと危ねえ。HPが一・二割残った。

そしてカイリキーにじんつうりきがヒット。

俺はバトルに勝利したのだった。



「次は世界大会でやろうYO!」

「ああ、機会があればな」

一応素性をばらした。

ゲス一口を打倒するのに協力関係は必要。

「さて、他のトレーナーも見るか」

「主よ、あそこにアイス売ってるから買って」

「いいよ」

メガネ野郎

「このアイスイマイチだの」

「確かにもう少し甘みが欲しい」

ミントの味も良いが、甘い物の方が好みだ。

せがむので金を渡してホットドック屋にアルセウスは直行した。

俺は玉川達とベンチで座る。

「それで強いやついるか？」

「あんまりいませんね」

見渡してみるとそこまで強くなく、よく動画とかでみるポケモンバトルだ。

フィールドクリエイトで作った場所での戦いを凄く熱心に観戦している観客とか結構いる。

それで俺らにとっては大してない戦いに歓声が上がっていた。

「一人ヤバそうなのがいるそうですヨ？」

「80人抜きしてるトレーナーがいるそうです。今通りかかった人が話してました」

80人抜き……腕試しか。

どんなのだろう。

「何かの商品を賭けてる見たいです」

「珍しいきのみって誰か話してた」

あ、確かに珍しいきのみとかあまり見ない。

スターの実とかどこにあるのだろうか？

なつきとかダメージ減らしたりとかあったな。

回復とか状態異常からの復帰も。

一応きのみとかジグザグマで集めてるのだが全種類は集めていない。

時期や場所によって生息は違うらしい。

「面白そうだから見に行くか」

木の実によつては参戦するべきだな。

おやつに使えるのがいい。

あ、フィールドクリエイイトで場所を作ってるらしい。

ん、岩場か。

そこにはメガネのスイツの男と短パン小僧。

「ジバコイル、ほうでん！」

「ジュプトルウウ!?!」

ほうでんでジユプトルがノックアウトだ。
草には電気は効果今ひとつ。

「くっそっつ!!」

「これで99人。弱すぎる」

発言したのはメガネのビジネスマン風の男。

コイツがきのみを持っているんだな。

ん？ あれ？ コイツ世界会議で見たぞ。

何か拭いていたのだから見てなかった。

「全く、ここには強いトレーナーいないのかな？」

無双状態って事ですよね。

分かるわ気持ち。

「このきのみが欲しくないんですかね」

あの実……見た事ないな。

俺は持ってないきのみだ。

「よし、私が行く」

「唯？」

マジでいくのか？

確かに強くなつたけどあいつ結構強いと思うぞ。

「よし次は私が相手！」

「ほう、威勢のいいお嬢さんだ」

唯が立候補する。

「おや？ 貴方は？」

「ん？」

「どっかで見た事あるような……………」

「…………どっかで会つたな」

「ええ、そのアフロに見覚えが…………」

またそっちかよ!?



さて、唯とメガネ野郎のディアンとの対戦。

ディアンはフィールドクリエイトの加護持ちで、数個のフィールドを持つてるそう
だ。

ちなみに今回は草原。

ルールは三対三のシングル。

俺の直感だとコイツは変態の仲間だろうし、何かタイプの加護持ちか？

「それじゃ行きましようか」

「こいー！」

バトルスタート！

「行け！ ジバコイル！」

「行け、ドラピオン！」

ドラピオン、どく・あくのポケモン。

木羽君から譲って貰ったのにや。

通信交換なのでレベルの上がりが高い。

ジバコイルは連投か。

勝つチャンスはある。

「ドラピオン、ほのおのキバ！」

トライアタックの前にドラピオンのほのおのキバが炸裂。

あ、ダメージはあまり受けてないようだ。

「ジバコイル、トライアタック」

「ドオ!？」

ドラピオンを振りほどき空中に放り出される。
トライアタックがヒット。

「ドオ……」

うわっ、ダメージを受けている。

何らかの加護持ちか？

ビリリ

うっわあ!?! 麻痺したぞドラピオン!?

「ジバコイル、ほうでん」

「……」

「ドオ!?!」

うっ………HPがあと少し。

強いぞこの相手。

「ラスターカノン!」

「……」

ドカーン

「ド、ドオ!?!」

ドラピオンが倒れた。

唯もそこまで弱くない。

これが……世界。

「行つて、ドンカラス！」

相性が悪い相手。

最近やみのいしを与え進化した。

最近進化の石が高値で売られてるらしい。

金よりも高く売れるとかなんとか。

石は集めてる俺は勝ち組。

「ドンカラス、つじぎり！」

「ジバコイル、ほうでん」

一応つじぎりは当たるのだが大して聞いていない。

「……………」ドカーン

ほうでんがドンカラスにヒットする。

「カアアアアアア!!」

効果抜群の上に急所に当たったようだ。

倒れるのは予想出来た。

「頑張つて、アブソル！」

「ここでアブソルの登場だ。」

「行くわよ……メガシンカ!」

「ほお」

ブレスレット型のキーストーンから光が溢れる。

その光がアブソルを包み込む。

そして、

「ガウ」

翼の生えたメガアブソルだ。

「ふいうち!」

「アブツ!」

ふいうちが当たる。

あ、ドラピオンやドンカラスよりもダメージがはいつてる。

「ふう、ラスターカノン」

「……………」

「アブオ!?!」

ラスターカノンがメガアブソルにヒツ……………ん?

……………あ、あれ? ほうでんよりも威力強くない?

HPが僅かしか無くなった。

もしかして……………。

「言ってませんでしたっけ？ 自分鋼タイプの加護持ちですよ？」

ほうでんぱっかり使ってるから電気タイプの加護持ちだと思ってた。

「どどめだ！ マグネットボム！」

「オプオ!？」

「アブソル!？」

メガアブソルのHPがゼロに。

ディアンの勝利だ。



「まさか変装してるとは」

「まあな、その方が厄介事を避けられる」

正体をばらした。

「そうだ。この木の実良かったらどうぞ」

「いいのか？ 持ってないから助かる」

「先行投資ですよ。それに沢山持ってますし」

えっと何があるかな？

ニクの実

トツポの実

ビスナの実

上からニンク、じゃがいも、茄子である。

ちなみにきのみは人間でも食べられるので料理に使うことが出来る。

やった、食費が浮くぜ。

「それじゃホテルに戻りますか。それでは世界大会で会いましょう」

「じゃあな〜」

また出合いがあったのだった。

今回の標的

「もう飽きたから帰ろう」

「だな、色違いだからなんだって話だ」

色が違うからと言って珍しいだけで強いとは限らない。

大事なのは中身だよ。

ポケモンバトルをよくやっているが、そこまで強くはないので退屈。

見てたらトレーナーがポケモンの技を命令する時に、変なポーズしてるけどあれって意味あるのかな？ アニメでも多少気になってた。

勿論俺はそんなことやらないよ？ 恥ずかしいし。

「あれ？ S5でしたっけ？ なんかやってますよ」

「クソ兄貴はロシアですね」

「今頃クマとかと戯れてるんだろうな……………」

どうせクズ兄貴は雪国生活を楽しんでるだろうな。

雪合戦とか一度やってみたいな。

「面白そうだから行ってみようぜ」

変装してるからバレないだろうし、関わらなければ厄介事にはならない。



「くっ!」

「遊星!」

「おいおいどうしたあ? もう終わりかあ!」

聖沢遊星だったけ?

お前結構強いつて聞いたけど。

「ジャパンはポケモン発祥の地だって聞いたが大したことねーな」

「くっ……」

観戦モードにしているが聖沢のポケモンは一体。

相手のポケモンは残り四体。

日本トップクラスなのに負けるってことは加護持ちか?

だけど変態達の中にはこんな奴いなかった。

「トドメだ! バシャーモ、ブレイズキック!」

「グレイシアアアア!!」

あー聖沢負けた。

「やっぱり弱いな。二体倒せたのはよくやったが」

「お前、なんなんだ!」

何処のトレーナーだ?

「ああ、実はな、ヒロト・カゲヤマと同じトップクラスの实力を見て来いってMr.ゲ

スーロに頼まれてな」

「カゲヤマヒロトの?」

あれ? 俺関係?

敵かよ。

「それでゲスーロ派で一番強い俺に白羽の矢が立ったって訳だ」

俺とコイツの強さ違うぞ。

コイツらの派閥は色々と勘違いしてるんじゃないか?

「何をする気だ……」

「決まってるだろ世界大会でコテンパンにするつもりさ」

無理だな。

俺にたどり着くまでに他の変態に返り討ちにされそう。

今、コイツがボロクソになるイメージが出たわ。

「……させない」

「は？」

「お前がたどり着くまでに倒してやる！」

たどり着くまでに倒しても倒されても俺に負けるって結果は変わらないがな。

「フツ面白い奴だ。俺の名前はレックル、世界大会で会おう」

レックルだっけ？ 満足して去って行つた。

酷いと思うが、今のは茶番とかしか思わなかつた。



「つて言つてたけど」

「途中から見てましたけど先輩の方がはるかに強いですよ」

「またいつもの無双か……」

「ピザ美味しいの」モグモグ

俺もシーフードピザを頬張る。美味しい。

トレーナーの集まりから離れ食事をしていた。

目立ちたい奴らとか多かつたな。

「それにしてもゲスローか……」

嫌な事言ってくるし、汚い事とかもやりそう。

ポケモンバトル前の下剤とか注意だな。

P r r r r r r r r

あ、スノウからだ。

なんだろうか？

『……………よう』

『ヤア、オヒサジブリ』

「スノウとポリゴンか」

天才ハツカーと電腦ポケモン様が何のご要件で？

「スノウどうした？」

『……………レックルってトレーナーの事』

「盗聴じゃないですか」

今さっきのトレーナーの事か？

『……………確かにトップクラスのトレーナー』

「うんうん」

『……………ただタイプ加護持ちのトレーナーには劣る』

「だろうね」

見れば分かると思いますがね。

言われなくても圧勝。

『……………技マシンは沢山持つてるって話』

『ウン、タンケンセットツテノガアルケド、ワザマシンガトレルツテ』

あ、技マシンを発掘出来るんだ。

ボールやきのみを取れるからありそう。

『……………あとポケモンとエンカウントしやすい加護を持つてるって』

『オンオフキノウツキダツテ』

加護っても色々あるんだな。

「ハッキングして聞いたの？」

『……………違う、ブログ作ってるから見た』

あ、分かる。ポケモントレーナーのブログとか結構儲かりそう。

自分のポケモンを公開してそうだな。

技マシンとか売って生活する方法もあるか。

『……………だから大して気にしなくていい』

「オーケー今後の敵は変態達か……………」

鋼使いのディアンは強そうだったな。

他にもメリルのカイリユーも早くてヤバかった。対策はあるのだが胡座かいてちやダメだな。



夜。

「凄い綺麗ですね……………」

「まあな、予約して空いてたから良かったぜ」

話したら今の時期空いてるらしく、予約を取ったら簡単に出来たし。

で、今いるのは夜景の見えるレストラン。

「うっひょーロブスター！」

「ムール貝もあるな」

「日本じゃ食べませんよね」

「お昼も食べたから太りそう……………」

「私は胸の方に栄養が行くんで平気デース」

「あ、私もです」

「……………」

やっぱそんな体質の人とかもいるんだな。

少しくらいお腹に脂肪があっても俺は気にしないのだが。

「美味しいですね」

「夜景も綺麗ですしムードがありますよ」

一度ニューヨークの100万ドルの夜景を見ながら食事をしてみたかったのだ。

「後で展望台に行くか。屋上にあるらしい」

「いいですね。行きましょっか」

屋上から見た方が雰囲気あるだろう。

全方位見渡せる。

食後も俺らは夜景を楽しむのだった。

修行場

「beef or chicken?」

「chicken」

そろそろ数時間すれば日本に到着だ。

アメリカ編はもう終わり。

「こう楽しむと惜しむな」

「ええ、でも同じく帰ってきたって感じですね……………」

名残惜しい。

まだ休んでいたい。ピーターパン症候群みたい。

「それで? 世界大会まで1ヶ月って事になりましたけど……………」

「三四ヶ月くらい前から通達してたとか言ってたけど」

「気になったので調べましたけど、市役所に通達されてないみたいですね」

「日本のトレーナーのみ通達されてないって。木島さんに聞いたら初耳だったとか」

おかしいなあ。

ゲスローの仕業か?

「まあ、そこは人脈で調べておきますね」

「助かる」

確か情報屋だっけ？

知り合い多いなコイツ。

「あゝ日本食が恋しくなるから牛丼屋にでも行くか」

「……よく食べれますね」



「ふう、やっと帰ってきた……」

「疲れたね」

「俺は寝るぞ」

アメリカから帰国後、俺達は日本へ帰ってきた。

家に入った途端に脱力が体にのしかかる。

俺も休むとしますかな。

「ZZZZZ」

「寝るの早いな」

「まあね、結構興奮してたし、色んなの食べたからな」

異文化に触れるのも悪くは無い。

むしろ楽しい。

「それで？ 1ヶ月の間は何するの？」

「修行場巡りをしようと思う」

「修行場？」

その名の通り修行する場所だ。

木羽君に教えてもらった。

世界各地に高レベルのポケモンが沢山いる場所があるらしい。

例えばアマゾンの奥地や南極の中心辺り、サハラ砂漠等々色々各地にあるのだとか。

もちろん日本にもある。

「一番近いのは富士の樹海だな」

「樹海……………」

そう、富士の樹海である。

ゲームではシロガネ山と被る場所なのだ。

ここには高レベルのポケモン達がゾロゾロいるらしい。

木羽君や森屋君もレベル上げによく行くらしく、道具も結構落ちていたりとか。

で、聞いた話によると、リングマの生息密度が高いらしい。

ひこうタイプのポケモンとかも比率が高いってさ。

「なんか迷ったらヤバそう………」

「案外大丈夫だそうだぞ?」

青木ケ原樹海は一步入ると出られないという俗説があるが、遊歩道や案内看板も多く、近くにはキャンプ場や公園、樹海を一望できる展望台、風穴、氷穴などがある観光地である。

しかし、遊歩道を外れて森に入った場合は遊歩道より200メートル以上離れた地点で遊歩道や案内看板が見えない場合はどこを見ても木しかない。

樹海に限ったことではなく、深い森ならどこでも同じであるのだが。

「ヤバかったら方位磁針を使うなり、携帯でGPSを使って帰ればいいし」

ちなみに方位磁針やGPSが使えないと言う俗説もデマ。

確かに地中に磁鉄鉱という磁力を帯びる鉱物があるが、若干狂うだけで大幅には狂わないだとか。

携帯機器は密集した木により電波が遮断されるとかで使えないことがあるらしく、近年では基地局が作られ携帯機器が繋がりがよくなるとか。

「そっか、ついでにキャンプでもする?」

「いいね。飯盒炊爨とかやってみたかった」

近くにキャンプ場とかもあるし、休みの日にいいかもしれない。

満点の星空の下でカレーライスつてのもいいかもしれない。

「カレー食べたい!」

「いいね」

焼肉も食べたい。焼き魚もいいかも。

「儂シチュー食べたい!」

「いつの間にか起きた?」

飯の話になると食いつく。

アルセウスにも協力してもらおうから。

移動とか。

「他に修行場ってあるの?」

「あるぞ」

富士の樹海の他にもいくつかあるので説明。

北海道は何個かあるらしいので省く。

山や湖、自然のスポットが沢山あるとか。

本州に行くとき、恐山とかゴーストタイプが多く生息、比叡山はエスパークタイプが多いとか。

他にも琵琶湖、秋芳洞、西表島等々も修行スポットだとか。

「北海道って確か火山もあつたよね」

「ああ、そこも修行場らしい」

案の定炎タイプとか出現してると。そこにヒードランとかもいそう。

「琵琶湖ってやっぱり水タイプ？」

「ああ、ギャラドスやホエルオーがよく目撃されているって」

日本一巨大な湖だから沢山ポケモンが泳いでそう。

水タイプが結構いるらしいので釣り人には人気のスポットだとか。

奥の方へ行けば行くほど高レベルだとか。

アメリカで木羽君からルアーボールを貰ったので使ってみようか。

北海道も湖多いから期待できるかも。

……一応ダイビングの技マシンとか用意した方がいいかも。

湖の底とかに道具とかあつたり、海底洞窟とかあるかもしれない。

何かあるかね？

「西表島って何か珍しいのいそうだね」

「ああ、いるらしい」

マングローブ林とかサンゴ礁とかあるし、観光スポットとして最高だ。

その島ではアローラ地方のポケモン達が沢山いて、色々な島の中でも激戦区らしい。島のボスモンスターは巨大なキテルグマであり、現地民との共存を考えてるらしい温和な性格で、ポケモン達は人は迷惑をかけないとか。

そのキテルグマは抱き締め行為をするのだが、手加減は知ってるらしくケガはしない程度でやってるとか。

「聞いていると楽しみになってきた……………」

「俺も」

ついでに観光もいいかも。

休みの日を利用して、アルセウスを足にして行こうかと思っている。

他の変態トレーナーも修行場で鍛えてるって話だ。

俺も胡座かいてちやいけいなしな。

キャンプ

ただ今俺や唯、アルセウスは富士の樹海にいた。

「ガオガエン！ かみなりパンチ！」

「ガオ!!」

「キュ!?!」

大きなラツタにガオガエンが攻撃。

ラツタは瀕死になって逃げた。

「ここ強くない?」

「本当に強いな」

レベル50のポケモンとかわんさか。

いいなあ。今度から通おうかな?

「ゴォー!」

「ゴーリキーだ」

カイリキーの進化前だ。

「つばめ返し!!」

「ガオ！」

「ゴオ!?!」

ツバメ返しがあごにヒット。

瀕死になって逃げる。

あくタイプの加護つてば凄い。

チートつた言っても過言じゃない。

「もう少し奥まで行ってみない？」

「もうそろそろ夕方だから少しだけな」

一応近くにアルセウスいるから最悪飛んで帰る。

「グマア！」

「リングマのエンカウント率高いな」

「ホントじゃのう」

「ガオガエン、かわらわり！」

「ガオ」

「グマ!?!」

ノーマルなので効果抜群。

「ゴオオ！」

「かみなりパンチー」

なんかゴルバットが出てきたので瞬殺。
蝙蝠が出てくるんだし、もう夕方だな。



「さてさて、キャンプ道具レンタルして場所を借りた」

「組み立てはやった」

それでテントも唯と一緒に作る。4、5人が寝つ転がれるスペースである。
寝袋も用意した。

「さて、カレー作るか」

「濃は寝てるぞ」

寝るなー。

唯は珍しく手伝ってくれるってのに。

とりあえず飯盒するか。

まず飯盒にご飯を入れて、水が薄くなるまでとぐ。

それで目盛り通りに入れる。

「あれ？ まだ火に入れないの？」

「それだと芯が残るからふやかさないとダメだと」

炊飯器使ってるからあんましないが。

飯盒の場合、そのままお米を水に浸してしばらく置く。

そして数十分浸す。柔らかくする。

よし、そのうちにカレーでも作るか。

えつとカレールウ、玉ねぎ、にんじん、肉、じゃがいも。水を入れる。

隠し味にチーズを入れる。

野外にて作るカレーは本当に雰囲気がある。

こりや美味しいカレーになりそうだ。

「いい匂いしてきたね」

「そろそろご飯が30分くらい経つから火にかけるか」

よしよし、近くにブロックがあったからそれを使って台にする。

「沢山木を持つてきたな」

「うん、新聞紙とかも持つてきたし」

今さっきテントを組み立てる際に、ポケモン達に木の枝とか持ってきてさせたのだ。少し多めにご飯やカレールーを作ってやったぜ。

喜べ!!

「燃やすぜ! ガオガエン、軽くほのおのパンチ!」

「ガオ」

あ、ライター程度の火は出せるんだ。

火力の調節はできるんだな。

よし、燃えた燃えた。

キルアみたいにかみなりパンチでも火をつけられたかも。

さて、沢山木を入れてそのままにしておこう。

「時間かかるし、漫談でもしようか」

「いいね。それじゃクソ兄貴達はどうなったか」

ああ、アイツらね。

最近幸せだからすっかり忘れてた。

「確かロシアでぼちぼち仕事してるらしい」

「家族一緒に良かったんじゃない?」

スノウからたまにそんな話を聞く。

「この前来てなかったのは単に連絡ミスだな。ロシアにいて連絡先が分からなかったってさ」

「ツイテナイネー」

単に運が悪いからだってばよ。

来なくて正解だな。

来たとしても嫌味とか吐いてやることも面白いだろう。

「おつ、いい匂いしてきたのう」

「それで幼馴染のビッチは？」

「刺されて障害残ったって」

「そうなんだ。日頃の行いってのも大事だね」

あのビッチの名前ってなんだっけ？

「今は大人しくしてらって」

「それがいいと思うよ。ビッチ行為は自重したほうがいい」

だな、晒されている時点でしばらく動かない方がいい。

「そうだ、真田グループの人間から聞いたんだけど」

「？」

「鞍田のおじさんって元警察官らしいよ」

「マジで？」

えっ？ あの元警察なの？

「しかも有名な警察一族だって」

「ふえ〜」

なんかあの女と言ってたのはそれだったのか。

でもなんで禪一丁で山の中を歩いてたんだらうか。



よし、カレーと米が出来た。

皿を出してと。

「お前ら並べー」

「わーい」

「待ってました」

唯、アルセウス、そのほかの配下が並ぶ。

「うわあ、美味しそう………」

「味見した所は会心の出来」

「期待できそう」

それで全員の皿に配り終わる。

「いただきまーす」

みんな一斉に口に入れる。

「うまあああああああいー！」

「最高っ!!」

アルセウスが涙を流した。

唯は幸せそうな顔だ。

他のポケモンも同じく。

美味さを嘸み締めていた。

「夜空になってるな」

「キレー」



「ちよつと……トイレ」

「そうか」

食事中、カレーを一皿を食べて唯がトイレだそうだ。

あるよね。飯食ってる時にトイレ。

俺もよくある。

あ、唯が帰ってきた。

「あ、おかわり」

「はいはい」

……………こいつ少食なんだけどな。

美味いと結構食うのか？

「ウ〜ンやっぱり美味しい」

「そうか、ありがとよ」

少し早食い？ 急いで食べなくてもいいのに。

「おい、主よ……………」

「なんだ……………へ？」

アルセウスが指を指してるので見てみると。

「……………どうなってるの？」

あれええええ!?

唯が二人!?

「おい、どうなってる!？」

「何？ 私が二人!？」

「ど、どういうこと?？」

どうなったる？ メタモン？ それだと喋れないだろうし……………ゾロアか？

「お前からお尻見せろ」

「へ？ なんで」

ゾロアは変身しても尻尾を残してるとって頭の隅に残ってる。

「はい」

「一応念の為触る」

「どうぞ」

こつち側の唯は膨らんだものはない。

「お前だな。唯は少食、あまり多く食べない」

「……………」

「触るぞで」

それでこつち側の唯の背中に縦に長いのが。

少し掴む。

ポオン!!

「あちゃあ、バレてしもうた」

ゾロアが出てきた。

って喋ってる!?



「ほんますまないなあ」

「あまりが少しあつたからいいぞ」

「うまいわあ」

ゾロアと一緒に飯を食べている。

こうなったのも何かの縁だ。

お腹すいてたらしく、唯に化けるといふ悪知恵を思いついたそうだ。

「ごちそうさまでした」

「そうかい」

美味しいようだなにより。

「なあ、旦那はん。ポケモンとか捕まえとんの?」

「ん? まあな」

「うち、仲間にせえへん？」

「……………いいのか？」

あれ？ 仲間になつてくれるの？

「いいよ？ 飯はうまいし、見ず知らずの悪狐に食べさせてくれるし。周りのポケモン達も幸せそうやし」

「オーケイ、よろしくなゾロア」

「今後よろしくどす」

こうしてゾロアが仲間になるのだった。

なんでコイツは京都弁なんだ？

湖

「さて、起きるか」

今日はアルセウス号に乗って琵琶湖までひとつ飛びだ。

所在地が静岡県なので駿河湾で働く事があると思うので、水上で活動できるポケモンを捕まえようと思う。

庭に池があるが水を入れていない状態。

せっかくだから入れてみようと思う。

ゲッコウガで十分と言いたいが、ライドしたいのでアイツを捕まえようと考えてる。

「ぐびー」

「Z z z z z z z z z z」

アルセウスと唯さんが一緒に寝てますね。

もう少し寝かせておこう。

俺はテントから出る。

今日は晴れだな。

「おや？ 旦那はん。起きはったんです？」

「まあな、朝食でも作ろうかなって」

昨日仲間にしたゾロアだ。

いつの間にか足元にいた。

「手伝いますよ?」

「助かる。朝飯はワカメのインスタントスープだ」

「あら、美味しそう」

寂しいからついでに木の実もつけようつと。

昨日見つけたオレンのみだ。

水道水汲んでヤカンを温める。

木の実でも焼こうかな? 焼きみかん作ろう。

網があつたので火を通し、やかんと一緒に焼く。

「旦那はん、木の枝持つてきたで」

ゾロアが唯に化けて追加の木の枝を持ってきてくれた。

言おうと思つてたけど気を利かしてくれるらしい。

「まだ持つてくるよ?」

「あ、まだ欲しかった」

もう少し木が欲しいな。

その方が火が強くなるだろう。

「ほら、沢山持つてきたよ」

少し経って沢山木を持つてきた。

早い上に有能だな。

シュー シュー

それで木の枝を入れると沸騰。

そろそろだな。だけどもう少し沸かそう。

木の実はそろそろの具合だな。

取り上げて冷まそう。

「ふあく眠い……」

「おはよう主」

起きてきやがったな貴様ら。

美味しいのが出来ているぞ。

「あく甘い匂い」

「顔洗つてこよう」

唯とアルセウスは顔洗うようだ。

みかんを焼いたからそこらにいい匂いがするな。

「結構美味しいね焼きみかん」

「いけるぞ」

「ほら、ワカメスープもあるぞ」

「アツアツだからフーフーしたほうがいいかも。」

湯気が結構出てる。

「あつつ！」

「暑すぎて飲みにくいの」

もっと冷ましたほうがよかったか。

俺は後で飲もう。

「主、ワカメスープお代わり」

「まだ少しあるぞ」

「冷まそう……………」

水でも入れようかな？

近くに水道水あるし。

「いやぁ美味しいわぁ」

「そうか何よりだ」

ゾロアにも好評らしい。

小狐状態で食べているから可愛らしい。

「そう言えばさ」

「なあに？」 ムシヤムシヤ

「お前メスカ？」

「メスに決まつてるやろ。こんなプリティガール捕まえといて何言つとんの？」



「これ海じゃないの？」

「湖なんだよなコレ」

はい、富士の樹海から琵琶湖にやって参りました。

アルセウスさんに掛ければちよちよいのちよいだ。

琵琶湖とは滋賀県の面積の6分の1を占める日本一の湖。

100万年以上前から存在する古代湖の1つだ。

琵琶湖は世界の湖の中でも、バイカル湖やタンガニーカ湖に次いで成立が古い湖であるとも、世界で13番目に古い湖なのだ。

固有種も生息し、条件も整えば蜃気楼とかも見られるとか何とか。

海流のようなのが発生とかもしてるとか。

「上から見てたがおっきいのう」

「貯水量も日本一だつてさ」

最高で104Mの水深があるとか。

「それじゃ釣りを開始しますか」

「私も」

すぐいつりぎおを準備し持ってきたのでフィッシングスタートだ。

唯もやってみるみたいだ。

「あ、かかった」

「早いな」

「ギャオオオオオオ」

唯はギャラドスを釣り上げたようだ。

「アブソル、ストーンエッジ！」

「アブオ！」

効果抜群、瀕死になり帰っていく。

「つれないなあ」

「あ、またかかった」

「ホオオオ」

ホエルオーじゃないですか唯さん。
大物ですよ。

「ストーンエッジ」

「ホオオオオ!!」

あーまた一撃ですな。

強いようだなにより。

「つれないなあ……」

「エサつけてる?」

「確認した」

ゲームとかやってる時もつれない時もあるし。

場所が悪いのだろうか?

「あ、また引いてる……」

それじゃなんで唯のはヒットしてるんだ?

「ビイイイイイ」

「ドククラゲだ」

「アブソル、つじぎり」

「ビイイイイイ!？」

また瞬殺され水の中に入る。

えーなんでかからないの？

よし、エサの方を實際見てみるか。

キュルキュル

? まだエサが残ってるな。

嫌われてんのか俺は？

エサ、倍にしてつけてみよう。

「ぼうずやね。旦那はん」

ゾロア、なんで釣り用語わかるの？

「あ、またかかった……………」

「……………」

「ギャオオオオオオオ!」

またギャラドス。

さつきから大物ばっかりじゃないか。

「ストーンエッジ!」

瞬殺、以下同文。

グイグイ

あ、やっとかかった。

ザパン

「あ」

「え」

「長靴……………」



「つれないなあ」

「すごいつりざおなのね」

「ZZZZZZZZ」

もう唯は可愛そうになったのかももう釣りはやめている。

クイ

あ、ひいている。

ザパン

「ギバア！」

やっと会えたなギバニア。

サメハダーに育てて立派にライドしてやるよ。

面倒だから弱らせずにルアーボール投げよう。

投げて、当たってボール入る。

1、2回揺れて、

「ギバア！」

うわっ、出た。

もう一度、行っけえルアーボール！

当たって、ボールの中に入るが、

「ギバア！」

またかよ。面倒くさくなってくるから次はハイパーボール投げよっ。

当たり、ボールの中に入ると、

カチツ

やっただよ。

やっどゲット出来たよ。

「そろそろ帰ろっか」

「だな、夕方だもんな」

「Z z z z z z z z z z」

ヤミカラスの鳴き声とか聞こえてくる。

「一旦家に帰ろう」

「うん」

唯に少し疲労の色が出てる。

家で休もう。

「明日はどうするの?」

「西表島に行くぞ」

起きろアルセウス帰るぞ。

俺らは超特急で家に帰るのだった。

しまキング

「ふああああ」

琵琶湖から戻ってきて翌朝。

俺はあくびしていた。

それにしてもやっぱり自分の家の枕が1番寝やすいな。

慣れない枕はホント寝るのに時間がかかるな。

家の枕が1番ずら。

「あーやっぱり家の枕だわ」

「……………本当だね」

あ、唯も起きたのか。

「グツモーニング」

「ああ、うん……………おはよう」

今日は西表島だぞ？

準備はよろしいかな？

「はいえ」

「もう出来てる」

「わあ、ご飯と味噌汁と焼き魚」

「主よおはよう」



つて事で数時間後。

「おお？ この辺海が綺麗じゃの」

「まあ場所によって海の色とか違うからな」

「あれが西表島？」

西表島は日本の南西部に浮かぶ離島、八重山諸島に属する島で面積289.62km²、周囲130.0kmの島で、面積は日本で第12位、沖縄県内では沖縄本島に次いで第2位である。

島の面積のうち、90%は亜熱帯の自然林で覆われている。

みんな知ってる通りここには島の固有種があり、珍しい動植物の楽園である。

太古の海進期にも完全に水没することなく、結果として島の生物群は独特の生態系を維持したまま現在に到る。

アローラもだいたいそんな感じだろう。

数多くの河川でのカヤッキング、海洋でのシュノーケリング、スキューバダイビングとかやってるとか。

今回は日帰りなのでやらないが、機会があつたらやってみたいな。

よし、降りよう。

アルセウスは島に降下する。

「うわー海綺麗ー」

「ホントだな」

「……………」

「海水浴とかしてみたいな」

「……………」

「うおっ!!」

「どうしたアルセウスうおっ!!」

「うわっ!!」

後ろを振り返ると巨大なキテルグマ!

「……………」

ん? 腕を広げた?

(なんだ？ 仲良くしたいのか)

(フレンドリーなんだね)

(喋らないから少し不気味じゃの)

確か手加減してるって聞いたな。

観光客にサービスとかしてるのかな？

「えへへ触ってみよう」ギユ

「……………」ギユ

もふもふだっけか？

いいなあ。火とかつきたい。

「……………」ギユウウウ

「ん？」

「……………」シュパ！

「えっ！ ちよっ!？」

「おい!？」

あ、あれ？

唯を連れて逃げやがった……………？

「おや？ お兄ちゃん達……初めて？」

「ええ、まあ」

ああ、キテルグマの背中を見てたら第一島民発見。

それで話しかけてきた。

「あのキテルグマは相当温和な正確なんだが………一つ困った癖があつてね」

「うんうん」

「たまに気に入った人間を攫つて秘境巡りをするんだ……まあ大体の人間が満足するんだけど、秘境巡りが終わるまで逃げる事が出来ないんだ」

「わおっ………」

島巡りをしてくれるのかあのキテルグマ。

人の予定気にしないのは困るが、フレンドリーな熊さんだ。

教えてくれた島民の方は去っていった。

「……とりあえず探そう」

「そうじゃな」



「うわっアローラのポケモンばかりだ」

海の方も少し見たが、アローラの水タイプが多かった。

静岡の海と違うラインナップだな。

やはり場所によって生息は多少違うんだなあ。

それで島の中でもアローラが多い。

奥までは入っていないが、ツツケラやイワンコがよく襲ってくる。

もちろんアローラ以外も出てくる。

「それで唯はどこだ？」

「多分奥じゃないのか？」

「だろうな。島のボスって聞いたし、奥の方でなにかレクチャーしてそうだ」

どうせ珍しい木の実やポケモンとかを見ているのだろう。

俺が連れてかれたかった。

「ガオガエン、かみなりパンチ」

「ガオ」

高レベルの地域にいつの間にか入ってたらしく、ドデカバシをガオガエンで攻撃し倒す。

「少し休憩しないかの？」

「だな」

時計を見ると十二時過ぎてる。

唯は居ないし食べてるだろうからその分食ってても問題ない。
近くに海辺があるから気に腰かけて食べよ。

「お弁当の時間だな」

「いやっほう」

さてさて、今日のご飯は俵状のおにぎりとチーズハンバーグとレンコン。
更にはスープ付きだ。

「レンジが欲しいの」

「冷めてても美味しいから」

こんな時にレンジあれば嬉しい。

「うまああああああああいい!!」

アルセウスさんはチーズハンバーグを一口食べたなら叫び出す。
丹精込めて作りましたからね。

「んほおおおおおう!!」

おにぎり食べたらまた叫び出す。

確かツナマヨ入れてた。

「うほおおおおおおお!!」

レンコンはタレにじっくりつけて置いていたから味がしみている。

自信作。

俺も弁当食べよ。

うん、上手い。

「おい、唯のは?」

「仕方ない食べていいぞ」

「ラッキー!」

唯の弁当にも手をつけた。

俺もチーズハンバーグを半分貰っておこう。

うん美味しい。

「それにしてもアイツどこ行ったんだす?」モクモク

「探せばいつか見つかるじゃろ」モクモク

ちよつと心配になってきた。



「どこだ？」

もう夕方なんだけどね！

唯は携帯持つてないんだけどどうしよう！

「主よ、飛んで見よう」

「賛成、上からの方が見やすい」

視点を變えて上空から探す事になった。

「どこだー唯ー！」

流石に森が邪魔で見えない。

クソツタレ。

「もしかしたらさっきの所に戻ってるかもしれないの？」

「確かにありうるな。戻って見よう」

元いた所へ戻すつて事もありそう。

さて、戻ってみるか。

いなかったら搜索願を出さなければ。

「おーい、こつち!!」

あ、いた。

なにかビニール袋を持ってやがる。

土産か？

「いたいた。心配したぞ」

「ごめん。結構楽しかった」

「そうか……怪我なくて何よりだ」

もう夕方だし帰るか。

「帰るぞ」

「うん」

「そういえば弁当は？ チーズハンバーグ楽しみにしてたんだけど」

グッバイ西表島。

「ねえ弁当は」

「食べた」

「えーっ!？」

大会前

「おはようございますーす！」

「おはよう」

登校日、玉川が家に寄ってきた。

食事したので行くのは準備万端。

コーヒーブレイクタイムの最中だ。

「今日雨が降るそうですよ」

「傘もっていくか」

ニュース見てたら雨予報が会ったし、持ってた方が良さそうだ。

もしポケモンバトルするならばゲッコウガとか活躍しそう。

「あ、玉川さん」

「唯さん。おはようございます」

よくよく考えれば唯は学校行ってないな。

聞いた話だと学校に融通聞かしているらしい。

「おや、お客さんかい？」

「わっ！ 喋った!？」

ああ、ゾロアに会うの初めてだよな玉川は。
アルセウスとかよく喋るので違和感とか無い。

「ゾロアといいいます。よろしゅうな」

「玉川柚子です。よろしくお願いしますね」

玉川が頭を撫でようとすると、

「さわんなあ！」

「えっ!？」

あ、ゾロアが引いた。

おいおいどうしたよ？

「ヒロイン同士、馴れ合いはせん！」

「ヒロイン?」

……………こいつヒロイン狙ってるのか？

「先輩、何言ってるかわかります?」

「よく分からん」

「あのーゾロアさん? ヒロインとかどうでもいいので仲良くしましょうよ。クツキー
食べます?」

「あ、ありがとう」

??”??” (☒☒☒) ??”??”

「美味しそうに食べてますね」

「ふむ、ヒロイン力が高いなあ。こりや手強い」??”??”

「可愛いキツネが食事してるので絵になるだろ。」

「まだヒロイン力高そうなのいますよ?」

「な、なんとー?」

「学校行くぞ」



「面白そうな子が仲間になりましたね」

「他にも加わったぞ」

「……………唯さんと旅行ですよね。私も行きたかったな」

「気分乗ったらな。まだ行ってない所もあるから」

「約束ですよ」

北海道とかも行くのかな?

他にも強化スポットは日本にある。

もしかしたら準伝説に会えるかもしれない。

また未開の地は沢山あるし。

あ、未開と言えば深海だな。

カイオーガとか生息してそうだ。

駿河湾とかで急に大雨が振るってことがたまにあるって聞いたが……………マジでいるのか？

海底とかアイテムや遺跡がありそうだ。

ダイビングはいつかやろう。

「先輩って将来なりたいのってありますか？」

「うーん」

玉川がいきなり進路聞いてきたけど。

あんま考えて無かったな。

「進学……………かな」

「なるほど、お媚さんとかには？」

「お媚さん？」

あゝ料理美味いからか？

どっかのジムリーダーが料理とかやってたな。木の実使った料理とか良さそう。

どの木の実も栄養価高いから人気だつてき。

あの眼鏡野郎も稼いでるとか。

「アリスさんとかスノウさんも専業主夫として養いたいとか言っていましたよ」
「肉食共め」

確かに金ありそうだから養えそう。

スノウとかハッカーの仕事してるとか言ってたな。

スタンガン持つてるしリスクはありそうだが。

でも悔しいから少し働きたい。

「まあ、ポケモントレーナーであるからな。それを軸にしていきたいかな」
「どんな仕事です？」

ありきたりなのは嫌だな。

YouTuberとかプログラマーとかありきたり。

「冒険家とかかな……」

「冒険家ですか……」

イエス。ゲームでも冒険だったからな。

密林や砂漠とかも行ってみたいかな？

南極つてのもいいかも。

あ、入るのに許可つているんだっけ？

「オンラインサロンとか出したら面白そうじゃないですか？」

「ありきたりだな」

トレーナーズスクールつてのもいいかもしれないがありがたり。

「ん〜でもマンツーマンの塾とかいいかもな。加護とか使つて弟子作りとか」

「いいかも知れませんか。人手は多い方がいいかも知れませんか」

「まあ、俺のお眼鏡に叶えばの話だな」

認めた奴しか育てたくない。

「他の変態トレーナーは何仕事してるんだろう」

「メリルさんは貴族だそうで事務とかしてるそうです」

「シンシアも組の経理とかやってるらしい」

みんな仕事してるんだね。

ちなみに鞍田のおじさんや紳士のおじさんは仕事をしてないらしい。

「や、止めてくれ！」

「はっ、やだね」

「はっはー」

「これが自然の摂理だ。弱いから悪い」

あらら？

またヤンキー共が悪さしてるぞ？

相手は中学生だぞおい。

「止めろ」

「あ、なんだテメエ……影山!?」タタタツ

「クソツタレ！ 逃げろ！」タタタツ

「覚えていろ！ 必ず落日を迎えさせてやる！」タタタツ

あれ？ 逃げた。

前やった事がそんなに？

「あ、ありがとうございます！」

「良いつてことよ」



放課後。

「先輩、一緒に帰りませんか？」

「いいぞ」

放課後、偶然玉川と鉢合わせる。

「あれ？ 少し雨降ってきましたね」

「予報で言ってたもんな」

傘用意しておいた。

「さ、帰りましょ」

「だな」

校門をでると、

ザアアアアアアア

「あ、凄い雨降ってきたな」

「風も吹いてきましてね……………」

雨降るとは聞いたが、こんなに降るなんて聞いてない。

「先輩、ファミレスあるんで休んでいきませんか？」

「入ろう」

小腹が空いたので飲み物や軽食もいいかも。

俺たちは注文を取る。

「俺はサンドイッチとコーヒーか」

「私はイチゴパフェを」

やっぱ甘い物か。

俺は玉子、カツ、ハムチーズの三種。

「それで大会の準備はOKですか？」

「まあな。切り札も揃えた」

まさか昨日唯がやらかすとは思っていなかった。

何故あんなケミカルが起こったのだろう。

「まあ、見てのお楽しみだな」

みんなビックリするだろう。

楽しみにしたまえ。

あ、食事が来たようだ。

俺達は大会前の英気を養うのだった。

初戦

「待ちに待った予選だな」

「ええ、ようやくですね」

「40人位だっけさ」

「結構いるんだな」

とある場所のスタジアム。

いよいよ世界大会の予選である。

選考の方法は県大会、全国大会、世界大会への順番だ。

この時点は県大会。

県大会のやり方はトーナメント方式で、ベスト8までが全国大会に出場出来る。

ルールは三対三の勝ち抜き戦。

参加条件はバッジ8個とってる事。

「これだけいるんだからチャラ男は頑張ったんだな」

「そこは褒めてあげませんとね」

チャラ男は頑張ったんだ。

糞だけど世の為人の為してたんだな。

「あれ？ 唯さんは？」

「アイツは埼玉が所在地だからな。そっちの方へ行ってる」

アイツ埼玉だからここへはいない。

アルセウスがお供についてるらしい。

『皆様よくお集まりくださいました！ それでは予選トーナメントを発表します！』

あ、やつと発表か。

即日発表だからずっとワクワクしてた。

「えっと、四ブロックに別れてますね」

「あ、皆違うブロックですね」

みんなベスト4ですね。

コイツら二人が負けないだろ。

「よお」

「あ、チャラ男」

「あ？」

そんなに怒るのかこいつ？

「なんか用か？」

「調子に乗るなよテメエら」

はく？ なに急に？

この前の事で利口にならなかったの？

「色々なネットワークで聞いたりしたが、選ばれたトレーナー達殆どがお前をどんな手を使つても倒そうとしてるぜ」

「ほお」

この前の会合での神の逆恨みか？ それともゲス一口か？ それともどつちもか？

「覚悟しておけ。お前に明るい未来は無い」

「この前敬語使えって言いましたよね？」

「次はママに殴られたいんですか？」

「くっ、お、覚えとけ！」

あ、逃げたよ。

ママ？ また脅しのネタあるんだな。

「それにしてもどんな手を使つてもか……………」

「そこまで恨まれる事はしてないと思うんですけどね……………」

人間、何かしても何もしてなくても嫌われるって事もよくあるからな。

善行しても余計な事だからと言って馬鹿にされるのもしばしば。逆に何かやらかしてもやらなくても味方の人間もいるけどな。

「おい」

「何ですか？」

アリスに黒帽子と黒マスク、黒革ジャンを着た男が話しかけてきた。

「二回戦で当たるもんだ」

「あ、よろしくお願ひしますね」

「俺は茶頼さんの一番弟子だ」

「チャラ男さんの？」

一番弟子か。

響がいいなあ。

「勝つたらテメエが茶頼さんにしてきた無礼を謝らせてやる……………」

「はい？」

えつと、アリスがやった事？

クソ市長を焚き付けてチャラ男を殴らせた事だよな。

チャラ男が俺の事をド底辺とかいったり、二葉を馬鹿にしたので少しスッキリしたのだが。

無礼なのはチャラ男だ。

「俺の名は龍宮^{レウキウ}郎。覚えておけ、お前の落陽はすぐだ」

「……………」

と、言いながら去っていた。

なんかカッコイイ名前だね。

アリスが負けるはずが無いけど。

「チャラ男は私らとは別ブロックですね」

「アイツもベスト4決定ですか」

「ブロックで思い出したが北海道とかの自然がある地域じゃトレーナーが多いらしいか

らブロックも多いらしい」

「人の手とか入ってなさそうな所多いですし、強そうなポケモンとかいそうですね」

珍しいポケモンとか居そうだよな。

「あ、ポケモンバトルが始まるみたいだ。準備するぞ」



記念すべき1回戦目。

「い、行くぞっ」

ボーイスカウト風の男子中学生っぽい。

戦い慣れてないのかな？ 声が上がずってるぜ。

「行けっ！ ピジヨット！」

「ゾロア、殺れ」

「分かったで旦那はん」

「しゃ、喋った！」

喋るポケモンってのもレアだよな。

「見掛け倒しだ！ ピジヨット、つばめがえし！」

「ピジョー！」

「ゾロア、ナイトバースト」

「ほれ！」 トガン

「ピジヨット!?!」

あ、一撃。

「戻れ、ピジヨット！ 行け、プルンゲル！」

「プオ！」

「ゾロア、あくのはどう！」

「はいはい」

「プルーン!?」

「プルンゲルっ!!!」

効果抜群だー!

「頼む! トリトドン!」

「どお!」

トリトドンが。

やっぱり海に近いのか水タイプ持ってるのが多い。

「ゾロア、あくのはどう!」

「どおお!?」

「トリトドンオオン!」

よし、勝ったのら。

ゾロアはノーダメージ。



はい、二回戦目ですぞ。

今ベスト16まで残ったので、これに勝てば全国大会出場決定。
「信じてるぜ」

お相手は電気工事とかする人っぽい服装。
今ボールにキスをした。

「行け、又オー！」

「又オーツ！」

又オーか。しめりけの特性でビリリダマとかを鎮圧する事とかしそうだ。
発電所勤務か？

「行け、ブラツキー」

「ブラア！」

ブラツキー、色違いだ。

「ブラツキー、だましようちだ」

「ブラ」

「又オ!?!」

あ、急所に当たった。

「くっ、行け！ レアコイル！」

レアコイルか。

やっぱり電気タイプを使うか。

「ブラツキー、アイアンテール！」

「レアコイル!？」

さて、次は？

「行け、ゼブライカ！」

特性はひらいしんかでんきエンジンかな？

「だましうち！」

「ゼブライカー！」

二回戦目突破。



ベスト8。

三回戦目。

「ふっ、見せてあげましょう。華麗なる戦いを」

戦うのはマジシャン風の男。

ポケモンを使った手品でもするのかな？

「行け、バリアード」

「ブラツキー、殺れ」

フエアリー出すんじゃねえよ。

「ひかりのかべ！」

「ひかりのかべかよ……アイアンテール！」

「ブラツ！」

「バリ!？」

ここはリフレクターだろ。

「くっ、行きなさい。プクリン！」

「アイアンテール！」

「プクリン!!」

あちら瞬殺。

ちなみに急所に当たった。

「クッ！ 戻れ！ 行け、サマヨール！」

「ブラツキー、だましようち」

「ヨオオオウ!!？」

「サマヨールウ!!」

「先輩、お疲れ様です」

「お疲れ様、ヘルガー頑張ったな」

玉川もベスト4へ。

メガシンカしないで戦った。

「ヒロトサーン！ 見えましたか！」

「見てた見てた。キリキザン一匹で勝ち抜いてたな」

「いやあ多少ダメージ喰らいましたけどね」

アリスもベスト4へ。

キリキザンで無双してたな。

後チャラ男もベスト4。

どうでもいいな。

さて、全国大会出場決定だな。

今さっきLINE来たが、唯も1位通過で全国大会決定だそうだな。

「そう言えば気になってたんですけど？」

「どうした玉川？」

「予選前の……龍宮さんでしたっけ？ 二回戦見てたんですけど違う相手でしたよね

……」

「私もおかしいと思って確認したんですが……一回戦で負けてました」

成長

「ニドキング、じしん！」

「キリキザン、アイアンヘッド！」

「ギャラドス、かみくだく！」

「キリキザン、アイアンヘッド！」

「エビワラー！ ビルドアップだ！」

「キリキザン、アイアンヘッド！」

はい、試合終了。

アリスさんの3タテであります。

やっぱりチャラ男をボコボコにできたな。

全部アイアンヘッドでキメてやがる。

「く、くそそおお！」

アリスが戦ったと言うことは、次は俺対玉川だ。

見せてくれるよなあ。晴れパをよ。

「先輩、行きますよ！」

「ああ、見せてもらおう」

つてな訳でフィールドへ。

よし、行くか！

バトルの音楽が鳴り響く！

「行け、キュウゴン！」

「キュウ！」

玉川のキュウゴン、こいつはただのキュウゴンでは無い。

ヒイイイ

「ん、暑くなるな」

特性ひでりのポケモン。

晴れパの起点となる一匹である。

「いけ、ブラッキー」

「ブラッ！」

ブラッキーで十分だと思うが、他のトレーナーと違い強い方なので注意が必要だわ
さ。

「ブラッキー、だましようち！」

「キュウゴン、あくのはどう！」

だましうちは当たるが、HPは残ったようだ。

レベルが高い方なので、防御は少しはあるようだ。

あくのはどうも当たる。

ダメージも少しは食らう。

「ブラツキー、もう一度だましうち！」

「ブラッ！」

「キュウ！」

「キュウコン……」

倒れてもひでりは解除されない。

あつい岩持たせたからもつと持続する。

「頑張つて！ ダーテング！」

来たよあくタイプ。

確かダーテングの特性はようりよくぞ。

日照り時、すばやさが二倍になる特性。

「ダーテング！ ぼうふう！」

「やっべ、ブラツキー！」

「ブラ？」

あ、外れた。

「ブラツキー、だましようち！」

「ブラツ！」

急所に当たる。

ダーテングのHPの半分程を削った。

「ダーテング！ リーフブレード！」

「ブラツ！」

クソツ、一手早いなコイツ。

うわ、ブラツキーのHPが赤色に。

だけど、

「ブラツキー、だましようち！」

「ブラツ！」

「ダーテング……」

こつちの方が自力があるようだ。

ブラツキーはダーテングにトドメを指した。

残りは一匹。

「行って、ヘルガー！」

やっぱり来たかエースモンスター。

こいつは一筋縄では行かないな。

「ブラッキー、あくび！」

「ブラッ」

「あ」

玉川にはもう入れ替えるポケモンはいない。

次のターンからお眠りしな！

「ヘルガー！ メガシンカー！」

ヘルガーは姿を変えていく。

苦肉の策だけどステータス上がる。

「かえんほうしゃ！」

「ガウ！」

「ブラッ！」

ブラッキーが戦闘不能になった。

想定内だな。

「行け、ベトベトン！」

「ベトオ！」

勝ったな。

「Z z z z z」

ヘルガーが眠った。

あくびも結構仕事するようだ。

お、ついでに特性サンパワーでHPが減ったぞ。

「ベトベトン、じしん」

「ベトオ」

ヘルガーは大ダメージだ。

ヘルガーのHPバーは赤色になった。

「ガウ!？」

あ、起きやがった!

くっそー。

「ヘルガー! あくのはどう!」

「ガウ!」

おっと、半分ほど削られたようだ。

「ベトベトン、かわらわり!」

「ガウ!？」

「ま、負けた……」

玉川、お前の成長を見せてもらった。
いい弟子を持ったよ。



「さーて広人さん！」

「来い！」

決勝。

俺対アリス。

アリスのポケモン達は砂パ。

砂嵐を起点としたパーティー。

「行け、キリキザン！」

「ギザ！」

キリキザン、今さっきからこのポケモンで連勝している。

「行け、ベトベトン！」

「ベトオ」

頼むぞベトベトン!

「キリキザン、つじぎり!」

「ベトベトン、かわらわり!」

ぬおっ?! 先手取られた上に急所に当たった!

ベトベトンも負けずにかわらわりで反撃。

「ベトオ!」

「キザ!」

「えっ! キリキザン!」

あ、あれ? 一撃で倒れた!? 急所に当たったみたいだ……四倍ダメージも加算され

てるし良い一撃。

とりあえずラツキーだな。

ダメージは受けたが。

「頑張つて! ワルビアル!」

「ビアル!」

ワルビアル、サトシのエースだったような気がする。

懐かしいな。

「かみくだく!」

「かわらわりー！」

そっちの方が早かった。

ダメージを貰う。バーが黄色だ。

それでかわらわりを与える。

効果抜群だ。

こつちも攻撃力が高いので、

「ビア!？」

「し、しまった……！」

あれれれれ!?! 毒う!?!

………そういえば特性どくしゅだった。

よく考えてみればあんまり特性が発動した事無いから忘れてた。

三割だよな。確率。

ん、バーがあつちも赤色。

「ワルビアル! かみくだく!」

「ベトオー!」

ご苦労、ベトベトン。

いい仕事をした。ワルビアルは毒でダメージ。

「行け、ブラツキー！」

「ブラツ!!」

やる気見え見え。

「ワルビアル！ もう一度かみくだく！」

「ビアルツ！」

「ブラツキー、まもる」

「ブラ」

「あ」

残念でしたね。

「ビア……」バタリ

毒で倒れる。

危ない。

「行っけーバンギラス！」

「キラ！」

来たか！ アリスのエース。

ハッハー。これでも喰らえ！

「ブラツキー、あくび！」

「ブラッ」

ねーむれ、ねーむれ。

「バンギラス、いわなだれ！」

「ギラー！」

「ブラッ!？」

あれ？ アリスが動揺してない。

なんでだろうか。

??“??”

バンギラス、何食べてる？

まさか。

「そう！ ラムのみデス！」

「メガシンカしないのかよ！」

「それはもつと上の大会でやりマース」

そんな方針だったのか……予想外だな。

「ブラッキー、あやしいひかり！」

「ブラッ」

混乱にさせとこう。

バンギラスが混乱し……てない!? 外れた!

「バンギラス、かみくだく!」

「ギラー!」

かみくだくが攻撃成功される。

うわあ、結構なダメージが入りやがった。

そろそろ瀕死が近い。

まだまだ終わらなうい!

「ブラツキー、どくどくだ!」

「ブラツ!」

「ギラー!」

善し! 当たった。

「かみくだく!」

「ギラー!」

「ブラツ!」

ブラツキーが倒れた。

ご苦労。

……ああ、強くなったなアリス。

少し嬉しいな。

「さて、行け、サザンドラ！」

「！」

同じく600族だ。

「きあいだま！」

「シャアアアア！」

あく・いわタイプですからね。

「ギラアアアア!？」

「バンギラス!？」

バンギラスにきあいだまが当たった。

ちなみにこだわりメガネを持たせている。

「ギラ……」

「おおう」

たった、バンギラスが立った。

よく耐えたなおい。

「ギラツ……」 バタリ

あ、コイツ毒だったけ。

毒ダメージでバンギラスは倒れた。
俺は優勝したのだった。

他の奴らは？

「「かんぱーい」」

三人でファミレスで全国大会出場決定の打ち上げでござる。

「いやあくそれにしても濃いのが多かったですよね〜」

「ええ、海パンのとかいましたし」

「私の時は祈禱師っぽいのがいましたよ。奇声を上げてました」

わく濃いのも多いですな。

てかゲームにもそんなの居たな。

「そういえば唯さんってどうなりました？」

「普通に埼玉1位通過だった」

ドンカラスだけで無双って言った。

加護は凄い。

「あ、木島兄妹も全国大会出場だった」

「やりましたね！」

まあ、スノウも強いって聞くし。

神奈川は木島君の配下で一杯だそうだ。

「あ、浩ちゃんの方も終わってますね。木場さんがメガハッサムで無双だそうです」
あ、動画で速報あった。

浩ちゃんのゴローンがバレットパンチでとどめ刺されている。

確かこのゴローンって面白い戦い方するって聞いたな。

「他は……鞍田のおじさんも1位通過か」

トリデプスのメタルバーストでフリージオにトドメを指している動画だ。
無双か。

ん……………紳士のおじさんも勝ち上がったのか。

えっと、どれどれ？

「先輩！ 他の国は全国大会終わってるそうですよ！」

「あ、マジ？ 結果どうなってる？」

他の奴らか。

どうなってるんだらうか？

？

「クレベース！ ジャイロボール！」

「グオオオ！」

「なっ！ オオスバメ!?」

『決まったアアアア！ ロシア大会優勝おおお！ シンシア選手決めましたあああ
！』

シンシア、前よりもビキニの面積が少なくなっているような……。

？

「アツハツハツハツハツ！」 グルグル

「カメー」 グルグル

海。パン小僧。ジゼル。

優勝して嬉しいのか、カメックスのこうそくスピンしてて甲羅の上で一緒に回転して
る。

……………。

？

「ボルケニオン！ かえんほうしゃ！」

「ウボオオオ！」

「トルネロス!!」

『おおおつと！ 一撃だアアアア！』

ヴオンさんか！ えっ！ ボルケニオン持ってるの!?

「ふふっ、少しはやるようだけど甘いわね」

「クツソオオオオ！」

？

「君いいいいいいのおおおお心にいいいいイイ!!!
?」

○×△■(? . ? .)

「……………」

なんかパンクロッカーの様な人が歌ってる。

そういえば毒使いは五月蠅いとか何とかあったな。

？

「カイリユー！ しんそく！」

「リユ！」

『決めたアアアア！ ハンガリー大会優勝はあああメリル選手うううう！』

コイツは必ず這い上がってくるだろう。

その時は……な。

？

「ルカリオ！ はどうだん！」

「ルツカリオ！」

「しまった！ マタドガス!!」

『決まったアアアアアア！ アメリカ代表はデイスに決まったアアア！』

ああ、あの狂って暴れた人だ。

そういえばアメリカ出身だっけ？

「よーしよくやつ……うっうううううっ！ ガアアアアアアアアアアア！」

?

「ベロベルト！ パワーウィップ！」

「ベロ！」

『決まった！ 優勝はピスコ選手！』

あ、この人写真を整理してた人だ。

ノーマル……だからいつもしよつびかれるのか？

「さて、整理するか」

?

「マリルリ、アクアジェット！」

「マアアリ！」

『マリルリのアクアジェットが決まったアアア！』

マリルリのアクアジェットが決まる。

「ふう……」

「あーん、バーブンさん〜」

「きゃつ、素敵！」

近くに女がいるな。

フェアリー使い、バーブン。

……モテるんだな。

？

「レジスチル！ メタルクロー！」

「……………」

「しまったっ！」

メガネ野郎も世界出場か。

「次は世界ですね」フキフキ

あ、メガネ拭いとる。

？

「オツホホホホホホホ！」

この人なんでSMのボンテージ服なんだろう？
ちなみにこの人は電気タイプに加護だって。

？

「フウウウウ、まだサドつけが足りねえな」

この人は電気タイプの人に痛みつけられてた人だ。
地面タイプの人だって。

？

「ふう、中々……」

「ナツシー♪」

カルロ、ナツシー（アローラ）に踏まれてる。

？

「み、皆強そうですね……」

「そ、そうですね……」

こんな狂った奴らが優勝するんだ。

普通だったら皆沈黙だな。

「色々相手を研究しておくか……」

まず注意してくのがあくタイプの大敵。

格闘、虫、フェアリータイプ。まあ、その他のタイプの奴らも注意しておくかな。

まず最初に危なそうなのは木場君の虫タイプ共だ。

玉川に聞いた所、相当ヤバい加護を持っていると森屋君から教えて貰ったらしい。

どんな加護かは分からないらしいが。

ガオガエンとかに頼るしかないか。

次にパラディンが率いる飛行タイプ集団。

九州遠征とか言ってたし、他の飛行の伝説ももってる可能性も多いにある。

日本も多少自然は多いし生息してるかも。

そして鞍田のおじさんだな。

色んな山や森を駆け巡ってるって言うてるし、それでレベルとか上げてるとか聞い

た。

山奥とかレベルが高いのが多いから良い修行場になるな。

後は……あの紳士か。

戦ったことないけど強い……とは思う。

ゴーストタイプも油断出来ない奴らも多いし注意だ。

よくよく考えてみればこの日本も激戦区だな。

「あー負けられねえ」

ゲスローの事もあるが、ポケモントレーナーとしてのプライドだな。

色々なトレーナーと戦い、どんな考えでポケモンを育て戦わせるのか少し興味があ

る。

「あ、ドリンクバー行ってきます」

「私も私も」

「あ、俺も」

疲れたので甘いものを体は欲している。

少し休もう。

全国大会

「さて、全国大会ですね！」

「ええ、頑張りましょうね！」

まあな。他の加護持ちのトレーナーに合わなければの話だが。で、今東京にいる。

それで広いグラウンドにあつめられているのだ。

で、周りを見るとS5とか顔見知りもいるようだ。

まあ、敵対している視線を多く感じる。

実は俺たちに勝ったら賞金が出るそうさ。目が血走ってるぞコイツら。

賞金を出すのはゲス一口。さすが大富豪。

他の俺の味方や敵対している奴にも賞金がかかるらしい。

ヤバい奴ほど賞金額が高いらしい。

賞金首になった気分だ。

他の変態トレーナー達も高額を付けられてるって。

シンシアは1億4000万、メリルは3億だって。

………ワンピースの世界に入った気分だな。

「俺は負けない！ アイツに勝つ！」

聖沢遊星、賞金額 3000万

「私もだ」

富江、賞金額 1100万

コイツらそこまで脅威無いか？

確か一般^{ノーマル}人の生涯賃金は2億7000万。

変態トレーナーを数人倒せば人生安泰だな。

「私って億って言葉は慣れてるからな………」

真田唯、賞金額 6700万

「つて言うか私らは賞金貰えないんですよね」

玉川柚子、賞金額 7700万

「ええ、ゲス^スの口の手先や無所属の人間に当てはまるそうですよ」

” 処刑人 ” 黒田アリス、賞金額 1億

「まあな。海賊が海賊を狩っても賞金は貰えないだろうし」

” 底王 ” 影山広人、賞金額 2億

僕らは高額賞金首のようだ。

アリスがクロコダイル倒した後のルフィで、俺がウソツプやバルトロメオつてところか？

本当にウソツプは新世界来てから成長したよな。

筋肉もついたみたいだし、おもしろ植物を使って相当活躍してる。

前半のパラダイスじゃボロクソにされたり、ドジツたりしてた記憶が多い。

「よお、広人」

「……………よう」

あ、木島兄妹だ。

「結構人居るな」

” 鳥頭 ” 木島聖騎士、懸賞金 1億3000万

「……………頭くらくら」

木島雪、懸賞金 6100万

やっぱリスノウも強いんだな。

ネイティしか見た事ないけど。

「やっぱりボンタン奪った奴らが多いな」

「……………ボンタンになんのこだわりがある？」

「青春つてやつか？」

よく分からん。

短ランも行けると思うんだがな。

ボンハンはもうやめておけ。

「やあ、広人」

「あ、柚子姉！」

おや、虫タイプ使い共だ。

「皆強そうなの多いね」

”インセクター” 木場明人、懸賞金 2億2200万

「こつちも調整完了ですよ！」

森屋浩介、懸賞金 9700万

何気に俺よりも懸賞金が高い……そこまで脅威なのかコイツ。

森屋君はそろそろ1億だし。

『お待たせしましたあああああああああああ！』

あ、やつと開会か。

待ちくたびれたじえ。

『それではあああああああ！ 全国大会を開始しますー！』

『Y A A A A A A A!!』

うおっ、すごい歓声。

皆待ちに待ってたんだな。

『皆ああああ世界にいい行きたいかああああ!』

『Y A A A A A A A A A!!』

で? 予選のルールは?

適応力を試す為だと思ってたけど今まで聞かされてない。

『それではお待ちかねー! 予選の方法を発表しまあああす!』

ゴゴゴゴゴ!!

ん? なんの音?

!? グランドから建物?!

これは!!!

『第一の予選はあああ! バトルピラミッドオオオオオ!』

『Y A A A A A A A A A!』

バトルピラミッドって言ったたら、バトルフロンティアの施設の1つ。

ポケモンやトレーナーが邪魔し、道具を拾いながらつぺんを目指す。

暗いので進みにくいのが記憶にあり、進むのにストレスがかかった。

それで野生のポケモンは周ごとに変わる。

やけどにさせる周もあればPPを削る周もあり、だいたいはつで邪魔する周もあったとか。

攻略法も多少ある。にげあしやものひろいの特性のポケモンを使ったり、素早いポケモンにテレポートを使わせる。

まあ、周回事にポケモンの目星がつくので、度々変えていく事も忘れないが。

『はい、ルール説明しますよー！』

要約するところだ。

手持ちは六匹まででトレーナーの持ち道具はゼロ、拾った道具を使用可。

ポケモンには道具持たせて良い。

まず最初に参加者全員がピラミッド1階にランダムに飛ばされるので頂上まで登る。

全7階。

ポケモンや暗闇が邪魔するので突破しろ。トレーナーによる妨害も可。

頂上に着けば第一予選突破。

128人までがリミットになる。

六匹全部瀕死になるか、リミットによるタイムアップで失格。強制脱出するとか。

あと、このピラミッドはフィールドクリエイトの加護で作られてるって。

『ちなみにポケモン協会は中立です！ なんの息もかかってませんから公平をお約束

しまーす!』

ほう良かった。

ゲスー口の息はかかってないか。協会も一枚岩って訳じゃないのか。

「とりあえずバラで行った方がいいんですかね?」

「可能であれば味方同士で見つけてくつついた方がいいかもな。PP削られたり相性悪いタイプにぶつかる事もあるだろうし………」

道具を分け合うのも手。

仕方ない。ランダムだから運勝負だし。

『ちなみに早く頂上に来れば二次予選が有利になりまーす! どう有利になるかは教

えまつせーん!!』

二次予選は何あるんだ?

またバトルフロンティア風のダンジョンが来るのか?

『さて皆さん! 準備はよろしいですか?! 5分後にワープしますよ!』

あ、ポケモンに道具を持たせておこう。

「それじゃ。作戦はワープ後に上を目指しながら近くにいる仲間と合流だな」

「分かりました」

「僕らも合流するよ」

多分懸賞金目当ての奴らも徒党で襲ってきそう。

それと、せいなるはいを何匹か持たせておくか。持たせてもポケモンは使えないが、不味い時には使おうとしよう。

玉川達にも分けておこう。

拾っておいてよかった。

『それでは始めますよー！ 3秒前！ 3！ 2！』

いきなりかよ！

てかどんなギミックあるんだ？ 勝てば暗闇が少なくなるのか？

『ー！』

「あ」

シユン

景色が変わり、ピラミッド内部に移動したようだ。

「やっべ……鞍田のおじさんと紳士の人に作戦言うの忘れてた」

まあ、言わなくてもわかるか。

ピラミッド 前編

「やっぱ暗いなー」

外装がピラミッドの中みたいだ。

盗掘者みたいな気分になってきたし。

そういうえば遺跡とかでもポケモンとか出るのだろうか。貴重な遺跡をバトルで壊したら問題ありそう。

古墳とかに行くのも面白いかも。

「ラッフー！」

ラフレシアか………毒麻痺眠りの状態異常をしてくと予測する。

「ガオガエン、ほのおのパンチ!!」

「クガー！」

「ラフレ!?!」

ラフレシア レベル30

俺にはこのレベルじゃ容易い障害だ。

多分ここは状態異常のフロアだと思う。

今さっきベトベトンが毒の技とかやってきたし、ジユペツタとか出たし、おにびとかやりそう。

それでここのルールその1。

ポケモンを倒したら暗闇が少し和らぐ。

数体倒したら周りが明るく照らされた。

なのでトレーナーに見つかりやすい。

「あ、モモンのみだ」

「あ、影山広人！ 行くぞー！」

「うぜーな」

この通りトレーナーが襲ってくる。

やめとけて……体力温存しとけよバカ。

「ガオガエン、かわらわり！」

「なっ、しまった！ イノムー!?!」

このトレーナー、3匹しか持ってなかった。

で、最後を倒したら、

「あー！」

シュン

このように緊急脱出するのだ。

これなら目の前が真っ白になっても安心。

それでルールその2。

「右か……お、なんでもなおしか……」

トレーナーを倒すと視界がだいぶ良くなる。さらにさらに階段への矢印を示してくれる。

そして倒された後に道具が残る。

簡単に言えばドロップ品のような感じだ。

「よし、道具を探しながら階段へ行くぞ」

てかこのピラミッド広くない？

結構歩いてるし、トレーナーに会うのが少ない。

あ、すごいキズぐすり見つけ。

「あ、影山広人！」

「見つけたぞ！」

「懸賞金二億は俺らのものだ！」

3人がかりだとコイツら……確かにピラミッドで失格になっても俺に勝てれば賞金貰えるからな。

「行け、サイドン！」

「カイロス、君に決めた！」

「ピジヨット！ 頑張れ！」

クソ……3人がかりで来るのか。

前多数で襲いかかってきた時は相手のレベルが低かったからどうにかなったけど、コイツらバツジ8個持つてるからな。

「DDラリアット！」

「しまった！ カイロス!？」

はい、カイロスは瀕死になりやした。

すばやさが高いつてもいいものですか。

「ピジヨット、はがねのつばさ！」

あまりダメージは無いが面倒だな。

数つてのは嫌なものだ。

「かみなりパンチだ！」

「ピジヨット!？」

「かわらわり！」

「あ、サイドン！」

2体とも一撃で倒れる。

あく時間かかるな。

制限人数が128人だから急がねえと。

「ドククラゲ、行け」

「殺れ、テツシード！」

「行つけールカリオ！」

うわー悪、炎に嫌なタイプだ。

「ガオガエン、じしん！」

『ギャユアアアア!?!』

偶然効果抜群のタイプだからな。

……………あれ？ 全員瀕死？

「負けるな、ウインディ！」

「頑張れ、ベトベトン！」

「行つけー！ ギガイアス！」

「じしん！」

また効果抜群のポケモンじゃないですか。

「な、しまった」 シュン！

1人緊急脱出した。

あれ？三体しか持ってなかったの？

「クソツタレ！ いけ、ラプラス」

「アイアント！ 頑張れ！」

アイアントは炎で一撃。

「つのドリル！」

「アイアント、ハサミギロチン！」

相手側が攻撃側よりレベルが高い場合は無効。

効かないから。

ラプラスはつのドリルを覚えてたんだな。

「ほのおのパンチ！」

「な、アイアント」

「かみなりパンチ！」

「ラプラス！」

なんかちよろいな。

「頼むお前が頼りだ！ ピクシー」

「いけ、俺の切り札！ フリーザー！」

!! フリーザー!?

クソツタレ!! モブが何故もっている!

「くっ、ピクシーにどくづき!」

フリーザーにはじしん効かんからな。

「ピッ!」

あ、気合いのハチマキもってるから堪えた!

「ピクシー! この指とまれ!」

「フリーザー、こころのめだ!」

あれ? これはこれは?

絶対零度来るじゃん! しかもこの指とまれでターゲットなってるし。

わーとレーナーが薄笑いしてる。

……だけどね。

「戻れガオガエン。いけ、ベトベトン!」

入れ替えればいい話なのだ。

「な、れいとうビーム!」

一応当たったがそこまでダメージは無い。

「ゆ、ゆびをふるだ!」

ギユウウウウン

なんだいやなおとか？

脅かすなよ。

……………ん？ 様子がおかしい。

ドカアアアアン!!

あ、じばくかよ！ 多少だがダメージが入る。

まあいいや。

「ベトベトン、いわなだれ！」

「キユオオオ！」

よし、勝った！

あまりダメージないから大金屋。

「く、負けた……………」 シュン！

「すまねえ、真理子、佐藤さん……………」 シュン！

二人が緊急脱出して消失した。

さて、道具だ。

「かいふくのくすりとげんきのかから、あとは……………コールドスプレーか」

回復系は嬉しい。

欲を言えば塊の方が良かったが。

「えっと……真っ直ぐか」

「………広人」

うわっ!? スノウ!!

いつからいた?

「びつくりした〜」

「………意外と早く会えたな」

よし、味方と合流。

これで俺の生存率はかなり高まった。

「いつからいたんだ?」

「………フリーザーとピクシーが出てきたところから」

気づかなかった。

よくあるんだよなあ。集中してて気づかない事とか。

「さて、上に行きますか」

「………行こう」

俺はスノウを仲間に加え、上を目指すのだった。

ピラミッド 後編

「ガオガエン、かわらわり！」

「……………ポリゴン2、10万ボルト」

「し、しまった！ サワムラー!？」

1層で出会った俺たちはただいま6層に着いた。
それで襲いかかってきた敵を返り討ちに。
普通だったら逃げると思うんだけどなあ。

「あ、げんきのかけらだ」

「……………私いない」

もう結構道具を拾っているんだけどね。

今さつき何個かせいなるはいを拾っているんだ。

もうこつちの勝利は決まっている。

「さて……………真っ直ぐか」

「……………合流したい」

まあ確かに。

数あつた方が有利。

「ンガー！」

「ベトベトン、かみくだく!!」

「ガー!?!」

ゲンガーが倒れる。

ここはPPを削る階のようだ。

1階から5階までは状態異常の階だった。

眠りや氷等の状態異常を食らわすポケモンがぎょうさん出てきた。

なんでもなおしを持っておいてよかった。

「きゃー！」

「ワタツ!?!」

「しまった！ 風香！」

あ、カップルがムウマに襲われてる。

観戦モードになっているが、そろそろ女の方は落ちそうだ。

「ベトベトン、かみくだく！」

「ベトベ！」

一撃でムウマは瀕死になる。

「……………良かったのか？」

「漁夫の利だ。暗いの嫌だし」

まあ、危ないし？ 暗いの嫌なだけだから勘違いしないでよねっ！ ふん！

「なあ」ヒソヒソ

「うん、OK」ヒソヒソ

何を話しているのかね？

「あ、ありがとうございます！」

「助かりました！」

いやいや、困った時はお互い様ですし？

「あ、あのお」

「ん？」

「回復系ってありませんか？」

あるっちゃあるけど？

「タダじゃ上げないが？」

「今さつき宝物庫がありまして、状態異常を治したりの薬や、持たせる道具があつたんでそれと交換しませんか？」

宝物庫？ そんなのあるの？

と、言つて道具を見せてくれる。

わあ、鉢巻だったりレンズだったり道具が沢山。

……………どうしようかな。

「オーケー分かった。取引成立だ」

「あ、ありがとうございます！」

せいなるはいを渡す。

結構余分にあつたので、八個位の持つてる。

与える人が尊いと思う。

「んじや俺達は行く。気をつ」

俺が後ろを向いた瞬間、ポケモンバトルの音楽が鳴つた。

「あ？ おい、どういうつもりだ」

「は？ 決まつてんだろ。お前をボロクソにするんだよw」

「バカねく普通渡さないでしょww」

「お前から倒せば二億だけ？ 弱い振りなんていくらでもしてやるよww」

「まじチヨロいわw」

なんなのこの豹変具合は。

コイツら……………恩を仇で返しやがって。

「あーリーガーとーさんww」

「お礼に二億貰っておくわww」

コイツら助けたのは間違ってた。

ぶっ倒して道具採っておけば良かった。

「んじゃ勝負だw」

「ざまあwwww」

なんで施したのにこんな目に合わなければならんのだ。

人が信用出来なくなるよ。

カタカタカタカタカタカタ

ん？ スノウ？ 何を打ってる？

あ、ここもしかして電波繋がるのか？

「行けっwルンパツパ！」

「行けwエアームド！」

「ガオガエン、ルンパツパにつばめがえし。エアームドにはほのおのパンチ」

「ガオ」

はい、瀕死。

2体とも一発で仕留められた。

でもなんだろう？ ニヤニヤしてる。

「おい、次出さねえのか？」

「はあく？」

「うひひww」

なんか様子がおかしい。

「な〜んで出さないか知りたいか？」

「？」

「このまま長引けばタイムアップになるだろw」

「これなら勝利したって事になるしw」

ああ、そういう意味か。

でもそんな判定になるのか？

勝っても負けてもないし、貰えなかったりピンハネされるかも。

「でも貰える思うのか？ タイムアップの引き分けで倒したと判定される？」

「いや、予選で落とした時点で勝利でしょw」

「落ちろwww」

確かに貰える可能性がある。

クツソ、嫌な奴らを助けたな。

……よし、気絶させてポケモンを出させよう。

「……………広人」

「なんだ？」

「……………任せな」

「？」

パソコンカタカタ打ってたし秘策でも？

「……………おい、鰐淵豊一と田島風香だな？」

「……………なんで知ってるの？」

「もしかしてストーカーww？」

調べたんだ。

「……………男の方」

「な〜に〜？」

「……………お前のパソコンをハッキングしたけど」

「……………へ？」

「……………この写真ヤバいだろ」

「……………」ガク ガク ブル ブル

「……………然るべきとこに持っていけばどうなる？」

やっぱりやらかしてる人間か。

皆スネに傷を持つてるからな。

「……………女の方」

「な、何」

「……………LINDA、糸井義彦」

「ひっひい!? な、なんで知って!」

「……………いいのか? やばくね?」

言ってる意味わからんがヤバいんだな。

「……………こつちとら情報網多いんだよ。ナメるなよ馬鹿共が」

「ひいっ!」

「……………2億山分けか、社会的に抹殺されるか」

「うっ……………」

「……………やるのかやらねえのか?」

「いけ、マツスグマ!」

「マグカルゴ! 行け!」



「ふう、助かったぜい」

「……………アイツらの日頃の行いが悪い」

すぐ近くに階段があったので登った。

それでゴールドスプレーが結構あったので振りかける。

ドカーン！

「少し遠いな？ 爆発音がする」

「……………全然聞こえん」

身体能力が超強化されてますしね。

耳もよくなってる。

だいたいぼくはつは面倒だからな。

さっさと切り抜けよう。

あ、げんきのかけから見つけ。

「……………暗くて全然見えん」

「俺も」

ポケモン倒したくてもゴールドスプレーしてるからね。

ずっと暗いまま。

「あ、先輩！」

「広人さん！」

「あ、お前ら」

やつと会えたな。

「平気か？」

「少しダメージを食らってる子がいますけど問題ありません」

「私もです！」

よかよか。

「で？ どっちが頂上かわかる？」

「こつちです」

トレーナー倒してたか。

よし幾三！

ああ、他の奴らはどうなったんだ？

「あ、階段見つけ」



「よ、広人。お疲れさん」

「木場君か、先に来てたか」

あ、いなかったやつが全員揃ってる。

「あ、あつちに登録してきなよ。順位で何か有利になるみたいだよ？」

第二次予選は何をやるのだろうか。

「……………広人、先どうぞ」

「先輩の方が先に着きましたしね」

別に先でも後でもどっちでもいいんだかな。

俺は登録を済ませ、そこら辺にあったドリンクバーで喉をうるおすのだった。

ロワイヤル

「あれ？ まだ終わらないの？」

「長いなー」

俺達がクリアして3時間後。

まだ終わっていないみたいだ。

「この焼き鳥いまいちだな」

「でもこのたこ焼きは美味しいぞ」

「そうです？ お好み焼きとかも美味しいですよ」

頂上に着いた人間には無料で飲食できる。

退屈を凌げる。

「結構難しいってさ」

「分かる。だいたいくはつだったり毒だったりあるし」

「トレーナーとか道具や金関係で襲いかかってきましたし」

やっぱり皆も同じか。

暗さがマシになるだけではなく道具も欲しいし。

道具はランダム落ちてるから分からない。

「階段近くで待ち伏せて何人か倒して道具をゲットしたぜ」

「あ、そんな手があったか」

「族の仲間数人と合流してな」

俺と鉢合わせしなかったし、ずっとはいなかったんだな。

だけどコイツら賞金首だからピラミッド内では結構襲われてそう。

振り返ちにして道具とか大量だろう。

トレーナー同士の共食い行為とかもあったかも。

それで人数少ないとか。

「そういえば宝物庫とかあった？」

「ん？ 俺の所はあったぞ？ 木の実が沢山あったぜ」

俺の所は無かったな。

もしかしたらモンスターハウスみたいなエリアもあったかもしれない。ミミック部

屋を連想。

みちづれを覚えてる奴とかもいたりして。

「それにしても何人残ってるかな？」

「今の所クリア者は50数人ってところか？」

時間経ってるのにまだ戦ってるトレーナーがいるのか？

確かに128人まで到着し、ピラミッド内のトレーナーが居なくならない限り終了じゃあない。

「俺の族の仲間も数人見えないな」

ちらほら木島の仲間が見られる。頑張ったな。

コイツら最大勢力だ。

だけど過酷っぽいから落ちてる可能性もあり。

麻痺や氷の所でダメージとか受けてそう。

「あ、リンゴジュース美味しいですね」

「本当だ美味しい」



更に3時間後。

「まだかよ」??”??”

「トランプでも持ってくればよかったですね」

数人上がってきたが、まだ終わらない。

「ZZZZZZ」

「……………」

あ、唯が寝てる。

わかる。暇だからな。

ジリリリリリリリリ

「あ、終わった？」

「やっただよ」

六時間いて凄い暇だったな。

軽食があったのは良かったけど、それでも暇だったな。

……………それで60人程しかいませんが？

やっぱリキツイなこのピラミッド。

俺もエメラルドやった時に苦労したよ。

『お待たせしましたああああ！ 一次予選終了です！』

やっとか。

『はい、では二次予選始めたいと思いまーす！ それではスクリーンをご覧下さい！』

あ、スクリーンが出てきたにや。

何をやるんだろうか。

『二次予選はあああ、バトルウウロワイヤルウウウ!』

『Y A A A A!!』

あ、スマブラを連想した。

中学生を島に閉じ込め殺し合いをさせる映画があつたな。

それでそれで、どんなルールでやるつもりだ?

『まずは16ブロックのエリアに別れてバトルロイヤルをしてもらいまーす』

エリアの大きさは1×1kmの広さ。

更に全員倒れるまで6対6でバトルするそうだ。

ついでにピラミッドの道具を繰り越しで使えるつてさ。

シンプルだな。俺としては舞台とかでやりたいが。

それで早く着いた順から入るブロックを決めていいんだつて。

で、勝ったら本戦出場&世界大会へ。

確かベスト16で世界つて言つてたし。

「皆別ブロックでな」ヒソヒソ

『それでは到着順からどうぞつ!』

それで皆別ブロックへ。

うちらが居ないブロックへは木島の舎弟達が占めている。

で、淡々とうちらと一緒にブロックへ入れてくる人間がぞろぞろ。

あ、俺の所に数人入ってる。

ん？ あれ？

「先輩、本戦で会いましょう！」

「ああ、ん？ チャラ男がいらないな……S5もいない」

「チャラ男だったら私達が倒しましたヨ。あとS5は他のトレーナーに倒されちゃったって他の人が言っていました」



『それではああああー第一ブロックヴヴヴ！』

ああ、俺が初手か。

『それでは影山広人、佐家本一郎、佐家本二郎、佐家本三郎！ 準備お願いします!!』

あ、やっぱり顔そっくりだから三つ子だと思った。

「影山広人」

「あ?」

「見せてやるよ」

「俺達の」

「パーフェクトな戦いを」

……油断はしないぞ? ここまで来てる時点で優秀だしな。

「貴様に勝つ為に『それでは始めます! 3! 2! 1!』」

ヒュン

おっと着いた。

ここは荒地か?

岩場ばかりで見通しが悪い。

「見つけたぜー! 影山広人!!」

うわっ、早速見つけた。エリートトレーナーみたいなのが勝負を仕掛けてきた。

1? なのに見つかるの早い。

「行け、プテラ!」

「ベトベトン、君に決めたっ!」

ベトベトン、やっておしまい！

「おつ、いたいた！ 行け、ライチュウ！」

「よし！ 手筈通りに畳むぞ。行け、スターミー！」

同じ顔の人間が二人出てくる。

他の所も結託してやるのが有り得そう。

「行くぞ！ 俺ら三兄弟の力を見せてやる！」

………ポーズもとって息ピツタリだ。

三人同士で連携とかよくやってそう。

「二郎、三郎！ フォーメーション△！」

「応！」

あ、なんか囲まれた。

「プテラ、はがねのつばき！」

「ライチュウ、10万ボルト！」

「スターミー、なみのり！」

少しダメージが入ったな。

「ベトベトン、スターミーにかみくだく！」

「ベト」

「しまった！ スターミー！」

エスパークタイプいたしな。

さて、次は、

「ライチュウにもかみくだく！」

「ライ!?!」

「プテラ、ほのおのキバ!?!」

「いわなだれ」

「しまった！」

ライチュウを瀕死にほのおのキバで突っ込んできたプテラをいわなだれし瀕死。

油断しない。

まだ始まったばかりだ。



「先輩、お疲れ様です！」

「ふう、勝った勝った」

案外すんなり勝てたな。

世界大会進出だ。

「それじゃ次は私の番ですね」

「頑張れアリス」

「頑張ります！」

次はアリスか。

い。
スノウの情報だと俺らの派閥以外でもうS5以上の実力のトレーナーはいないらしい。

木島の配下も数人だがうちらと一緒にブロックに入ってサポートしてるやつもいる。

これで日本のゲス一口派は全滅したかな？

「あ、始まったよ」

今はアリスの勇姿を見るとしよう。

こんたいかいちゆうもくのダークホース

『ゴウカザル！ ソーラービーム！』

『しまった!? オーダイル!?』

わあ、ソーラービームがかめはめ波みたいに撃ってる。

「これでゲームセットだ」

最後の森屋君の試合が終わり、ウチらの派閥が全員世界大会に進出した。

さて、ここからが本番だ。

全員が強敵だからな。

『皆さんお疲れ様でした！ それでは明日の全国大会のトーナメントを行います！』

まあ、結構時間かかってますしね。

明日に繰り越しでしょ。

『ルールは3対3の勝ち抜き戦！ 準決勝からは6対6のルールに変更になりマース

!!』

6対6か。

俺のポケモンも多いし、逆にポケモンの数少ない唯だと不利だ。

『少し早いですが、トーナメントの組み合わせ表を発表します!』
あ、スクリーンに写真が映り出された。

次に写真がシャツフルするよな映像になる。

それで横に自然に並べられ、全員の対戦相手を映す。

それで? 俺の相手は?

「……………お、私か」

「スノウか」

初戦の対戦相手はスノウか。

……………情報少ないな。

ポリゴン2とネイティオくらいしか直に見てないし知らない。

多分飛行タイプの加護持ちだろう。

兄貴良い奴だし、トレーナーとして色々教えてそう。

まずは疲れたし、泊まってるホテルへ帰ろう。

バイキングだっけ? 楽しみだな。



「よっこいしょっ」

ふう、鰻美味かったなあ。

屋上でひと涼み。

「……………よ、広人」

「スノウか」

ん？ 何の用だ？

「……………切り札があるって聞いたが？ ホントか？」

「聞かれてたか……………」

まあ、情報として入ってるだろ。

「……………あの二匹か？」

「？」

「……………？」

二匹？ 全部は知らないのか。

まあ、唯が偶然やらかしてくれたけど。

誰にも話してないからな。

「……………私は勝つつもりだぞ？」

「俺も当然だ」

当然だろ。

電気、岩、冷凍の技を覚えさせているので前と同じ技編成とは違うのだ。

「……………データを洗い直さなければ」

「そうか、気張れや」

「……………うん」

スノウは去っていった。

「……………ふう」

一応、スノウの県予選のビデオを見た。

手持ちはポリゴン2、ネイティオ、ワタツコだ。

だけど疑問が一つ。

本当にこの三体か？

アリスはメガバンギラスを奥の手で全国大会で使うと言っていた。

だったらスノウも何か持つてるんじゃないのって話。

情報通だからなんかヤバイ情報とかありそう。

とりあえず頑張ろう。

「フアイトーオウツ！」

ごくせんみたいな感じで。

「……………」

「……………あ」

視線があつたので振り向くと森屋君……………いたの？

「どっから見ている」

「よっこいしよの所から……………」

最初からじゃん。

「それでもスノウさんが対戦相手か……………」

「まあな」

「県予選じゃあ全然本気出してないみたいですね」

「やっぱり隠し玉あるのか」

「ええ、ギャラドスもいるみたいですよ」

ギャラドスか……………飛行持つてるし強いしな。

「あとは……………あ、あのヤバいポケモンか」

「あのヤバいポケモン？」

「あ、やっぱなんでも無いです……………それじゃ対戦相手の研究もあるので失礼！」

あ、行っちゃった。

ヤバいポケモンってなんじゃろ。

アニポケのポケモンリーグみたい。

「……………行くぞ、凡人！」

「来やがれ！」

『それではあああああバトル開始いいいい！』

あ、聞いた事ないバトル音楽だ。

気分が乗ってくる。

「行け、ベトベトン！」

「……………行けワタッコ！」

ワタッコ……………か。

素早さ高そう。

「……………やどりぎのたね」

「タッコ！」

案の定先手を取られた。

やどりぎを植えられる。

「とくづきー！」

「ベトベー！」

どくづきがあた……………らない。

外れた。

「……………へへっラッキー。マジカルシャイン」

「ダッコ！」

普通等倍ダメージを貰う。

さらにやどりぎでダメージ。

「いわなだれ！」

「ベトベト！」

「タッコ!？」

当たって効果抜群だが、

「僅かに残ってるか」

「……………きあいのタスキ」

装備してるの？

綿の中に隠してるのか。

「ベトー！」

「……………回復してる？」

ああ、くろいへドロ持たせといた。

「……………マジカルシャイン」

「くっ、どくづきだ……」

瀕死になったが四割程体力が削られた。

次は？

ネイテイオか？

「……………行け、ギャラドス」

ここでギャラドスの登場だ！

「ベトベトン、いわなだれ！」

「ギャアアア！」

効果抜群なのだがまだHPが残っていた。

「……………ギャラドス、じじん！」

「しまった！」

確かにじじんを覚えるっけな。

「ベト!?!」

くっ、瀕死だど!?!

マジかよ。玉川達よりも強くないか?!

「行け、サザンドラ！」

「グオオオオ！」

「……………ここおりのキバ！」

くっ、効果抜群だ。

多少のダメージが入る。

「ガア！」

「サザンドラ、れいとうビーム！」

「ガアアアアアア！」

「……………くっ、ご苦労ギヤラドス」

あと一体。

「戻れ、サザンドラ」ボシユン

一応戻す。

何を出してくるか。

「やれ、ガオガエン！」

「ガオ」

「……………行くぞ」

ボン

何年前だろうか？

金銀によってレベルが違うポケモン。

カントー地方まで行ったりして羽根をゲットした。

懐かしい懐かしい。

「キシヤアアアアアアア!!」

サトシもこのポケモンを初っ端で見たらしい。

心正しきトレーナーの前に、七色の翼を光らせながら姿を現すと伝えられる伝説のポケモン。

にじいろポケモン、ホウオウ。

「ええええええええええええええええええ!!」

「……………フツ」ドヤ ドヤツ

嘘だろ!?

なんでいるのおおおお!!?

「おい、どこで捕まえた……………」

「……………兄貴とバイク中に山奥で」

びえん。

「……………怪我してたから治すと懐いた」

凄いなオイ。

あ、アルセウスゲットした俺も強運。

「さて、気を取り直して。ガオガエン、かみなりパンチ」

「……………ホウオウ、そらをとぶ」

あ、しまった!

そして、急降下。

「ガア!?!」

「かみなりパンチだ!」

「ガオー！」

効果抜群。

なのだが3割しかダメージしか与えられない。

こっちは2割程度もらったが。

こっちの方がまだ有利。

??
??

「……………たべのこしか」

持たせておいた。

少し回復。

「もう一度かみなりパンチ！」

「ガオー！」

「……………じしん！」

クソツタレええええ！ 覚えられてたのかよおおお！

「ギユオオオオオオ！」

大ダメージを受けた……………あ、わずかだがヒットポイントが残っていた。

ガオガエンのかみなりパンチが当たる。

「……………アイアンヘッド！」

ガオガエンは瀕死に。

あとホウオウは半分以下のHP！

スノウもあまり顔に見せないけど焦ってるだろ。

「行け、サザンドラ！」

「グギャアアアアア」

頼むぞ！

「あくのはどう！」

「……………くっ！」

こだわりメガネ。

特攻を1.5倍にする。どっちかと言うとサザンドラは特攻タイプだ。

ドガアアアアアン！

「グア……………」

俺の勝ちだ！



「まさかホウオウ持つてるとはな」

「……………最初小さかったけど成長した」

なるほど、雛の頃から育てたのか。

「……………唯の試合始まるみたい」

「ああ、どんな因縁の対決なんだろうな」

次は紳士のおじさんと唯だ。

まさか……………紳士が唯の関係者だったとはな。

『第三試合はじめまあああす！』

あ、そろそろだ。

俺らはみんながいる席に軽く急ぐ。

『真田唯VS真田弓兵！ バトル開始いいいい！！』

真田家

俺達は座る。

「まさか紳士のおじさんが唯の知り合いだったとはな」

「……………まあな。色々あったらしいぞ」

「おっ、たこ焼き美味い！」

確か唯。パパの名前が真田剣兵だったな。

下の名前が弓兵だし名前が兄弟っぽい。

槍兵って兄弟もいるのだろうか。

「……………でだ。アイツの正体だがフランスの傭兵部隊で働いていた傭兵だ」

そういうえば動きがキレッキレだったな。

「……………付いた異名が【撃墜王】だそうだ」

「何をした……………」

「……………銃でヘリコプターを墜落させたらしい」

「ええっ……………」

「木場さん、この動画見てくれませんか？ 格闘使いの」

「あ、それ見た。まさかあれを初っ端から出すとはね」

銃でって、よく墜落させたな。

燃料とか操縦士を狙ったのか？

「……………あと一人で敵の拠点を制圧したと」

「……………すげえな」

「……………海外では有名だそうだ」

「そうなんだかあ……………で、傭兵を辞めたのか」

「……………まあな。危険な仕事だからな」

確か無職って言ってたし。

「……………それで今は財産食い潰しながら覗き活動してる」

イヤイヤ、覗きするってのはどうなんだよ。

もっと就職するとかそんな選択肢は無かったのか。

「……………たまに、お偉いさんからボディガードの仕事してるって」

もう民間警備会社に就職したら？

覗き魔から足を洗ってさ。

「……………ちなみにアイツは」

「始まるみたいだな」

「……………本当だ」



「……さて、戦いましょうか」

「うん、勝つ」

「ほう、若いですな」

ちなみに紳士の歳は40歳だ。

結構老け込んでるようで意外と若いんだな。

「行け、ドンカラス！」

「カー！」

「ほう、ドンカラスですか」

一見有利なのは唯の方だ。

悪はゴーストに効果抜群。

「お行きなさい、ムウマージ」

「ム！」

ムウマージか。

確か凶鑑の説明には呪文のようなモノを唱えるって記載。

不幸の呪文もあれば、恋愛成就の呪文もあるから探す人もいるってさ。

御守りや神頼みと大体同じやな。

「ムウマージ、マジカルシャイン！」

「ムウ！」

「ドオオ!?!」

うおっ、効果抜群だな。

「ドンカラス、つじぎり！」

「ドオ！」

と、言っても半分以下のダメマジだ。

効果抜群なものにな。

「ダメ押しですよ！ マジカルシャイン！」

「かア！」

ドンカラスが戦闘不能。

やっぱり強いな。

「頑張つて、ドラピオン！」

「ここぞでドラピオンだな。」

「ムウマージ！ シャドーボール！」

「ムマー！」

半分以上のダメージだ。

「ドラピオン、かみくだく！」

「ム！」

「ほう、追い詰めましたな。もう一度シャドーボール」

「ムマー！」

ドラピオンは瀕死に。

残り一体、次はアブソルだ。

「行け、アブソル！ メガシンカ！」

アブソルは光の玉に包まれ、翼の生えたイケメンに変身。

「ほほう、メガシンカですか？ 神々しい」

俺のメガシンカも見られる機会があるかもしれない。

「つじぎり！」

「ムマー!？」

「ご苦労、ムウマージ」

ムウマージはボールの中へ。

「やりますな。兄貴の娘だけはある」

「……………」

一体何があったのだろうか。

大企業のトップの兄弟が何故フランスの傭兵会社へ入るのだろうか？

「次はそうは行きませんがな。ゲンガーー！」

「……………」

あ、影からゲンガーが出てきたわ。

影とかに入れたんだな。

「つじぎりー！」

「ほろびのうた」

あ、使えるもんな。

……………非常に不味い状態だ。

つじぎりでダメージは入るが決定打にはならず。

ほろびのうたが決まる。

特性マジックミラーでも反射出来ん。

互いのカウントが3になった。

「まもるー！」

「シャドークロー！」

やっぱりまもるを持っていたか。

シャドークローは効果抜群なのに当たらない。

ほろびのカウントが2になった。

「くっ……」

「ふっ、ライバルの傭兵部隊の方がもつと陰湿ですか？」

一見狡いとは思いますが、戦場じゃルール無用だからな。

あと、アブソルもほろびのうた覚えるし立場が上だったら俺も唯もやるよ。

「もう一度まもる」

「……」

「くっ、つじぎり！」

まもるに阻まれ当たらず。

ほろびのカウントが1になった。

「それでは戻りましょう」

「……」

ゲンガーは戻る。

「ガラ！」

アローラのガラガラか。

炎、ゴーストか。

「……………シャドークロー」

一応半分以上ダメージは食らった。

……………アブソルのHPがゼロになる。

「くっ……………」

「見事なポケモンを育ててます。また再戦の機会があればまた戦いましょう」

「ええ、ありがとうございます……………」

この紳士礼節も弁えてやがる。

悔しいだろうなあ唯。



「負けちゃった……………」

「……………ウチも負けた」

唯もスノウ共々強いと思うが相手が悪かったな。

「ほら、チェロスじゃ」

「ありがとうアルセウスさん……」

「……………そのフランクフルト寄越せ」

「くっ、それ買ったばかりなのに……………」

俺もチエロスを買おう。

うん、甘い。

「あ、小休憩ですね。何か買ってきますか？」

「俺も行くよ」

「儂、たこ焼きー！」

これでベスト8だ。

次の組み合わせを見てみよう。

第一試合、俺VS鞍田隆一郎。

「鞍田のおっさんか」

「ふっ、我が筋肉のリベンジッ！」

第二試合、真田弓兵VS森屋浩介。

「ほっほっほ、若いだな」

「あ、柚子姉。ついでにコーラお願い」

第三試合、木場明人VS黒田アリス。

「アレは使いたくないかなあ」

「広人さん、玉川さん。手伝いますヨー！」

第四試合、木島聖騎士VS玉川柚子。

「髪整えるか……」

「たこ焼きと……コーラですね？」

改めて見ると全員強者だな。

木場とか紳士は実力を見せてないから楽しみだ。

「俺もたこ焼き食いたくなつたな」

「行きましょうか」

こんたいかいゆうしょうこうほの1チーム

? side

「うむ、面白い」

「どうしたの? マスター?」

とある場所、とあるトレーナーとポケモン。

トレーナーは資料、ポケモンはコーヒーを片手に。

「ああ、この資料だ」

「鞍田隆一郎の事を調べたのか」

「まあね。もしかしたらお得意様になるかも知れないし、情報を知るのが後々得だと思おうしね」

「で、何が書いてあるの?」

ポケモンはコーヒーを飲む。

「エリート警察一族の出身。色々あってクビになってるんだ」

「色々? 勤務中に服でも脱いだの?」

「そんな可愛い事で捕まらないよ」

トレーナーも喉が乾いたのか飲み物に手をつける。

「実は独断で人身売買組織を潰したんだ」

「それじゃ正義の味方みたいなものじゃん」

「外見はそうだけどね。実は違うんだ」

「？」

トレーナーは資料をめくる。

「実はその人身売買組織は警察とグルなのさ」

「え？」

「犯行を見て見ぬふりの代わりに多額の金銭や情報を貰っていたらしい」

「クソじゃん」

「本当にね」

実際、日本人は健康な人間が多いから臓器売買で狙われる事が多い。

外国人に売られるのもよくある。

「それで事実歪曲されて、捕まった犯人は証拠不十分で釈放。独断で無実の人間を捕まえた責任で家を追い出された」

「権力って持ち過ぎると腐るんだね」

「歴史が証明してくれてるね。それでその組織は懲りずに人を誘拐したりして売買して

いた」

「あ、この前潰した組織だっけ？」

「うん、今はチャイナにいると思うよ？ 生死不明だかね……………」

「軍資金溜め込んでたからラッキーだったね」

人身売買生活を楽しんでいるだろうか。

生死不明だが。

「チャイナといえばアイツか」

「知り合っているの？」

「まあな、変な奴だが気のいい奴だ」



「行くぞ我が筋肉う！」

「……………」

イヤイヤ筋肉関係ないやん。

ポケモンの実力で語り。

さて、正念場か？ 連続で強敵だしな。

この前戦ったけど強い方だし。

「ん？ 自分の筋肉も負けてはいないと思ってるだろう」
「思っていないです」

【山の番人】鞍田隆一郎 懸賞金 1億6000万

結構強そうだな。

何を出してくるかな。

『それでは準々決勝第一試合始めます！』

「行くぞ！」

「返り討ちだ」

こっちも切り札を持っている。

負けられん。

「行け、ベトベトン！」

「プテラ！ 行つてこい！」

最初はプテラか。

「プテラ、メガシンカ！」

プテラは光の玉に包まれる。

「グオオオオウ！」

メガプテラの登場だ。

確か特性はかたいツメだったな。

攻撃力と素早さがウリのポケモンだ。

「ストーンエッジ！」

「キシャアアアア！」

あ、外れた。

あつぶねえ。

「いわなだれ！」

「ベトベト！」

ヒット！ 半分以上のHPを奪ったぜ！

技当たらなくてラッキーだな！

「もう一度ストーンエッジ！」

うぐ！ ダメージは大体4割くらいか。

「いわなだれだ！」

「くつ、プテラ……………」

先手当たってたらこつちが負けてたかもな。

まじで油断が出来ない。

「行け！ レジロック！」

「……………」

来たよレジロック。

準伝説ですな。

と、言っても防御力高いし分が悪い。

「戻れ、ベトベトン。サザンドラ頼むぞ」

「ガアアアア」

特攻お化けのサザンドラさんに頼むとしよう。

「れいとうパンチ！」

「何いい!!？」

クソツタレ！ 半分以上のダメージを受けちまった！

コイツれいとうパンチとか覚えられたんだな。

「きあいだまだ！」

「くっ！ レジロック！」

特防は普通の筈だ。

「……………」

は？ HPがギリギリ残ってるだと…………耐えやがった！

「れいとうパンチ！」

「ガウウ!？」

クツツタレ！ 倒された！

「戻れサザンドラ！」

俺はベトベトンを出す！

「アームハンマー！」

「ベトベト!？」

危ない……赤色だが残った。

「かわらわり！」

よし、倒せた。

やべえなこのおっさんは。

「頼むぞ！」

出てきたのは暗い灰色をした、城の石垣のようなものに足が4本生えているような外見。

目のついた石のような1つ1つの部分が生命体であり、それが積み重なって1つの個体を作り出している。

タマタマとかナツシーとかもそんな感じだろうか。

コイツ、ツンデツンデをゲットしやがった!!

「……」

「ふっ」

おい待って!? ウルトラビーストいるのかよ!!

………つて事は他の奴らも持つてる可能性とかあるかも。

「ベトベトン! かわらわり!!」

確かコイツは素早さが低かったはず。

格闘は4倍ダメージ。

「………」

ダメだ。

4割くらいしかダメージを受けてないや。

「ツンデツンデ、アイアンベッド!」

「……………」

ベトベトンは瀕死になる。

まさかこんなポケモンがいたとはな。

「ふっ、どうした？　我が筋肉に魅せられたか？」

「冗談」

まさか奥の手その1を見せる時が来たとはな。

「頼むぞー！」

俺はボールを投げる。

人々を深い眠りに誘い夢を見せる能力を持つ。新月の夜に活動するポケモン。

怖そうな外見だが悪気の無い特性。

あんこくポケモン ダークライ

(・・―・・)(・・―・・)(・・―・・) ザワザワ

やっぱりザワザワしてる。

結構有名だし映画にも出た。

何故持つてるかて？

前助けたダークライの仲介により、ダークライ達の住処に連れてって貰ったのである。

その中で優秀なダークライに声を掛けて誘っておいただ。

「行くぞ、ダークホール！」

「……………」 z z z

「ツンデツンデ!？」

ちなみにダークホールの通常の命中率は5割だが、このダークライは7割程の命中率らしい。

それなので口説いて連れてきた。

おほぎを与えるとスムーズに交渉出来た。

「よし、ダークライ……………きあいだま」

「クライ！」

4倍ダメージ。更には特攻が強い種族値。
更に更にナイトメア。

「……………」

「ご苦労、ツンデツンデ」

俺らの勝ちだ。



「次の世界大会では負けんぞ！」

「ああ、またやろうな」

まだ切り札はあるしな。

「飲み物買つてくか。何か飲む？」

「いや、プロテインを常備してるから結構」

プロテインって常備してるものなんだな。

「次は紳士と森屋君か」

「あの紳士か……確かとっておきがあると言っていたな」

マジかよ、楽しみだな。

俺達は席に戻るのだった。

他の加護持ちの実力

「さて、次は私ですかな」

「真田さん……………」

真田弓兵VS森本浩介。

ゴーストVS虫って言った方がいいか。

木場君もどんなの使うか楽しみだ。

「行け、アリアドス！」

「行け、ガラガラ！」

しまった。アリアドス出しちゃたか。

「ニトロチャージ！」

「……………」

「負けるなアリアドス！ エレキネット！」

ダメージをアリアドスは食らうが持ちこたえる。

大半のHPを削られたので次で終わりだろう。

後に色々残すためにエレキネットを貼ったようだ。

「もう一度ニトロチャージ！」

「くっ、アリアドス……」

アリアドスは倒れる。

流石に虫に炎は不味い。

「頑張れアゲハント！」

アゲハントか、最初に育てたのがこのポケモンだと言っていたな。

糸を吐くを上手くして大会を総ナメしていたとかなんとか。

「アゲハント、アクロバット！」

「キィー！」

素早さが偶然上であつたので攻撃を成功させる。

しかし、決定打にはならず。

「フレアドライブ！」

「……………」

一撃で決まった。

「済まない……………」

別に森屋君が弱いのではなくて相手が悪すぎる。

多分後ろにはもっと凶悪な切り札が待っているだろう。

「頼むぞデンチュラ！」

「チュラ！」

最後のポケモンはデンチュラか。

「デンチュラ！　ほうでんだ！」

「チュラ」

お、急所に当たったようだ！

しかし、

「おや、減らされてしまいましたな。それではフレアドライブ」

フレアドライブがデンチュラに当たりゲームセットだ。

「そちらも強者でしたな。また挑戦を受け付けますよ？」

「ええ……楽しみに待っていてください……」



第三試合、木場明人VS黒田アリス。

「さて、揉んであげよう」

「セクハラですー！」

「なんで」

県予選を見たがハツサム一体しか使っていない。

決勝で森屋君をボロくそにした。

「カモン、バンギラス！」

「はあ……行くか。ヘラクロス、やっておいで」

ん？ ヘラクロスか？

「ヘラクロス、メガシンカ」

「こつちもバンギラス、メガシンカ！」

お、おおくメガシンカ同士の戦いだ！

あんまり見ないから興奮してきたア〜。

2匹とも光の玉に包まれ違う姿で出てくる。

「ヘラクロス、インフアイト!!」

「ロオ！」

「グオウ!?!」

初手でインフアイトやるか。

威力ある上に効果抜群だからバンギラスは吹き飛ばされバーの色が赤になる。

「バンギラス、つばめがえし！」

「なにー！」

あ、覚えさせてたか。

4倍ダメージの上にインファイトの追加効果の為HPが半分以下に減る。

「メガホーン！」

う、等倍だが瀕死にするにはちょうどいいダメージだ。

「御苦労、バンギラス」

まだ砂嵐は終わってないぜ！

「行け、ワルビアル！」

「びあるー！」

「メガホーン！」

「ビアー！」

やっぱりメガホーンが突き刺さるよな。

ダメージを半分以上与えられる。赤色に。

「つばめがえしー！」

あ、コイツにも覚えさせておいたのか。

「なに!? ヘラクロス!!」

なんと!? ヘラクロスが倒れた。

よし、よくやれてる。

「やるね」

「そつちこそ」

どつちも強いね。

「行け、ウルガモス!」

やっぱりガモスも入れていたのか。

「むしのさざめき!」

「ビア!」

効果抜群、よくやったよウルビアル。

「行け、キリキザン!」

「キザ!」

キリキザン……………か。

「かえんほうしゃ!」

「キザア!」

炎には効果抜群なんだよな。

「キリキザン! ストーンエッジ!」

「キザ!!」

効果抜群、なのだが。

「強かったな。かえんほうしや」

「キザアアア!?!」

地力が違いすぎる……………確かガモスって種族値高い方だし。

地味に脅威だ。

「強かったね。トップクラスには入ってるよ?」

「世界大会でリベンジです……………」



「行きますよ!!」

「来い!」

木島聖騎士VS玉川柚子。

飛行VS悪の戦いだ。

「キュウコン！ 頑張つて！」

「行け、ファイアー！」

わー日照りに出しちゃいけなさそうなのが出てきた。

「ファイアー！ げんしのちから！」

「イヤアアオ」

あ、岩タイプ覚えてたのね。

「え!? キュウコン！」

効果抜群なのか一撃で瀕死となる。

次出てきそうなのは。

「行つて、ヘルガー」

「ガウ！」

「メガシンカ！」

光の玉に包まれ、メガヘルガーにメガシンカする。

特性サンパワー、天気がひざしがつよい状態だととくこうが1.5倍になる代わりに
毎ターン終了時に最大HPの1/8が減る。

諸刃の刃だが今はこのファイアーを倒さないと。

「ファイアー、げんしのちから！」

効果抜群だがステータスが高いのか半分のダメージも行かない。

「ヘルガー！ あくのはどう！」

ゴリ押しで行くか。

特攻が1.5倍だしタイプ一致だし。

あ、ダメージ食らってる。

「ガウウ」

サンパワーのデメリットだ。

HPが半分程に。

モグモグ

あ、たべのこし持たせてるのか。

「ファイヤー、げんしのちから！」

効果抜群の岩タイプが突き刺さる。

ヘルガーのHPは赤に。

「ヘルガー、あくのはどう！」

「クオウ！」

あくのはどうが突き刺さる！

しかし、

「あつぶねえ……………」

HPバーが見えるか見えないかって所。

「ガウ……………」

サンパワーでヘルガーは倒れ…………てない？ あ、こつちも見えるか見えないとこ。

「…………エアスラッシュ」

ヘルガーは倒れた。

不味いな、後3匹はダーテングだと荷が重い。

「行け、ダーテング！」

「グウ!!」

「だましようちー！」

「御苦労、ファイヤー」

ファイヤーが倒れる。

飛行タイプだからな。草のポケモンは嫌だろ。

で？ 次は何を出す？

「トゲキッス、殺れ」

「チッキ！」

来たよ害悪。

「エアスラッシュユ！」

効果抜群だ。てんのめぐみの特性だったはず。

「グウ?!」

「え！」

運悪くひるんだようだ。

「もう一度エアスラッシュユ！」

そしてダーテングのHPがゼロに。

ホーリーナイトの勝利だ。

「いやあ、まさかファイヤーが倒されるとは思ってたぜ」

「残念です……」



やっぱみんな強いなあ。

そして次の準決勝の組み合わせは？

第一試合 影山広人VS真田弓兵

「行くぞ覗き魔……」

「来なさいカツアゲ魔……」

第二試合 木場明人VS木島聖騎士

「行くぞボンタン狩り……」

「来い昆虫狂……」

やべえラインナップだな。

興奮が止まらない。

「あれ？ 俺ってカツアゲ魔？」

「……………ネットでは有名だぞ？」

「そうか……………」

ベスト3にはいるちからをもったチーム

? side

「コイツも面白いな」

「次はゴーストの人？」

「まあね」

「一方ともコーヒーを片手に資料を見る。」

「真田剣兵の弟なんだけど、これまでの経歴は凄くてさ」

「何かあったの？ 兄弟なんだから一緒に働いてるイメージがあるんだけど」

「実は跡継ぎを決める争いがあったね。それで負けて出ていってしまったらしい」

「仲良くすれば」

「そういう伝統らしい。蠱毒に催してらって」

ちなみに三人兄弟。

「それで？ その後は？」

「海外に移り住んだらしくてね。その後傭兵団に身を置いたらしいんだ」

「傭兵団に？ なんて？」

「……本人曰く、死に場所が欲しかったって」

コーヒートをグイッと飲む。

「でも兄弟同士は縁は切れてないらしくてね。たまに会うそうだって」

「そうなんだ……」

マスターの方は、甘いものが恋しいのか大判焼きを口にはおる。

「それで頭が冷えたのか日本に移り住んだって訳。戦場で身につけたスキルを使ってやりたかった覗きをしてるそうだ」

「もつといいスキルの使い方あるでしょ」

「うん、相当余罪あるみたい。多少のコネもあるそうだって」

「ヘーロクじやなさそう」

マスターがつまんでいだ大判焼きを貰う。

「……で、マスター。それ関係で調べたことがあったんだけどさ」

「ん？ 何があったの」

「真田槍兵の事」

「ああ、次男で確か選ばれたトレーナーだった？ 会ったの？」

「そりや会えないよ。だって行方不明になってるらしい」

「……………なんで？」

「僕も分からない。色んな人に聞いてみるとポケモンが現れた時期を境に行方不明になっただけなんだ」

「少なくなったので相方にコーヒーを注ぐ。」

「ポケモンが現れた境って事は神が関係してるとして事？」

「確証は無いけどね。だけどその日を境に数人だけ選ばれたトレーナーが行方不明になってる。余りにも不自然だ」

「ろくな奴らじゃないだろうし、変なイベントとか考えてるんじゃないのか？ 例えば

ダンジョンのボスとかやぶれた世界やドリームワールドに飛ばされたとか」

「ろくな奴じゃないだろうし有り得る……」

「少なくとも自分のにもコーヒー注ぐ。」

「確かその行方不明メンバーの中に影山——」

「あ、準決勝始まる」



「さ、やりましょう」

【幽騎士】真田弓兵 懸賞金 1億8600万

コイツそろそろ二億じゃん。

ゴーストか。あくタイプの方が基本有利だが、虫や格闘の技を使う可能性も高い。
6対6のフルバトル。

お、音楽がなり始めた。

「行け、ギルガルド」

「頑張つて、サザンドラ！」

まずはこれで様子見。

「サザンドラ、あくのはどう！」

「ギルガルド、キングシールド！」

やっぱり使ってきたか。

守られてるのでダメージは入らない。

「もう一度だ。あくのはどう！」

「ギルガルド、キングシールド！」

また塞がれる。

そろそろ潰れそうだ。

連続で出し過ぎると失敗するぞ？

特攻とメガネとタイプ一致だし相当な威力。

「あくのはどう！」

「くっ、せいなるつるぎ！」

ジリ貧なのか攻撃してきた。

あくのはどうは当たるがダメージを受ける。

こっちもダメージを受けるが少し。

「戻れ、ギルガルド！」

やっぱり戻すか。

何が出てくる？

「行け、ミミツキユ！」

ここでフェアリーの登場だ。

ヤバい！ 悪、ドラゴンの天敵だ！

「よし、戻す！ 行け、ベトベトン！」

「ベトー！」

ここでベトベトンへ入れ替える。

さすがにヤバいと理解出来る。

「ベトベトン、かみくだく！」

一応当たるのが、コテンとなってしまう。
ばけのかわか。

「じゃれつく！」

ダメージを受けるも等倍。

自分に毒を持てとかあつたな。

「ベトベトン、どくづき！」

やっぱどくを与えるに限るでしょ。

効果抜群だ。

「キュ」

な、僅かに残ってるだど？

あ、タスキが布の下から少し見える。

「じゃれつく!!」

「どくづき！」

半分程減ってしまったな。

ここで一体倒せた。

あと五体。

「行け、シロデスナ！」

シロデスナか。

じめん ゴースト。

「かみくだく！」

「だいちのちから！」

かみくだくがヒットする。

しかしまだHPが終わってないのでだいちのちからが命中。

僅かに残ってしまった。

「かみくだく」

「ご苦労、シロデスナ」

シロデスナは瀕死になる。

これで二体目。

次は何で来る？

HPが少ないからアレを使いたいけど使えない。

「行け、ギルガルド！」

「ここでギルガルドか。」

「かみくだく！」

「せいなるつるぎー！」

かみくだくは当たるも半分にも至らず。

せいなるつるぎは当たり瀕死となる。

「行け、ガオガエン！」

「ガオ！」

炎・悪だからな。

鋼・ゴーストに対抗。

「DDラリアット！」

「キングシールド！」

あ、能力値下げられた。

「DDラリアット！」

「キングシールド！」

そろそろやめた方がいいんじゃない？

まもると同じく連続すると失敗するぞ。

「DDラリアット！」

よし、当たった。

効果抜群だ。

「ご苦労、ギルガルド」

「少し休めガオガエン」

ガオガエンを休ませよ。

能力値を低下させられたんだし。

「行くぞヤミラミ！」

「ヤミ！」

「行け、ガラガラ！」

「ガアララ！」

ヤミラミ、最近出番が少ないような気がする。

気張れよ！

「ヤミラミ、いばるだ！」

「しまった！」

「ヤミ！」

ヤミラミのいたずらどころだ。

変化技なら一手早い。

「ガラガラ！ ホネブーメラン！」

「ガラアアアア！」

いきなり自分で攻撃しだした。

確か三分の一で自分に攻撃だったけ？

うわ、物理だから余計にダメージを食らってる。

「どくどくだ！」

「ヤミー！」

「もう一度ホネブーメラン！」

炎タイプなのでやけどは効かない。

特性は避雷針なのででんじはも効かない。

「くっ、戻れ」

こんらんで毒だし戻すよな。

「やれ、ゲンガー！」

「ンガー！」

「ゲンガー、メガシンカ！」

くっ、ゲンガーがメガシンカされる。

「ヤミラミ、でんじは！」

「ヤミー」

麻痺はさせておこう。

ここは倒れそうだし邪魔しておこう。

「ゲンガー、ほろびのうた！」

やっぱりやってきたか。

ゼロになるまで交換しないつもりだな。

「ヤミラミ、いばるだ！」

「ヤミ」

「ゲンガー！ シャドーボール！」

いばるや麻痺をかけるも動いて使ってきた。

ほろびのカウントが3となった。

「ヤミラミ、不意打ち！」

「ンガー!?!」

効果抜群、更には動けないらしい。

ほろびのカウントが2となる。

「ヤミラミ、もう一度不意打ち」

「ゲンガー！ シャドーボール」

「ヤミ！」

「ンガー！」

ヤミラミ、不意打ち成功。

ゲンガー、自分で自分を攻撃。

ほろびのカウントが1となる。

ヤミラミの最終ターンだ。

「戻れ、行け、ガラガラ！」

「いばるだ！」

読めてましたよ？

「ヤミ」パタリ

ほろびのカウントがゼロになる。

ご苦労、ヤミラミ。

「行け、ガオガエン！」

「ガオ」

ガオガエン、あと頼むぞ。

「ガラ！」

あ、自分で自分を攻撃しました。

「かみくだく！」

よし、戦闘不能だ！

あと二体だ。

「行け、ゲンガー！」

「ンガー！」

「かみくだく！」

よし、あと二体。

最後の一体は何だ？

「まさかこのポケモンを出すとは」

？ スノウと同じく伝説か？

もしかしたらどっからかギラティナを捕まえてきている可能性もある。

山奥とか行ってもサバイバルとか出来そうだしその最中伝説と会ってもおかしくない。

「頼むぞー！」

体はほっそりとした人型をしており、両腕の先は鎌のような形をしている。

全身はピエロの衣装のように黄色・水色・ピンクのカラフルな模様で彩られており、頭は色とりどりのふしぎな火花の集合体で、この頭を爆発させて人を驚かし、生気を奪う習性がある。

「……………」

はなびポケモン ズガドーン。

うわ……………コイツもウルトラビースト持ってたのか。

つて事は他の奴らも持ってそうだ。変態行為してたらエンカウントなんかしてるかも。

エスパー使いとか伝説の宝庫っぽい。

「ズガドーンか……………」

「ええ、アフリカ遠征中にバツタリあってしまいました、それから仲良くなって行きました……………」

「アフリカ……………」

自然が豊富な場所だから遠征とか行くのもいいかもしれない。

海外遠征か……………考えておこう。

「それから一緒にポケモ」

「ガオガエン、かみくだく！」

「なんの！ 目覚める。パワー！」

目覚める。パワー？

まさか効果抜群や等倍の技がないんじや……………？

「ガオ!？」

あ、効果抜群がよ!？

なんのタイプだこの技？

うわ、半分以上ダメージを食らう。

まあかみくたくを入れてたのであっち側も半分程、

「……………」??”??”??”??”

たべのこし食つとる！

体力が少し回復した。

「めざめる。パワー！」

「かみくたく！」

あっちの方が素早さが高いので先に当たる。

「ガオ……………」

ガオガエンは倒れる。

その隙にズガドーンは体力回復。

半分以上のHPだ。

「行け、ゲッコウガ！」

「クウガ！」

頼むぞゲッコウガ！

「ゲッコウガ、あくのはどう！」

「クウガ!!」

「ズガドーン！ 目覚めるパワー！」

先に目覚めるパワーが当たった……あ、急所に当たった!?

あくのはどうはささるが多少の体力が削られる。もう赤のバーだ。

「目覚めるパワー！」

く、ゲッコウガは倒れた。

サンクス。仕事はしたぜ。

「頼むぞ！ サザンドラ！」

「ギユアアアアア！」

多少HPを削られてるがな。

「ズガドーン！ 目覚めるパワー！」

「サザンドラ！ あくのはどう！」

ズガドーンがはやく、目覚めるパワーが当たる。
しかし、

「ギユアアアアア!!」

赤色バーになったが生き残っている。

サザンドラがあくのはどうを放つ。

「やっぱりお強いですね……」

「そっちな」



「さ、急ぎましょう」

「ああ、見物の試合だ」

俺らは観覧席の間を小走りする。

「先輩、そろそろ始まりますよ」

「あ、ポップコーンとコーラ忘れた」

「コーラありますヨ。ポップコーンは移動販売があちちから来るので待ってましょう」

準決勝 木島聖騎士V S 木場明人

トツプクラスのちからをそなえたチーム

「よし、前のボンタン狩りの屈辱戦だ！」

「ボンタン……」

学生服とかのズボンイコールボンタンって訳じゃないぞ？

ボンタンってのは改造制服らしい。

コイツの認識はどうなってる。

お、バトルの音楽がなり始めた。

よく考えればひこうタイプVSむしタイプだし、ホーリーナイトの方が有利。前じゃ返り討ちにされたとか言ってたような気がするけど。

「行け、ツボツボ！」

「行け、トゲキックス！」

やっぱりステロだ。

その後ドクドク吐いて戻るのが目に見える。

「トゲキックス、エアスラッシュュー！」

「チッキ」

てんのめぐみのエアスラッシュ。

六割方ひるむ。

「ステルスロック！」

「ツボ！」

ひるまない！ ツいてるなこの野郎。

ステロ巻かれたぜ？

炎、氷、虫持ちのひこうタイプには痛い。

ふきとばしとか食らったら終わるぞ。

「まじかよ！ はどうだん！」

コイツ、格闘のも持っていたのか。

ツボツボは黄色のバーだ。

「どくどく！」

やっぱりそう来るよなあ。

トゲキツスは毒に。

「よし、戻れツボツボ！」

やっぱり戻すか、無理はさせたくないし。

「ウルガモス、やっちゃって！」

「ここでウルガモスの登場だ！」

「トゲキツス、エアスラツシユ！」

「まもるだ！」

「これで、毒のダメージを増やしていくとかそんなのだろう。」

「くつ、エアスラツシユ！」

「まもるだ！」

「どんどんダメージが増えていくな。」

「エアスラツシユ！」

「ふきとぼし！」

「当たってもひるまないか。」

「ウルガモスはダメージを貰うもトゲキツスは手持ちに戻る。」

「ステロあるから四分の一は食らうだろ。」

「ギヤアアアス」

「ファイヤーが出てきやがった！」

「うわ、二分の一のHPが削られたし！」

「……」
「??」
「??」

「あ、たべのこし（略）。」

「もう一度ふきとばし！」

「させるか！ エアスラッシュュ！」

お、エアスラッシュュが当たった！

しかし、ウルガモスを倒してないのでふきとばしが決まる。

「キュアアアア！」

次はチルタリスか。

登場時にダメージを貰う。

「ぼうふう！」

「もう一度ふきとばし！」

「くっ！」

あ、ぼうふうが外れた。

「シャアアアア！」

次はメガヤンマか。

四倍なので二分の一のダメージを受けた。

「かえんほうしゃ！」

「しまった！」

効果抜群。メガヤンマは瀕死となる。

「くっ、行け、トゲキツス！ エアスラッシュュ！」

「ウルガモス、かえんほうしゃ！」

ステロでダメージを食らった。

エアスラッシュュを放とうとするもかえんほうしゃを放つ。瀕死に。

次は？

「キュアアア！」

エアームドかよ。

やっちまったな。

「かえんほうしゃ！」

「しまった！」

わ、一撃で決まったし。ステロのダメージもあるから瀕死になってしまう。

「くっ、チルタリス！」

後残ってるのはチルタリス、ファイヤーと一体。

「サイコキネシス！」

「キュアアアア!？」

サイコキネシスとか覚えられたんだ

「もう一度ほうふう！」

あ、ウルガモスが瀕死になった。

やっぱり強いですな。

「……………戻れウルガモス、行け、ヘラクロス、メガシンカ！」

ヘラクロスは光の玉に包まれ、メガシンカする。

「ロックブラスト！」

やはりスキルリンクなのから5回あたりチルタリスは瀕死となる。

「……………」

ん？ どうした？

「このポケモンは世界で使いたかったんだけどなあ」

「へえ、僕も世界で使う予定のポケモンがいるよ」

「そうか、俺もこのポケモンを出す。行け！」

このポケモンはみんな見覚えのある。

何億年も生き続けているといわれ、グラードンとカイオーガの争いを治めたという伝説が残され、オゾン層を飛び続けエサとなる隕石を食らう。

ルビサファとか結構やってたので印象に残る伝説のポケモン。

「キシヤアアアアアアアア」

「え、レックウザじゃん……………」

マジかよ……………なんでレックウザがいるんだよ。

「凄い……………どっから捕まえたの?」

「北海道遠征時に急にエンカウントしてな。そのまま居着いちゃった」

北海道か、こんど行ってみよう。

湖とか面白そうなのいるかもしれないな。

「キシヤアアアアアアアア」

ステルスロックで四分の一ダメージをもらう。

多分やってくるのは、

「ガリョウテンセイ!」

早かったのはレックウザ。

威力が高いが防御と特防が下がる。

「グオオオオ!」

「マジで？」

ヘラクロスが一撃で殺られた!?
やばいぞ！

「行け、ツボツボ！」

「ツボツ」

何をする気だ。

「きあいだま！」

「キシヤアアア！」

あ、攻撃が外れた。

「チャンス！ ねむるだ！」

「ツボzzzz」

かーらーのー？

「ツボ！」

カゴのみでしたか。

ツボツボ全回復。

「きあいだま！」

特性は頑丈なのか、わずかだが体力は残る。

「どくどくだー！」

「やべえー！」

どくどくか。

これで体力が減って行くか。

チラチラ見えてたけど多分きあいのタスキ持ちか？

「ぼうふうー！」

「まもるだー！」

毒のダメージをレックウザは受ける。

「く、かわらわりー！」

「まもるー！」

かわらわり覚えられたのか。

同じく毒ダメージを受ける。

「ぼうふうー！」

「まもるー！」

三回連続かよ！

また毒ダメージを受けた。

やべえ、ヒットポイントはもう黄色だ！

「りゆうのはどう!」

「まもる」

しかし、まもるは失敗しダメージをもらい瀕死に。

「キシヤアア!?!」

レックウザも力尽きた。

共倒れ、ツボツボがレックウザを倒すとはな。

「火消し頼むよ、ハッサム」

「頼む、ファイヤー!」

ステロでダメージを頂くもわずかだが残った。

「強かった。バレットパンチ」

決勝の相手は木場に決まった。

決勝

? side

「次は木場明人か」

「良く考えれば変態の中じやマトモそうだね」

「でも相当な過去があるみたいだ」

マスターはコーヒーを口に付ける。

「両親を飛行機事故で無くしてる。祖父祖母の家で生命保険を貰って暮らしていたって
さ」

「壮絶だね」

人形焼をほおる。

「その家が限界集落あつたみたいで、森の中が遊び場だったらしい。マタギの祖父から
色々教わって虫の事を沢山教えてもらったってさ」

「へえー」

マスターはスタジアムをうつり出される映像に向かう。

「ん、それだけ?」

.....

「それだけ」

■□??

よし、決勝数分前。

一応切り札その1と2を用意。

あと少しだから木場の戦力を復習しよう。

ハッサム（メガシンカ）

ヘラクロス（メガシンカ）

ウルガモス

ツボツボ

が見せたポケモン。

よく山に入るし伝説やウルトラビーストを持つてる可能性も高い。

ゲノセクトやマツシブーンやフローチエを所持しているかも。

ツボツボは出してくるかな？ 危ないとしたらガオガエンとかしかいないし。

普通だと八分の一ダメージを食らうだろうし、木島の場合は飛行タイプがあったからこそ使ったようなものだしな。

「木場さーん！ 頑張つてー！」

「先輩！ 頑張れー！」

俺はスタジアムに出る。

同じく木場もスタジアムに出てくる。

「さ、やりますか」

「うん。こつちも準備OK」

壮大なバトルの音楽が鳴り響いた。

行くぞー！ 木場！

「ヘラクロス、行つてこい！！ メガシンカ！」

「行け、ゲッコウガ！」

ツボツボは出さないか。

じゃあどんな編成にしてある？

「ゲッコウガ、どくびし」

「！」

どくびしを撒き散らす。

そつちもステロ撒いてたし。

「ヘラクロス、メガホーン！」

おっと、ヘラクロスの攻撃がヒットする。

「グウガ！」

きあいのタスキを持たせておいた。

僅かにHPは残ってる。

「もう一度どくびし！」

ヒイハアアアツ！

お前から猛毒決定な。

「インフアイト！」

あ、外れた。

「つばめがえし！」

四倍ダメージ。

しかし僅かに体力は残る。

「メガホーンだ！」

サンクスだぜゲツコウガ。

これで他のメガシンカは無くなったようなものだ。

「仇を取れ、ベトベトン！」

ベトベトン、頼むぞ？

「インファイト！」

「どくづき！」

ダメージを半分程貰うが、ヘラク羅斯を瀕死にする。

「さて、次は？」

「行け、ハッサム！」

なんだハッサムか。

メガシンカは1つだけでもんな。

「ハッサム、メガシンカ！」

あ？

ハッサムが光の玉に包まれる。

一度のバトル中にメガシンカを行えるポケモンと回数は1匹でなおかつ1回までだぞ？

手持ちにメガシンカできるポケモンが2匹以上いてメガシンカポケモンが倒された場合は、残ったもう1匹をメガシンカさせることはできないんだか。

まさか、

「ああ、言っ•て•な•か•つ•た•ね。僕の加護《メガシンカマスター》なんだ」

「《メガシンカマスター》？」

メガシンカマスター、なんとなくは予想が着くんだが。

「普通は1回のバトルにつき一匹のメガシンカなんだけど、この加護は例外なんだ」
法則を無視した加護とかもあるんだな。

「この加護を持つていると二体以上メガシンカさせる事が出来るんだ」
そんな加護があつたとは。

虫のメガシンカもあるよな。

「むしくい！」

ぬおっ!? テクニシャンだから威力高え。

ベトベトンは瀕死に。

「殺れ、サザンドラー！」

「キシヤアアア！」

「かえんほうしゃ!!!」

こだわり&特攻。

四倍ダメージでクソやべえ。

よし、ハツサムが倒れた。

「ウルガモスー！」

炎だし等倍だな。

「かえんほうしゃー！」

かえんほうしゃをぶち込む。

岩の技を使いたいが覚えられない。

あ、半分以上ダメージを与えた。

なんて威力。

「むしのさざめきー！」

くっ、効果抜群だな。

ウルガモスは毒のダメージ、食べ残しで回復。

「かえんほうしゃー！」

あ、僅かに残りやがった！

「虫のさざめきー！」

あう！ 急所に当たった！

■ サザンドラは瀕死にー！

「■」

■ ウルガモスも毒でダウン。

■ 相打ちだな。

「やるね。 広人」

「そっちもな」

そっちは三体。

こっちはヤミラミ、ガオガエン、ダークライ。

予想からゲノセクトとかいるかも。

ウルトラビーストもいる可能性あり。

どくびし巻いておいて、対策としてガオガエンにつばめがえしや、ダークライにきあいだまやれいとうビームを覚えさせている。

「行っけ！ ヤミラミ！」

「カイロス、行ってこい！ メガシンカ！」

戦力を削りますか。

毒をカイロスは受けた。

……何体メガシンカ出来るんだろう。

「いばるー！」

混乱してな♪

「カイロス！ シザークロス！」

「キュウウウ！」

は？ 攻撃を当てただと？！

うっ、HPが赤くなっ……………瀕死になった！

「うわっ、ラッキー」

嘘だろ……………一撃かよ。

「行けええダークライ!!」

頼む、この流れを断ち切れ！

「れいとうビーム！」

2倍ダメージだ！

行っけえ！

「キユオオオ……………」

な、HPが見えるか見えないかの所だと……………よく耐えたな。

「……………」ドガ

「あ」

あり？ 混乱のダメージを受けて瀕死になったぞ？

こっちもラッキーだ！

さ、次は何がくる？

「行っけえ！」

スーパーモデルのようにとても華奢で女性的な体は全体が白く、ところどころレースやフリルのように見える装飾がある。

目の上から伸びている触角は地面につくほどの長さがある。

同じタイプのウルトラビーストのマツシブーンとは対照的に、脚力が非常に強く凄まじい速度で大地を駆け抜ける。

また、気位が高く潔癖な気質のためか、自分の世界以外の物には一切触れようとしな

い。
えんぴポケモン フェローチエ

「またかよ……」

「まあね。山奥を歩いてたら偶然あつてさ。ミツハニーから貰ったはちみつをあげたら着いてきたんだ」

こいつ養蜂でもやってるのか？

虫タイプっぽくていいかも。

毒状態となる。

「むしのさざめきー！」

「サイコキネシス！」

先手を取られたがダークライは耐えた。

赤色のバーにはなつたが。

サイコキネシスを覚えさせていて良かったと思う。

あ、フェローチエのHPが少し残った。

「でんげきはー！」

「まもる」

やたら無闇に真面目に対応しちやダメだな。

世の中不真面目に生きるのも大事。

「……」 バタリ

フェローチエは毒のダメージで倒れる。

本当にどくびしに助けられてるな。

「戻れ、ダークライ」

一体」。

さて、最後だガオガエン！

「ガオ！」

「ガオガエンで来るか……ならば行け！」

3億年前にいたポケモン。プラズマ団に改造され背中に砲台をつけられた。

何故に砲台をつけるのかよく分からない………ロマンか？

………しかも赤い!! 色違いだど!?

こせいだいポケモン ゲノセクト

やっぱいいやがったか………まさか色違いだとはな。

良く見てみるとグソクムシヤに似てるような気がするんだけど気のせいか？

「よし、テクノバスター！」

カセットの色は白色。

氷だよな………地面对策とか。

「ガオオオオウ!?!」

「ああ、どっちが勝ってもおかしくない戦いだった」

木場、近づいてくる。

「世界で再戦するよ」

握手を求めてくる。

俺は握手し返す。

「ああ、待ってるぜ」



「それで？ カセットが白の氷タイプなのに何故に効果抜群だったんだ？」

「ああ、ペンキで塗ったんだ。カセットを」

あ、そんなイカサマだったのか。

「木場さん、車来ましたよ」

「あ、来ちゃったか。んじやあね」

「ああ」

ベッツだよ。

俺は見送る。

世界大会まで時間があるし、少し休暇やダンジョンに行くとしようかな？
ちよつと頼まれた事もあるし。

「先輩、帰りましょう」

「ああ、どつか寄つてくか」

「寿司行きたいデス！」

じゃ寿司行くか。

いつも通りのメンバーで回らない寿司を食べに行くのだった。

入った寿司屋でサインを求められた。

ヘナヘナの字だったが上手くかけたと思う。

小旅行 その1

「広人サンお待たせしましたー!」

「俺より早く来ててその言葉か」

新幹線の駅にて待ち合わせ。

アリスが早く来ていた。

こういうのは男が早く来てないとダメだな。

「ホームに行くか」

「ええ。ご飯はどうします?」

「いいや? 現地で食べる」

と、言っても少しだけクッキーを食べたのだが。

「で、1時間程で着くそうですよ」

「そうなんだなあ」

今回は名古屋へ。

弓兵おじさんの頼み事を受ける事に。

「あ、新幹線が来ましたよ?」

座席で寝よう。



「広人さん。そろそろ着くそうですよ？」

「あ、もうか」

もう少し寝たかったがな。

喫茶店でコーヒー飲むでしょう。

新幹線から出て、俺らは駅から出る。

「なんか朝食食ってくか」

「ええ」

ん、ここがいいか。

「ご注文どうぞ」

「ホットコーヒーとモーニングセット」

「私はリングジュースとモーニングセットで」

名古屋に来たら食べてみたかった。

始めてきたから調べてきたのだ。

「お待たせしましたー」

モーニングセットの内訳は、ゆで卵・小倉トースト・コーンスープ。

小倉トーストは大きめなのでガッツリOKだ。

「小倉の上に生クリーム乗ってますよ」

「うみゃーな」

「美味しいですね」

パンがモチモチだな。

市販のパンとは違う感触だな。

「あっつー!」

「平気か?」

コーンスープ飲むと確かに熱いな。

だがそれなので眠気が吹っ飛ぶ。

「舌を冷やしてから飲むといい。それだと舌が麻痺して飲みやすいんだって」

「へえ〜」

よく熱い飲食物を口に入れてしまった、口を開けてハフハフして熱い空気を出すのが

いい思い出だ。

「ゆで卵は普通ですかね？ 目玉焼きに塩とかかけるタイプなので良かったですけど」

「俺は目玉焼きに焼肉のタレをかける」

「焼肉のタレ……………」

ん？ 邪道かな？ 好きなのかければ良いと思うよ。

ちなみに地域とかによって好みが分かれる場合もある。

しょうゆ派が多い地域もあれば塩コショウやとんかつソースやマヨネーズが多い地域とかも。

少ないがラー油やケチャップをかける人もいるらしい。

もちろん塩のみの人もいるとか。

「あ、広人サン。まだ食べてないんですか？」

「早っ」

もう食べ終わってる。



「さて、じゃバスで行くでしょう」

丁度バスが来たようだ。

弓兵おじさんの依頼は御札貼りだ。

この時期に幽霊が出る場所があるのでそこへお参りに行く事に。

昼間でもゴーストタイプが出るほどの場所で、強レベルのポケモンがいるので俺について行って欲しいって。

「でもなんでゴーストタイプがここら辺に出るんだろう？」

「なんでですか？」

「森屋君から聞いたんだけどさ、墓地とか古戦場にゴーストタイプが多く生息するんだって」

「ここら辺に墓地や古戦場が無いって事ですか？」

「その通り。怨念が深い程強いゴーストポケモンが出てくるんだって」

ポケモンの世界になる前から幽霊は出ていたそうさ。

スノウに調べてもらったのだが、ここら辺で人が死んだなんて話聞いた事無いらしい。



はい到着。

バスの中から見ただけど車の運転が荒い人多かったな。

「なんか不気味な感じですね」

「入り口から入ってこの感じってヤバいな」

で、御札を貼りに行く祠の入り口。

変な雰囲気がある。

「さ、さして行きましょ」

「ああ」

「広人サンってお化け屋敷とか大丈夫な方ですか？ それによって私の立ち位置変わるんですけど」

あ、ゴーストがバトルを仕掛けてきた。レベルは52。

「ガオガエン、かみくだく」

「ガオ」

「ゴースト!？」

一撃ですな。

瀕死になったゴーストは一目散に逃げていく。

「ヘッターア！」

わ、ジュペッタだ。

レベルは50。

なんなのこのレベルの高さ。

「キリキザン、サイコカッター」

ここダンジョンじゃないんだろ？

なんでこんなにレベルが高いんだ？

「とりあえず進もう」

その後、俺らは進んでいくも高レベルのポケモンが道を阻む。

そして、

「ここが祠か」

「長かったですね」

やつと着いたな。

早く帰って味噌カツ食いたい。

「グオオオオオオオオ！」

「ヨノワール……………」

ヨノワールか。レベル87。

今日見た中でも高レベルだ。

「バンギラス、かみくだく！」

「ガオガエン、DDラリアット！」

一撃ですな。

瀕死になった。

「ガオガエン、捕まえろ！」

聞きたい事があるんでな。

「でだ、気になったからコイツを連れてきた」

「ゾロアどす。デートの邪魔して悪いなあ」

ゾロアさんもポケモンと会話ができる。

なのでゴーストポケモン達に真実を聞いてみようって事になった。

「なんでここら辺に強いポケモンがいるのか聞いてくれ」

「なんで強いのか？」

「ゴオオオオオオ！　ワアアアアル！　ゴオス！」

「……なるほどお」

なんか理由があつたのか。

「大昔に争いがあつて人が埋まつてるって。ゴーストタイプのポケモンは相当な怨念が

ある場所だと自動的に経験値が溜まって強くなるからみんな集まってるだつてな」



「だから墓地にはゴーストポケモンが多かったんだな」

「……………」

「……………」

取り調べが終わり、解放されたので夕食をとる事に。

沈黙だな。昔そんな事あったんだ。

「お待たせしましたー」

俺はエビフライ定食。

アリスは味噌煮込みうどん。

デカイな俺のエビフライ。

「あー美味しいな」

「美味しいですね……………」

「少し食う?」

「食べます」

エビがプリツプリツだ。

ああ、味噌煮込みうどんも美味しい。

タルタルソースをかけたエビフライは最高だな。

「さ、帰るか」

「そ、そうですネ」

俺らはお土産を買っていき、静岡に帰るのだった。

………またアリスを誘ってどこかへ行こう。

小旅行 その2

「玉川、行くぞー」

「はい。待ってくださーい！」

はい、玉川さんとデートです。

ブーブーごねていたのでやっつとである。

まあ今回もまた頼まれ事があるのだが。

「今回は動物園なんですな」

「まあな。今回はゾロアも連れてく」

実は原因不明の謎があるので連れてきて欲しいとの事だった。

ついでに玉川と歩き回るってのもいいかなと思った。

「ポケモンの説明とかしてくれませんか？」

「しようがないな」



はい、つてことで動物園にやって参りました。

キーキーする音や、独特の匂いとかが動物園に来たと実感する。

よくよく考えればセキチクシテイは街と動物園が合体してて面白いし、サファリパークがあるので観光客とか良く来そうだ。

ポケモンで町おこしとかも面白そう。

珍しいポケモンとか植物とか生息させて人とか呼んだり。

「先輩、どこ回ります?」

「えっと、哺乳類、爬虫類、鳥類のゾーンがあるんだな」

今は哺乳類ゾーンか。

回っていいこう。

「あ、大きいナマケモノですよ!」

「ケツキングか」

1日中寝そべったまま暮らすポケモンだ。

手の届く場所に生えている草を食べ草がなくなるとしぶしぶ場所を変える。

見てみると周りに草なんて生えてない。

「なんか空を見えますね」

「暇なのかな？」

まあ寝つ転がって雲を見てるのもいいかもしれない。
どっかの偉人は美しい物は雲だと言っていた。

しかし、周りの人間は失笑した。

偉人の感性つてのはあまり理解されないのだろうか。

「ギャース」

「ギャース！」

あ、近くのヤルキモノが喧嘩してる。

取っ組み合いになってる。

ヒュン ヒュン ヒュン

おい………その取っ組み合いで果物がケツキングに飛んでいく。

危ないだろ。

「ケツキング!!」パチ

は？ 両目を全開……にした？

ヒョイ！

えー?! ものすごい速さで寝返りして果物を避けた。

物が当たっても気にしなさそうじゃん。

「ギャース!!」

あ、スイカをヤルキモノが投げてきた。

「ケツキーキング!!」クルクルクル

あれ? コマのよつに体を回転させてきた?

あ! 投げられたスイカの威力を回転で勢いを流してキャッチ。

そのままスイカは手に。

「……………」??〃??〃

寝転びながらスイカを齧っている。

「すごいな……………」

「すごいですね」



「……………」

「……………」

「先輩? 何があったんですか?」

「静かに」

前にいるのは赤と白のボール型のポケモン。

マルマインさんです。

コイツ哺乳類じゃなくて爆弾の一種だろ。

しかも雄雌無いかからカタツムリとかの一種か？ それとも付喪神みたいなやつなのか？

レベルにはよるがだいぶくはつは覚えてない事がある。

まあ自爆は覚えている事もあるが。

あ、もしかして技忘れをしてるのか？

その方が安全だし。

「なんでバクダンボールがいるんだよ」

「バクダンなんですわね」

まあ珍獣だと思えばいいか。

赤と白なんだし縁起がいいだろ。

「ギャース」

「ギャース！」

おい、ヤルキモノがまだ争ってる。

きのみが飛んでった。

モモンの実やクラボの実だ。

マルマインに当たるがそこまで怒っていない。

「ギャース!!」

あ、あれはマトマの実だ。

ベチヤ

「……………」プルプルプル

「ん?」

ドガアアアアアン!!

あれ? マトマのみが当たったら自爆した。

……………なんで?」

「先輩、案内板にへマトマの実を与えないでください。嫌いなので自爆します〜って書いてます」

あ、嫌いな食べ物とかあるんだ。

良く考えればアルセウスも冷凍モノやジャンクフードは好きだからな。



そして爬虫類コーナーへ。

「あ、ジジーロンだ」

ジジイみたいなドラゴンを発見。

爬虫類に入るのか？

性格は優しいが、怒ると暴れるポケモンだ。

人懐っこいのでよく子供と仲良くなる。

実際に今ふれあいコーナーで子供に囲まれてる。

「ああいうポケモンってのもいいよな」

「そうですね」

子守りとかしてくれるポケモンってのもいいよね。

「横入りすんなよ」

「あ！ いいだろ！」

おいおいガキ共が喧嘩しとるぞ。

「ガウ！」

「ご、ごめんなさーい」

「ガウ」

あ、仲裁した。



次は鳥類のコーナーだ。

ピーピー鳴き声がする。

「あ、オウムですよ？」

「王蟲？」

いやいや流石に風の谷じゃないか。

このポケモンはペラッポ。

人の言葉を真似することが出来る特徴がある。

「パンテータータベタイ」

「うわ」

変な言葉仕込まれてるな。

「モモヒキ モモヒキ ガーターベルト」

遊ばれてるんじゃないか。

もつとまともな言葉教えろ。

「カイゾクオウニ オレハナル！」

何のセリフを覚えさせられてるんだ。

「バスケガシタイデス」

安西先生。

「ヨウコサン スキデス ケツコンシテクダサイ!!」

プロポーズ!?

オウムの前でプロポーズかよ。

「キミヒコサン プロポーズ ウレシイデス デモジツハ ワタシ……」

あれ? 途切れて間が空く。

「……………」

「プロポーズの返事は?」

「どうなったんですか……」

「……………」

何とか言えよ。

「……………」

「続きは？」

「スケルトンブラジャー！」

「……………」

その後何回かペラップに聞いたが教えてくれず、変な言葉を吐いて誤魔化すのだった。



「結構面白かったですね」

俺も同感。

芸を覚えるポケモンもいれば、客と遊ぶポケモンもいた。のんびりしているポケモンもいるがな。

人間もポケモンと仲良くしようとしているが、ポケモンの方も人間と仲良くしようとしていて努力する姿勢がわかる。

人間とポケモンもあまり変わらないな。

「またこんな場所があるって聞いたんでまた行きましょう」

「いいぞ
いいぞ」

グウ

あ、腹の虫が鳴った。

昼食べてなかつたし、軽く何か食べていこう。

本戦開始！

「ヒロトさん！ はいっ」

「ほっ」

「はっー！」

俺らはハワイにあるワイキキビーチで観光中だ。

実は世界大会本戦はハワイで行われるようで、せっかく来たので遊んでいるのである。

俺ハワイ来たことないわ。

「いやートロピカルジュースが美味しい」

「最高じゃの」

アルセウスと唯がトロピカルなカラフルジュースをぐくぐくしとる。

あー空気が美味しい。

「そろそろご飯行きましょう」

「いいね。何食う」

「私はシュリンプがあるのがいいですね」

「ハンバーガーってのも有名だって」

「マグロ漬けつてのも」

「昼夜で分けて行く。それか好きなの食べるか」

今は昼。

俺らはレストランに入る。

「俺はガーリックシュリンプで」

エビの養殖が盛んなハワイならではのメニューだ。

ガーリックバターをたっぷり効かせてエビを炒めたシンプルな料理。

プリっとしたエビの食感とガーリックの香ばしい味付けが人気を集めている。

「うまい……」

エビとガーリックが合う。

「美味しいですね」

「流石ハワイ」

「あ、パンケーキあるんだ」

「注文しておこうか」



翌日。

さて、本編に戻るか。

「やっぱり結構いるよな」

「世界つてのも広いよな」

日本の変態組と合流。

更には海外の変態組とも合流。

「アツハハハハハハハ」

海。パン小僧が現れた。

元気いっぱい。

【海賊】ジゼル 懸賞金 2億4000万

「ふむ、いい土じゃ」

「オホホホホ！ 這いつくばりなさあーい！」

ドワーフのおじさんとSM服のお姉さんだ。

【ノーム】リッチ 懸賞金 1億1800万

【雷獣】アマスファイー 懸賞金 1億4600万

「いい写真だな」

「ほお、いいですねあ〜」

この人はノーマルタイプの人だ。

真田弓兵とくつちやべってる。

【魔のレンズ】ピスコ 懸賞金 1億9000万

「……………」ゴクゴク

【ヘビーベイビー】バーブ 懸賞金 2億9030万

「ふふっ、どう? この服新調したの!」

「いいなー私は服あまり着ないから……………」

「……………」寒くないの?」

【赤竜】メリル 懸賞金 3億2500万

【氷結の魔女】シンシア 懸賞金 1億7000万

「やっぱり皆勝ち上がるわね」

「……………」当然の結果だ」

【焔】ヴォン 懸賞金 2億

【デスメタル】ロミス 懸賞金 1億3200万

「y o o」

「Ze」

「はっはっはっお腹痛いうっ……………アアアアアア!!」ドガーン

【破壊王】デイス 懸賞金 3億200万

【双曲】ロツスレイ 懸賞金 兄 6000万 弟 5000万

「……………」メガネ フキフキ

【剛鉄】ディアン 懸賞金 2億4300万

「どうです?」

「あ?」

【花屋】カルロ 懸賞金 1億5000万

「まあ、エスパークタイプが居なくなって気になって……………」

「確かに私も見ていません。ミュウツーのらしきポケモンとは遭遇したのですがね

……………」

「なんだったんだあのポケモンは?」

ミュウツーはエスパークだからな。

何をしているんだろうか。

「それはともかく。タイプ別の加護持つてる人間も要注意ですが。変態トレーナー含めて他の加護持ちも厄介なのがいますよ」

「どんなの?」

「例えばあそこにいる釣り人ゴレル、ヤドランで無双したそうです」

ゴレル 懸賞金 9600万

「他にもドラゴヴァイパー兄弟、呪術師エレール、バカツプルのグンゼルとエレールとか」

「凄そうなものいるな」

「他に厄介なのはカプリコやデンドロかな? イーフアンも最近有名になってますし。」

「あ、今言った名前は変態組で味方ですよ」

「それにしてもよく知ってるな」

「情報通でして……………」

変態にもまだヤバいのがいるのかよ。

結構賞金稼ぎとかいるのだろうか。

『みなさんお待ちせしましたー!』

やっと始まったか。

待ちくたびれたぜ。

『今回はバトルロワイヤル形式で無人島でポケモンバトルをしてもらいマース!』

無人島でバトルロワイヤルか。

フィールドクリエイトとかやって整地してそう。

『ですがデスマッチではありません。このスターチップを争奪し、星を十個程集めてもらいマース』

遊戯王じゃん!!?

なんなの？ 集めたら城に入れるのですかな？

『星を全部失つたり十個集めれば自動的に戻れます。食事やトイレとかはありますのでご安心を。制限時間は24時間！』

チップを賭けて勝負するし無くなったら戦う意味無いだろうしな。

『それでは始めます！ 3. 2. 1!』

シユン

いきなり始まんのかよ。

なんで準備とかさせない訳？

「あれ影山さん」

「あ、森屋君」

「あら？ 見知った顔ね」

「ヴォンさん」

「おいおい、ヤバイメンツじゃん」

「あらら? デンドロじゃない」

「僕もいるよ」

「木場氏……………」

森屋君、ヴォンさん。木場氏。

そしてデンドロってカルロが言ってた厄介な変態トレーナーか。

「どうやらバラバラになったけど固まったわね」

「このまま一緒に動かない?」

「賛成だな」

このまま一緒に行動する事になった。

「さて、スターチップを確認して」

「?」

「なんです」

「何個あるかって。何回戦えるかって事よ?」

俺は……………3つか。

「僕は2つか」

「私は3よ」

「私は2だ」

「僕も2つ」

「俺は3つだ」

あら？ 個数に違いがある。

森屋君とデンドロと木場は2つか。

「なんの違いがあるんだ？」

「もしかしたら優勝したかどうかか、シードとか期待かしら」

「あーそういうえば優勝したっけ」

ヴォンさんも優勝してたな。

「私はイギリス大会の準優勝だったしな」

ああ、動画で見たよ。

『おっーほっほっほっほっほっ！ 私の勝ちよっ！』

『くっ、カブトプス……………』

あのSMの人はイギリスだったんだね。

このデンドロって人の性癖ってなんだろう？

「さ、狩りに行くわよ」

「その必要は無いぜ」

はっ！ 囲まれてた!?

しかも場数くぐってそうな顔してるのが多い。

「こつちも賞金が欲しいんでなあ」

「億超えの賞金首を放っておけねえな」

やっぱ俺らが目的か。

「あ、あれは【早撃ち】レモンボーイ!」

「おつと有名になっちまったな」

「あの傷は【手折り足折り】ベルクマン!」

「……………」

なんか有名な人間がいるようだ。

名前聞いた事ねえよ。

「【水瓶座】や【双剣】までいる……………」

ゴメン、森屋君。

全然わからない。

「まあ、運が悪く残念だと思えや。このメンツだしな」

「お前ら倒せば一生遊んで暮らせるぜ!!」

「……………サクセスは終わりだ」

ポケモンバトルの音楽が鳴り響く。

「さあ、殺ろうぜ変態チーム！ ポケモンバトルだ！」

バトルチューブ 前編

「ふう、まさか開始1時間以内に戻ってくるとはな」

「うん。星持つてる人結構いたからねー。足運ぶのめんどくささが無くて良かったよ」

俺は三番目にクリアしたらしい。

早いなコラ。

ちなみに1番は、

「……………」 チュパ

バーブン。

クリアした後に壁に寄りかかって沈黙しながらミルク飲んでいた。

で、2番目は、

「……………」

パンクロッカーのロミスさん。

暇そうに黄昏ていた。

声掛けにくい2人だなく。

その後ヴェオンさんや木場氏が来たので安心したが。

「終わるまで暇ね。なんか団欒しないかしら？」

「いいぜ」

「他の変態組の奴らとか来そうだね」

多分、どっさり来そう。

「じゃ私から。なんか趣味とかある？ 私は美容かしら」

「僕は昆虫観察かな？ そういえば山奥行くとたまにアトラスオオカブトが発見されるんだよ。まったく、非道な奴らがいるね」

「確かにポケモンが世界出てくる前までいたわね。飼い主のモラルが分かるわよ」

「本当に酷いな……………」

沼の泥水を排出したりする番組とかあるよな。

そこに外来種がいるとかよくある。

ミドリガメとかも外来種らしい。

「大人の趣味は？」

「うーん。漫画かな」

「漫画か…………」

至って普通だな。

「じゃ特技は？」

「あー自覚は無いけど料理。自覚があるのはキャンプ」

「キャンプ？」

実はこの世界になる前はカツアゲとかされてたので金が無く食べる物が無かったのだ。

つて事でたまに森の中に籠り、自炊して食べていた事がある。

一人キャンプつてのも楽しいぞ？

火を見て星空を見るんだ。

銚子で取った魚や弓矢で捕まえた鳥を捌いて食べる。

「……………」

「？」

なんかバーブンやロミスに哀れな目を向けられてるんだが？

原始人みたいで楽しいぞ。

「いやっほほほほう！」

「あ、先輩」

あ、ジゼルが出てきた後に玉川が戻ってきた。

早いな。

「一人だったんで怖かったです……………」

「確かに賞金首だもんな」

「私ら悪いことしてないのに賞金首なんですわね……」

本当だな。

ゲス^グス^ス口の方が悪人に見えるんだけどね。

懸賞金が絡むとウチらが悪人に見えるんだ。

あ、よく見ればドリンクコーナーあるじゃん。

「玉川、飲みに行こ」

「いいですね」

多分時間がかかるだろうからゆっくりしよう。

「先輩、何飲みます?」

「ハワイに來たしフルーツジュースでいいか」

「私も飲みます」

あゝ美味しい。

味が濃いいし、日本のフルーツジュースとは違うぜ!

それにしても時間たったが変態しか見ないな。

「あ、広人さん」

「アリス、やっとききたか」

「ええ、早く来れました」

まあ、やわな腕前じゃあ無いからな。

もつと勝ち上がってくるだろ。

「あ、そういえば」

「？」

「レツクル。つて名前のトレーナーでしたけど、勝負を仕掛けてきたので返り討ちにしちゃいました」

「そうか」



半日が経過した。

「クソ、暇だな」

「ゲーセンでも置いてくれれば良かったのに」

だいたいの変態組はクリアした。

比率だと一般人達の方は少ない。

『ほい！ お待たせしてしまいましたー!!』

ん、やっと終わったか。

んと？ 80人程か？

『それでは二次予選の方に行きたいと思いまーす!!』

で、二次予選は？

『二次予選はくバトルウウウチューブ!!』

バトルチューブ？

あれだろ。バトルフロンティアでハブネークのような施設に入り、トレーナーと戦ったりポケモンにエンカウントしたり、毒入れられたり回復したり。

運要素高いし毒とかぶち込まれたのが記憶に残っている。

『この予選で先着32人が決勝トーナメントに出場しますー!』

これをクリアすれば決勝か。

さて、自分の運はどうなってるのかね？

なんか状態異常の部屋の他にも新しいナニカがありそうだ。

この前のピラミッドでも宝物庫見たいのがあったからな。

例外があつても不思議では無い。

『ルールを詳しく説明しますよー! ポケモンは6匹まで所持OK。道具の使用は禁止

ですが持たせるのはOKです!』

前やったバトルピラミッドと同じだな。

ゲームとは違うルールとかもありえる。

『そーれーでーは! 準備OKですか!? 1分後に転移します!』

早いなコラ。

えっと、道具のせいなるはいを使う事が出来ないし、たべのこしとか持って行こう。

『ではスタートします!!』

シユン

お、豪華な内装の場所に着いた。

なんだろここ?!

あ、三つの扉がある。

ここから選べって事なのか?

ちなみにメイドさんはいない。

よし、まっすぐ行くか。

俺は真ん中の扉を開く。

「ん？ モンスターハウスか」

ここポケモンが出現するんだな。

サマヨールやミロカロスとか出てたけど。

「ミオオオ」

「サマヨールか」

やっぱり出てきやがったな。

この野郎！

「ガオガエンー！」

「ガオー！」

「かみくだくー！」

かみくだくがヒットする。

あ、瀕死になった。

さて、速やかにここを抜けよう。

だけどトレーナーよりポケモン出現の方がリスクが少ないかもしれない。

逃げることもできるし、タイプの幅が小さいから対策を練られる。

「……………」

よし、出た。

で、また三つの扉。

……………どれだけ進めばいいんだろうか？

一定数超えればとか場所によって違うとか。

まあいい、真ん中行くか。

ん？ 人がいない……………バトルフィールドか！

『ピンポンパンポーン！ ここではトレーナー同士戦って貰いマース！ ちよつと待っててね？』

は？ ここバトル？

ちよつと待ってて事……………マッチングするって事？

シユン

「ふむ、吾輩が飛ばされるのであるな」

太った老紳士が現れた。

ちなみに変態組では無い。

「中々の強敵……………血湧き踊るのである」

あれ？ こいつ舐めた目をしてないぞ？

あ、もしかして金目的じゃなくて純粹に勝負が好きなトレーナーか。マトモな方なトレーナーもいるんだな。

「行くぞ、ドククラゲ！」

「カモン、ベトベトン」

さて、切り抜けますか。

バトルチューブ 中編

「ガオガエン、かわらわり！」

「く、やられたのである」

ギガイアスにトドメを指す。

太った紳士を返り討ちにした。

シュン

『それでは回復しますね』

ふえ？ 勝ったら回復してくれるのか！

いえーい。たいしてダメージ受けてないけどね。

さて、扉あるし前に進むか。

「また三つの扉か」

まだ数回だけ見飽きたな。

……………よく考えたら運要素なんだよな。

まさかクリア方法が複数ある事もあるんじゃない？

「……………進むか」

まだ分からないから確定は出来んな。
あく時間とかかかりそう。

「真ん中」

真ん中だ。

決めたら真ん中。

さて、次は何があるかな。

「……………」

あれ？ 人形が置いてある。

マリルの人形か。

あーここはセーフって事ね。

やっぱりここはゲームと同じなのね。

「真ん中だな」

また真ん中に。

左右行つてもどちらも同じだろ。

『はい、ここではトレーナーバトルをしてもらいまーす！ ちよつと待つててな？』

えーまたやるの？

シユン

「おや？ 貴方ですか」

「？ 顔は見た事ある」

「私はイーファン。以後お見知りおきを」

中華風の服をきた青年……………クソ、イケメンじゃん。

ヴオンさんが言っていた油断出来ないトレーナーの1人か。

「いまさつき戦いましたけど時間制限とか無いみたいですしデスマッチですね」

「やっぱりそう？」

なるほどね。

「さ、やりましょう」

ポケモンバトルの音楽が鳴り響いた。

全部で五体か。

「行ってください！ カイリキー！」

「リイキ」

「レッツゴー、ベトベトン！」

まあ、等倍だからな。

「どくづき！」

「ばくれつパンチ！」

タイプ別の加護を持つているとは聞いた事無いしな。
普通の加護ならゴリ押しで行けんだろ。

「ベト?!」

あれ? ばくれつパンチが先に当たった?

……………ついでにベトベトンが黄色のバーになった。

ヤバイ、こんらんした。

「……………どうしました?」

く、どんな加護持ってやがる。

反撃を。

「ベト!」

ふう、こんらんの判定に勝つてどくづきを決めると瀕死なられる。

あれ? 攻撃力は高いのになんで等倍のどくづきで倒れるんだ?

「頑張! ニョロボン!」

「ボオン!」

ニョロボンか。

よし、加護でこっちの方が素早さが高い。

「どくづき!」

「ばくれつパンチ！」

うおつ！ ばくれつパンチが先に刺さるだど!?
く、ベトベトンが瀕死に。

「行っけえ！ ダークライ！」

「ラァイ！」

やれ！ ダークライ！

「ばくれつパンチ！」

「サイコキネシス！」

な!? また先手を打たれだど？

う、効果抜群か……HPは黄色に。

あ、混乱か！

「ラァイ！」

よし、乗り切って攻撃！ 瀕死になったぜ！

たべのこしを持たせたので少し回復。

「やりますね！」

「こっちのセリフだ」

つたく、なんなんだこの加護は？

「行ってください！ エビワラー！」

「ワアラー!!」

「ドレインパンチ！」

く、効果抜群だなこの野郎。

しかしまだ瀕死では無い。

「気合いだアアア！ ダークライ、サイコキネシス！」

「ラアアアイ！」

よし、祈りが通じた。

一撃でエビワラーは倒れる。

「行ってください！ クチート！」

「くちー！」

クチートか。

「クチート、メガシンカ！」

なんだとおう！ メガシンカすんのかよ!!

「くちー!!」

ふたつに分けられた後ろ口。

メガクチートだ。

「グロウパンチ！」

くっ、ダークライは瀕死になる。

こいつ……………強すぎだろ。

「行けっガオガエン！」

「ガオ！」

ガオガエン、頼むぞ！

「グロウパンチ！」

「フレアドライブ！」

確か特性ちからもちだとか。

しかも攻撃力上がってる上に効果抜群。

「ガオー！」

フレアドライブもあたって……………あ、メガクチートは瀕死になった？

攻撃は結構高いのに。

防御は弱いのか？ なんの加護だろ。

「……………やはりお強い」

「そっちこそ。そろそろどんな加護か教えてもいいんじゃないの？」

「もうヒントは出しましたよ？」

いつ出したよ？

「それでは最後です。レジスチル」

「……………」

うおつ、準伝説持つてるんだ！

たまに変態組以外でも所有しているトレーナーもいるんだよなあ。

意外と身近に現れるかもしれない。

「レジスチル、メガトンパンチ！」

「ガオガエン、フレアドライブ！」

メガトンパンチを食らうが、フレアドライブをヒットさせた。

反動でダメージを受けるが相手に手負いを受けさせた。

「……………」

あ、きあいのハチマキか。

ギリギリ耐えた。

「今だ！ メガトンパンチ！」

「ガオガエン、まもる」

おっと、そうはさせねえな。

「ガオガエン、かわらわり！」

「レジスチル、かみなりパンチ！」

ドガ

あ、かみなりパンチの方が先に刺さって急所に当たった。
ガオガエンは倒れる。

「トドメだ。ヤミラミ！」

「ヤミ」

「ふいうち！」

「れいとうパンチ！」

ヤミラミのふいうちが先に当たる。

「参りました」

「強かったぜ」

シユン

リタイアしたのか姿は消えた。



『はい、またバトルですよー！』

シュン

「お、カゲヤマヒロトか」

「また見た事ある」

また変態組が………確か双子のトレーナーだったはず。

ドラゴバイパー兄弟だったかな？

「ああ、俺はドラゴバイパー弟！ 兄ちゃんと一緒に組んでのマルチが真骨頂なんだけどなー！」

あ、マルチの戦いで双子が活躍しているのを噂で聞く。

こいつらか？

「行くぞカゲヤマヒロト！ 行けっケツキング！」

「ケーキング！」

ケツキングか。

なまけの特性だがよく扱えるな。

「ベトベトン！」

「ベトー！」

ベトベトン、先方頼むにや。

「ベトベトン、かわらわり！」

「ケツキング、じしん！」

かわらわりがヒットするが、

「ケッキング！」

「ハチマキか」

耐えやがったな。

そして更にじしんがダメージに入る。

……………ん？ ダメージはそこまで威力無い。

「かわらわり！」

ふう、倒れた。

「行けっアイアント！」

「ギー」

バトルキューブ 後編

「しまった！ ケツキング！」

こいつケツキングを二体所持してやがった。

ちなみに全部で四体、後はアイアントとレパルダスを持つてたぜ。

こいつ変態組の人間なのにイーファンよりも弱い。

マルチ専門だとしてももつとやるだろうに。

「お前やつぱり強いよ」

「あくあ、お兄ちゃん組めばもつと戦えたんだけどな」

シン

何の加護を貰ってるんだろうか。

さ、前に進むか。



うん、また三つの扉だ。

本当に一定数潜り抜けたらクリアなのか？

クリア条件がなんなのか分からない。

運って言ったら色々ある。

例えば力が偶然強かったから喧嘩に勝てたとか、頭良くても足が遅いから運悪く殺人鬼に追いつかれて殺されたとか。

強かったり頭良くても生き抜けるとは限らないからな。

「この世に生き残る生物は、激しい変化にいち早く対応できたもの」ってのがダーウィンの進化論。

つまり適応力だ。

先着32人とか言ってたしゴールがあるのか？

シューウウ

あれ？ 体が消えかかってる？

シューン

「あ？ なんかに飛ばされてきたぞ？」

「あ、もしかして俺飛ばされてきたのか」

対戦コートのような場所に着く。

相手が対決マスに入ったらランダムで飛ばされるってシステムなんだ。

こいつ聞いてたのか？ 対応酷くね？
あ、バトルの音楽が鳴った。

ん？ 五体だが現在全部で三体？

しかもそのうち2体は状態異常。

「いけえ！ ダストダス！」

「ガオガエン、GO」

やっぱり毒タイプを繰り返してくる。

「ガオガエン、じしん！」

「ダトア!？」

「くっ！」

よし、一撃で地面に沈む。

「クソ、クロバット……………」

「……………」カチン コチン

……………ツイて無さすぎだな。

「……………かみなりパンチ」

クロバットは瀕死となる。

まさか氷漬けにされていたとは。

「……………行けっゲンガー」

「……………」カチン コチン

「……………」

なんか可哀想になってきた。

「かみくだく」

「ガオ」

うーんゲンガーが瀕死になって勝利した。

「くっ、やっぱり運って大事だな……………」

「俺も教訓になった……………」

シュン

元の所へ戻った。



「お、ピカチュウの人形」

「ここはセーフって事ね。」

「ってかいつ終わるんだ？」

もう一時間経ってるぞ。

一応置物とかの位置を変えてるが、同じ所を通っていかないみたいだ。
この建物の構造はどうなってる？

さ、扉入る。

「キュオオオオン」

ぬおっ！ サマヨールがぶつかってきたぞ。

……………もしかして、まさか!?

「4体氷漬けになってる!？」

氷状態になってるのはゲツコウガ、ダークライ、ヤミラミ、サザンドラ。

動けるのはガオガエンとベトベトンのみ。

嘘……………だよな？

こんな時に格闘とかフェアリーとか虫タイプの加護を持つてるやつにエンカウントしたらタヒぬぞ!!

とりあえず先に進むか。

回復の扉も今さつき会ったし。

『は〜い！ バトルですよ！』

嘘だろ？

あのベビー服や発狂のやつとか来ないよな？
シユン

「あ、ヒロ」

「唯……………」

知り合いとエンカウントしちゃった。

「ああ〜やっぱりそんな感じはしてたよ……………」

「俺も」

そりゃ玉川達と戦う可能性もあるか。

「んじゃ行くよー!」

バトルの音楽が鳴り響く。

手持ちは四体、生きてるのは二体のみ。

内、一体は状態異常だ。

「行けっアブソル!」

「ベトベトン!」

……………エースを繰り出すか。

あ、麻痺してる。

「ベトベトン! かわらわり!」

「ベトオー！」

おっと、素早さ半減してるからなのかスムーズにダメージを与えられた。効果抜群なので瀕死。

「……………行け、ドンカラス！」

あゝヒットポイントが半分以下だ。

「いわなだれ！」

効果抜群である。

俺の勝利だ。

「あちやくやられた……………」

「惜しかったな」

シユン

さ、進むか。



三十分後。

「まだ終わらねえのか……………」

次はコダツクの人形か。

そういうえばポケモンの人形とかカンナとか集めてたな。金銀でも主人公の部屋の模様替え時にあつた。

こつちも面白そうだし集めてみようか？

「さて、こつちの扉だな」

ちなみにまだ氷漬けの四体は治っていない。

回復扉には入ったが、ガオガエンとベトベトンのみ回復された。

『はい、バトルでえーす！ 強敵同士のマッチングですね〜』

あ？ 誰だ？

「おや？ 君は」

「……………ゲツ!!」

コイツは……………格闘タイプのデイス！

ま、不味い！

ポケモンバトルの音楽が鳴る。

『それではバトルしてくださいーい！』

「行けっ、ベトベトン！」

「ベトベト」

「カモン、ルカリオ！」

「オオウ！」

不味い。

非常に不味い。

「ルカリオ、じしん！」

「ルカ！」

「ベト！」

く、やっぱり効果抜群か！

ギリギリHPは残った。

「かわらわり！」

「ベトオ！」

一応攻撃は当たり効果抜群何だか。

「……………」

硬い！

半分程くらいしかダメージを与えられてない！

コイツ強敵だ!!

「バレット、パンチ！」

「ベトオ!？」

ベトベトンが瀕死になる。

「頼む! ガオガエン!」

「ガオ!」

ガオガエン以外は氷漬け!

「ルカリオ、じしん!」

「ルツカリオツ!」

効果抜群じゃあないか。

それに気合いの響を装備しといた。

「ガオガエン! フレアドライブ!」

「ガ、ガオ!」

あ、外れた。

「バレットパンチ」

「ガオオオ!?!」

嘘だろ……瀕死になった。

ああ、後は氷漬けのポケモン達。

……俺の負けか。

ピンポーン！

何の音だ？

『はいー！ 32人になりましたので二次予選を終了しまーす！』

あら？ これバトルロイヤルみたいな感じだったの？

「命拾いしたね」

「ああ」

「決勝トーナメントで再戦待つつうっ……………ごあああああああああつ

！」

シユン

こうして間一髪で二次予選をクリアしたのだった。

世界トーナメント

? side

「それで……………よかったの？」

「……………ん、何を？」

「世界大会。参加しないで」

「良かったに決まってるでしょ。こっちにもやることあるの」

「そう……………」

相方にコーヒーを注ぐ。

マスターは箱に入った羊羹を出し皿に乗つける。

高級栗羊羹……………一本七千円。

「まあ……………でも羨ましかったかな？ ポケモンバトルでシノギ削って見たかったけど

ね」??”??”

「やっぱり？ 食い入るように見てたしね」

「ま、まあね。勧誘しようかと考えてるトレーナーもいるし、顔なじみもいるしさ」??”

??”

「マジ？ 顔なじみいるの？」

羊羹を切って、相方に渡す。

「計画上、参加は出来ない。普通の身の上だったら参加したかったんだけど………」

“??”

「今は計画が大事ね……」??”??”

「美味いねこの栗羊羹」??”??”

「本当だね」ゴクン

「高い羊羹つてのもあるんだね」

栗羊羹の味と舌触り舌つつみをつ。

近くには高級抹茶羊羹もスタンバイ。

「羊羹は甘いけど世の中甘くないし気をつけよう。マスター」

「わかってるよ。ミュウツー」

「そうだ。観戦しにいかない？ ハワイにマーケティングしてたよね？」

「いいね、マカデミアナッツ食べたかったんだ」

「行こっか」

『皆さんお疲れ様です！ それではトーナメント表が表示されるまで少々お待ちください』

ふあ、終わった。

発狂する奴とエンカウントしたけどどうなるかと思っただし。

で？ 周りを見ると数十人。

格闘の奴もいるのでこれが最終ラウンドに戦うトレーナー達だって事か。

「広人さん、クリアしましたヨ？」

「おお、アリス。バトルチューブをクリアしたか」

「……………私もやったぜ」

「スノウも」

振り向いたらアリスとスノウが。

コイツらは生き残るよな。

「あれ？ 玉川さんと唯さんは？」

「唯は俺が倒した」

「そうですか。運が無いというか」

「運要素の予選だからな。と言ってもポケモンバトル自体は運要素だけど」

バトルフアクトリーだろうがバトルアリーナだろうが運要素だろ。

対戦相手とポケモンはランダムに決まるしな。

実際、バトルタワーでも弱点タイプを出されたり、わるあがきするまで待った思いう出がある。

……………玉川は落ちたのか。

結構強豪トレーナーだとは思うけど。

よく見たら周りの人間は変態組だな。

「スノウ、ゲスー口側の人間っているか？」

「……………いない。多分全滅」

よし、全滅。

俺らのポケモンは無事だな。



「それにしても濃いメンバーが残ったなあ」

「ホントですなー」

『お待たせしましたー！ それでは対戦相手を発表します!!』

あ、画面に俺らの絵、三十二もの顔が映る。

それでシャッフルされる。雰囲気出るね。

ジャラララララ

どんな組み合わせになるんだろう。

虫、格闘、フェアリーは食いあってくれないかにや？

ジャラララララ

ん？ 長いな。

まだかよ。

ジャララララララ ジャン！

あ、出た。

えつと誰だ相手は？

「おや、貴方ですか」

「眼鏡野郎……」

この前唯と戦った眼鏡野郎、ディアンだ。

確かコイツは鋼使いだっただははず。

鋼のヤバいのは……………結構いるよな。

とりあえずガオガエンや炎格闘地面のポケモンを用意だな。
逆にあっち側は格闘タイプ技で攻めてきそう。

ルカリオとかいたりして。

あ、他の奴らも対戦相手はどうなってるだろうか。

「あれ？ 僕とやるんだね？」

「よろしく？」

木場VSヴォンさん。

「アアアアアアアアア!!」ガシヤーン

「……………」

デイスVS木島。

「ふう……………」ビチャ

「ウオツカですか？ 良い酒蔵紹介しますよ」

バーブンVS真田弓兵。

わあ、強敵同士がマッチングしてるぞ？

荒れるな。

「それにしてもやばいのとマッチングしてますね」

「強敵同士の戦い多いし」

ちなみに隣の次の相手はジゼルVSスノウのどっちかだな。

『はい！ ルールを説明しますね！ 準々決勝までは三対三。準決勝からは六体六のフルバトルです!! 道具の使用は禁止ですが持たせるのは可です!』

大体日本と同じか？

もう少し捻りが欲しいんだけど！

『ちなみにフィールドはランダムです』

まあ、そりゃそうだな。

でもどんなフィールドがあるんだろ？

草むらや岩場や砂場とかあった。

捻りが欲しいフィールドとか無いか？

『それじゃトーナメントは明日！ ぐっすり寝てくださいね!』



あーあ。砂浜が綺麗だな。

大会終わってもまた来たいかな。

「あ」

「あ」

誰か黄昏てると思ったらいーファンだっけ？

中華服着てるから中国の人かな。

「ヒロトさんでしたっけ」

「まあな。お前強いな」

「ええ、結構奥地で修行したんですが……加護持ちには敵いませんよ」

「そうか？ 結構通用すると思うけど。」

「そういえば何の加護持ちだ？ 気になってた。俺は悪タイプの加護」

「もうヒントは出しましたけど答え合わせしますか。拳の加護と言って、パンチ技は攻

撃力2倍と急所に当たりやすくなる加護です」

あ、確かにパンチ技しか繰り出してなかった。

しかも威力が高かった。

「もうひとつあるんですけどそれは秘密です」

「いいよ。俺もまだ加護があるし」

もうひとつあるんだ。

なんだろうか。

「こつちも質問しましょう。なんの趣味を持っているんですか？」

「俺……あまり変態じゃないんだけど」

人並みに女の子が好きだったり、カツアゲしてるだけなんだけどなあ。

「そつちの趣味は？」

「シヨタ専です」

「小学生とか？」

「正確に言うると一二年生くらいですかね」

うーん。鞍田のおじさんよりも大人しいしマトモな方なのかな？

「……………おかしいですか？」

「いや、他の奴らの方が頭がおかしい。今日の変態の仲間達を思い浮かべろ」

『ヒヤツホオオオオウ』

『もつとぶつてえええええ!!』

『暖かなアアアア!! タイヨオオオオの下にいいいいいい!! あ”あ”あ”ああ

あああああ!!』

『ほほう、良い角度ですな』

『分かるか?』

マトモな方だな。

「でもなんか面白い変態話無いんですか？」

「変態話……」

まあ……あるちやある。

「この話は懺悔だけど……誰にも言うなよ」



『先輩、ちよつと眠いんで寝ます〜肩貸してください』

『いいぞ。止まる時に起こす』

玉川と電車に乗った時、眠くなつたのかスースー寝てしまった。

『Zzzz』

『……………』

玉川は少しキツめワンピースを着ており、体がハッキリ出ている。

なので胸が強調される。

元々巨乳なので倍々の見応えだ。

『……………』

ここで……俺は魔が差し出してしまった。
電車内は誰もいない。

こつちも判断力が鈍ってるのか、手が勝手に動いてしまい、

『……モミ』

揉んだ……触ったじゃなくて揉んだ。

やっぱり……大きいし柔らかい。

しばらく数秒このままだった。

『次は〇〇〜』

『……ヒョイ!!』

『んあ……? 先輩? もう着きましたか?』

『いや……もう1つ先の駅だ』

『分かりました……もう少し寝ましゅ』



「気づかれて無いようですね。僕は口硬いので安心を」

「助かるよ……」

「先輩。その話本当ですか？」

「なっ！」

全力で振り向く。

なんだと？ いつの間に玉川が!?

「……………嘘だよ私だ」ニヤリ

「スノウかよ……………」

夜の砂浜 前編

「それにしてもあんなイケメンにも性癖があるとはな」

「……………意外」

イーファンと別れ、スノウと歩いていった。

今さっきの事をばらさない代わりに砂浜を一緒に歩いてくれだとき。

……………ばらさないよな？

ズルズルと脅されるのはヤダぞ？

「……………これつきりにしてやる」

「何考えてるか分かったのか？」

「……………少しはな」

まあ…………プロのハッカーだし信用は出来るだろう。

「本当に夜の砂浜ってのもいいもんだな」

「……………だな」

波の音、店からの光。

雰囲気が出てくる。

ジュース売ってるから後で買おうか。

「こういう所でカップルがイチャつくんだよな」

「……………ああ」

夜、誰もいない砂浜で18禁をするんだ。

……………なんだろうか。腹たってきた。

「……………おい」

「どうした？」

「……………バカップルいたぞ」

あ？ 狩るのか？

「ああ〜グンゼル」

「ああ〜エレーテル」

「好き」

「僕も好きだ」

確かラブラブバカップルのグンゼルとエレーテルだったけ？

ゼロ距離で座っている。

俺らのこと気づいてないよな？

あ、たしかコイツら本戦落ちてたよな。

「……………確かコイツら」

ん？ スノウ？ 何を砂を持っているんだ？

「……………ふん」

あ、砂をバカップルにかけた。

「ああ〜グンゼル」

「ああ〜エレ〜テル」

……………あれ？ なんで反応しないの？

「……………コイツらはイチヤイチャしてると何も感じないらしい」

「イチヤイチャする事に集中し過ぎだろ」

「……………ポチエナにケツを噛まれても動じなかったって」

刺される時には流石に気づく……………よな？

「……………オラツ」 ビチャ

……………スノウ、海水をかけるとか酷いだろ。

誰だつて水をかけられたらハツとなる。

「……………愛してる」

「僕もさ……………」

……………気づいてない？

コイツらの愛は水をかけただけでも消えないのか。

「……………お、ナマコブシ見つけ」

おい、流石にやり過ぎだろ。

……………しかも手掴みだ。

ヒュン

軽く投げた。

もうやめて差し上げろ。

「ああ〜」

「ああ〜」

まだ氣づいていないのか。

ピュ!! ピュ! ピュ!!

うわ、ナマコブシが水をバカツプルに吐いた。

……………いや違うな。

変な臭いがする……………いえきか!?

ナマコブシもそこまで?

「愛してる……………」

「私も……………」

ダメだ。

「もう行こうぜ」

「……………ああ」

もうダメだ。

コイツらの絆はモノホンだな。

どうやったらイチャイチャを止めるんだ？

諦めて離れ、十数メートル離れたら、

PPPPPPP

俺じゃないな。

バカツプルの方からだ。

「愛し……………あ、タイマーセットしてたの忘れてた」

「愛して……………あら？ グンゼルったらうっかりさんね？」

「ははは、ゴメン。あれ？ 体中が砂と水……………あれ？ 臭うな……………」

「あら本当。もしかしたら海の神様が私達の愛に嫉妬したのかしら？」

「嬉しいね」

「ふふふっ」

「はははっ」

……砂やいえきよりもタイマーの方が障害になるのかよ。

「……………ホント、妬ましいな」

「ああ……………」



ああ、歩くのも疲れてきたな。

「座らないか？」

「……………ああ」

少し飽きてきたからな。

「……………よししょ」

「サイコソーダ飲む？」

「……………いただこう」

キンキンに冷えたサイコソーダを渡す。

「……………コレ氷漬け」

「あ、サザンドラのれいとうビームを使った後にどうぐに入れたんだ」

「……………プルタブが氷で開けれん」

水で溶かすか。

キンキンに冷えていた方が良いと思ったが裏目に出てしまった。

「……………確かこのソーダって砂糖少なめらしいぞ？」

「ん？ そうなのか？」

あんまり表示とか見ないんだよな俺は。

あ、よく見たら原材料表示されている。

「……………市販のジュースは砂糖多いからな」

「確かにコーラとか砂糖が多いって聞いた事が……………」

砂糖って摂りすぎると体に悪いよな。

甘いものが好きな人がいるけど中毒になってる人もいるのだろうか？

そう言えば森屋君って甘党って聞いた事が。

まあ大丈夫か。

「……………確かコーラはトイレ用洗剤に使えるらしい」

「マジで？」

「……………後は植物の栄養剤にもなるし、害虫駆除にも使う事もあるとか」

「……………」

「……………錆取りにも使われるってさ」

マジ絶句。

コーラにそんな使い道が会ったとは。

……………待てよ？ コーラを飲むトイレ用洗剤を口にしてると同じ事なんだよな

？ 体が悪くなる……………よな？

「……………確か毎日飲んで体が悪くなった例がある」

「コーラが飲めなくなってくるんだが……………」

「……………砂糖自体は体に必要だからな？ たまになら良いと思うぞ」

マックを1ヶ月間毎日食べるってドキユメンタリーがあつたがそんな感じだろ。

でも……………毎日、水や野菜を食べても体が悪くなるなんて聞いた事ない。

コーラやマックのジャンクフードの食べ過ぎは毒つてことね。

「なんか世の中の闇を見た気がする」

「……………まだ氷山の一角」

確かにハッカードし色んな事知ってそう。

「……………地球温暖化」

「おい、それ闇が深いだろ」

「……………だな。止めておこう」

地球温暖化の闇はこっちも知っている。

100年前と比べ、平均気温は1度程しか上がっていない。
恐竜時代は3度程平均気温が高いつか。

気象庁のホームページでは、日本沿岸の海面水位は、1906〜2018年の期間では上昇傾向は見られないと明記されているとか。

他にネットで調べたらボロボロとおかしい点があった。

なーんの為にこんな騒ぐんだろくなあ？ ん？

「あ、プルタブが取れるようになった」

「……………飲むか」

サイコソーダを開けると、

「……………凍ってるぞ」

「しまった……………」

結局、凍らしていないミックスオレを飲む事に。
冷えてなくてもミックスオレは美味しかった。

夜の砂浜 後編

意外とミックスオレってのもイけるもんだ。

確か350円で80回復で、700円で50回復するキズぐすりよりも安価。

ちなみにコレは買ったモノ。

売られてたので興味があったので買ってみた。

……でもよく作り方をわかったな。

なんかの加護か？ アイテム作りとか。

アローラでは50種類以上のきのみを混ぜて作られていて、ブレンドは店ごとのオリジナル。

時に痛んで食べられなくなる寸前のきのみを使うことでコクを高め、酸味をきつく仕上げたものが出されることもあるのかなんとか。

「……………あ」

「どうした？」

「……………なんか分からんがハイポーションの動画思い出した」

「うっ」

俺も見た。

栄養ドリンクを様々な種類を入れて飲む動画だ。

見ただけで恐怖が出てくる感じ。

様々な瓶が揃っており、匂いだけでも臭かったとか。

案の定飲んでら吐いたらしく、綺麗な映像が流れた。

カレーに混ぜて食っても無駄だったとか。

「胸焼けしてきた」

「……………だな」

スッポン入れた時点で止めておく方がいい。

「それにしても海は綺麗だな」

「……………あのポジションどう処理したんだろ？」

戻すな。

「……………おいしいみずって高くね？」

「分かる。100円位で買えるだろうし、ポケモン世界って物価高いんだな」

ちなみにハワイでも回復薬として売られている。

海外じゃミネラルウォーターとしてもよく飲まれている。

ああ、喉が潤う。

「あ、ケイコウオが跳ねた」

「……………本当だな」

ケイコウオが真ん前で跳ねた。

そう言えばここは海だったな。

海といえばアクア団だったけ？

確か目的は海の面積を広くする事だったな。生命は海から産まれてきたので、増やして色々増やしたいだとか。

でも海の近くに町とかよくあるし、居住地が減りそうだ。

漁獲量は増えるがな。

「そういうえげなでイルカやクジラは高血圧にならないんだ？ 海水にいるのに」

「……………なんでだろうな」

「アツハハハハハハ」

あ、海。パン小僧ジゼル。

よし、他の所へ行こう。



ほお、雰囲気がある岩場に着いたぞ。

釣りとかやっている人とかいるかもしれない。

夜釣りとか。

あ、そう言えば釣り人が参加者にいたような。

「んふつううううっ！」

「おい、アレはなんだ？」

「……………ああ、確か触手が好きだって聞いたな」

そこに居たのはデンドロ。

オムスターに顔を埋めて何かしている。

ちなみにコイツは本戦突破。

「触手か…………」

「……………ドククラゲとか好きそうだな」

確かドククラゲは毒持ちだよな？

「……………化石のポケモンを使うそうぞ」

「そういう加護か」

化石オンリーとかそんな感じか。

……………あれ？ イーブイ使いとかはどうなったんだろ。

魚オンリーとかも居たって聞くけどどうなんだ？

……………出てないって事は死んだとか顔出せる状況じゃないとか。

フミ

「うおっ！」

「おや？ また踏まれましたか……………」

またお前かよ。

「なんだ？ そつちも散歩か？」

「ええ、気分転換に。初戦の相手は天敵のタイプなんで」

「……………確かに」

まーねー草タイプだからね。

「それじゃ私はこれで」

「ああ頑張れ」



「やっぱ情緒あるなー」

俺らは夜の街を歩いていた。

夜の外国は雰囲気がいい。

「なんか出店有るみたい」

「……………食ってこうぜ」

わー屋台だ。

異国情緒があるなあ。

「……………兄貴が福岡で屋台したって言ってた」

「福岡の屋台って有名だからな」

博多名物の焼ラーメンをはじめ、餃子やおでん、焼き鳥、天ぷら、もつ鍋、明太子料理とかレパートリーがあるそうだ。

「小腹が空いたからどう？」

「……………いいね」

何しようかな。

「それじゃ俺はラーメンかな？」

「……………私はホットドック」

海外来てラーメンだ。

もつとハイカラの食事しろと言うところだが、何故か選んでしまった俺である。

「よし、選ぶか」

「……………私も」

えっと……………豚骨でいいか。
中つくらい。

あ、10数秒で出てきた。

あらいい匂いね。

「お、ホットドックも美味そう」

「……………そっちも」

「少し交換しようか」

「……………いいぜ」

スノウと合流。

机があったのでここで頂く。

「……………ほら」

「……………」

ホットドックを突き出して来る。

このまま食えと？

「あ、美味しい」

一口食べると肉がプリプリ。

マスタードが味を引き立て、野菜がそれを調節する。

「じゃ俺も」

「……………アーン」

レンゲがあつたので、麺とスープを一緒に食べさせる。

「……………いける」

「自分の食べようぜ」

俺も食おう。

あー夜に食べるラーメンは背德的だな。

「失礼、相席いいですか？」

「ん」

「……………」

「あ」

見た事ある女……………変態チームだよな。

「えっと、顔は見た事ある」

「……………呪術師だっけ？」

「あ、覚えてくれてました？」

確か呪術師エレールだったな。

奇遇だな。

「小腹が空いたのか？」

「ええ、この時間になると」

みんなそうなんだな。

「それは海老か？」

「……………美味そう」

「ハワイはシュリンプが有名なので」

そっち選んどけば良かった。

「本戦突破おめでとうございます」

「どうも」

「……………サンキュ」

確かコイツは落ちてたな。

聞いた話によるとアリスがコイツを倒した直後バトルチューブが終わったと言う発言を聞く。

アリス、グツジョブ。

「そういえば呪術ってどんな事出来んの？」

「自分探すとベロ占いってのが得意です」

………ベロ占い？

「ああ、珍しいですよ。私って呪術が盛んな町出身でして……結構多様な呪術があるんです」

「へ〜」

「ベロ占いは才能を見るんです。9割以上の的中率ですよ？」

「………すげえな」

そんな占いがあるのか。

「俺どんな才能ある？」レロ

「おうじゃのしるしってのが欲しいんですけど………」

「ほれ」

「早い！」

「………即」

3個くらいあるから持ってけ。

「それじゃ見せてください」

「………」レロ

「んー」

ど、どんな才能があるんだろうか。

「悪の組織のリーダーや、料理人の才能がありますね」
「……………」

開始ッ！

「悪の組織……………」

「……………悪の組織」

「ま、まあ……………占いですし」

「いやいや何言ってるんだ。」

「悪タイプ使うからか？」

「スノウは？」

「……………ほれ」レロ

「それじゃサービスで……………」

「コイツは凄腕のハッカーだし。」

「ハッカーとかクラッカー、デイトレーダーとか向いてそうですね」

「……………もうやってる」

「デイトレーダーも？」

「……………YES、年収は一千万超えとる」

「す、すげえ。」

歳いくつだ？

「凄い才能持ってますね」

「それで人探してのは？」

「ええ、名前と生年月日、顔写真を知れば位置を探せる呪術です。成功率は四割程ですが」

「四割行けばいいんじゃない？」

「ええ、それで警察に協力して表彰と懸賞金を貰いました」

超能力捜査じゃん。

最近見ないね。

「それじゃ人探して欲しいんだけど」

「うーん。つめたいいわ欲しいな」

「はい」ドサ

「まだ早い！」

6個くらいあるから持つてけ。

「それで九頭龍先輩を探して欲しい。これ写メね」

生年月日も教える。

あの人が何処へ行ったんだろう？

「それじゃ待つてくださいいね」

地図を取り出し、クラピカのようにダウジングする。

「んー？ んー」

「……………」

「んー？ んー？ んんん？」

「……………どうしたんだ？」

「ちよつと集中してるんで話しかけないでください」

まあそりゃそうだろ。

集中してる時に話しかけるとイラってくる。

「日本には居ないですね……………」

「じゃ海外か」

「探して見ますね」

三分後。

「んーんー？ んー？ ん……………ん？」

「……………なんか分かったか？」

「だから話しかけないで下さいってば！ 集中してるんですよ!!」

「……………ゴメン」

いやいや、ややこしいってば。

「……………結論から言いますと、世界地図に反応がありません」

「……………嘘……………だろ」

「話は最後まで聞いてください。死体でも反応はあります。体がバラバラになっても骨になっても反応するんです」

「……………意味わからん」

「大陸の他にも三大洋や極地もやりましたが反応しません……………なので地球にはいないかと」

「……………」

地球にいない……………のかよ。

ええっ……………アブダクシヨンされたの？

「ま、まあ……………四割の確率なんで」

「ああ、外れる事を祈る」

「……………遅いしそろそろ帰るか」

「そうだな。んじやな」

「ええ、ご武運を」

翌日。

『さあああやって参りました。世界大会スターアアトです』

やつと始まった。

さてさて、切り札②と③を見せる時がくるかね？

『それではフアアアストバトル！ 一回戦!!』

最初はあの二人だな。

『東からくるのは！ 踏んづけられる事大好きな靴職人！ 〔グラスファイバー会〕顧問

！ イタリア代表、〔花屋〕！カルロオオ!!』

あ、カルロが出てきた。

イタリア代表だったけ？ スノウ曰く、良い靴を作るとか。

〔グラスファイバー会〕って何だ？

『西からは！ 虫タイプ使いの一番弟子！ 〔宛山事件〕の救世主！ 最近付いた二つ名

は〔死番虫^{ウオツチャー}〕！ 森屋アアア浩介エエ!!』

うん、ツツコミ多いな（〇〇）

「それでその『グラスファイバー会』ってのは？」

「確か薬草を育ててて売買する組合でしたね……………」

そんな会があつたのか。

何か加護とかやつてそう。

「アリス、『宛山事件』って何？」

「えっと、確か宛山告獣郎っていう犯罪者トレーナーを捕縛したって事件です。警察と

共にガサ入れとかしたそうですヨ」

「へえ〜」

やつぱり犯罪者トレーナーとかいるんだよな。

「ウオツチャイ死番虫」って二つ名は？」

「戦つたら必ず負けるので死神扱いで、虫タイプをよく使うので^{ウオツチャイ}「死番虫」と名付けられ

ました。シバンムシは死神が持つ死の秒読みの時計と言われていますからね」

上手く名付けるよな。

『それでは！ バトルうううう開始いいいい！』

あ、音楽がなつた。

「行け、アゲハント！」

「カモン、メガニウム！」

アゲハントで来るよなあ。

「アゲハント、ぎんいろのかぜ！」

「メガニウム、げんしのちから！」

うおっ?! げんしのちからを覚えてたのか！

しかもメガニウムが先制した。

アゲハントが瀕死、瞬殺された！

「アゲハント……」

「危ない危ない。虫タイプは鬼門なので育てたかいはありません」

コイツも対策はしてるよな。

「行け、アリアドス！」

次はアリアドスか。

「シザークロス！」

「げんしのちから！」

またメガニウムの攻撃が先にあたる。

幸い、HPは残った。

そして反撃のシザークロスが当たった。

「メガ!？」

「え？」

「あ、特性スナイパーで、ピントレンズ装備してるんです」

あ、メガニウムが倒れる。

効果抜群＋急所＋スナイパーだから高ダメージ。

確かメガニウムは防御型の種族値だよな。

これを突破するとか凄い。

「やりますね。次は行け、ジャロダー！」

「ジャロオオ！」

ジャロダーか。

特性は何かな？

「リーフストーム！」

く、アリアドスが倒れる。

「ちなみに、特性はあまのじやくですよ？」

「くっ」

げえ！ んじゃ特攻が上がつてんじやん！

「頼む！ デンチュラー!!」

「……………」

デンチュラか、最後の1匹だ。

「それでは敬意に評してこの技で決めましょう」

カルロが腕をたくしあげると……………Zリング!!?

「ブルームシャインエクストラ!!」

カルロが咲き誇るような動きをし、ジャローダの周りが花畑になる。

光がデンチュラの上から落ちてきて衝撃が生まれた。

案の定瀕死になった。

「負けた……………」

「【宛山事件】の救世主ですか……………奴を捕まえるだけの實力はありますね」

ヤドランの謎

「なんかさー知らぬ間に伝説とか作ってるのいそう」

「いそうですね……」

踏んづけ野郎の戦いが終わった。

『それでは次の試合！ 東からはっ！ 「レッドウエーブ」の救世主、電撃サデイス ティッククイーン！ 【雷獣】アマスフィイイイイイイイイ!!』

「おっほっほほっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほ!!」

あー俺もあるよ喋ってる時に。

気管に唾が入るんだよ。

『そして西コーナー！ 魚釣りだったらこの人！ 世界中の川や海を歩き、結果を釣りブログで魅せる！ 釣り人オブ釣り人！ ゴレルウウウウウウ!!』

「ふう、今日も釣り日和だ……」

釣り人にはこの女は相性悪いでしょ。

「アリス、「レッドウエーブ」って何？」

「ああ、クラブの大群がイギリスの海岸に押し寄せて来た事件の事です。海藻とかの漁

業系は大惨事になってたとか。それでこの人が返り討ちにしたって話です」
「クラブの大群……」

なんかこの世界になる前にそんな現象があつたような気がする。

「釣りブログとかやってたんだな」

「ええ、確か有名なブログです。釣り好きなら知らない人はいないですよ?」

そつち系はよく分らない。

「おっはっほっほっほっほっ!」

「ふむ、深い」

『バトルウウスタアアアアト!』

あ、バトルの音楽が鳴った。

「行きなさい、サンダー!」

「ギユアアアアア」

「行きなさい、ヤドキング!」

「……………」

いきなり……サンダーか。

で、ヤドキングか……ヤドンの頭にシエルダーがかみついて進化したポケモンだ。

シエルダーから送り込まれた毒素によって知能が発達したそうだ。

確かストレスで人間は進化するとかそんな話があるが、毒もストレスに入るのか。

「パワージエム！」

「10まんボルト！」

……………サンダーのほうに攻撃が入る。

「くっ！」

「おっはっほっほっ！」

「頼む、ヤドラン！」

実はシエルダーも噛みつく前の2枚貝の姿から灰色の巻貝状の姿に変化しているそう
うだ。

シエルダーは尻尾からにじみ出る旨味が欲しくて離れないが、激しい戦いで本体から
外れてしまうと本体はヤドランに戻ってしまうんだな。

あれ？ ヤドランってレベルで進化する……………んだよな。

だったら噛み付いてるシエルダーはどっから来たんだ？

「れいとうビーム！」

「10万ボルト！」

ヤドランは倒れる。

メガシンカの道具は誰でも持つてるわけ無いよな。

「いけ！ ヤドラン！」

「10万ボルト！」

あ、色違いのヤドラン。

しかし落ちる。

「後で釣り行こう……………」

釣り好きだなコイツ。



「……………釣りブログにへバトルチューブではトレーナーと一度も戦わなかったって書いてある」

「どんだけ強運なんだよ」

ヤドランのレベルも強いとかもここまで来れた理由かもしれない。

「……………次の試合は見物だ」

『次の試合はー！ 東から来るのは！ 『乙坂氷穴』の踏破者！ 虫タイプ大好き昆虫野

郎！ 『インセクター』 木場アアアア明人オオオオオ！』

がんばえー！

『西から来るのはー！ 中国No. 1のポケモントレーナー！』 【仁悠】の熱き獅子！

ダークフレイムマスター、ヴオオオオオオン!!』

ヴオンさんって中国だったんだな。

他の出身とかもロミスはドイツ、ジゼルはフィリピンだとか。

全員は知らんが。

「それでアリス？」

「説明します。【乙坂氷穴】は山梨で見つかった氷タイプが沢山いるダンジョンです。沢山のトレーナーが挑戦しましたが、木場さん以外はあなぬけヒモ等で脱出したそうです。本人は4日程野宿してダンジョンをマップピングしたとかなんとか」

4日程野宿………マジ？

食料とかトイレとかどうしたんだろう。

「【仁悠】は中国の大企業の一つですね。美容とかが有名ですね……たしかこの人は社長の息子だった筈」

美容系の社長息子か。

「上に三人姉がいるそうですよ。なので女っぽい外見と趣味だそうです」

あーだからオネエ系だったのか。

『バトルウウ開始イイ!!』

「行け！ ブーバーン！」

「行つけえ！ イワパレス！」

まあ、いわタイプで攻めるのが普通だよな。

「ブーバーン！ きあいだま！」

「イワパレス！ ストーンエッジ！」

ストーンエッジが先に決まる。

あ、イワパレスにせんせいのツメ持たしてる。

しかし、HPはギリギリ残った。

きあいだまは当たる。

「しまった……残ったか」

「やるわねえ」

イワパレスが倒れた。

次は何を出す？

「行け、オニシズクモ！」

初見のポケだな。

水だし相手に取って面倒な相手だ。

「10まんボルト!」

え、電気技。

しかし、HPは残る。

「アクアブレイク!」

「やっぱり水だし電気タイプは持つてるわよね……」

ですよー。

こつちもゲッコウガにサイコキネシスやれいとうビームを覚えさせてるし。

ブーバーンは倒れた。

「行きなさい、リザードン!」

「ガオオオ」

「メガシンカ!」

お、光の玉に包まれ、黒い姿のリザードンだ。

「ドラゴンクロー!」

オニシズクモは倒された。

「行つけえ! ウルガモス!」

「あら」

最後のポケモン。

炎受けても等倍だ。

「……く、サイコキネシス！」

木場は決定打は無いらしい。

普通相性で攻めるしかないか。

あ、急所に当たったがHPは残る。

「いわなだれ！」

やっぱりやってくるか。

「キュウウウウウー！」

ウルガモスは倒れた。

巨星墜つ

「マジかよ」

「木場負けた……」

相性が悪いのもあるけど、簡単に負ける相手じゃないぞ？

懸賞金の額が間違ってるんじゃないの？

「……………次は兄貴だ」

「私スタンバイしてきます」

アリスがそそくさと移動。

ああ、木場VSデイス。

相性では木場が有利だな。

『お待たせしむしたああああ！ 次の試合！』

あ、オレンジジュース飲んでなかった。

『東からは！ アメリカ大会の覇者！ 今大会の優勝候補の一角！ テキサスのハイ

パークレイジー君！ 『破壊王』、デイスウウウウウ！！』

「ふう、今日も何か壊したい……………」

「テラキオン、いわなだれ！」

うおっ、効果抜群！

だがHPは赤色だが残った。

「マジカルシャイン!!」

「キイイイ」

フェアリータイプの技だな。

あ、効果抜群なのか一撃で瀕死になった！

「うお、まさかテラキオンが一撃でやられるとはね……………」

「こつちも伊達に鍛えてないんでな」

トゲキツスは特攻タイプだし、テラキオンは特防は高くない。

結構効くだろ。

「んじゃこつちは…………行け、ルカリオ！」

「ルカリツッ！」

ルカリオか……………トゲキツスはフェアリーだし、飛行は等倍だしな。

あ、格闘やエスパーは効くぞ？

「ルカリオ、メガシンカ！」

やってくるか。

ルカリオは光の玉に包まれ、姿が変わる。

「行け、メガルカリオ！ コメットパンチ！」

効果抜群だな。

トゲキツスはオーバーキルで瀕死に。

さて、木島は次は何を出す？

「行け、ファイヤー！」

炎タイプを出してくるよな。

「ストーンエッジ！」

「かえんほうしゃ!!」

あ、ストーンエッジを先に繰り出したルカリオだけど外れた!!

ルカリオにかえんほうしゃが当たる!!

「しまった！ ルカリオ！」

「グオ……………」

ルカリオが瀕死になって倒れた。

確か特防が弱かったしな。

木島は残り2体。

デイスは残り1体。

ファイヤーに当たり、戦闘不能になる。

7割の暴風が外れるか。

「互いにあと一体」

ああ、多分次に出してくるのは。

「行け、レックウザ!!」

「GUUOOOOOOOO!!」

やっぱり出てくるよね。

多分温存したくても相手が強いし。

「レックウザ、ガリョウテンセイ!!」

畳むか。

「ガウー!!」

お、耐えた……耐えたぞケルディオ!

「ケルディオ、エアスラッシュ!!」

氷タイプの技覚えられないのか?

岩も?

「レックウザ、ぼうふう!」

「GUUOOOO!!」

あ、ひるんだ!?

「もう一度エアスラッシュ!!」

「GUOOOO!?!」

もう一度やるか……………あれ? またひるんだ。

レックウザのHPが三分の一辺りに。

「エアスラッシュ!!」

三撃目のエアスラッシュ。

あ、ケルディオと同等にHPが残った。

「ハイパーボイス!」

ケルディオに当たる。

木島あ、ギリギリ勝てたな。



「……………優勝候補が落ちたか」

「……………確かロツスレイは予選落ち」

さて、次はアリスの番だ。

『次の試合に入ります——！ 東からは！ 億超えの悪使い！ 地獄からの使者、【処刑人】黒田アアアアリスウウウ!!』

「イエーイ」

『西からは！ ギタリストグループ【ベノム】のリーダー、ポイズンケミストリー！ 【デスメタル】ロミスウウウウウウ!』

「……………」ギイイイイイン

うえ？ ギタリストのグループだったんだ。

「……………」ちなみにファンは極小数だが存在する」

「へ、へえ……………」

「……………」私も準備してくるぜ」

「ああ、頑張つて来いよ」

「……………」任せろ」

『バトルウウウ開始イイイイ！』

スノウが席を離れる。

「行け、ロズレイド!」

「カモン、キリキザン!」

おっとアリスに有利なポケモンを出したな。

「ロズレイド、めざめるパワー！」

「うえ!？」

ふえ? めざめるパワー?

「キザアアアア!？」

は!?! 効果抜群だ?!?

そのまま瀕死になりやがった!!

「いやあくラツキー、実は格闘タイプなんだよね〜」

四倍ダメージ!

まじかよ。

「く、行け、バンギラス!! メガシンカ!!」

すなあらしが巻き起こる。

更にバンギラスが光の玉に包まれた。

「メガシンカしてくるか。ロズレイド、エナジーボール！」

「バンギラス! れいとうパンチ！」

しかし、ロズレイドのほうが一歩早し。

バンギラスは半分以上削られる。

ロズレイドにれいとうパンチが当たるがギリギリHPが残った。
「ギガドレイン!!」

……………急所に当たった。

バンギラスは倒れた。

「危ない所でした……………」

アリスはそこまで弱くないんだがなあ……………敵が強いのか。

「行っけえ、ワルビアル!!」

最後のワルビアルだ。

「エナジーボール!!」

「ビアル!!」

ワルビアルがエナジーボールを受け……………倒れた。

スーパークイーン

『よーし次の試合だ！ 西からは、ネット世界の伝説的存在！ 電腦世界のスーパークイーン！ 木島アアアアアアアアスノウうううう！』

あ、微妙に変装してる。

え、スノウは何をしたんだ？

伝説？

「アリス、やつは何をやらかした？」

「いや、私に聞かれても……………」

何やつてもコイツはおかしくないか。

『東からは！ 海といえはこの男！ 年中海パンでどこでも走り回る狂った10代！

嵐を呼ぶ海パン小僧!! 【海賊】シゼルウウウウウウ！』

そーいえばなんでコイツ海パンなんだろうか？

「アリス、なんで海パン？」

「いやそこまで情報通じゃないんですけどね……………」

まあそりやそうだろうね。

なんで変態トレーナーがこんな趣味に走ってるのか常人には分からないよね。

あれ？ 俺常人……………なのか？

「それにしてもホウオウには鬼門ですね」

「だな。水タイプに10万ボルト覚えてるのもいるし」

氷タイプの技を持っているのも居そうだね。

つーか水タイプって結構数多いよね。

『バトルウウウウウ！ スタアアアアアアアアト!!』

「いけ！ スターミー!!」

「……………ワタツコ、ゴー」

スターミーか……………やっぱり草タイプでワタツコから攻めるよな。

「スターミー！ れいとうビーム!!」

「……………しまった!」

「コオ!？」

ぬお！ やっぱりれいとうビームを持っていたか。

あ、ワタツコが倒れた。

一撃じゃねえか。

スノウはあと2体。

予想じやネイテイオとホウオウだ。

「……………ネイテイオ！」

「スターミー！ 10万ボルト！」

やっぱり電気持つてるよなあ。

「……………」

「……………おおっ」

は、ネイテイオのHPが僅かに残ったった！

「……………」

「えー」

な、シンクロ!?

スターミーが麻痺した！

「……………ネイテイオ、ギガドレイン！」

覚えんのかよ！

うわゝスターミーの体力が半分程削られた。

「スターミー、10万ボルト！」

「……………」

スターミー、麻痺した！

「ネイティオ、ギガドレイン！」

「……………」

当たった！

しかしスターミーのHPは僅かに残ったぞ！

「くっ、スターミー！ れいとうビーム！」

「……………」

麻痺せず当たった。

ネイティオは倒れる。

あと一匹だな。

「……………挽回しろ、ホウオウ！」

「キシヤアアアアアアアアアアア！」

ザワザワザワ

やっと出たよホウオウ！

観客がザワザワザワしてる。

「……………はがねのつばさ！」

「……………」ドサ

スターミーがやっところさ倒れたにや。

次は何で来るんだろうな。

「いけ、カメックス!!」

「カメエ!」

おや、カメックスですな。

「……………ホウオウ、10万ボルト!」

「カメックス! ハイドロポンプ!」

「カメエ!」

あ! ホウオウの方が早い!

しかしカメックスは耐えた…………。

それでハイドロポンプが入る。

「キシヤアアアア!」

まだホウオウ生き残ってるよ!

しぶとい!

「ホウオウ、もう一度10万ボルト!」

わーカメックスが倒れた!

やるじゃん大金屋!

「……………」

………ん？ ジゼルが考え事。

どうしたんだろうか？

「……よし、いけ！ カイオーガ!!」

「グアアアアアアアア！」

や、やっぱりカイオーガでたー！

水タイプ使いだし持ってんだろうよ！

「カイオーガ、かみなり！」

「グアアアアアアアア!!」

ホウオウは倒れた。



やっぱりカイオーガ出してくるよなあ。

他にもヤバそうな出てきそう。

「さ、次の対戦は？」

『お待たせしましたー！ 次の試合です！

東からくるのは！

被害者は数知れず！

見つかつたら素直に捕まる潔さ！ 覗き大好きゴースト紳士！ 【幽騎士】真田アアアアアア弓兵いいいいいい！！』

「……………覗きに終わり無し」

『西からはー！ 赤白のベビー服がトレードマークの熱血漢！ 母親随時募集中！ 生後492ヶ月の健康優良児【ヘビーベイビー】バアアアアアアブウウウウウウ！！』

「……………」カランカラン

「……………」↑俺

なんだろうこの絵面？

覗き魔VS大人赤ちゃん？

『『『きやああああああああああバーブンスああああああああああん！！』』』

「うわー！」

なんだこの歓声！

バーブンス人気だな。

「行きますよ」

「来な」

『バトルウウウウウウ！ 開始いいいいいい！！』

「いけ！ ムウマージ！」

「ミミツッキユ、やれ！」

ミミツッキユか……コイツは何者なんだろうか？

ピカチュウの真似してるけど………ポリゴンって噂が建っているんだが。

「ムウマージ、サイコキネシス！」

「つるぎのまい！」

まあ、サイコキネシスが当たったな。

ばけのかわでコテンってなってノーダメージ。

自分にバフをかける余裕があるっても良いもんだなあ。

「あくのはどうー！」

うお、当たった。

しかし半分程しか削れない。

「シャドークロー！！」

「……………」

まあ、効果抜群の技持つてるよなあ。

……………あ、ムウマージが瀕死に。

「……………」

あ、ミミツッキユのHPが少し減った。

………いのちのたまだな。

さて、ゴースト紳士は何を出すか。

「ガラガラ！」

ガララガラガラだな。

「シャドークロー！」

う、少しHPは残ったようだ。

ラツキーだな。

「シャドークロー！」

「………」

ミミツキュは倒れた。

しかしバーブン有利。

「ゴー、カプコケコー！」

「………」

な?! 持っていやがったか!

場のフィールドがエレキフィールドに!

「アイアンヘッド！」

あら、ガラガラは倒れたな。

次来るのはやつか。

「行け、ズガドーン!!」

ザワザワザワ

まあ、来るよなズガドーン。

「ズガドーン！ ビックリヘッド！」

ドガアアアアン

うお、めっちゃ爆発した！

「……………」バタリ

わ!? 急所当たって倒れたみたいだ！

しかしズガドーンのHPは半分に。

次は何で来る!?

「レヒレレ！ いけ！」

うわ、カプレヒレだ。

終わったか？

「……………」モグモグ

食べ残しか。

もう一本撃てるって事か。

「ズガドーン、シャドーボール!!」

まあ、炎よりもゴーストの方が効果ありそうだし。

しかし半分も削れない。

「レヒレ、ハイドロポンプ!!」

「レエエー!」

ズガドーンは倒れた。



まさか紳士が倒れるとは。

「えっと、先輩は次の次ですね」

「だな。行ってくる」

次の戦いは。

鞍田のおじさんVS……………。

俺の番か

「よし、着いた」

次の次が俺だ。

『次の試合!! 東からは日本の山々を駆け巡り、沢山のダンジョンの発見! 【ポーシヨ

ンの池】の発見者! フルマウンテンアルピニスト! 【山の番人】鞍田隆一郎!!』

「はっはっはっ!」

【ポーシヨンの池】?

確か聞いた事あるような?

『西からは! 美女・美少女の写真大好き! 狙った獲物は逃がさない! 【ミカーレン

タウン事件】の解決者! シューティングスターカメラマン! 【魔のレンズ】ピス

コオオオ!!』

「ふう」

【ミカーレンタウン】?

全部知ってるとは思うなよ?

『試合開始! いいいいいい!!』

バトルの音楽がなり始めた。

「いけ、ベロベルト！」

「やれ、プテラ！ メガシンカ！」

いきなりメガシンカすんのか。

まん丸の光に包まれ強そうなプテラが現れる。

「プテラ、ストーンエッジ！」

「アイアンテール！」

うお!? アイアンテール覚えるんだ!!

しかしプテラの攻撃が刺さる。

「ベロ!?!」

急所に当たった！

しかし僅かに残り瀕死にはならない。

「ラァ！」

アイアンテールは刺さるも半分程しか削れない。

「はがねのつばさー！」

その僅かな体力が無くなりベロベルトは瀕死となった。

次は何出す？

「いけ！ ドーブル！」

！ ドーブルか！

スケッチで何が来るかよく分からん！！
気合いのタスキはあるか？

「ストーンエッジ！」

「ニードルガード！！」

あ、ニードルガード持ってたのか。

「キシヤア！」

ダメージをプテラは受ける。

赤色のバーだ。

「はがねのつばき！」

「キノコのほうし！」

やっぱり覚えるよね！

「Z z z」

あー寝ちゃった。

「ゆめくい！」

プテラは倒れた。

厄介だなダブル。

「次だ！ いけ！ レジロック！」

「……………」

ここです出するか。

「アームハンマー！」

「キノコのほうし！」

ダブルの方がはやかった。

「……………」モグモグ

あ、ラムのみだ。

ねむらず。

さて、アームハンマー当たりますね。

当たって効果抜群だが、

「タスキ持っててよかった……………」

ギリギリ残る。

どこにある？ しっぽの中にも隠してんの？

「キノコのほうし！」

やばい。

そして動けず。
眠ったまま。

「ゆめくい！」

ダメージを与え、そして回復する。
しかし、起きない。

「Z z z」

「もう一度ゆめくい！」

もう一度やっても起きず。

「ゆめくい！」

三回目。

「もう一度ゆめくい！」

うわあ……………まだ起きないよ。

もう4回目赤色のバーだ。

「……………z z z」

……………。

「ゆめくい！」

5回目。

もうギリギリ。

ドールはかなり回復。

「……………」パチン

あ、起きた。

「アームハンマー！」

「ニードルガード！」

あ、ああつ！

読まれてただと?!

反射ダメージにより瀕死に！

「強いすな」

「そっちもですよ」

鞍田のおじさんはあと一匹だな。

「いけ！ ツンデツンデ！」

「……………」

やっぱり出てくるよなあ。

だけど。

「……………」

「キノコのほうし！」

「……………」ZZZ

クソ！ やっぱり素早さ低い！

「……………」ガサゴソ

「ジャイロボール！」

ん？ ラムのみ？

起きた。

そして当たり、

「キュオオ！」

ウツソン。

急所に当たった…………ドールは倒れた。

「これで一体一だな」

「滾りますな」

で、ピスコの最後はなんだ？

「いけ！ ポリゴン2」

「リリリリ！」

喋って…………ないな。

スノウのポリゴンだけか？

「ポリゴン2！ シャドーボール！」

「ツンデツンデ！ じしん！」

ん？ シャドーボールが当たってじしんを受けたけど……………どっちもあんまり効いてなくね？

ポリゴン2はきせきもちか。

「サイコキネシス！」

「く、ばかちがらだ！」

やっぱりばかちがら持ってたか。

「リリリ……………」

効果抜群。

ポリゴン2は瀕死に。

鞍田のおじさんの勝利だ。



さて、次は俺らの番か。

俺はなんて紹介されるんだろ？

『東からは！ バトル時には眼鏡コレクションを持っていく重度の眼鏡コレクター！』

鋼の錬金術師！ 【剛鉄】「ディアン！」』

「あ、あの人の眼鏡デザインいいな」

……そういえば眼鏡拭いてたような。

『西からは！』

あ、俺の番か。

なんて呼ばれるんだろ。

『変態トレーナーを統率する大きな器！ 強力な悪タイプのエキスパート！ 瞬殺カツ

アゲ王子！ 【底王】影山アアアヒロトオオオオ！』

カツアゲ王子か………予想どおりだな。

と、言っても合法だし問題ない。

『止めてえええ僕のお小遣いがあゝ』

『今月の生活費があああああつ』

『ふざけんなああ〜全財産があゝ』

『わ、俺の年金……どうしよお』

『今月の食費が……』

と、まあこんな事が会って脳裏に浮かんだが……これら勝負をいきなり仕掛けてきたトレーナーなんだよねえ。

おまもりこぼんが思ったより強力でした。

「さてと」ガチャ

なんか眼鏡かけた。

ハート型（笑）

『バトルスタート！』

「ルカリオ、行け！」

「いけ、サザンドラ！！」

「あー！」

コイツ………多分ガオガエンで来ると思ってたんじゃない？

「メガシンカ！」

な、コイツも持ってたか！

光の玉に包まれメガルカリオが登場する。

「かえんほうしゃー！」

「インフアイト！！」

あ、サザンドラの方が早い！
ルカリオは赤色のバーになる。

「グオオウ!!」

インフアイトが当たった。

こつちも赤色のバーだ。

「もう一度かえんほうしやだ!」

「グオオウオオオオ」

よし、倒れた。

ゴボウ行くなゴボウ。

「仕方ね出すか……………」

ポン

竹とかぐや姫、ロケットがモチーフと思われる。

全体的なシルエットは重量級ながら体の中心から伸びる首の部分は細長く華奢。

体から分離して浮遊しているロケットエンジンのような2本の腕から炎を吹き出す。

「行け、テツカグヤ!!!」

「……………え」

え!! テツカグヤ!!

確かに鋼と会いやすいとかそんな加護だと思っけど。

「サザンドラ、続けてかえんほうしゃ!」

「ドラ!」

あ、半分減った。

「テツカグヤ! ラスターカノン!」

ここでサザンドラは瀕死になる。

仕事はしたぞ!

「行け、ガオガエン!」

「ガオ!」

ルカリオは消えたしエンペルドが来ない限り大丈夫だろ。

「フレアドライブ!」

「ガオウ!」

効果抜群テツカグヤは倒れた。

「く、行けつ……………ゲノセクト!!」

なっ、やっぱり持っていたか!!

鋼タイプだからありうるか。

「ゲノ！ テクノバスター」

ドオアオオオオ

「ガオ……」 バタリ

う、効果抜群だから水タイプか。

「いけ、ダークライ！」

「ラアイ！」

よし、やれダークライ！！

「ダークホール！！」

よし、かかれかかれ 「……」 あ、かかない。

「ゲノ、むしのきざめき！！」

「ラアアアイ?!」

う、効果抜群だから結構効いたあ。

もう4分の1しかない。

「頼む！ ダークホール！」

かかれかかれかかれ 「zzz」 かつたあ！

「ダークライ、10万ボルト！」

「ラァイ！」

三分の一減った。

「ZZZZ」

「ダークライ、きあいだま！」

「ラァイ!!」

お、もうゲノは赤色のバーに。

「……………」パチン

あ、起きた！

「10万ボルト！」

「むしのさざめき！」

早かったのは……………。

「ラァイ♪」

「……………」バタリ

あつぶね。

今回は辛勝だったな。